秋田県文化財調査報告書第346集

# 向　様　田　A　遺　跡

―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ―

## 遺　構　篇

２００３・３

秋　田　県　教　育　委　員　会

秋田県文化財調査報告書第346集

向様田A遺跡

遺構篇

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

# 向様田（むかいさまだ）Ａ遺跡

―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ―

## 遺構篇

２００３・３

秋田県教育委員会

巻頭図版1



向様田A遺跡全景（空撮・南→）

巻頭図版2

向様田Ａ遺跡全景（空撮・南西→）

向様田Ａ遺跡全景（空撮・南東→）

巻頭図版4

1　平成12年度調査区近景（南→）

2　北東部捨て場調査風景（南→）

3　南東部捨て場礫出土状況（南東→）

4　南東部捨て場石棒出土状況（北西→）

1　東部環状配石遺構（空撮・南→）

2　東部環状配石遺構近景（南→）

3　中心部配石確認状況（南西→）

4　ＳＱ43・44配石遺構確認状況（南→）

5　ＳＱ76配石遺構確認状況（南西→）

1　西部環状配石遺構（空撮・北→）

2　西部環状配石遺構全景［人物は規模の大きな柱穴］（西→）

3　西部環状配石遺構中心部敷石確認状況（西→）

4　ＳＸ347性格不明遺構完掘状況（西→）

5　ＳＫＰ340柱穴完掘状況（南→）

1　石剣・石刀

2　ＳＫ土坑内出土玉類

3　ＳＫ06配石墓覆土内礫出土状況（南→）

4　ＳＫ42土坑墓赤色顔料検出・完掘状況（北→）

5　ＳＱ47配石遺構確認状況（北西→）

6　ＳＱ421配石遺構土層断面（東→）

# 序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、そうした自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われております。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、森吉山ダム建設に先立って、平成12・13年度に森吉町において実施した向様田A遺跡の発掘調査成果のうち、遺構についてまとめたものであります。調査では縄文時代晩期の環状配石遺構や大規模な捨て場、土坑墓群や配石遺構群などの祭祀遺構が発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、森吉町、森吉町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　清

# 例　言

1．　本報告書は平成12・13年度に行われた向様田Ａ遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

2．　本報告書は森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては第８冊目にあたる。

3．　調査結果については、秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料（平成14年３月）等でも公表してきたが、本報告書の内容がそれらに優先する。

4．　本報告書の作成にあたり、以下の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表する。

秋元信夫　阿部義平　池田淳子　伊藤玄三　稲野裕介　榎本剛治　大村和弘　岡村道雄
小林和彦　小林達雄　熊谷常正　佐野一絵　滝沢規朗　冨樫泰時　宮尾　亨
（五十音順・敬称略）

5．　本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行50,000分の１「米内沢」「大葛」、同じく25,000分の１「阿仁前田」「太平湖」、及び東北地方建設局森吉山ダム工事事務所作成1,000分の１「森吉山ダム貯水池平面図」である。

6．　自然科学分析は放射性炭素年代測定・樹種同定、赤色顔料の素材推定、土壌理化学分析・脂肪酸分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に、黒曜石の原産地推定をパレオ・ラボに、石製品の石質鑑定をフォッサマグナミュージアムにそれぞれ委託した。

7．　空中写真撮影・礫群の空撮図化は株式会社シン技術コンサルに委託した。

8．　本報告書における土層注記中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』（1997年版）によった。

9．　本報告書の巨礫・大礫・中礫の区別は、地学団体研究会編集『新版　地学事典』（1997年版）により巨礫（粒径256㎜以上）・大礫（粒径64～256㎜）・中礫（粒径４～64㎜）とした。

10.　本報告書の執筆は、平成13年度調査分についての記載を山本起嗣が、それ以外を吉田英亮が分担して執筆した。

# 凡　例

1．　本報告書に収録した遺構実測図の方位は、日本測地系平面直角座標第Ｘ系の座標北を示す。原点（ＭＡ50）における座標北と磁北との偏角は、西に８°10′である。本文及び巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

2．　本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は、１／40・１／20を原則としたが、遺構の規模に応じて適宜１／30・１／50・１／100等を用いている。挿図にはそれぞれスケールを付した。

3．　遺構実測図において、確認時点での礫と覆土中から検出した礫を２段階表示する場合は、適宜その旨を表示している。また、段丘礫層中の自然礫の輪郭線は細く表している。

4．　遺物実測図の縮尺は、土器は１／３を、石器は１／２を原則とした。ただし、大型の土器・石器は大きさに応じて適宜異なる縮尺を用いた。挿図にはそれぞれスケールを付した。

5．　挿図の遺物実測図には、種別を問わず通し番号を付した。それらは写真図版中の番号と対応する。

6．　土層注記は、基本層位にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）、遺構堆積土にはアラビア数字（１・２・３・・・）を用いた。

7．　遺構番号は、その種別を問わず、プラン検出順に01から始まる２桁・３桁の連番を付したが、精査の過程において遺構ではないと判断したものは欠番となっている。

8．　遺構・遺物の種類を表す際、下記の略号を用いる。

〔遺構〕　ＳＫ……土坑　　ＳＱ……配石遺構　　ＳＲ……土器埋設遺構
　　ＳＸ……性格不明遺構　ＳＮ……焼土遺構　　ＳＫＰ…柱穴様ピット
　　ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＴ……捨て場
〔遺物〕　ＲＰ……土器（片）　ＲＱ……石器及び剥片　　Ｓ……礫

9．　土坑観察表における「（隅丸）・（ズ）・（長）」の各略記号は下記のとおりである。
（隅丸）……隅が丸い長方形に近いもの　（ズ）……ずんぐりしたもの
（長）……細長いもの

10.　遺構実測図中の「●」は土器類、「▲」は石器類、「■」は赤色顔料を示した。なお、遺物等の出土地点は平面分布図と遺構全体を透視した垂直分布図の２種類に示し、断面に出土する遺物については略号を用いて記載している。

11.　挿図中に使用したトーンは以下の通りである。

焼土

磨面

アスファルト

赤色顔料

# 目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

## 第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過…… 1
第２節　調査要項…… 3

## 第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地…… 5
第２節　遺跡の歴史的環境…… 6

## 第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観…… 10
第２節　調査の方法…… 10
　１　野外調査…… 10
　２　室内整理…… 12
第３節　調査の経過…… 12

## 第４章　調査の記録

第１節　基本層位…… 17
第２節　検出遺構と出土遺物…… 21
　１　概要…… 21
　２　遺構と出土遺物…… 21
　（１）ＳＫ（土坑・土坑墓・配石墓）…… 21
　（２）ＳＱ（配石遺構）…… 99
　（３）ＳＲ（土器埋設遺構）…… 126
　（４）ＳＸ（性格不明遺構）…… 126
　（５）ＳＮ（焼土遺構）…… 127
　（６）ＳＫＰ（柱穴様ピット）…… 130
　（７）ＳＩ（竪穴住居跡）…… 130

## 第５章　自然科学的分析

第１節　向様田Ａ遺跡出土炭化材の年代と樹種…… 152
第２節　黒曜石製剥片の原産地推定…… 155
第３節　向様田Ａ遺跡出土石製品の石質について…… 158
第４節　向様田Ａ遺跡における赤色顔料の由来について…… 158
第５節　向様田Ａ遺跡の遺構内容物について…… 160
第６節　向様田Ａ遺跡における
　土坑・土器埋設遺構の内容物について …… 163

## 第６章　まとめ …… 169

報告書抄録

# 挿図目次


第１図　森吉山ダム建設工事区域の遺跡…… 2
第２図　遺跡位置図…… 5
第３図　周辺の遺跡分布図…… 7
第４図　向様田遺跡群全体図……11
第５図　向様田Ａ遺跡グリッド設定図 ……13・14
第６図　基本土層図……18
第７図　遺構配置図 ……19・20
第８図　調査区東部（墓域）遺構配置図……22
第９図　ＳＫ01・02・03・04 ……24
第10図　ＳＫ05・06・07……27
第11図　ＳＫ09・10・11・12 ……30
第12図　ＳＫ15・17・18・19 ……32
第13図　ＳＫ31・20・21・22・23・73・25……35
第14図　ＳＫ28・24・27・29・33・26 ……38
第15図　ＳＫ42・34・38・35・37・39・45……42
第16図　ＳＫ50・65・68・59・51・55・69……45
第17図　ＳＫ72・85・71・79・80・81・83……48
第18図　ＳＫ109・113・93・94・102・144・98、
ＳＫＰ87・88 ……51
第19図　ＳＫ114・116・115・123・128・327・117・118・
126・132・320、ＳＫＰ119・331 ……55
第20図　ＳＫ326・181・124・131・133・321・328・351・
352・363、ＳＫＰ364 ……57
第21図　ＳＫ150・161・163・168・169・142・165 ……60
第22図　ＳＫ329・212・369・174・175・177・203・334・
354・355・370・400 ……68
第23図　ＳＫ371・376・384・385・374・377・381・383・386・
393～396・399・401・521、ＳＫＰ392・397……73
第24図　ＳＫ407・404・408・409・410・413・415・416・
417・440・441・519 ……77
第25図　ＳＫ443～445・447・448・454・460～462・507・
508・512、ＳＫＰ509・510・518 ……82
第26図　ＳＫ186・187・188・191・192・193・194・217・
218・365、ＳＫＰ221 ……85
第27図　ＳＫ197・198・199・276・277・288・299・309 ……87
第28図　ＳＫ223・225・293・295・338・213・216・246 ……90
第29図　ＳＫ313・319・282・283・287・301・307・317・
323・324 ……97
第30図　ＳＫ387・366・398 ……98
第31図　東部環状配石遺構 ……101・102
第32図　東部環状配石遺構関連遺構位置図、
ＳＱ43・44……103
第33図　東部環状配石遺構中心部配石、ＳＱ76……104
第34図　西部環状配石遺構 ……105・106
第35図　西部環状配石遺構関連遺構位置図、中心部敷石…107
第36図　ＳＸ347・348、ＳＫＰ248・298・306・340・341……111
第37図　南西部捨て場礫検出状況、ＳＱ47・48 ……113
第38図　北部配石遺構群及び検出遺構 ……114
第39図　ＳＱ135・405・421・78・353 ……116
第40図　ＳＱ134・136・137・138・145・146・147・148……119
第41図　ＳＱ182・226・227・358・359・361・373・418……122
第42図　ＳＱ406・414・420・164・220・360・362・378……125
第43図　ＳＸ103、ＳＮ86・99・214・375、ＳＲ57・58……128
第44図　ＳＸ286・402・465……129
第45図　ＳＫＰ柱穴様ピット ……131
第46図　北部配石群下柱穴様ピット ……132
第47図　ＳＩ190・200・291……137
第48図　遺構内出土土器① ……138
第49図　遺構内出土土器② ……139
第50図　遺構内出土土器③ ……140
第51図　遺構内出土土器④ ……141
第52図　遺構内出土土器⑤ ……142
第53図　遺構内出土土器⑥ ……143
第54図　遺構内出土土器⑦ ……144
第55図　遺構内出土土器⑧ ……145
第56図　遺構内出土土器⑨ ……146
第57図　遺構内出土土器⑩ ……147
第58図　土製品・遺構内出土石器① ……148
第59図　遺構内出土石器② ……149
第60図　遺構内出土石器③ ……150
第61図　遺構内出土石器④ ……151
第62図　土坑種別分類分布図 ……171・172
第63図　土坑の規模 ……178
第64図　Ａ群土坑類の規模 ……179
第65図　土坑類全部と各群別での長軸方向 ……180
第66図　Ａ群検出土坑類長軸方向 ……181
第67図　向様田Ａ遺跡グリッド別
出土土器重量分布図 ……185・186

# 表　目　次


第１表　森吉山ダム工事区域の遺跡一覧…… 2
第２表　秋田県遺跡地図(県北版)による周辺の遺跡一覧… 7
第３表　調査経過(平成12年度)……15
第４表　調査経過(平成13年度)……16
第５表　柱穴様ピット一覧① ……133
第６表　柱穴様ピット一覧② ……134
第７表　土坑観察表① ……174
第８表　土坑観察表② ……175
第９表　土坑観察表③ ……176
第10表　土坑観察表④ ……177


# 図　版　目　次


巻頭図版１　向様田Ａ遺跡全景（空撮・南→）
巻頭図版２　向様田Ａ遺跡全景（空撮・南西→）
巻頭図版３　向様田Ａ遺跡全景（空撮・南東→）
巻頭図版４　１　平成12年度調査区近景（南→）
　２　北東部捨て場調査風景（南→）
　３　南東部捨て場礫出土状況（南東→）
　４　南東部捨て場石棒出土状況（北西→）
巻頭図版５　１　東部環状配石遺構（空撮・南→）
　２　東部環状配石遺構近景（南→）
　３　中心部配石確認状況（南西→）
　４　ＳＱ43・44配石遺構確認状況（南→）
　５　ＳＱ76配石遺構確認状況（南西→）
巻頭図版６　１　西部環状配石遺構（空撮・北→）
　２　西部環状配石遺構全景
　　［人物は規模の大きな柱穴］（西→）
　３　西部環状配石遺構中心部敷石確認状況（西→）
　４　ＳＸ347性格不明遺構完掘状況（西→）
　５　ＳＫＰ340柱穴完掘状況（南→）
巻頭図版７　１　石剣・石刀
　２　ＳＫ土坑内出土玉類
　３　ＳＫ06配石墓覆土内礫出土状況（南→）
　４　ＳＫ42土坑墓赤色顔料検出・完掘状況（北→）
　５　ＳＱ47配石遺構確認状況（北西→）
　６　ＳＱ421配石遺構土層断面（東→）
図版１　１　向様田地区全景（空撮・北→）
　２　向様田地区全景（空撮・南西→）
図版２　向様田Ａ遺跡全景（空撮・南→）
図版３　向様田Ａ遺跡礫群遠景（空撮・南東→）
図版４　墓域全景（空撮・南→）
図版５　東部環状配石遺構（空撮・南→）
図版６　西部環状配石遺構（空撮・北→）
図版７　１　基本土層ＬＴ28～29グリッド付近（東→）
　２　基本土層ＭＡ32～33グリッド付近（東→）
　３　基本土層ＭＡ34～35グリッド付近（東→）
　４　基本土層ＭＡ29グリッド付近（東→）
　５　基本土層ＬＰ35～36グリッド付近（西→）
　６　基本土層ＬＴ43グリッド付近（西→）
　７　基本土層ＮＦ25～26グリッド付近（西→）
　８　基本土層ＭＩ33～ＭＪ33グリッド付近（南→）
図版８　１　ＳＫ02土坑（墓）完掘状況（北西→）
　２　ＳＫ04配石墓確認状況（南西→）
　３　ＳＫ05・06配石墓確認状況（北西→）
　４　ＳＫ05・06配石墓完掘状況（北→）
　５　ＳＫ06配石墓確認状況（南西→）
　６　ＳＫ06配石墓礫出土状況（南→）
　７　ＳＫ06配石墓土層断面・小玉出土状況（南→）
　８　ＳＫ06配石墓遺物出土状況（北東→）
図版９　１　ＳＫ09配石墓確認状況（南東→）
　２　ＳＫ09配石墓完掘状況（南東→）
　３　ＳＫ10配石墓確認状況（北→）
　４　ＳＫ10配石墓礫出土状況（南→）
　５　ＳＫ15配石墓確認状況（南→）
　６　ＳＫ15配石墓覆土内礫出土状況（南→）
　７　ＳＫ17土坑墓完掘状況（南→）
　８　ＳＫ17土坑墓小玉出土状況（南東→）
図版10　１　ＳＫ20・73土坑（墓）土層断面（南→）
　２　ＳＫ20・73土坑（墓）完掘状況（南→）
　３　ＳＫ21土坑（墓）確認状況（南→）
　４　ＳＫ22土坑（墓）土層断面（北東→）
　５　ＳＫ23土坑（墓）確認状況（北→）
　６　ＳＫ23土坑（墓）土層断面（北→）
　７　ＳＫ23土坑（墓）完掘状況（北→）
　８　ＳＫ25土坑・31配石墓完掘状況（南→）

図版11　1　ＳＫ27・29土坑（墓）完掘状況（南東→）
2　ＳＫ33土坑（墓）土層断面（南西→）
3　ＳＫ42土坑墓土層断面（南東→）
4　ＳＫ42土坑墓赤色顔料検出状況（北東→）
5　ＳＫ65配石墓土層断面（南→）
6　ＳＫ72配石墓土層断面（南東→）
7　ＳＫ94土坑（墓）土層断面（南→）
8　ＳＫ144土坑（墓）遺物出土状況（北東→）
図版12　1　ＳＫ150土坑（墓）土層断面（南→）
2　ＳＫ163土坑（墓）完掘状況（東→）
3　ＳＫ169土坑（墓）確認状況（南西→）
4　ＳＫ169土坑（墓）土層断面（南東→）
5　ＳＫ169土坑（墓）完掘状況（南西→）
6　ＳＫ328土坑他土坑群確認状況（北→）
7　ＳＫ370土坑完掘状況（東→）
8　ＳＫ376・384土坑（墓）完掘状況（南東→）
図版13　1　ＳＫ407配石墓礫出土状況（南→）
2　ＳＫ407配石墓完掘状況（西→）
3　ＳＫ401土坑完掘状況（南西→）
4　ＳＫ408土坑完掘状況（西→）
5　ＳＫ197土坑他土坑群完掘状況（北→）
6　ＳＫ223配石墓土層断面（北西→）
7　ＳＫ198・277土坑完掘状況（北西→）
8　ＳＫ277土坑土製小玉出土状況（西→）
図版14　1　ＳＱ47配石遺構土層断面（南東→）
2　ＳＱ48配石遺構確認状況（南東→）
3　ＳＱ135・353配石遺構確認状況（東→）
4　ＳＱ135配石遺構土層断面（南→）
5　ＳＱ353配石遺構確認状況（東→）
6　ＳＱ421配石遺構
焼土及び埋設土器検出状況（南東→）
7　ＳＱ405配石遺構土層断面（北西→）
8　ＳＱ405配石遺構土器内完掘状況（北西→）
図版15　1　ＳＱ78配石遺構確認状況（東→）
2　ＳＱ78配石遺構土層断面（南西→）
3　ＳＱ134配石遺構掘り込み部土層断面（南→）
4　ＳＱ137配石遺構確認状況（南→）
5　ＳＱ145配石遺構確認状況（南→）
6　ＳＱ148配石遺構土層断面（西→）
7　ＳＱ358配石遺構確認状況（南東→）
8　ＳＱ373配石遺構確認状況（南東→）
図版16　1　ＳＱ359配石遺構確認状況（東→）
2　ＳＱ359配石遺構土層断面（北東→）
3　ＳＱ414配石遺構確認状況（南東→）
4　ＳＱ414配石遺構土層断面（東→）
5　ＳＱ420配石遺構確認状況（東→）
6　ＳＲ57土器埋設遺構土層断面（南西→）
7　ＳＲ58土器埋設遺構確認状況（西→）
8　ＳＲ58土器埋設遺構土層断面（南西→）
図版17　1　東部環状配石脇・
ＳＸ402性格不明遺構確認状況（北東→）
2　ＳＸ348性格不明遺構完掘状況（北→）
3　ＳＫＰ248柱穴完掘状況（北→）
4　ＳＫＰ341柱穴完掘状況（南→）
5　ＳＸ286性格不明遺構確認状況（南→）
6　ＳＸ286性格不明遺構完掘状況（南→）
7　ＳＸ465性格不明遺構確認状況（南→）
8　ＳＸ465性格不明遺構完掘状況（南→）
図版18　1　ＳＸ103性格不明遺構確認状況（東→）
2　ＳＮ86焼土遺構確認状況（南→）
3　ＳＮ214焼土遺構土層断面（南→）
4　ＳＮ375焼土遺構土層断面（東→）
5　ＳＩ190竪穴住居跡完掘状況（西→）
6　ＳＩ190竪穴住居跡
石囲炉内焼土確認状況（西→）
7　ＳＩ200竪穴住居跡複式炉完掘状況（西→）
8　ＳＩ291竪穴住居跡完掘状況（北西→）
図版19　遺構内出土土器①
図版20　遺構内出土土器②
図版21　遺構内出土土器③
図版22　遺構内出土石器
図版23　炭化材樹種同定顕微鏡写真①
図版24　炭化材樹種同定顕微鏡写真②
図版25　炭化材樹種同定顕微鏡写真③

# 第１章　はじめに

## 第１節　調査に至る経過

秋田・青森・岩手の県境付近の中岳に源流をもち、秋田県北部を貫流する米代川の流域では、過去、幾多の洪水による被害を受けてきた。

昭和47年７月、梅雨前線の停滞による大洪水は既往最大規模のもので、米代川上流部の無堤部では氾濫、堤防は決壊するなどして二ツ井町や能代市の市街地などが浸水し、甚大な被害を受けた。この大洪水を契機に「米代川水系工事実施基本計画」が改訂され、洪水調節を目的とする米代川上流ダム群の一つとして、阿仁川支流の小又川に阿仁川ダムが建設されることとなった。のちに森吉山ダムと改称されるこのダムは、洪水調節の他、既得取水の安定化・河川環境の保全、灌漑用水の供給、水道用水の供給、水力発電などを目的とするダムである。

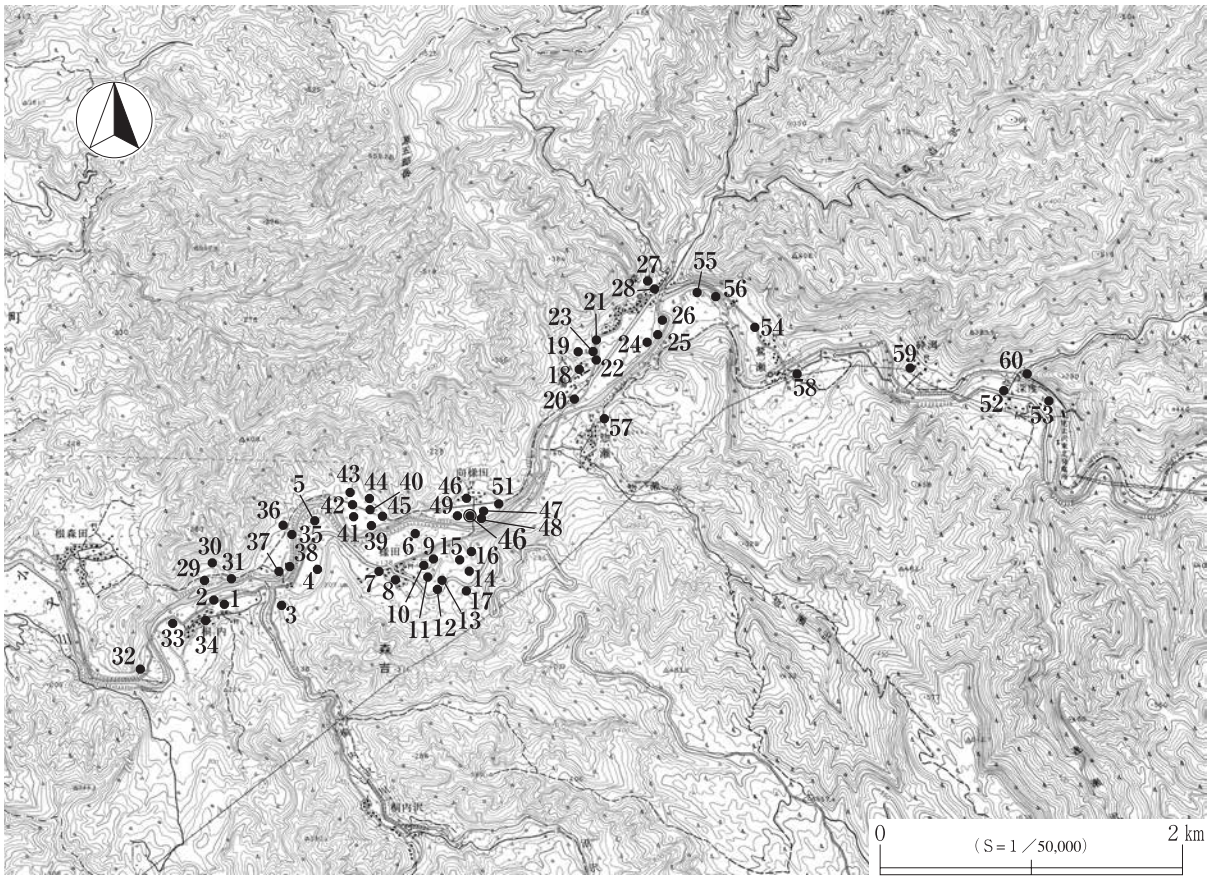
森吉山ダム建設にともない、事業主体である建設省（現国土交通省）東北地方建設局森吉山ダム工事事務所は、文化財保護法に基づき、秋田県教育委員会に対し貯水池流域面積248.0㎢の遺跡分布調査を依頼した。これを受けて、秋田県教育委員会は、遺跡分布調査を平成４（1992）・平成５（1993）年の２年にわたって実施し、その結果、桐内遺跡、二重鳥（ふたえどり）遺跡、漆下遺跡、栩岱遺跡、砕渕（じゃきぶち）遺跡、丹瀬口遺跡の新発見の６遺跡が開発区域に係わることを確認した。この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は協議を重ね、平成３（1991）年発行の『秋田県遺跡地図（県北版）』に記された「周知の遺跡」、及び遺跡分布調査で発見された「新発見の遺跡」の双方についての確認調査を秋田県教育委員会が実施し、遺構・遺物の広がりを把握していくことを申し合わせた。

秋田県教育委員会では、平成６（1994）年度より確認調査を実施し、平成10（1998）年にすべての確認調査を終了し、60の遺跡を確認した（第１表）。

森吉山ダム関連の工事は、平成６（1994）年の下流工事用道路から開始され、翌年には事業地内の材料運搬道路に移った。一方、平成10（1998）年の第12回日本ジャンボリーの開催にともない、平成７（1995）年に日廻岱Ａ遺跡・砕渕遺跡、平成８（1996）年は上悪戸Ｄ遺跡・深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前Ｂ遺跡・天津場Ｃ遺跡のアクセス道路部を森吉町教育委員会が調査した。

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事日程に合わせて発掘調査を実施する合意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。これまで秋田県教育委員会では、平成９（1997）年から平成13（2001）年の５年間で、深渡遺跡・姫ヶ岱Ｃ遺跡・姫ヶ岱Ｄ遺跡・桐内Ａ～Ｄ遺跡・日廻岱Ａ遺跡・向様田Ａ～Ｆ遺跡・砕渕遺跡・漆下遺跡（一部）等の発掘調査を実施している。

向様田Ａ遺跡の発掘調査は２箇年にわたって行われ、遺跡総面積7,600㎡のうち、平成12年度(2000年７月17日～10月19日）に3,600㎡を、平成13年度（2001年５月17日～10月19日）に4,000㎡の調査を実施した。




**第１図　森吉山ダム建設工事区域の遺跡**

**第１表　森吉山ダム工事区域の遺跡一覧**

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡所在地 | 時期 |
|---|---|---|---|
| 1 | **桐内C** | 森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外 | 縄文前～後期 |
| 2 | **桐内D** | 森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外 | 縄文後期 |
| 3 | **桐内沢** | 森吉町森吉字桐内沢関下タ103 | 縄文前～後期 |
| 4 | **日廻岱A** | 森吉町森吉字日廻岱65,63-1外 | 縄文前～晩期 |
| 5 | **日廻岱B** | 森吉町森吉字日廻岱86,88,89,90,91 | 縄文前・後期 |
| 6 | 漆下 | 森吉町森吉字漆下2-1,4,5,6,7,8,14-2,37外 | 縄文前～後期 |
| 7 | **上ハ岱A** | 森吉町森吉字上ハ岱102,104,105,106外 | 縄文中～晩期・弥生 |
| 8 | **上ハ岱B** | 森吉町森吉字上ハ岱70,71,72 | 縄文前～晩期 |
| 9 | 二重鳥A | 森吉町森吉字二重鳥31-1,32-2,47-1,106-1,134,135 | 縄文晩期 |
| 10 | **二重鳥B** | 森吉町森吉字二重鳥11,99,100外 | 縄文中～後期 |
| 11 | **二重鳥C** | 森吉町森吉字二重鳥93,94,95,96,97,110 | 縄文前～晩期 |
| 12 | **二重鳥D** | 森吉町森吉字二重鳥39 | 縄文中～晩期 |
| 13 | **二重鳥E** | 森吉町森吉字二重鳥65,66-1,69,70-2,70-3 | 縄文前・晩期・弥生 |
| 14 | **二重鳥F** | 森吉町森吉字二重鳥124-1 | 縄文中～後期・弥生 |
| 15 | **二重鳥G** | 森吉町森吉字二重鳥80,81-1,84-1 | 縄文早・中～晩期・弥生・近世 |
| 16 | **二重鳥H** | 森吉町森吉字二重鳥6,14,15 | 縄文後期 |
| 17 | **水上** | 森吉町森吉字水上42-1,43-1,44,113-6外 | 縄文中・晩期・弥生 |
| 18 | 天津場A | 森吉町森吉字天津場15-3 | 縄文後期・古代 |
| 19 | 天津場B | 森吉町森吉字天津場16-1 | 縄文後期 |
| 20 | **天津場C** | 森吉町森吉字天津場87-1,87-3,88-2 | 縄文中～後期 |
| 21 | ネネム沢A | 森吉町森吉字ネネム沢26,27,28,29,30,31,32,33,34,35 | 旧石器・縄文後期・古代 |
| 22 | ネネム沢B | 森吉町森吉字ネネム沢17,19,22 | 縄文後期 |
| 23 | ネネム沢C | 森吉町森吉字ネネム沢6-1 | 縄文晩期 |
| 24 | 森吉家ノ前A | 森吉町森吉字森吉家ノ前50,145,174,175,176,177,178 | 縄文前～後期・古代・中世 |
| 25 | **森吉家ノ前B** | 森吉町森吉字森吉家ノ前138,139,140,141,142 | 縄文中～晩期・室町時代 |
| 26 | 森吉家ノ前C | 森吉町森吉字森吉家ノ前101-1,103,114,115,116 | 中世 |
| 27 | 森吉A | 森吉町森吉字森吉95 | 縄文後期・古代 |
| 28 | 森吉B | 森吉町森吉字森吉69 | 縄文後期 |
| 29 | **上悪戸A** | 森吉町根森田字上悪戸4-1,9,10-1,11-1・2,12-1～4,13,14-1,16-1・2外 | 縄文中～晩期 |
| 30 | **上悪戸B** | 森吉町根森田字上悪戸8-12 | 弥生後期 |

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡所在地 | 時期 |
|---|---|---|---|
| 31 | **上悪戸C** | 森吉町根森田字上悪戸7,8-9 | 縄文後～晩期 |
| 32 | **上悪戸D** | 森吉町根森田字上悪戸34-7,34-29～41,34-60・61・67・54外 | 縄文後～晩期 |
| 33 | **桐内A** | 森吉町森吉字桐内前田5-1,6-1・3外 | 縄文早・中～晩・弥生 |
| 34 | **桐内B** | 森吉町森吉字家ノ下16、字桐内33-1,34～37外 | 縄文晩期 |
| 35 | **姫ヶ岱A** | 森吉町根森田字姫ヶ岱8,9-1,10-1 | 縄文前～晩期 |
| 36 | **姫ヶ岱B** | 森吉町根森田字姫ヶ岱14-10～12 | 縄文中～後期 |
| 37 | **姫ヶ岱C** | 森吉町根森田字姫ヶ岱12-2～11,15外 | 縄文早～晩期 |
| 38 | **姫ヶ岱D** | 森吉町根森田字姫ヶ岱12-31外 | 縄文早・中・晩期 |
| 39 | 橋場岱A | 森吉町森吉字橋場岱48,49,50-1外 | 縄文中期 |
| 40 | 橋場岱B | 森吉町森吉字橋場岱69,78外 | 縄文後～晩期 |
| 41 | 橋場岱C | 森吉町森吉字橋場岱42,62外 | 縄文後～晩期 |
| 42 | 橋場岱D | 森吉町森吉字橋場岱110-1 | 縄文時代 |
| 43 | 橋場岱E | 森吉町森吉字橋場岱109 | 縄文時代 |
| 44 | 橋場岱F | 森吉町森吉字橋場岱101,103,104 | 縄文晩期 |
| 45 | 橋場岱G | 森吉町森吉字橋場岱6-1,39,40,46 | 縄文後期 |
| 46 | 向様田A | 森吉町森吉字向様田家ノ下モ8,9-1・2,11,16,81-1,82,83,84 | 縄文晩期 |
| 47 | **向様田B** | 森吉町森吉字向様田67-1・2,70,71-1,72,74,75外 | 縄文後～晩期 |
| 48 | **向様田C** | 森吉町森吉字向様田76,77,78,79 | 縄文後～晩期 |
| 49 | 向様田D | 森吉町森吉字向様田家ノ下モ14-1,17,18,19-1,20 | 縄文晩期 |
| 50 | **向様田E** | 森吉町森吉字向様田家ノ下モ36,37,39,63,64 | 縄文前・晩期・古代 |
| 51 | **向様田F** | 森吉町森吉字向様田58,59外 | 縄文後～晩期 |
| 52 | **深渡** | 森吉町森吉字深渡104-1外 | 縄文前～晩期 |
| 53 | 深渡A | 森吉町森吉字深渡29外 | 縄文後～晩期 |
| 54 | 鷲ノ瀬 | 森吉町森吉字鷲ノ瀬80外 | 縄文後期 |
| 55 | **地蔵岱** | 森吉町森吉字地蔵岱74外 | 縄文前～後期・古代 |
| 56 | 地蔵岱A | 森吉町森吉字地蔵岱124外 | 縄文中～後期 |
| 57 | 惣瀬 | 森吉町森吉字惣瀬86外 | 縄文後期・古代 |
| 58 | 栩岱 | 森吉町森吉字栩岱74外 | 縄文後～晩期 |
| 59 | **砕渕** | 森吉町森吉字砕渕124外 | 縄文中～後期 |
| 60 | 丹瀬口 | 森吉町森吉字丹瀬口2-1外 | 縄文後期 |

※遺跡名がゴシック体は、調査終了遺跡

## 第２節　調査要項

遺　跡　名　向様田Ａ遺跡（むかいさまだＡいせき）（略号２ＭＳＤ－Ａ）
所　在　地　秋田県北秋田郡森吉町森吉字向様田家ノ下モ８外
調査期間　平成12年度：平成12（2000）年７月17日～10月27日
　　平成13年度：平成13（2001）年５月17日～10月19日
調査目的　森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調査面積　7,600㎡（平成12年度：3,600㎡　平成13年度：4,000㎡）
調査主体者　秋田県教育委員会
調査担当者
［平成12年度］　三嶋　隆儀（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
　　牧野　賢美（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
　　吉田　英亮（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
　　加藤　　竜（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
　　高橋　俊幸（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　松尾　睦子（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　鈴木　博文（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　松橋　　淳（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　佐藤　　有（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　藤田　大誠（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　松岡　忠恭（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　小納谷　亮（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　大里　明子（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　田中多喜子（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
［平成13年度］　児玉　　準（秋田県埋蔵文化財センター副主幹）
　　山本　起嗣（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
　　吉田　英亮（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
　　鈴木　博文（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　松橋　　淳（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総務担当者
［平成12年度］　佐藤　　悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長）
　　嶋田　敏輝（秋田県埋蔵文化財センター主査）
　　佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター主事）
　　八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター主事）
［平成13年度］　佐藤　　悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長）
　　嶋田　敏輝（秋田県埋蔵文化財センター主査）
　　佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター主事）

成田　　誠（秋田県埋蔵文化財センター主事）
［平成14年度］　佐藤　　悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長）
嶋田　敏輝（秋田県埋蔵文化財センター主査）
高橋　　修（秋田県埋蔵文化財センター主任）
成田　　誠（秋田県埋蔵文化財センター主事）　※職名は調査年当時のもの

調査協力機関　国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所　森吉町　森吉町教育委員会

参考文献

無明舎 『秋田県昭和史』 1989（平成元）年

秋田魁新報社 『ダムに沈む「むら」森吉町森吉』 モリトピア選書１　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1992（平成４）年

川村公一 『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』 モリトピア選書２　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993（平成５）年

森吉町教育委員会 『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』1996（平成８）年

森吉町教育委員会 『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』1997（平成９）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第251集　1994（平成６）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第259集　1995（平成７）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第267集　1996（平成８）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成９）年

秋田県教育委員会 『深渡遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―』 秋田県文化財調査報告書第286集　1999（平成11）年

秋田県教育委員会 『姫ヶ岱Ｃ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』 秋田県文化財調査報告書第287集　1999（平成11）年

秋田県教育委員会 『桐内Ｃ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―』 秋田県文化財調査報告書第299集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会 『姫ヶ岱Ｄ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ―』 秋田県文化財調査報告書第300集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会 『桐内Ｂ遺跡・桐内Ｄ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―』 秋田県文化財調査報告書第318集　2001（平成13）年

秋田県教育委員会 『桐内Ａ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅵ―』 秋田県文化財調査報告書第334集　2002（平成14）年

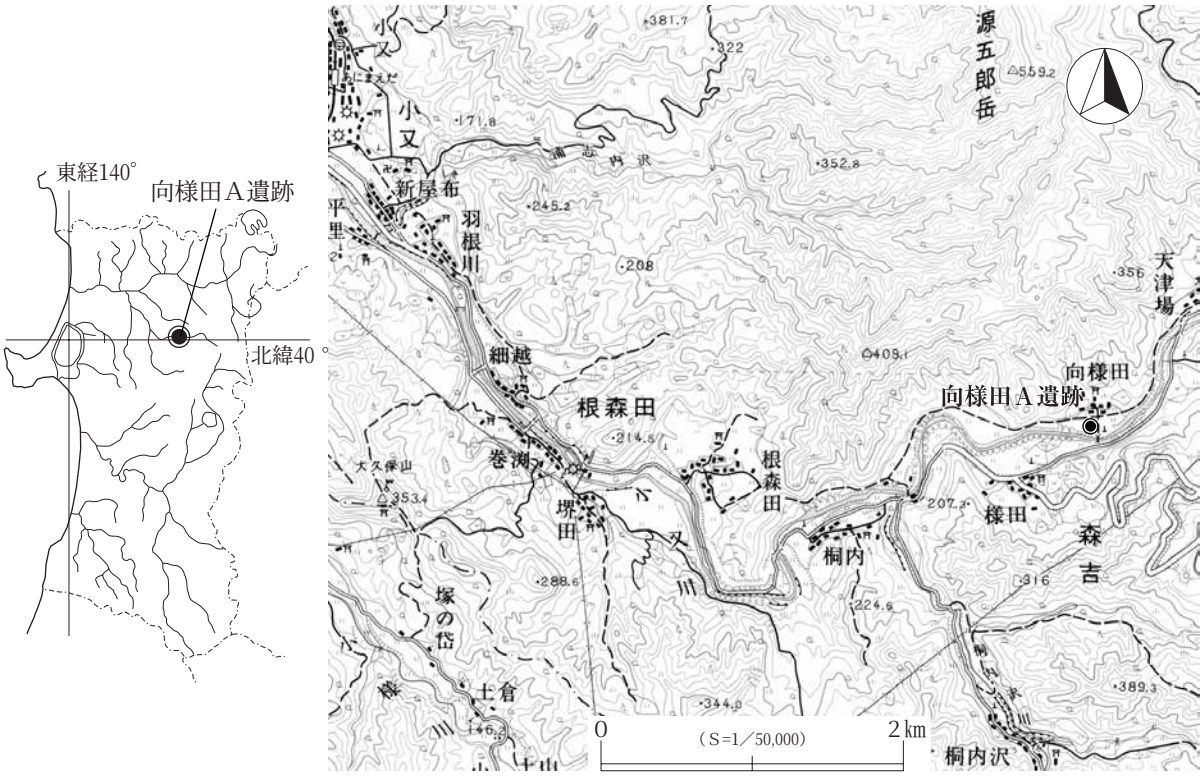
秋田県教育委員会 『桐内沢遺跡・日廻岱Ａ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ―』 秋田県文化財調査報告書第335集　2002（平成14）年

# 第２章　遺跡の環境

## 第１節　遺跡の位置と立地

向様田Ａ遺跡は、秋田県北秋田郡森吉町森吉字向様田に所在している。この向様田地区には向様田Ａ遺跡の他、向様田Ｂ～Ｆ遺跡の計６遺跡が所在する。遺跡のある森吉町は秋田県内陸北部に位置し、町の南東部には雄大な森吉山（標高1,454m）を仰ぎ見る自然豊かな場所である。向様田遺跡群の立地する向様田地区は、森吉山系に源を発する小又川の右岸に位置し、森吉山ダム完成時には湛水区域となる。地理的には、北緯40°02′26″、東経140°28′35″に位置し、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅の東南東約６㎞に所在する。

向様田Ａ遺跡は、小又川の右岸河成段丘上に位置している。これは源五郎岳山地が南に張り出した山裾につながる段丘面にあたる。他の５遺跡も同様である。標高をみると、向様田Ａ遺跡が134～136m前後で、南東の川側が最も高く、北、西の方向に非常に緩やかに傾斜する。当遺跡の西側には沢状の低地を挟んで向様田Ｄ遺跡があり、標高は133m程度である。東側では道路を挟んで向様田Ｂ・Ｃ遺跡が隣接し、向様田Ｂ遺跡は同じ段丘面で標高137m前後である。向様田Ｃ遺跡は一段低い段丘面となり、標高は133m程度である。その他、向様田Ｂ遺跡の東に向様田Ｆ遺跡（標高約138m）、向様田Ｄ遺跡の北東の台地上に向様田Ｅ遺跡（標高約150～159m）がそれぞれ位置する。




**第２図　遺跡位置図**

向様田Ａ遺跡は南側が小又川に向かい、比高差14～16m程度の段丘崖となっている。

遺跡の所在する森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・仙北郡田沢湖町、北は北秋田郡比内町・鷹巣町・合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の北秋田郡阿仁町との境に、町名の由来となった標高1,454mのアスピーテ･トロイデ複式火山である森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地を挟んで、北北東に小繋森（標高1,010m）、北に高烏帽子（標高764m）、北西に源五郎岳（標高559m）などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10～11㎞である。これらの山地は分水嶺をなし、行政区分上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高1,119m）・柴倉岳（標高1,178m）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。小又川沿いには集落・耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大６段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側から山が迫ってきており、概ね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面の方が勾配が急である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともにほ場整備事業が行われた。現在は、森吉山ダム建設のために、桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

この地域に分布する地質は、いわゆる東北地方日本海側グリーンタフ地域に属し、新第三紀中新世の地層を主としている。先第三紀の古期堆積岩（粘板岩、ホルンフェルス）が小繋森の頂上付近に顔を出しているが、それ以外の地域では、新第三紀中新世初期～中期の火山岩類、火山砕屑岩類および堆積岩類を基盤岩としている。また、第四紀層の森吉山及び柴倉岳の火山活動に伴う泥流堆積物・段丘堆積物・扇状地堆積物・河床堆積物・現河床堆積物が小又川に沿う平坦地を中心に被覆している。

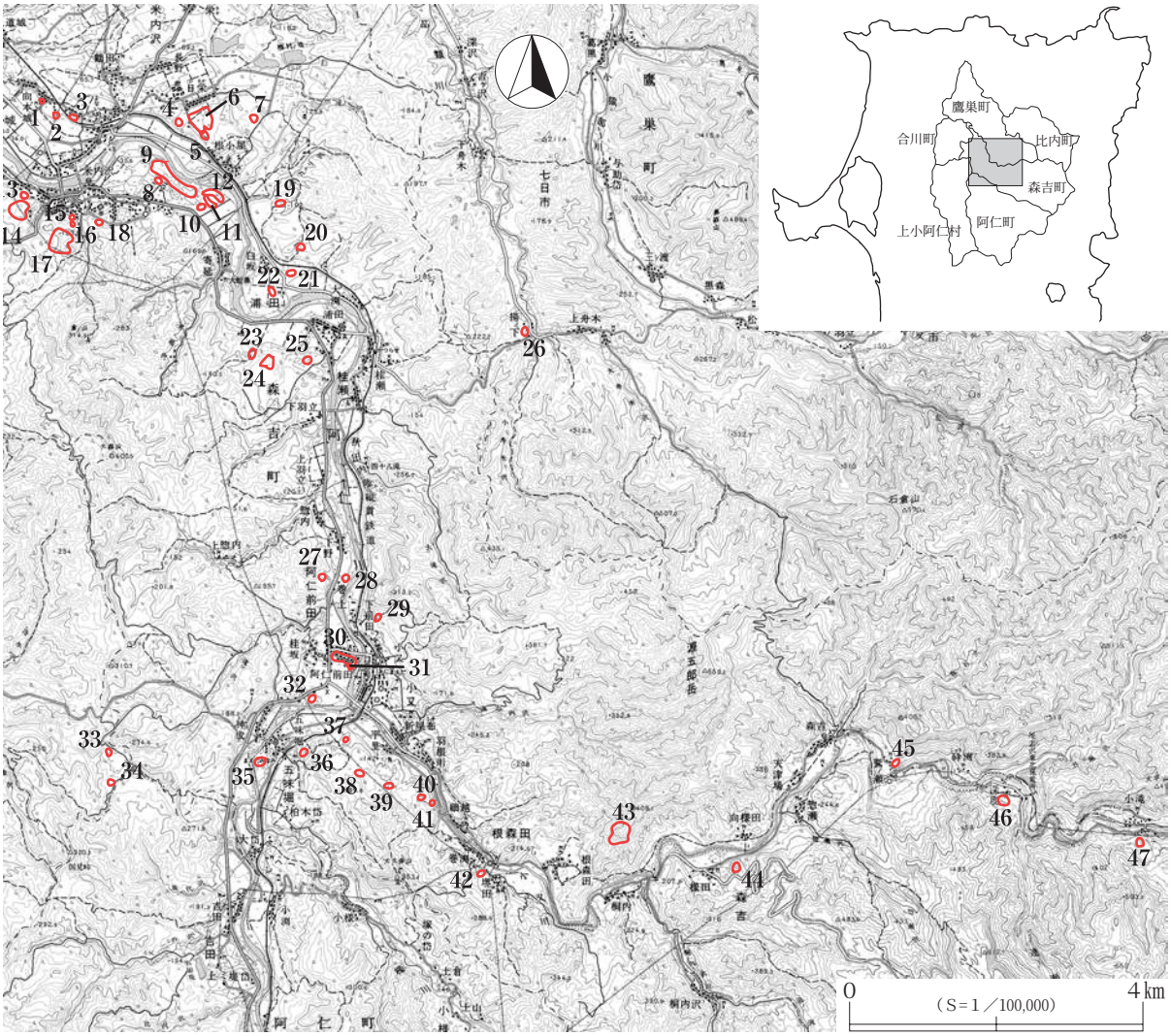
当地区の地質を概観すると、小又川を境に右岸側は火山性砕屑岩類が分布し、左岸川には粗粒玄武岩が急崖を形成し、第四紀の火山泥流堆積物が広く被覆している。

## 第２節　遺跡の歴史的環境

『秋田県遺跡地図（県北版）』（1991年発行）によると、森吉町には58カ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が周知されている。その後、秋田県教育委員会による平成４（1992）年度・平成５（1993）年度の森吉山ダム建設事業に係る分布調査と、平成６（1994）年度からの同事業に係る遺跡確認調査によって、合計60遺跡が小又川流域の根森田・森吉地区で見つかっており、町の遺跡分布図は大幅に塗り替えられた。

森吉町では、ダム建設事業に係る遺跡確認調査の実施された平成６（1994）年度以前においては、旧石器時代の遺跡は確認されていなかったが、これらの調査により、森吉地区のネネム沢Ａ遺跡で旧石器時代の遺物が確認された。

縄文時代の遺跡では、爪形文・貝殻沈線文・条痕文の遺物が出土した早期の桂の沢遺跡、前期の長




**第３図　周辺の遺跡分布図**

## 第２表　秋田県遺跡地図（県北版）による周辺の遺跡一覧

| 番号 | 遺跡名 | 所　在　地 | 主な時代 | 遺　構　・　遺　物 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 向本城 | 森吉町米内沢字本城向屋敷3 | 縄文 | 縄文土器片、石匙 |
| 2 | 桐木岱A | 森吉町米内沢字桐木岱41～65 | 縄文 | 縄文土器片（晩期）、石器 |
| 3 | 桐木岱B | 森吉町米内沢字桐木岱20～23 | 縄文 | 縄文土器片、土偶 |
| 4 | 長野岱II | 森吉町米内沢字長野岱346-1 | 縄文 | 縄文土器片（中期） |
| 5 | 長野岱 I | 森吉町米内沢字長野岱56-1 | 縄文・弥生・古代 | 円形ピット、礫石群、縄文土器片(前期・中期)、弥生土器片、土師器、石器 |
| 6 | 根小屋館 | 森吉町米内沢字長野岱56-1 | 中世 | 空堀 |
| 7 | 根小屋岱 | 森吉町米内沢字根小屋1-34 | 縄文・古代 | 縄文土器片（前期・中期・後期）、土師器、石器 |
| 8 | 冷水岱 | 森吉町米内沢字冷水岱 77-1 | 縄文・古代 | 縄文土器片（前期・中期・後期）、土師器、石器 |
| 9 | 狐岱 | 森吉町米内沢字狐岱88 | 縄文・古代 | 竪穴住居跡(縄文・古代)、土坑、配石墓、縄文土器片(前期・中期・晩期)、土師器 |
| 10 | 山崎 | 森吉町米内沢字山崎57- 1 | 縄文 | 土坑、配石遺構、縄文土器片 |
| 11 | 吉野 I | 森吉町米内沢字吉野13-1 | 縄文・弥生 | 土坑、縄文土器片、弥生土器片 |
| 12 | 吉野II | 森吉町米内沢字吉野5-1 | 古代 | 土師器片 |
| 13 | 御獄 | 森吉町米内沢字御獄62-1 | 古代 | 土師器片 |
| 14 | 御獄館 | 森吉町米内沢字高御獄2 | 中世 | 空堀、土塁 |
| 15 | 寺ノ上 I | 森吉町米内沢字寺ノ上12-28 | 縄文 | 縄文土器片（晩期）、石鏃、石匙 |
| 16 | 寺ノ上II | 森吉町米内沢字寺ノ上27-1 | 古代 | 土師器片 |
| 17 | 米内沢城 | 森吉町米内沢字倉ノ沢出口99-5 | 中世 | 空堀、土塁、井戸跡 |
| 18 | 伊勢の森 | 森吉町米内沢字伊勢ノ森52-57 | 古代 | 土師器片 |
| 19 | 浦田うるし沢 | 森吉町浦田字うるし沢50-1 | 縄文 | 縄文土器片 |
| 20 | 比内道下山根 | 森吉町浦田字白坂山根92 | 縄文 | 縄文土器片（後期） |
| 21 | 塚の岱 | 森吉町浦田字塚の岱80 | 縄文 | 縄文土器片（晩期） |
| 22 | 白坂 | 森吉町浦田字白坂上岱19-22 | 縄文 | 竪穴住居跡、土坑、配石遺構、縄文土器（後期・晩期）、岩偶、石錘、土製品 |
| 23 | 愛宕堂 | 森吉町浦田字稲荷沢40 | 縄文 | 縄文土器片（中期）、石器破片 |
| 24 | 浦田館 | 森吉町浦田字愛宕堂下44 | 中世 | 館跡 |

| 番号 | 遺跡名 | 所　在　地 | 主な時代 | 遺　構　・　遺　物 |
|---|---|---|---|---|
| 25 | 石倉坂 | 森吉町浦田字石倉坂3 | 縄文 | 縄文土器片（前期・中期）、石器 |
| 26 | 若木岱 | 鷹巣町七日市字若木岱9-2 | 縄文 | 縄文土器片、石器 |
| 27 | 焼山 | 森吉町阿仁前田字道行沢136-1 | 縄文 | 縄文土器片 |
| 28 | 下野上野岱 | 森吉町阿仁前田字下野上野岱345 | 縄文 | 縄文土器片 |
| 29 | 下前田下山根 | 森吉町阿仁前田字下前田下山根36 | 縄文 | 縄文土器片・石器 |
| 30 | 前田館 | 森吉町阿仁前田字八幡森1-1 | 中世 | 館跡 |
| 31 | 八幡森 | 森吉町阿仁前田字八幡森1-1 | 縄文 | 縄文土器片（前期・中期） |
| 32 | 陣場岱 I | 森吉町阿仁前田字陣場岱40-1 | 縄文 | 縄文土器片（前期・中期） |
| 33 | 冷水沢A | 上小阿仁村仏社字冷水沢 | 縄文 | 縄文土器片（後期）、石器 |
| 34 | 冷水沢B | 上小阿仁村仏社字冷水沢 | 縄文 | 縄文土器片（後期）、石器 |
| 35 | 五味堀 | 森吉町五味堀字五味堀1 | 縄文 | 縄文土器片、石器 |
| 36 | ボサツ堂 | 森吉町五味堀字堂ノ前45-46 | 縄文 | 縄文土器片（晩期） |
| 37 | 五味堀高屋敷 | 森吉町五味堀字下タ大久保岱174 | 縄文 | 縄文土器片 |
| 38 | 五味堀大久保岱 | 森吉町五味堀字大久保岱20 | 縄文 | 縄文土器片（後期）、独鈷石 |
| 39 | 小又小平里A | 森吉町小又字涌坪74 | 縄文 | 縄文土器片（後期）、石器 |
| 40 | 小又小平里B | 森吉町小又字上岱9 | 縄文 | 縄文土器片（後期）、石器 |
| 41 | 片平館 | 森吉町根森田字片平館3 | 縄文 | 縄文土器片（後期）、石器 |
| 42 | 桂の沢 | 森吉町根森田字桂ノ沢13 | 縄文 | 土坑、縄文土器（早期～晩期）、石器 |
| 43 | 仲ノ又館 | 森吉町根森田字仲ノ又75 | 中世 | 空堀 |
| 44 | 様田 | 森吉町森吉字様田二重鳥131 | 縄文 | 縄文土器片、石器 |
| 45 | 鷲ノ瀬 | 森吉町森吉字鷲ノ瀬31-1 | 縄文 | 縄文土器片（前期） |
| 46 | 深渡 | 森吉町森吉字深渡家の前 | 縄文 | 縄文土器（前期～晩期）、石組炉 |
| 47 | 向小滝 | 森吉町森吉字向小滝上段613 | 縄文 | 縄文土器片（晩期）、石器 |

野岱Ⅰ遺跡・地蔵岱遺跡、前期から後期にかけての大規模な集落跡が確認された狐岱遺跡がある。中期から晩期にかけては、姫ヶ岱Ｃ遺跡・姫ヶ岱Ｄ遺跡・砕渕遺跡・日廻岱Ａ遺跡・天津場Ｃ遺跡・上悪戸Ｄ遺跡・深渡遺跡・森吉家ノ前Ｂ遺跡・白坂遺跡・塚ノ岱遺跡がある。これらの中の遺跡で、深渡遺跡の石棺様組石・白坂遺跡の『笑う岩偶』は、大きく報道され話題となった。

現在の森吉町域を含む阿仁川・小阿仁川流域は『日本三代実録』に記す「楉淵（すぎぶち）村」に擬定されており、古代にあっては、律令化外の地として考えられている。古代の遺跡では、狐岱遺跡や諏訪岱遺跡などで平安時代の集落跡、地蔵岱遺跡で製鉄関連遺構が確認されており、その他天津場Ａ遺跡・ネネム沢Ａ遺跡・森吉家ノ前Ａ遺跡でも古代の遺構・遺物が確認されている。

中世以降の遺跡では、いわゆる中世城館が町全域で10箇所確認されている。町南部の旧前田村には、阿仁前田地区の前田館、五味堀地区の花館・天館、根森田地区の仲ノ又館がある。本遺跡に近い仲ノ又館には空堀や見張り台跡がある。森吉山ダム建設地区では、中世の城館跡は確認されていないものの、森吉家ノ前Ｂ遺跡で馬具の一部と思われる金具と、室町時代に属すると思われる珠洲（すず）系陶器が出土しており、小滝新兵衛岱遺跡から出土した鎌倉時代製作の青銅古鏡とともに、当該地域の中世の様相を示す数少ない資料となっている。

参考文献

秋田県農政部農地整備課　『大野台開発計画区域土地分類基本調査米内沢』　1978（昭和53）年

川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所1993（平成５）年

角川書店　『角川日本地名大辞典５秋田県』　1980（昭和55）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　1991（平成３）年

秋田県　『秋田県史考古編』　1977（昭和52）年

奈良修介・豊島昂　『秋田県の考古学』　郷土考古学叢書３　吉川弘文館　1966（昭和41）年

大和久震平　「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」『昭和三十二年度調査研究報告』　秋田県文化財保護協会　1958（昭和33）年

大野憲司　「狐岱遺跡について～1989年の範囲確認調査から～」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』　第５号　1990（平成２）年

高橋学　「森吉町長野岱Ⅰ遺跡採集の岩偶」『秋田考古学』　第42号　秋田考古学協会　1993（平成５）年

加賀利男　「長野岱Ⅰ遺跡について」『広報もりよし』　第120号　1968（昭和43）年

加賀利男　「塚の岱遺跡の発掘調査について」『広報もりよし』　第131号　1969（昭和44）年

森吉町　「民俗資料ならびに考古学資料調査の協力依頼について」『広報もりよし』　第127号　1968（昭和43）年

森吉町教育委員会　『諏訪岱遺跡～堤沢川流路溝工事に係る発掘調査報告～』　1992（平成４）年

森吉町教育委員会　『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1996（平成８）年

森吉町教育委員会　『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1997（平成９）年

森吉町教育委員会　『上悪戸Ｄ遺跡発掘調査報告書～比内・森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』　1997（平成９）年

秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会 『白坂遺跡発掘調査報告書－県営圃場整備に係る埋蔵文化財発掘報告－』 秋田県文化財調査報告書第244集　1994（平成６）年

秋田県教育委員会 『桂の沢遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘報告－』 秋田県文化財調査報告書第247集　1994（平成６）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成９）年

# 第３章　発掘調査の概要

## 第１節　遺跡の概観

向様田Ａ遺跡を含む向様田遺跡群は、森吉山の北麓を西に流れる小又川の右岸段丘上に立地する。向様田Ａ遺跡は東西に細長く形成された河成段丘上にあり、東西約170m、南北最大約95mに及ぶ。調査区内の標高は134～136mと比較的平坦であるが、段丘縁辺部である南側がやや高く、北西に向かい緩やかに傾斜している。遺跡中央部の標高が低く段丘礫が露出し、この場所に環状配石遺構が構築される。南側は小又川に向かい比高差およそ15m前後の段丘崖となっている。本遺跡の現況はほぼ全域が休耕田である。

平成６（1994）年度に秋田県教育委員会が対象面積63,934㎡の確認調査を実施し、そのうちの7,600㎡が向様田Ａ遺跡の範囲とされた。今回の調査では平成12年度に遺跡東半3,600㎡の、平成13年度には西半4,000㎡の調査を行った。

遺跡はその中央を南北に走る用水路によって大きく東西に分断され、調査年度も異なるため、便宜上東半をＡ区、西半をＢ区として記述する。ただし、平成12年度調査ではＡ区全域の精査が終了しなかったため、東部環状配石周辺、北部配石群周辺の調査は平成13年度に行った。

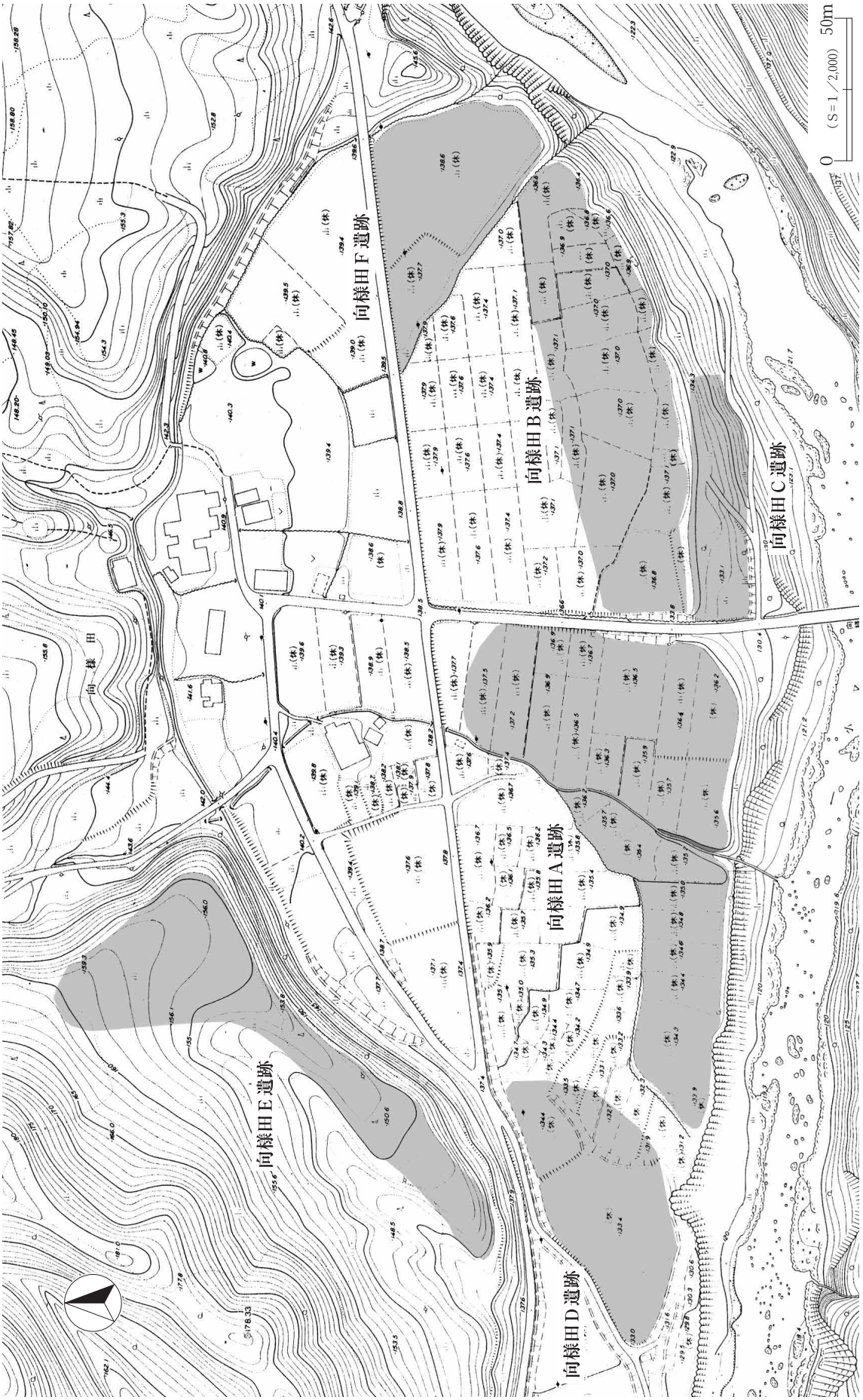
## 第２節　調査の方法

### １　野外調査

調査はグリッド法で行った。向様田Ａ遺跡のみではなく、向様田遺跡群の対象面積全域にグリッドを設定するため､向様田Ａ遺跡の北､向様田地区中央付近に任意の原点(Ｘ＝4316.000,Ｙ＝－30145.000,Ｚ＝138.882）を設定し、この原点を通る国家座標第Ｘ系の南北方向に南北基準線Ｘ軸を設定した。その地点でこの基準線と直交する線を東西基準線Ｙ軸とし、これらＸ・Ｙ両軸に４ｍ×４ｍの方眼メッシュを割り付けた。その原点をＭＡ50とし、東西方向には、Ｙ軸上西に４ｍ進む毎にＭＢ・ＭＣ・ＭＤ・・・・と正順に、東に４ｍ進む毎にＬＴ・ＬＳ・ＬＲ・・・・と逆順に各々Ａ～Ｔまでの、２文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Ｘ軸を北に４ｍ進む毎に51･52･53・・・・と漸増し、南に４ｍ進む毎に49・48・47・・・・と漸減する２桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅の杭を通るＸ軸とＹ軸の組み合わせで、ＭＡ50･ＭＢ51･ＭＣ52・・・・のように呼ぶこととした。

遺構は種類別に略号を付し、検出順に連番で遺構番号を付けた。番号登録の後、検討の結果遺構と断定することのできなくなったものは、これを欠番としている。原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、２または４分割法による精査を行った。

遺構外遺物は、原則的にグリッド単位で取り上げ、グリッド名、出土した層位、種別、年月日を記録した。捨て場とした箇所では、グリッドをさらに４分割し、南東端から時計回りでＡからＤの枝番を付した。祭祀関係の遺物・良好な精製土器等はトータルステーションによる機械測量を行った。記




**第４図　向様田遺跡群全体図**

録した項目は、１．遺物番号、２．出土グリッド、３．出土層位、４．種別、５．Ｘ座標、６．Ｙ座標、７．Ｚ座標、８．取り上げ年月日である。

遺構内遺物は簡易遣り方測量によって原則的に全点計測・記録して取り上げた。記録項目は捨て場の遺物と同様である。ただし、平成13年度調査では、覆土一括で取り上げた。

平面図および断面図は、原則として１／20で作成し、土器埋設遺構や炉跡などは細部状況を表すために適宜１／10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図にあたっては、基本的にはグリッド杭を基準とする簡易遣り方測量によったが、調査範囲やコンター図はトータルステーションによる機械測量を行った。断面図には土色・土性・しまり・粘性・混入物等を注記し、必要に応じてエレベーション図も作成した。また、ラジコンヘリコプターによる写真実測も行っている。

写真撮影は、遺跡や遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、規模の大きな遺構、遺跡の部分的な全景撮影の際にはローリングタワーを使用した。また、発掘終了の際には全景撮影のためにセスナ機・ラジコンヘリコプターによる空撮を行った。写真は、35㎜カメラにモノクロ、カラーリバーサル、カラーネガフィルムを装着して撮影を行った。

２　室内整理

各遺構については、現場で作成した平面図・断面図を第１原図とし、トータルステーションを用いて計測したものはデジタル処理した。使用したプログラムは（株）シン技術コンサル「遺跡管理システム」である。この第１原図をスキャニングし、Adobe社「Photoshop5.5」・Adobe社「Illustrator8.0」を使用し、トレースまでの作業を行った。

遺物については、洗浄・注記の後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に１／１で実測図を作成した。遺物についても遺構の処理と同様、デジタル処理を行った。報告書に掲載するにあたっての縮尺変更の作業も同様である。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などは拓影図の作成をあわせて行い、これらの作業の後、写真撮影を行った。

## 第３節　調査の経過

発掘調査は、平成12年７月17日から10月27日、および平成13年５月17日から10月19日まで実施した。

平成12年度調査では、対象面積7,600㎡のうち4,000㎡の調査を行ったが、調査区西側の段丘礫層が露出した範囲で配石遺構が確認され、その一帯の性格付けが困難だったことや、２箇所の捨て場の遺物出土量が多く作業が進められなかったこと、終盤に至って遺構の検出が相次いだことなどから、検出遺構は確認図面のみを実測し埋め戻し、西部の礫群に関しては、写真実測を行い、これら400㎡については次年度の調査に持ち越すこととなった。

平成13年度の調査では、７月に空撮写真から、昨年度の西部の礫群に環状に構築された遺構があることが判明し、さらに、13年度の調査区からも中心に敷石状の配石を伴う遺構の存在が確認された。この両遺構は報道等でも取り上げられ、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の協議の結果、数年間は保存し、一般に公開することとなった。そのため、両環状配石遺構は、下部施設の有無を確認することなく、現地保存している。

**第５図　向様田Ａ遺跡グリッド設定図**

## 第３表　調査経過（平成12年度）

| 平成12年 | 作業状況 | 特記事項 |
|---|---|---|
| ７月３週 | コンテナハウス・プレハブ等を桐内沢遺跡より移動　機材搬入、遺跡周辺の条件整備を行いながら、表土除去を行う | 21）グリッド杭打設開始 |
| ４週 | 確認調査時のトレンチ精査　調査区中央に基本土層観察用のベルト（ＬＴ２２～ＭＣ４３）を設定、両側にトレンチを設定し、土層を確認 | 27）三嶋、事故防止対策委員会に出席 |
| ５週 | 確認調査時のトレンチ、及びＬＳライン・３３ラインに設定したトレンチ精査調査範囲東側中央に遺物が集中して出土、写真撮影・遺物の取り上げを行う | １）芳賀所長・杉渕秋田北分室長・嶋田主査来跡 |
| ８月１週 | トレンチ精査・遺物の取り上げ（写真撮影）　調査範囲南東部粗掘開始 | ８）産業医による問診　10）松橋森吉町長・町教委柴田教育長・木村局長補佐・細田主事来跡、町長より作業員に挨拶 |
| ３週 | 北東部遺物集中区に関して、グリッドを４分割して遺物の取り上げを開始南西部遺物集中区についても精査を開始　南東部の粗掘を進めたところ、土坑を10基程度検出、配石を伴うものが顕著 | 24）パリノ・サーヴェイ辻本・千葉氏来跡、杉渕秋田北分室長来跡 |
| ４週 | 両遺物集中区の精査　南東部の粗掘ほぼ終了　南東部検出遺構精査 | |
| ９月１週 | 軽油汚染土の処理　両遺物集中区の精査　北部粗掘開始 | ４）発電機より軽油の流出が発覚、対応にあたった　５）森吉山ダム工事事務所菅原副所長・川村調査設計課長来跡、軽油流出に関して関係機関の視察と指導（鷹巣阿仁広域市町村圏組合消防署・秋田県警鷹巣警察署・秋田県鷹巣保健所・北秋田建設事務所河川砂防課・秋田県鷹巣阿仁健康福祉センター環境指導課・森吉町役場建設課）、櫻田課長補佐土嚢袋持参<br>６）森吉山ダム工事事務所と今後の協議、船木副所長・櫻田課長補佐・文化財保護室谷地学芸主事来跡、佐々木・八文字主事土嚢袋持参　８）森吉山ダム工事事務所川村調査設計課長・小林専門職・田中専門職・芳賀所長来跡 |
| ２週 | 両遺物集中区の精査・遺物取り上げ、重要遺物（祭祀関係・精製土器等）に関しては出土位置記録・写真撮影　北西部粗掘開始　南東部検出遺構精査 | 北秋田建設事務所河川砂防課春日課長・山本副主幹・鈴木技師・土佐組専務・三嶋で、汚染土搬出の打ち合わせ　13）北秋田建設事務所河川砂防課山本副主幹・鈴木技師来跡　14）北秋田建設事務所河川砂防課春日課長・山本副主幹来跡、船木副所長来跡 |
| ３週 | ２カ所（南西部・北東部）の遺物集中区を縄文時代晩期前半の捨て場と位置づけ作業を進める。重要遺物に関しては写真撮影、出土位置の記録、破片資料等はグリッド（４分割）単位で取り上げ　南東部検出の遺構精査<br>遺跡西部の粗掘、配石遺構を確認 | 18）日廻岱Ａ遺跡のパーティー合流、杉渕北分室長来跡　19）テクノクリーン（株）（汚染土処理業者）来跡　20）北秋田建設事務所河川砂防課春日課長・山本副主幹（他技師３名）・土佐組専務・舟木副所長・杉渕北分室長で、汚染土処理の現地協議　21）明治コンサルタント株式会社鷲谷・小林氏来跡　22）森吉山ダム工事事務所小林専門職・相馬工事課長引率で森吉町教職員研修会25名が来跡 |
| ４週 | 南西部捨て場の遺物出土状況の全景撮影、遺物とともに弧状に礫が巡る<br>南東部検出の遺構精査　遺跡北部を２ｍトレンチ調査　調査区西部の精査 | 25）土佐組による汚染土の搬出作業開始 |
| 10月１週 | 捨て場の精査（写真撮影・出土遺物取り上げ）　南東部検出の遺構精査<br>遺跡北部を２ｍトレンチ調査　調査区西部の精査 | ４）杉渕秋田北分室長来跡 |
| ２週 | 捨て場の精査（写真撮影・出土遺物取り上げ）同時に遺物取り上げの終了した箇所を掘り下げ　南東部検出の遺構精査　調査区西部の精査、ＭＦ３０グリッドで配石遺構を確認、全面調査に切り替えた | 10）秋田県建設技術協会北秋田支部一行、研修のため来跡　シン技術コンサル航空写真見積りのため来跡　11）縣北新聞豊村記者取材　櫻田課長補佐・杉渕北分室長来跡　12）児玉課長補佐・杉渕北分室長来跡　13）縣北新聞に記事掲載 |
| ３週 | 捨て場の精査（写真撮影・出土遺物取り上げ）同時に遺物取り上げの終了した箇所を掘り下げ、北東部捨て場より岩偶出土、南西部捨て場出土の礫を実測　南東部検出の遺構精査　調査区西部の精査　調査区西側中央からも多数遺構検出 | 17）鹿角市教委秋元生涯学習課長補佐来跡　18）森吉山ダム工事事務所川村調査設計課長・小林専門職来跡　20）国立歴史民俗博物館阿部義平氏・秋田県立博物館庄内課長補佐・櫻田課長補佐・高橋秋田中央分室長・杉渕秋田北分室長・嶋田主査来跡 |
| ４週 | 捨て場の精査（写真撮影・出土遺物取り上げ）同時に遺物取り上げの終了した箇所を掘り下げ、南西部捨て場出土の礫を実測・取り上げ　調査区西部の精査・空撮準備　調査区西側中央からも多数遺構検出、遺構精査を進めるが、終了不可能なものに関しては写真撮影・確認図面実測を行い、次年度に持ち越し　調査終了 | 25）シン技術コンサルによる西部礫群の写真図化のための空撮、及び遺跡全体の空撮　26）芳賀所長・杉渕秋田北分室長来跡　27）現場撤収 |

## 第４表　調査経過（平成13年度）

| 平成13年 | 作業状況 | 特記事項 |
|---|---|---|
| ５月２週 | バックホー、キャリアダンプによる表土除去を行う | 10）グリッド杭打設開始 |
| ３週 | 17日調査開始　現場・事務所周辺の条件整備を行う　確認調査時のトレンチ精査 | 18）児玉副主幹来跡、安全対策に関わる指示を仰ぐ |
| ４週 | 調査区西側より粗掘を開始　調査区中央部ＮＦライン付近に基本土層観察ベルト設定 | 21）芳賀所長来跡、作業員に挨拶　23）八戸市縄文学習館小林主幹来跡 |
| ５週 | 礫層にぶつかり粗掘が難航　調査区西側粗掘の結果、土坑多数検出 | 27）吉田学芸主事怪我のため入院（～7/20）　29）八戸市縄文学習館一行、研修のため来跡　30）鷹巣阿仁地区生涯学習指導員協議会一行、研修のため来跡 |
| ６月１週 | 粗掘範囲の拡大に伴い遺構検出数が増大、ＮＣ～ＮＦラインに配石遺構を多数検出　西側の粗掘ほぼ終了 | ７）文化財保護室鈴木室長・大野副主幹・杉渕北調査課長・嶋田主査来跡、鈴木室長より安全に関する指示を仰ぐ　８）合川町消費者の会一行、見学のため来跡 |
| ２週 | 調査区西側で精査を開始、縄文中期後葉の竪穴住居跡を３軒検出　排土の河川流出対策を行う | |
| ３週 | 調査区中央部の粗掘ほぼ終了、空撮図化業務委託に備え礫の洗浄を行う | 21）作業員健康診断 |
| ４週 | 28日空中写真測量を行う　昨年度排土場下ＭＧ３５付近に遺物包含層が認められた | 26）佐々木安全衛生指導員・櫻田南調査課長来跡、現場の安全管理について指導を受ける　28）シン技術コンサルによる礫群の写真図化のための空撮、及び遺跡全体・特定遺構の空撮 |
| ７月１週 | 調査区全域の粗掘をほぼ終了、全域で精査開始　昨年度からの継続調査区域に沈殿池を造成　調査区西側の向様田Ｄ遺跡と接するＮＰ２５付近にトレンチを設定、遺構の検出は無い | ３）文化財保護室谷地学芸主事来跡 |
| ２週 | 遺物の洗浄を開始　昨年度検出分の遺構の精査に着手　調査区西側～中央部にかけた礫群のエレベーション作成 | ９）杉渕北調査課長来跡　13）シン技術コンサル空撮成果写真納品のため来跡　第一回森吉山ダム開放セミナー現場見学会一行来跡 |
| ３週 | 昨年度排土場の排土・表土除去を行い、引き続き粗掘に着手、粗製土器片多数出土 | 16）杉渕北調査課長来跡、雨天時の安全・環境対策について指示を仰ぐ　18）森吉山ダム工事事務所笹木専門職来跡、排土流出対策を視察 |
| ４週 | 空撮写真をもとにＮＥ２６周辺を精査、敷石を中心に径16mの環状に配される礫群を確認、西部環状配石遺構とする | 23）森吉山ダム工事事務所笹木専門職・土濃塚係長、文化財保護室谷地学芸主事来跡　24）児玉副主幹、ダム事故防止協議会総会へ出席　26）児玉副主幹発掘調査協議へ出席 |
| ５週 | 昨年度排土場下より配石遺構を４基検出、礫群層の広がりも見られるため調査範囲を広げることとした | ８・２）安全パトロール実施、土佐組土佐勝男氏来跡　３）小林國學院大学教授・熊谷盛岡大学教授・冨樫秋田県立博物館館長・文化財保護室大野副主幹・杉渕北調査課長来跡、小林教授より現地指導を受ける |
| ８月１週 | 土器埋設を伴う配石遺構に接して、立石を伴う配石遺構を検出 | ７）ダム探検隊見学者一行来跡　10）向様田Ａ～Ｆ遺跡で安全衛生講習会開催、南・北・中央調査課職員が全員参加し現場の安全対策について検討会を実施 |
| ３週 | 現場・現場周辺に台風対策を施す | 20）吉田学芸主事現場復帰　22）前森吉山ダム工事事務所専門職小林氏来跡、台風対策の指示を仰ぐ　24）安全パトロール実施、土佐組土佐勝男氏来跡 |
| ４週 | 東西の環状配石遺構の全景を撮影　礫群下の遺構の有無を確認するため、東西（２５ライン）南北（ＮＡライン）にトレンチを設定　昨年度調査範囲の北西部ＭＦライン以北黒褐色土中より多数の土坑・配石遺構を検出<br>東部環状配石遺構に設定した南北トレンチを精査したところ、内帯・外帯ともに掘り込んだ後盛土した痕跡を認める | |
| ９月１週 | 調査区中央部の精査をほぼ終了する　東部環状配石遺構のエレベーション図作成 | ３）杉渕北調査課長来跡 |
| ２週 | 東部環状配石遺構の最北部に位置する不規則に並ぶ礫群中より礫石器数点を確認、付近からは土器埋設を伴う配石遺構・焼土を伴う配石遺構を検出 | 13）芳賀所長・杉渕北調査課長・嶋田主査来跡　シン技術コンサルによる礫群の写真図化のための空撮 |
| ３週 | 最北部礫群のレベリング終了　東部環状配石遺構南北トレンチに直交する東西トレンチを３０ラインに設定　遺跡見学会に向け、遺構の清掃を行う | 17）遺跡見学会職員打ち合わせ　18）県教育庁秋元・佐々田両教育次長、文化財保護室大野副主幹・芳賀所長・杉渕北調査課長来跡　22）秋田魁新報に記事掲載　23）縣北新聞に記事掲載 |
| ４週 | 遺跡見学会用通路の設定・調査区清掃・現場周辺などの条件整備を行う<br>調査区西側の精査をほぼ終了する | 26）向様田遺跡群報道発表、森吉山ダム工事事務所川村調査設計課長・笹木専門職他ダム関係者・芳賀所長・杉渕北調査課長・児玉副主幹・報道機関（13社ＮＨＫ・ＡＢＳ・ＡＫＴ・ＡＡＢ・朝日新聞・毎日新聞・秋田魁新報・河北新報・読売新聞・大館新報・秋北新聞・北鹿新聞・縣北新聞）来跡、同日各放送局にてＴＶ放送　27）各新聞社に記事掲載、遺跡見学会リハーサルを実施　29）向様田遺跡群遺跡見学会実施、約400名来跡 |
| 10月１週 | 北部礫群下を掘り下げたところ、数基の土坑を確認　東部環状配石遺構南北トレンチに直交する東西トレンチを３１・３２ラインに設定 | １）シン技術コンサル来跡、空撮打ち合わせを行う　３）秋田魁新報社山影記者来跡、環状配石遺構を撮影　４）森吉山ダム工事事務所斎藤用地課長、現場視察のため来跡　５）秋田魁新報に特集記事掲載 |
| ２週 | 北部礫群下の掘り下げを終了し、多数の土坑・ピットを検出する　ピット群に囲まれる形で長軸3.5m程の性格不明遺構を検出 | ９）森吉町教育委員会一行来跡　10）鷹巣町教育委員会佐野・榎本主事、新潟県立博物館学芸員宮尾氏来跡　11）安全パトロール実施、土佐組土佐勝男氏来跡 |
| ３週 | 調査区全域にて精査を終了　東部及び西部環状配石遺構については、補足調査に備えて十分に養生を施し調査を終了 | 15）秋田師範学校26期、秋田大学28期同窓会一行、見学のため来跡　17）文化庁岡村道雄氏・文化財保護室谷地学芸主事来跡、岡村氏より現地指導を受ける　18）シン技術コンサルによる遺跡全体の空撮　19）芳賀所長・杉渕北調査課長来跡、所長より作業員に挨拶　現場撤収 |

# 第４章　調査の記録

## 第１節　基本層位

調査区は、中央付近を南北に流れる用水路によって二分されている。調査もこれを境に、Ａ区・Ｂ区に分けて調査を行ったが、遺構の検出状況等からも遺跡の東西で若干様相が異なる。

Ａ区においては中央付近に設けられた確認調査時のトレンチに沿って基本土層観察ベルト（Ａ地点）を設定し、以下のとおり分層した（第６図）。このトレンチは当該区において検出された２箇所の捨て場のうち、南西部捨て場の北東端をかすめている。これを基本とし、補足的に北東部捨て場の範囲にあたるＢ地点、北部配石遺構群の検出位置であるＣ地点についても、土層断面の観察を行った。

Ａ区基本土層

Ⅰ－ａ　暗褐色土（10YR3/3）シルト　粘性普通　しまりやや弱　根が入り込みボソボソしている
　　水田耕作土

Ⅰ－ｂ　黒褐色土（10YR2/3）シルト　粘性やや強　しまりやや強
　　黄褐色土ブロック10%、炭化物（φ1㎜前後）２%、白色粒子若干、中礫若干混入
　　上部に帯状に錆が認められる

Ⅰ－ｃ　黒褐色土（10YR2/2）シルト～砂　粘性やや強　しまり普通
　　Ⅰ－ｂ層に類似するも、混入物が希薄

Ⅰ－ｄ　黒褐色土（10YR2/3）シルト　粘性やや強　しまり普通
　　黄褐色砂質土ブロック多量（50%）、白色粒子若干、中礫少量（10%）混入

Ⅱ　黒褐色土（10YR2/2）シルト　粘性やや強　しまり普通
　　暗褐色土粒･ブロック多量（40%）、炭化物（φ1～30㎜）多量（20%）、白色粒子少量（10%）、中礫 （φ10～50㎜）多量混入
　　遺物が大量に混入する　北東部捨て場の遺物包含層と近似

Ⅲ　黒褐色土（10YR3/1）シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　南西部捨て場の遺物包含層

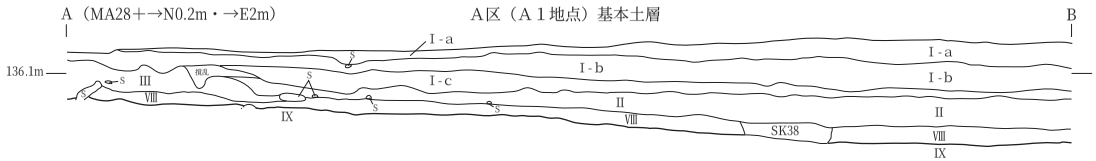
Ⅳ　黒褐色土（10YR2/1）シルト　粘性やや強　しまりやや強
　　炭化物が帯状に20%混入

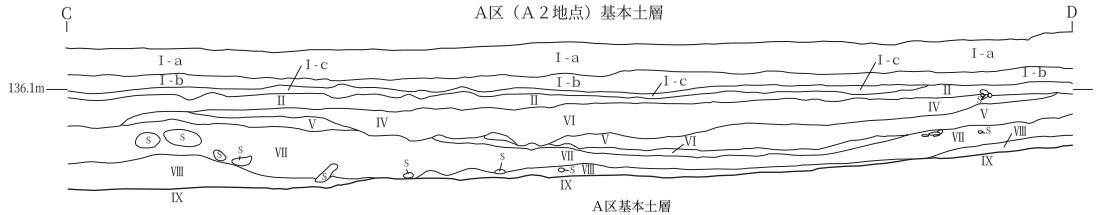
Ⅴ　黒褐色土（10YR2/2）シルト　粘性強　しまりやや強
　　炭化物（φ1～2㎜）少量（５%）混入

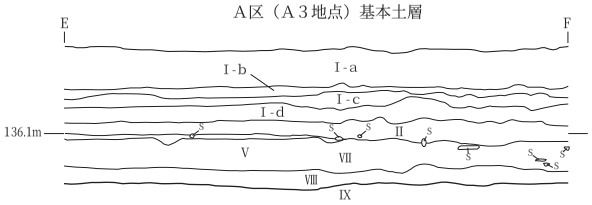
Ⅵ　灰黄褐色土（10YR6/2）砂質　粘性なし　しまり弱
　　薄い層状で、上部に炭化物の薄い層が堆積

Ⅶ　黒褐色土（10YR2/3）シルト　粘性普通　しまりやや強

Ⅷ　褐色土（10YR4/4）シルト　地山漸移層　粘性やや強　しまりやや強
　　Ⅶ層土が粒・ブロック状に混入　部分的にグライ化




A区基本土層

Ⅰ－ａ　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性普通　しまりやや弱
根が入り込みボソボソしている　水田耕作土

Ⅰ－ｂ　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性やや強　しまりやや強
黄褐色土ブロック10%、炭化物(φ1㎜前後)2%、白色粒子若干、小礫若干混入
上部に帯状に錆が認められる

Ⅰ－ｃ　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～砂　粘性やや強　しまり普通
Ⅰ-ｂ層に類似するも、混入物が希薄

Ⅰ－ｄ　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性やや強　しまり普通
黄褐色砂質土ブロック多量(50%)、白色粒子若干、小礫少量(10%)混入

Ⅱ　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　粘性やや強　しまり普通
暗褐色土粒・ブロック多量(40%)、炭化物(φ1～30㎜)多量(20%)、白色粒子少量(10%)、
小礫(φ10～50㎜)多量混入、遺物が大量に混入する　北東部捨て場の遺物包含層と近似

Ⅲ　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　粘性弱　しまりやや弱
南西部捨て場の遺物包含層

Ⅳ　黒色土(10YR2/1)　シルト　粘性やや強　しまりやや強
炭化物が帯状に20%混入

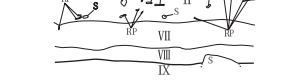
Ⅴ　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　粘性強　しまりやや強
炭化物(φ1～2㎜)少量(5%)混入

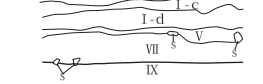
Ⅵ　灰黄褐色土(10YR6/2)　砂質　粘性なし　しまり弱
薄い層状で、上部に炭化物の薄い層が堆積

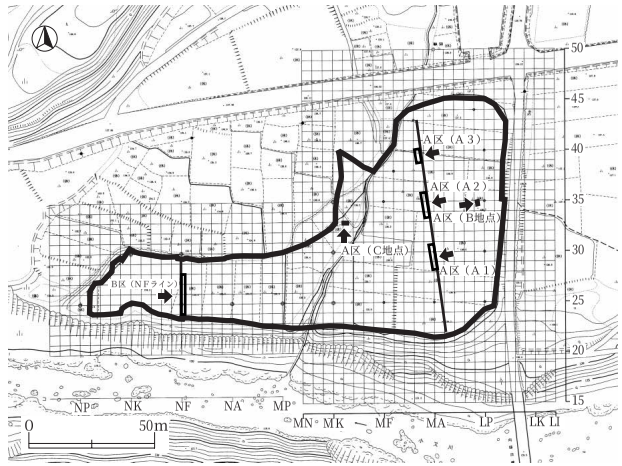
Ⅶ　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性普通　しまりやや強

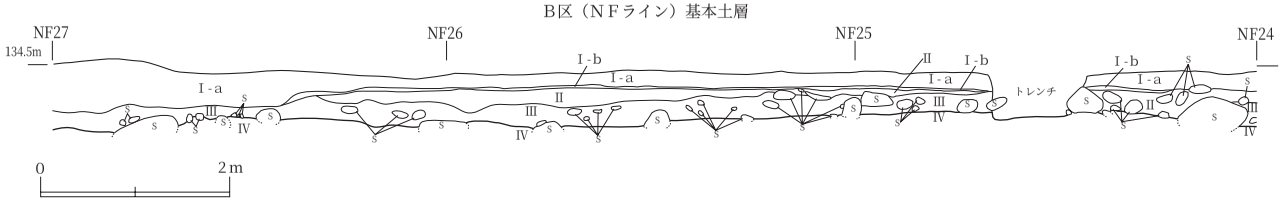
Ⅷ　褐色土(10YR4/4)　シルト　地山漸移層　粘性やや強　しまりやや強
Ⅶ層土が粒・ブロック状に混入
部分的にグライ化
遺構確認面

Ⅸ　褐色土(10YR4/6)　シルト～粘・砂　地山砂礫層　粘性やや強　しまり強
ほとんどの遺構確認面




B区基本土層（ＮＦライン）

Ⅰ－ａ　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまり普通　粘性やや弱
耕作土

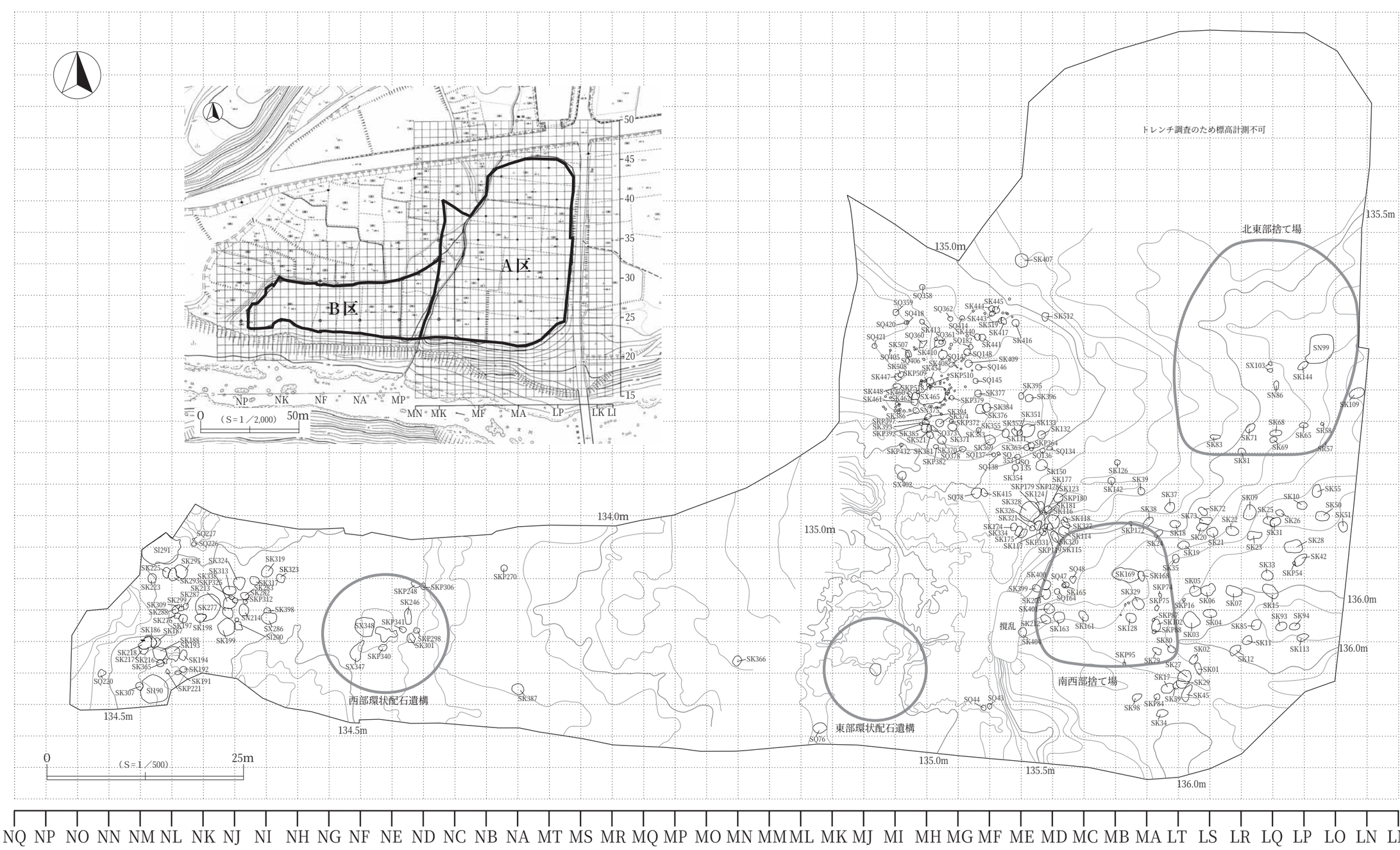
Ⅰ－ｂ　黄褐色土(10YR5/6)　シルト　しまりやや強　粘性普通
酸化した鉄分(水田床錆)、Ⅰ層土が微量混入

Ⅱ　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　遺物包含層　しまり普通　粘性やや弱
炭化物(φ1～5㎜)1%混入

Ⅲ　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂　遺物包含層　しまり弱　粘性やや弱
炭化物(φ1～5㎜)1%、小～中型の礫多量混入

Ⅳ　褐色土(10YR4/6)　細砂　地山土　しまりやや強　粘性弱

**第６図　基本土層図**


A区
B区
NP NK NF NA MP MN MK MF MA LP LK LI
0 （S＝1／2,000） 50m
トレンチ調査のため標高計測不可
北東部捨て場
135.0m
135.5m
136.0m
134.0m
134.5m
西部環状配石遺構
東部環状配石遺構
南西部捨て場
攪乱
0 （S＝1／500） 25m
NQ NP NO NN NM NL NK NJ NI NH NG NF NE ND NC NB NA MT MS MR MQ MP MO MN MM ML MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA LT LS LR LQ LP LO LN LM
46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21

**第７図　遺構配置図**

遺構確認面

Ⅸ　褐色土（10YR4/6）　シルト～粘・砂　地山砂礫層　粘性やや強　しまり強
ほとんどの遺構確認面

基本土層Ⅲ層とした層は、捨て場の遺物包含層（Ⅲ）と非常に類似しており、炭化物や、焼土など混入物の粗密が、そのまま遺物の包含状況に比例する。

Ｂ区においては、南北ＮＦラインに基本土層観察ベルトを設定し、以下のとおり分層した（第６図）。

Ｂ区基本土層（ＮＦライン）

Ⅰ－ａ　黒褐色土（10YR3/2）　シルト　しまり普通　粘性やや弱
耕作土

Ⅰ－ｂ　黄褐色土（10YR5/6）　シルト　しまりやや強　粘性普通
酸化した鉄分（水田床錆）、Ⅰ層土が微量混入

Ⅱ　黒褐色土（10YR2/2）　シルト　遺物包含層　しまり普通　粘性やや弱
炭化物（φ1～5㎜）1%混入

Ⅲ　暗褐色土（10YR3/3）　シルト～細砂　遺物包含層　しまり弱　粘性やや弱
炭化物（φ1～5㎜）1%、中礫多量混入

Ⅳ　褐色土（10YR4/6）　細砂　地山土　しまりやや強　粘性弱

## 第２節　検出遺構と出土遺物

### １　概　　要

先述のとおり、調査区は中央の水路を挟んで大きく東西に二分される。東半分を平成12年度、西半分を平成13年度に調査した。今後は便宜的に前者をＡ区、後者をＢ区として記述する。Ａ区西部とＢ区中央にはそれぞれ環状配石遺構が検出され、Ａ区ではその東側から北側にかけて配石遺構や土坑群および捨て場が見られる。Ｂ区では西部に土坑群が見られる。検出された遺構は、土坑175基（Ａ区136基、Ｂ区39基）、配石遺構36基、土器埋設遺構２基、性格不明遺構６基、焼土遺構４基、柱穴様ピット107基、竪穴住居跡３軒である。なお、捨て場に関しては平成15年度刊行の報告書に掲載する予定である。

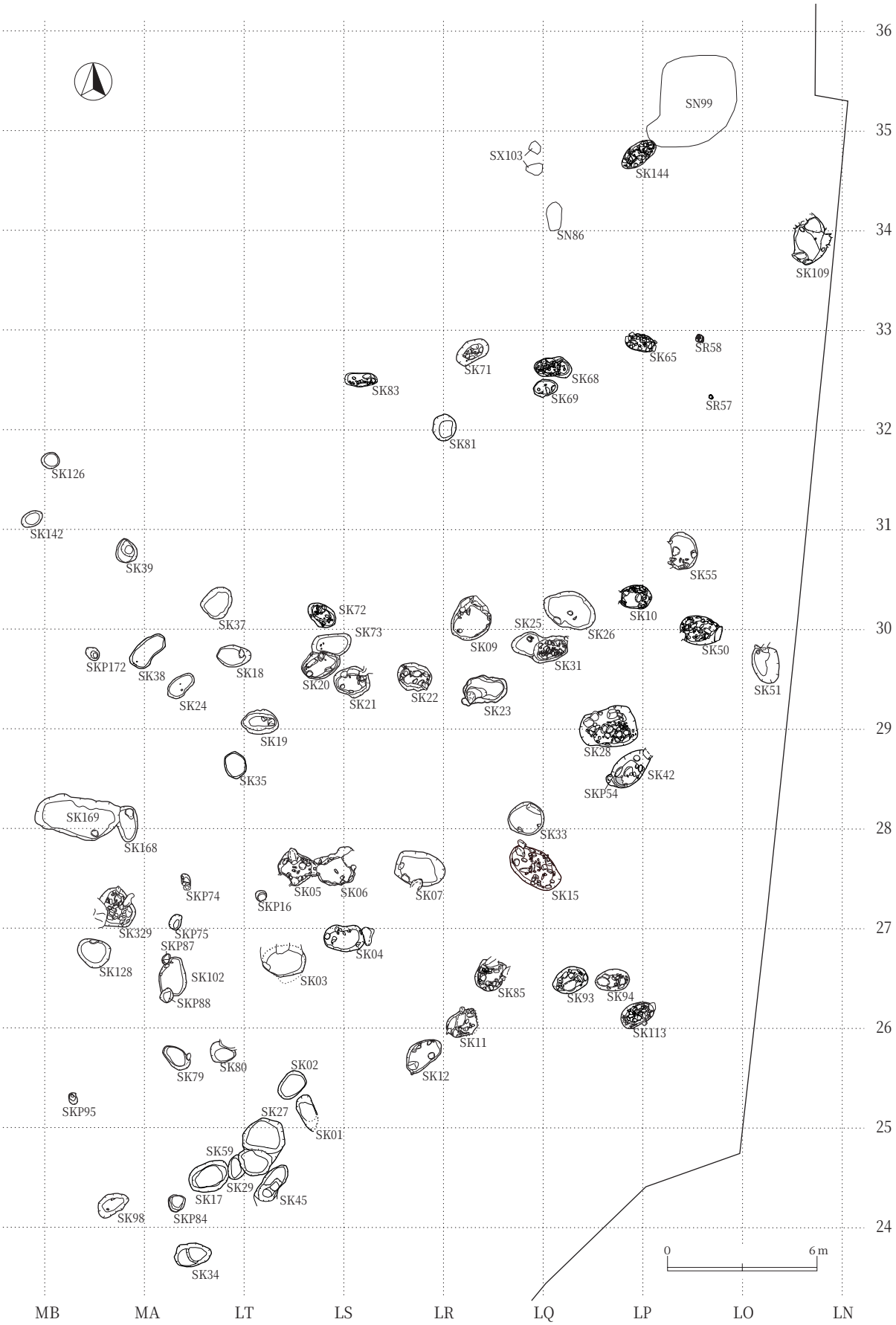
### ２　遺構と出土遺物

#### （１）ＳＫ（土坑・土坑墓・配石墓）

土坑は調査年度によって調査方法が若干異なるので、調査年度別に分けて記載する。また、多数の土坑を検出したが、諸条件により各土坑の性格付けを以下のとおり行った。

配　石　墓：掘方が明瞭・確実で、人為的に礫が配置（混入）されたと思われるもの

土　坑　墓：掘方が明瞭・確実で、副葬品の出土や、顔料を検出し、確実に遺体が埋葬されたと考えられるもの




**第８図　調査区東部（墓域）遺構配置図**

土 坑（墓）：墓とする根拠に欠けるが、掘方が明瞭で、かつ遺構の検出位置などから墓と想定可能なもの

土　　坑：規模・形状等からも性格の特定が困難なもの

【Ａ区・平成12年度調査】

平成12年度の調査範囲で精査を行った土坑はすべて墓域と位置付けた区域に位置する。

**ＳＫ01土坑［第９図、第７表］**

ＬＳ25グリッド（墓域南部・ＳＴ184南西捨て場の南東に隣接）にある。地山漸移層を精査中に南東側に一部撹乱を受けた状態で不明瞭な楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸150㎝、短軸70㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ16°Ｗ、深さ18㎝である。掘り込みは浅く、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は２層に分層され、いずれも地山粒が微量に混入する。

遺物の出土はない。

**ＳＫ02土坑（墓）［第９図、第７表、図版８］**

ＬＳ25グリッド（墓域南部・ＳＴ184南西捨て場の南東に隣接）にある。地山漸移層を精査中に楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸127㎝、短軸86㎝の方形に近い楕円形で、長軸方向はＮ40°Ｅ、深さ44㎝である。底面は平坦であり、北東に向かいやや傾斜する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は４層に分層され、黒褐色土主体であるが、覆土中位（２・３層）に砂質の地山粒を多く含む。

覆土中位から粗製土器の小破片２点が出土しているが、時期は特定できない。

遺構の形状、遺構の検出位置から判断すると土坑墓である可能性が高い。

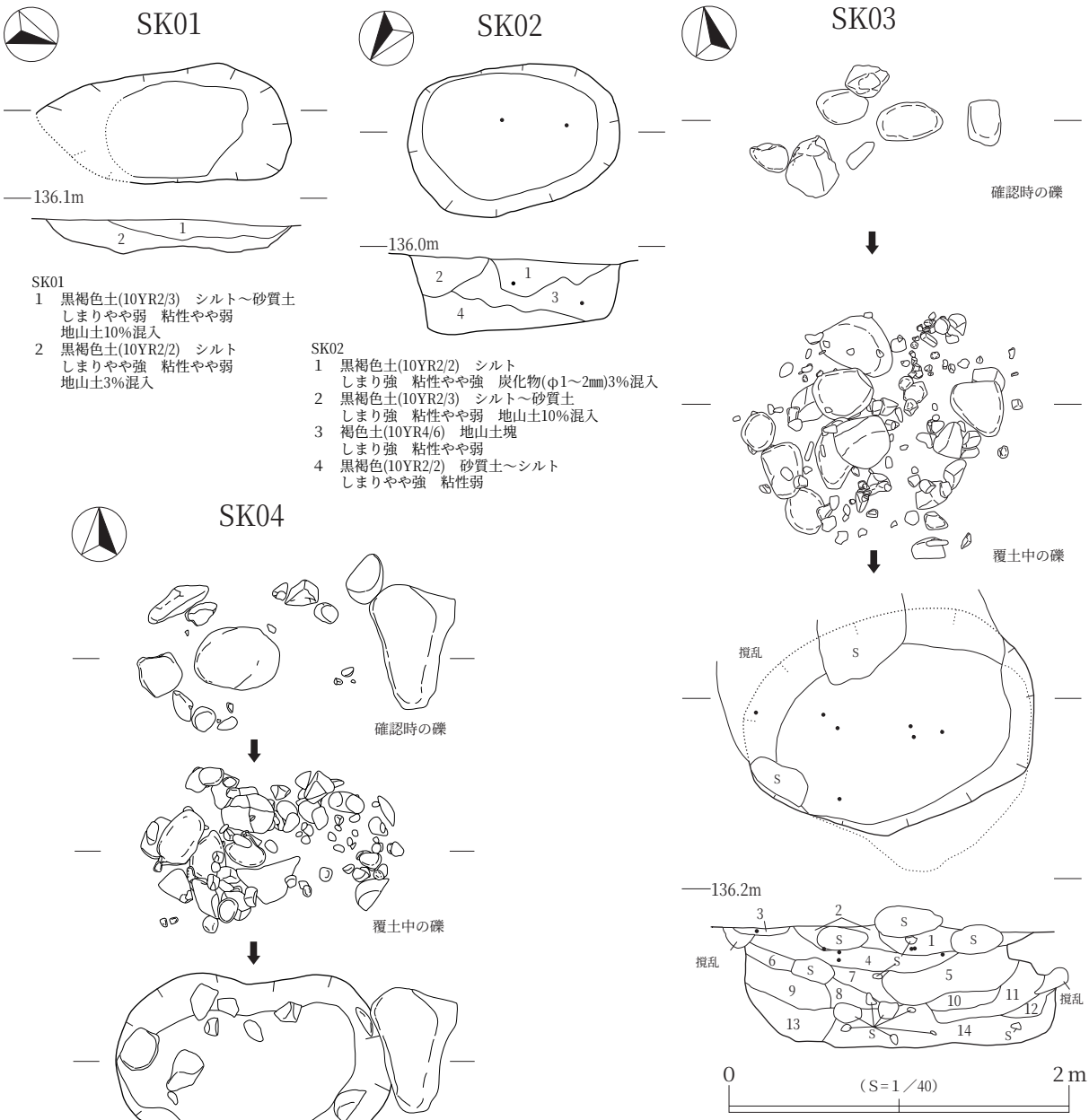
**ＳＫ03配石墓［第９図、第７表］**

ＬＳ26グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場の東に隣接）にある。地山漸移層を精査中に径の大きな礫の集中箇所を確認し、周囲を掘り下げたところ、ほぼ中央に径30～40㎝の礫をともなう不明瞭な楕円形のプランを検出した。サブトレンチを十字に設定し、全体の規模・形態を確認したところ、北部は撹乱であり、確認時のプランの南側に掘り込みがあることが判明した。

平面形は長軸176㎝、短軸推定120㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ82°Ｅ、深さ71㎝、礫上部までの高さは83㎝である。

底面はほぼ平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、撹乱箇所が多く、南側がフラスコ状に抉れる。北部は撹乱のため掘りすぎたものである。

覆土は14層に分層され、中央には地山粒を多く含んだ層がレンズ状に堆積し、覆土の特徴もこれを境に上下に二分される。礫はこの地山を含む層の上部と下部（覆土中位）に多く見られ、直径30㎝程度の巨礫と、直径10㎝未満の礫が混在する。巨礫は上位に、10㎝未満の礫は下位にまとまる傾向があり、西側に大礫がやや集中する傾向も看取される。




SK01
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～砂質土
　しまりやや弱　粘性やや弱
　地山土10%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山土3%混入

SK02
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性やや強　炭化物(φ1～2㎜)3%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～砂質土
　しまり強　粘性やや弱　地山土10%混入
3　褐色土(10YR4/6)　地山土塊
　しまり強　粘性やや弱
4　黒褐色(10YR2/2)　砂質土～シルト
　しまりやや強　粘性弱

SK04
1　黒色土～黒褐色土(10YR2/1～10YR2/2)　シルト～粘土
　しまりやや強い　粘性やや弱
　地山粒3%、炭化物(φ1～5㎜)1%、軽石粒(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり強　粘性普通
　地山粒10%、炭化物(φ1～5㎜)1%、軽石粒(φ１㎜)1%混入
3　黒褐色土(10YR2/3～10YR3/3)　シルト　しまり強　粘性普通
　地山粒3%、軽石粒(φ1㎜)1%混入
4　黒褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト　しまり強　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%、地山粒(φ1～50㎜)30%、軽石粒(φ1㎜)3%混入
5　黒褐色土～暗褐色土(10YR3/2～10YR3/3)　細砂～シルト
　しまり普通　粘性普通　地山粒20%、炭化物(φ１㎜)1%以下混入
6　黒褐色土～暗褐色土（10YR3/2～10YR3/3）　細砂～シルト
　5層に類似　赤色顔料極微量に含む
7　黒褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト　しまり強　粘性普通
　炭化物(φ1㎜)1%、地山粒5%、軽石粒(φ1㎜)3%混入

SK03
1　黒色土～黒褐色土(10YR2/1～10YR2/2)　シルト　しまりやや強　粘性普通
　炭化物(φ1㎜)2%、地山粒(φ1～10㎜)5%混入
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまりやや強　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%、地山土塊(φ30㎜)3%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性なし
　炭化物(φ1～3㎜)2%混入
4　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまりやや強　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%、地山粒(φ1～10㎜)30%混入
5　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや弱　粘性ややあり
　炭化物(φ1～5㎜)1%、地山粒(φ1～10㎜)30%混入
6　黒褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト　しまり普通　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%以下、地山粒3%混入
7　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまり弱　粘性なし
　炭化物(φ1～3㎜)3%、地山粒30%混入
8　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～粘土　しまりなし　粘性やや弱
　炭化物(φ1㎜)1%、地山粒30%混入
9　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～3㎜)1%、地山粒15%混入
10　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや弱　粘性普通
　炭化物(φ1～5㎜)1%以下、地山粒10%混入
11　黒色土～黒褐色土(10YR2/1～10YR2/2)　シルト
　しまりやや弱　粘性やや弱　地山粒1%混入
12　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまりなし　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%以下、地山粒15%混入
13　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)1%、地山粒3%混入
14　暗褐色土(10YR3/3～10YR4/3)　細砂～シルト　しまり普通　粘性ややなし
　炭化物(φ1㎜)10%混入

**第９図　ＳＫ01土坑・ＳＫ02土坑（墓）、ＳＫ03・04配石墓**

覆土上位から縄文時代晩期に比定される粗製土器片が７点出土しており、うち２点は台部の小破片である。精製土器の底部片も１点出土している。

礫の検出状況、遺構の検出位置から配石墓であると位置付けた。また、覆土中位への地山粒の混入状況、礫のあり方から、遺体埋葬後にすぐに礫を投げ込み、いったん埋めてから、さらに上部に礫を投げ込んだという過程の推測が可能であろう。

**ＳＫ04配石墓［第９図、第７表、図版８］**

ＬＳ26・27、ＬＲ26・27グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場の東に隣接）にある。地山漸移層を精査中に径50㎝程度の礫を検出、周辺を掘り下げたところ、その礫を中心として、外周にも礫をともなう楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸163㎝、短軸102㎝の楕円形で、長軸方向はＮ88°Ｗ、深さ47㎝、礫上部までの高さは73㎝である。

深さの中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面には段丘礫が部分的に露出するが、概ね平坦である。壁面は西側でほぼ垂直に立ち上がっているが、それ以外はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は黒褐色土主体で７層に分層される。地山粒を含んだ層が両壁際と、覆土中位にレンズ状に堆積する。礫は概ねこの覆土中位の層直下にみられ、レンズ状に配される。平面的にはレンズの端の部分を確認面で検出し、円形に礫が配されているように見える。また、西部に礫がやや集中する傾向も看取される。さらに中央には径50㎝程度の巨礫が配されている。また６層（平面的には西側）中からは微量ではあるが、赤色顔料を検出した。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の検出位置、覆土中への微量の赤色顔料の混入から配石墓であると位置付けた。また、西部に赤色顔料を検出することから、頭部の方位は西向きであったと推測される。礫のあり方をみれば、西部に集中することから、埋葬時の頭部方向と礫のあり方の相関関係がうかがわれる。

**ＳＫ05配石墓［第10図、第７表、図版８］**

ＬＳ27グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場の東に隣接）にある。地山漸移層を精査中に大礫が円形に並び、それに隣接して楕円形に礫が集中する箇所を確認した。確認したのが漸移層上位で、掘方の確認が困難だったため、慎重に周囲を掘り下げたところ、楕円形の黒褐色のプランが２基並んで確認された。確認状況では新旧関係が把握できなかったため、２基同時に半截して確認したところ、東側で切り合い関係にあるＳＫ06が古く、当遺構が新しいことが判明した。

平面形は長軸150㎝、短軸140㎝の不整な略円形で、長軸方向はＮ87°Ｅ、深さ48㎝、礫上部までの高さは59㎝である。

深さの中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに部分的に段丘礫が露出する。北部と南西部に非常に巨大な礫が露出し、壁面の一部となっている。底面は砂礫がのぞくが、概ね平坦で、東へ向かいやや傾斜する。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、南北辺では上位でやや緩やかで開き気味に立ち上がる。

覆土は黒褐色土主体であるが、全体に砂質の地山粒・塊が多量に混入し、特に９層以外では顕著で

ある。比較的径の大きい（30㎝以上）礫が上位に、中礫が下位に集中する傾向にある。平面的には周囲を巡るように大～巨礫が配され、西側にやや集中する。土層断面ではＳＫ06の覆土を当遺構が掘り込んだ状況が確認できた。

覆土中から縄文時代晩期の粗製土器片が３点出土しているがすべて同一個体のものである。他にチップ１点が出土している。

礫の検出状況、遺構の規模・形状、遺構の検出位置から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ06配石墓［第10図、第７表、巻頭図版７、図版８］**

ＬＲ27・ＬＳ27グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場の東に隣接）にある。検出に至る経過はＳＫ05の項と同じであり、当遺構が古い。また、北東部で若干色調の明るい暗褐色土のプランが当遺構に切られるように確認された。これをＳＫとして精査を進めたが、非常に浅く、遺構と認定するのは困難であり、また、土層の観察からも明確な区分ができなかったため、ＳＫ06の一部として扱った。

平面形は長軸推定175㎝、短軸128㎝の不整な楕円形で、北東部に非常に浅い張り出し部分を有する。長軸方向はN86°Ｅ、深さ58㎝、礫上部までの高さは78㎝である。

深さの中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに部分的に段丘礫が露出する。東部で巨大な礫が露出し、壁面の一部となっている。底面は砂礫がのぞくが概ね平坦で、東へ向かいやや傾斜する。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、上位からはやや開き気味に緩やかに立ち上がる。

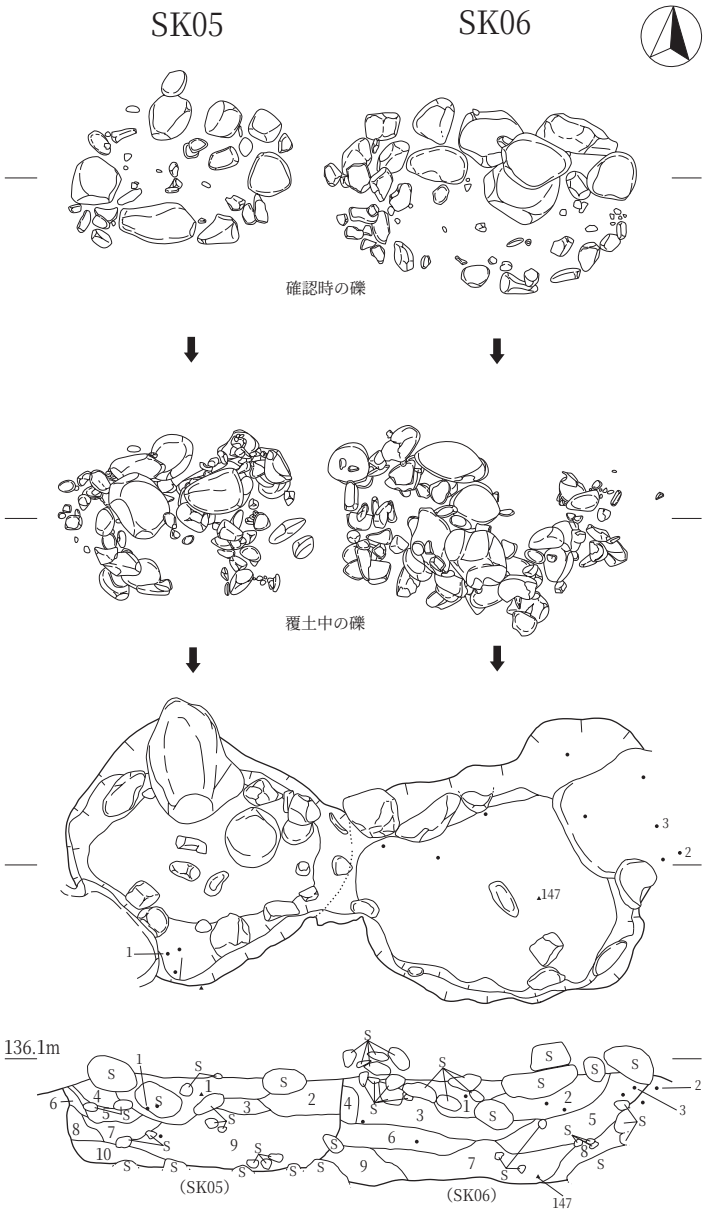
覆土は黒褐色土主体であるが、覆土中位（３～５層）の層に地山粒・塊がレンズ状に堆積する。礫は覆土上位、地山の含まれる層の直上にあり、断面からみるとレンズ状に配される。確認時に周囲に礫が巡るように観察されたのは、このレンズ状におかれた礫の縁辺部分が露出していたためである。当遺構内で検出した礫は非常に多く、大きいものでは直径約40㎝、小さいものは５㎝未満のものまでばらつきがあり、形・色などもバラバラであった。また、覆土下位で検出した礫は５㎝未満の礫のみであった。

覆土中位以上から縄文土器片９点が出土した。摩滅した粗製土器が多い。第48図２は注口土器の口縁部で、推定の口径32㎝程度になる大型のものである。口縁部直下は垂直で、すぐにほぼ直角に折れ、内側に入る。口唇部はＢ字状突起が連続し、小波状に装飾され、口縁部は浮彫による入り組み文や羊歯状文が施される。ほぼ全面に赤色塗彩が施され、丁寧なミガキも施される。また、底面直上東部から第58図147のヒスイ製の小玉が出土した。

礫の検出状況、遺構の形状、遺構の検出位置、底面直上からの小玉の出土から配石墓と位置付けた。ヒスイ製の小玉の出土位置が東部寄りであるため、遺体埋葬時の頭部方位は東向きであった可能性があろう。

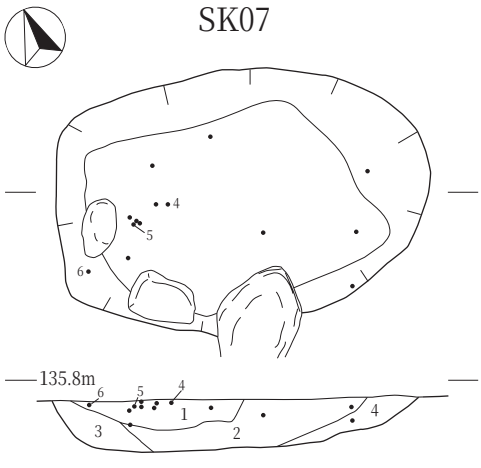
**ＳＫ07土坑（墓）［第10図、第７表］**

ＬＱ27・ＬＲ27グリッド（墓域ほぼ中央部）にある。漸移層下位を精査すると、ぼんやりとした黒褐色土が広がっていたが、遺構との確定が困難であったため、周囲を慎重に掘り下げたところ、地山面に至り、不整な楕円形のプランを確認し、ＳＫ07とした。このため、本来の掘り込みはより深かったものと推測される。




SK05
1　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり中～弱　粘性普通
　炭化物(φ1～3㎜)やや多く混入
　地山粒多量
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ3～5㎜)多量混入
　暗褐色土＋地山土塊層
3　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通～強　粘性なし
　地山土塊(φ30㎜)多く混入
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性なし
　地山土塊混入
5　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　黒色土＋地山土塊層(黒色土と地山が層状に入る)
　しまり強　粘性なし
6　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性なし
　炭化物(φ1～3㎜)多量混入
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト　地山土塊層
　しまり強　粘性なし
　礫(φ30～50㎜)多量、黒褐色土少量混入
8　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり普通～強　粘性普通
　地山土塊(φ30～50㎜)混入
9　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり強　粘性普通
　地山粒多量
10　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり強　粘性普通
　地山粒多量混入

SK06
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　礫(φ10～20㎜)少量混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山粒(φ3～5㎜)多量混入
　炭化物(φ1～3㎜)やや多い(全体的)
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　地山粒多量、地山土塊(φ10～30㎜)多量、
　炭化物(φ1～3㎜)多量混入
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト
　しまり強　粘性ほとんどなし
　褐色土混入
　地山土塊(φ50㎜)層
5　褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　礫(φ3～5㎜)多量、地山粒多量、
　地山土塊(φ3～8㎜)少量、
　炭化物(φ1～3㎜)少量混入
6　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　地山粒(φ3～5㎜)多量、礫(φ10～20㎜)多量、
　炭化物(φ1～3㎜)多量混入
7　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　シルト
　しまりやや強　粘性なし
　炭化物(φ1～3㎜)多量、礫(φ20～50㎜)多量混入
8　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性普通～強
　地山粒多量混入
9　黒褐色土(2.5Y3/1)　シルト
　しまり強　粘性なし
　地山粒多量




SK07
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　１層より少し明るい
　しまりやや強　粘性やや弱
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性強
　地山粒(φ5～10㎜)5%混入
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山土10%混入

**第10図　ＳＫ05・06配石墓、ＳＫ07土坑（墓）**

平面形は長軸196㎝、短軸136㎝の不整な楕円形で、長軸方向はN70°W、深さ26㎝である。

底面は滑らかで、かつ平坦である。壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は４層に分層され、黒褐色土主体である。

覆土全体より土器片が15点出土した。第48図４は浅鉢形土器の口縁部で、雲形文が展開する。その他原体のみの粗製土器片が多い。

遺構の規模・形状、遺構の検出位置より土坑墓である可能性は高い。

**ＳＫ09配石墓［第11図、第７表、図版９］**

ＬＱ29・30グリッド（墓域中央北寄り）にある。地山漸移層を精査中、礫のまとまる箇所があったため、周囲を慎重に掘り下げたところ、漸移層中で礫が楕円形に巡るのを確認した。遺構覆土が漸移層に非常に類似していたため、その時点では遺構プランは検出できなかったが、礫が比較的整然と円形に巡るために、礫の状況から配石墓と仮定し精査を進めた。

平面形は長軸176㎝、短軸150㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN55°E、深さ71㎝、礫上部までの高さは89㎝である。

深さの中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに部分的に段丘礫が露出する。底面はほぼ平坦である。壁面は下部で若干抉れるが、ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は10層に分層され、覆土下位と壁面付近に地山粒が含まれる。礫は上位にレンズ状に検出され、周囲と中央に径の大きな礫が目立ち、中央の下位に中礫がある。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の規模・形状、遺構の検出位置より配石墓と位置付けた。

**ＳＫ10配石墓［第11図、第７表、図版９］**

ＬＯ30・ＬＰ30グリッド（墓域北東部）にある。地山漸移層を精査中に、径60㎝程度の巨大な礫を検出し、周囲を掘り下げたところ、礫を多数ともなう楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸128㎝、短軸95㎝の不整な楕円形で、長軸方向はN87°W、深さ49㎝、礫上部までの高さは79㎝である。

深さの中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに部分的に段丘礫が露出する。底面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北東部の壁面は粘板岩が露出する。

覆土は黒色土で２層に分層される。礫は覆土中位以上にみられ、特に１層中と、層境界でレンズ状に検出された。直径30㎝程の礫が不規則ではあるが、周囲にみられる。礫の中には板状の粘板岩が顕著で、堆積状況から蓋石のように被せられたものが、中央に置かれた径60㎝程度の巨礫に押しつぶされた状況にみてとれる。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の形状、遺構の検出位置から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ11配石墓［第11図、第７表］**

ＬＱ25・26グリッド（墓域南部）にある。地山漸移層を調査中に、径30～40㎝程度の礫の集中箇所

を確認、周囲を精査したところ、楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸137㎝、短軸105㎝のほぼ楕円形で、長軸方向はN55°E、深さ63㎝で、礫上部までの高さは87㎝である。

深さの中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに部分的に段丘礫が露出する。底面は北東側が深く、南西部がテラス状になる。底面からテラスへの立ち上がり部分に巨大な段丘礫が露出する。壁面は形態上、北東部で丸みを帯びて急激に立ち上がるが、南西側は緩やかに立ち上がる。

覆土は黒褐色土主体で４層に分層され、概ね砂質である。覆土中の礫は中位以上にあり、その中でも上部には径の大きい礫、下位には径の小さい礫が南東部に比較的集中する傾向にある。

覆土中から粗製の縄文土器片が５点、赤漆塗彩の精製土器小片１点が出土している。第48図７は底面直上からの出土で、深鉢形土器胴部片で条痕文が施される。

当遺構は掘方形状がいびつであるが、礫の検出状況が近隣の配石墓と同様であることから配石墓と位置付けた。

**ＳＫ12配石墓［第11図、第７表］**

ＬＲ25グリッド（墓域南部）にある。地山漸移層を精査中に、径10～20㎝の比較的小さな礫の集中を確認し、礫をともなう楕円形の不明瞭なプランを検出した。

平面形は長軸167㎝、短軸101㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はN55°W、深さ54㎝で、礫上部までの高さは57㎝である。

深さの上位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに段丘礫が露出する。底面は丸みを帯びるが概ね平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は３層に分層され、覆土中位以上に礫がみられる。平面的には全体に礫がみられるが、北西側にやや集中する傾向にある。礫の大きさは径10～20㎝程度と揃っている。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の検出位置から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ15配石墓［第12図、第７表、図版９］**

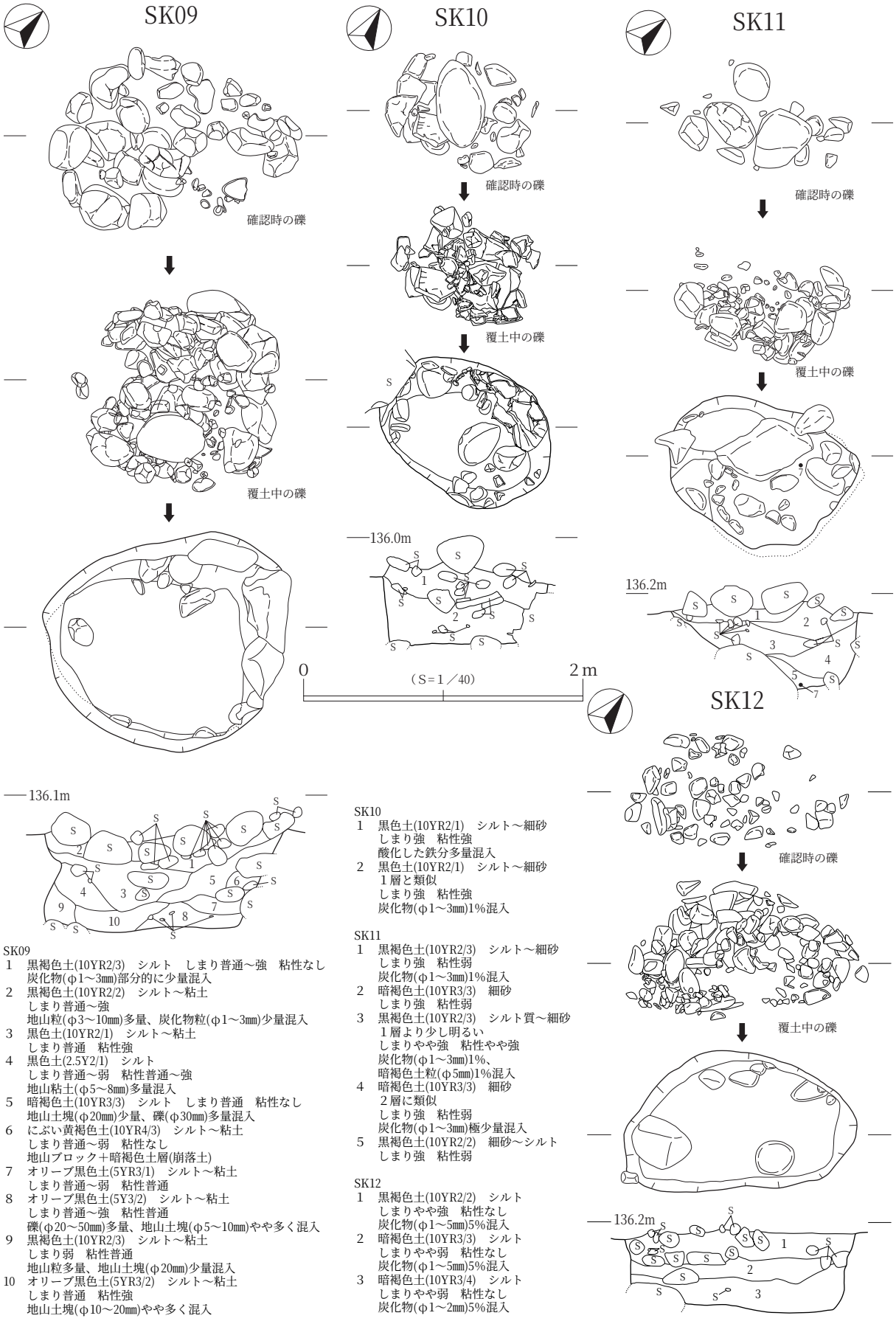
ＬＰ27・ＬＱ27グリッド（Ａ群：墓域ほぼ中央部）にある。地山漸移層を精査中に大～巨礫の集中箇所を確認、周囲を掘り下げたところ中央に礫を伴う楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸227㎝、短軸137㎝の長楕円形で、長軸方向はN53°W、深さ44㎝、礫上部までの高さは60㎝である。

深さの下位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに段丘礫が露出する。底面は砂礫層で、礫の露出が顕著であるが、丸みを帯び、概ね平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は黒・暗褐色土主体で、４層に分層される。２層に地山土塊が混入する。礫はすべての層で検出した。平面的にも全体から検出したが、中央やや西側に若干集中する傾向にある。径40㎝程度の巨礫が多く、分布はやや上部に偏る。

遺物の出土はない。




SK09
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通～強　粘性なし
　炭化物(φ1～3㎜)部分的に少量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～粘土
　しまり普通～強
　地山粒(φ3～10㎜)多量、炭化物粒(φ1～3㎜)少量混入
3　黒色土(10YR2/1)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性強
4　黒色土(2.5Y2/1)　シルト
　しまり普通～弱　粘性普通～強
　地山粘土(φ5～8㎜)多量混入
5　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり普通　粘性なし
　地山土塊(φ20㎜)少量、礫(φ30㎜)多量混入
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト～粘土
　しまり普通～弱　粘性なし
　地山ブロック＋暗褐色土層(崩落土)
7　オリーブ黒色土(5YR3/1)　シルト～粘土
　しまり普通～弱　粘性普通
8　オリーブ黒色土(5Y3/2)　シルト～粘土
　しまり普通～強　粘性普通
　礫(φ20～50㎜)多量、地山土塊(φ5～10㎜)やや多く混入
9　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～粘土
　しまり弱　粘性普通
　地山粒多量、地山土塊(φ20㎜)少量混入
10　オリーブ黒色土(5YR3/2)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性強
　地山土塊(φ10～20㎜)やや多く混入

SK10
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまり強　粘性強
　酸化した鉄分多量混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　１層と類似
　しまり強　粘性強
　炭化物(φ1～3㎜)1%混入

SK11
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり強　粘性弱
　炭化物(φ1～3㎜)1%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　細砂
　しまり強　粘性弱
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト質～細砂
　１層より少し明るい
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ1～3㎜)1%、
　暗褐色土粒(φ5㎜)1%混入
4　暗褐色土(10YR3/3)　細砂
　２層に類似
　しまり強　粘性弱
　炭化物(φ1～3㎜)極少量混入
5　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト
　しまり強　粘性弱

SK12
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性なし
　炭化物(φ1～5㎜)5%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまりやや弱　粘性なし
　炭化物(φ1～5㎜)5%混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりやや弱　粘性なし
　炭化物(φ1～2㎜)5%混入

**第11図　ＳＫ09・10・11・12配石墓**

礫の出土状況、遺構の検出位置から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ17土坑墓［第12図、第７表、図版９］**

ＬＴ25グリッド（墓域南端）にある。地山漸移層を精査中に、漸移層の土とは若干色調の異なる黒褐色土の広がりを確認した。あまりに不明瞭だったため、サブトレンチを設定して掘り下げ、プランを確定することができたので、これをＳＫ17として精査を行った。

平面形は長軸167㎝、短軸118㎝の楕円形で、長軸方向はN62°Ｅ、深さ70㎝である。

底面は平坦で堅くしまる。壁面は一旦垂直に立ち上がり、深さ中位程から、やや開き気味に緩やかに立ち上がる。

覆土は７層に分層され、下位の層には地山粒・塊が混入し、上位の層には炭化物が認められる。覆土中位東より（１層）では赤色顔料が微量ではあるが点在している。

遺物は遺構東部に集中して出土しており、覆土下位から上位までまんべんなく分布する。縄文土器片が46点、剥片・チップが３点、小玉が13点出土した。出土した縄文土器のほとんどが無文、もしくは原体施文のみの粗製土器小片である。精製土器の出土は少なく３点のみであった。第48図８は浅鉢形土器口縁部で、Ｂ字状突起を有し、雲形文が施される。第48図９は深鉢形土器口縁部で、口唇部に刺突を有し、入り組み三叉文が展開する。他に注口土器の底部が出土している。当遺構から出土した13点の小玉のうち第58図148だけが長楕円形で形状が異なり、他と比較して大きい。また、第58図154～160は数珠繋ぎの状態で出土した。石質鑑定の結果148のみがヒスイ製で、他はすべて緑色凝灰岩製であった。

当遺構は、副葬品と考えられる複数の小玉が出土し、かつ、その周囲から赤色顔料を検出したことから、土坑墓と確定可能な数少ない遺構の一つである。また、小玉・赤色顔料の遺構内での検出位置が北東に偏ることから、埋葬時の頭部方向は北東向きであったものと推測される。

**ＳＫ18土坑（墓）［第12図、第７表］**

ＬＳ29・ＬＴ29グリッド（墓域北西部・ＳＴ184南西捨て場の北東に隣接）にある。地山漸移層から地山面にかけて精査中に黒褐色の不明瞭な楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸136㎝、短軸88㎝の不整な楕円形で、長軸方向はN89°Ｗ、深さ24㎝である。

底面はほぼ平坦で、壁面は西側がほぼ垂直、他の面はやや緩やかに立ち上がる。

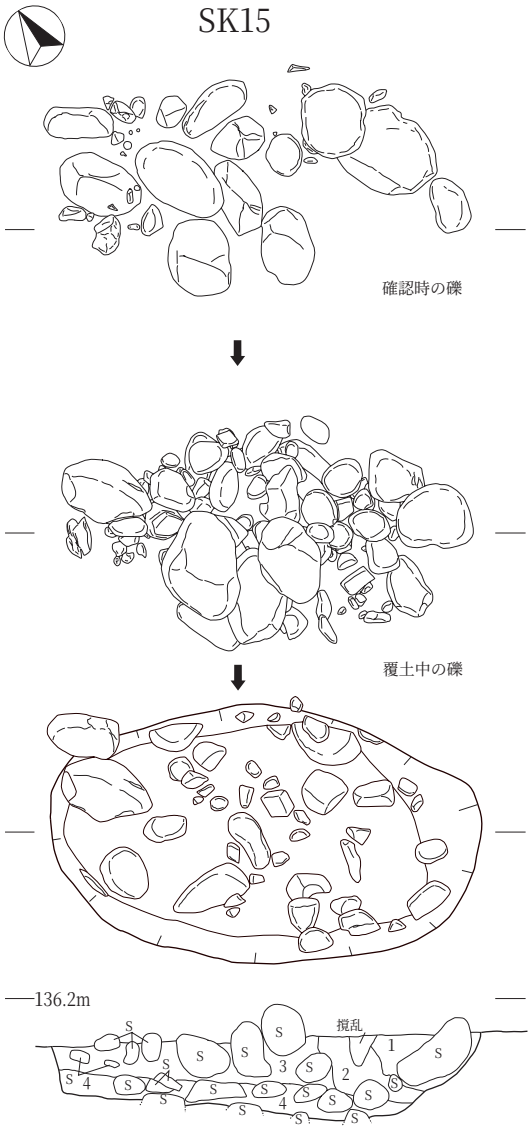
覆土は６層に分層され、黒褐色を主体とし全体に砂質である。壁面から底面にかけて一部地山土塊を多く含む。

覆土上位で縄文土器小片３点が出土している。第48図10は注口土器の口縁部と推測される。口唇部にＢ字状突起を有し、沈線により渦巻文が施される。

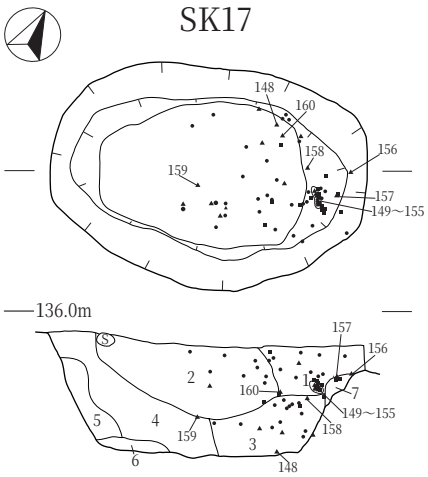
遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断すると土坑墓である可能性が高い。

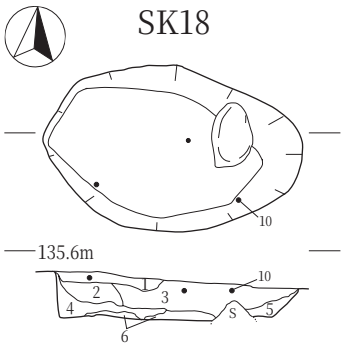
**ＳＫ19土坑（墓）［第12図、第７表］**

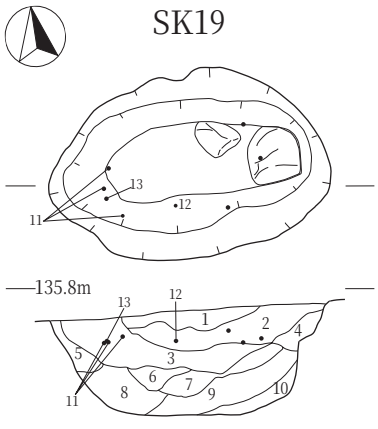
ＬＳ28・29グリッド（墓域北西部・ＳＴ184南西捨て場の北東に隣接）にある。地山漸移層から地山面にかけて精査中に中心に地山粒・塊の混入が顕著である黒褐色の不明瞭な楕円形のプランを検出し




SK15
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
2　暗褐色土(10YR3/3)　細砂
　しまり強　粘性弱　地山土塊(φ10～20㎜)30%混入
3　黒褐色土(10YR3/2)　細砂
　しまりやや強　粘性弱
4　暗褐色土(10YR3/3)　細砂
　しまりやや弱　粘性弱




SK17
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性なし
　炭化物粒1%、極小径の暗褐色土30%混入　赤色顔料が小玉周辺を中心に微量点在
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性なし
　炭化物粒1%、暗褐色土(φ1㎜)10%混入
3　黒褐色土(7.5YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性弱　地山土10%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりなし　粘性なし　黒褐色土30%混入
5　暗褐色土(10YR3/4)　細砂　しまり弱　粘性なし　地山土塊40%混入
6　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまり弱　粘性普通　極暗褐色土25%混入
7　褐色土(10YR4/4)　地山土塊　しまりなし　粘性なし

SK18
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまりやや強　粘性やや強　酸化した鉄分多量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまりやや強　粘性やや強
　地山土粒(φ5㎜)3%、酸化した鉄分多量混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～3㎜)1%、地山土粒(φ5～10㎜)3%、酸化した鉄分混入
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまり強　粘性やや強
　にぶい黄褐色土50%、酸化した鉄分混入
5　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　シルト～細砂　しまり強　粘性やや弱
6　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまり強　粘性やや強
　地山土塊(φ5～15㎜)50%以上混入

SK19
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性普通　地山粘土塊(φ10～30㎜)多量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや弱
　地山粒少量、炭化物(φ2～10㎜)少量混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～粘土　しまり普通～やや強　粘性やや弱
　地山粘土塊(φ5～15㎜)多量混入
4　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　シルト～粘土　地山粘土層＋暗褐色土　しまり強　粘性強
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト～粘土　しまり普通～やや強　粘性やや強
6　黒色土(10YR2/1)　シルト～粘土　しまり普通～やや弱　粘性強　地山粘土少量混入
7　褐灰色土(10YR4/1)　シルト　しまり弱　粘性なし
8　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　しまりやや強　粘性普通　地山土塊(φ5～10㎜)多量混入
9　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　地山土粒＋黒褐色土層　しまりやや弱　粘性やや強
10　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　シルト～粘土　地山層　しまり普通　粘性なし

0　（S＝1／40）　2m

**第12図　ＳＫ15配石墓、ＳＫ17土坑墓、ＳＫ18・19土坑（墓）**

た。

平面形は長軸143㎝、短軸101㎝の不整な楕円形で、長軸方向はN90°W、深さ51㎝である。

底面はほぼ平坦であるがやや狭く、壁面は東側ではほぼ垂直に、他では若干緩やかに立ち上がり、深さ中位よりやや上でやや開き気味になる。

覆土は10層に分層される。全体的に地山粒・塊が多く含まれるが、黒褐色土と交互に堆積する。

覆土上位から縄文土器片８点が出土している。第48図11はうち３点が接合したもので、推定口径約9.4㎝の精製の浅鉢形土器で、内外面ともに丁寧なミガキが施される。口唇部には２個１単位のＢ字状突起を有し、口縁部にはそれに対応してＢ字状突起が付される。口縁部には２条の平行沈線が横走する。部分的に赤色顔料が残るが、本来は全面赤色塗彩が施されたものと推測される。第48図12は非常に薄手で器面に節の小さいＬＲ縄文が施される。第48図13は粗製の深鉢形土器口縁部で、ＬＲ縄文が施される。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断すると土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ20土坑（墓）［第13図、第７表、図版10］**

ＬＳ29グリッド（墓域北西部）にある。地山面精査中に、やや上面南西に礫を伴ういびつで不明瞭なプランを検出し、半截したところ、２基の土坑墓が切り合い関係にあることが判明した。北東側の１基をＳＫ73とし精査を進めた。断面を観察し、当遺構のほうが新しいことが判明した。

平面形は長軸156㎝、短軸108㎝の楕円形で、長軸方向はN57°E、深さ38㎝である。

底面はほぼ平坦であり、壁面はやや丸みを帯びて急に立ち上がる。

覆土は９層に分層され、壁際に黒褐色土が、中央に暗褐色土が多く堆積する。両壁際に地山粒・塊を含む層が堆積する。南西壁際上位に径30㎝程度の礫がある。また、北部の確認面より上にも礫があるが、切り合っているＳＫ73に伴う可能性もある。

覆土中からは７点の縄文土器片が出土しているが、いずれも覆土中位からの出土であり、すべて粗製土器である。第48図14はそのうち３点が接合したものである。粗製の深鉢形土器口縁部で、器面にはＬＲ縄文が施される。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断すると土坑墓である可能性が高い。また、遺構南東部の礫は単独であるが、当遺構に伴ったものであると捉えるなら一種の配石墓としての位置付けが可能であろうが、人為的な配置とする根拠に乏しいので、ここでは土坑墓としての位置付けが妥当であろう。

**ＳＫ21土坑（墓）［第13図、第７表、図版10］**

ＬＲ29グリッド（墓域中央部）にある。地山面精査中に確認面よりやや上面北側に礫を伴った不明瞭な楕円形プランを検出した。

平面形は長軸142㎝、短軸127㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN88°E、深さ39㎝、礫上部までの高さは60㎝である。

底面は丸みを帯び、壁面も丸みを帯びて立ち上がり、深さ中位程で一旦角度を緩めてからまた急に立ち上がる。立ち上がりは概ね東側が急で、西側は緩やかである。

覆土は６層に分層され、黒褐色土が主体となる。覆土下位から壁にかけて地山粒を含む。確認面上位北側に径30㎝程度の扁平な礫を斜位で検出した。

覆土上位より１点の縄文土器小片が出土しているが、摩滅が著しく時期は不明である。

遺構の検出位置、遺構の形状から判断すると土坑墓である可能性が高い。また礫の在り方からすれば、一種の配石墓として位置付けることが可能であるかもしれない。

**ＳＫ22土坑（墓）［第13図、第７表、図版10］**

ＬＲ29グリッド（墓域中央部）にある。地山面精査中に確認面よりやや上面北西側と南東側に礫を伴った不明瞭なプランを検出した。

平面形は長軸137㎝、短軸115㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN77°W、深さ38㎝、礫上部までの高さは64㎝である。

底面は自然礫が露出し、やや丸みを帯びる。壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は８層に分層され、全体に地山粒・塊が含まれている。確認面より上位北西・南東端に径30㎝前後のやや扁平な礫がある。

覆土中位から底面にかけて、土器片５点が出土している。いずれも縄文時代前期と比定される小片である。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断すると土坑墓である可能性が高い。また、確認面上で検出した礫が当遺構に伴ったものであると捉えるなら、一種の配石墓としての位置付けが可能であろう。

**ＳＫ23土坑（墓）［第13図、第７表、図版10］**

ＬＲ28グリッド（墓域中央部）にある。地山漸移層を精査中に黒褐色土が非常に不明瞭な広がりを見せた。やや西側に礫を伴っていたため、配石墓の可能性を考慮し、プラン確定のため慎重に掘り下げ、若干はっきりしたものの特定が困難だったため、サブトレンチを設定し掘方を確認するに至り、ＳＫ23として精査を進めた。

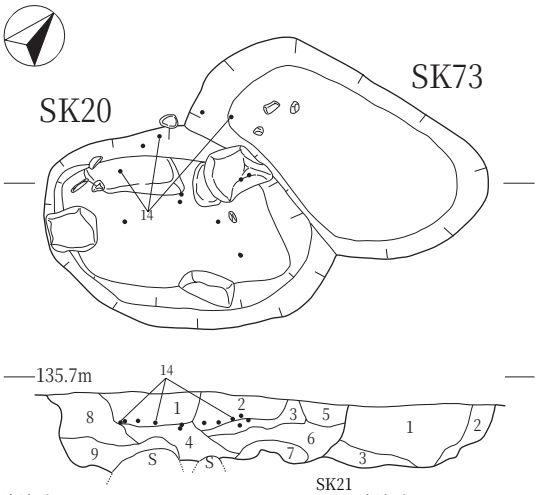
平面形は長軸174㎝、短軸110㎝の不整な楕円形で、長軸方向はN82°E、深さ55㎝、礫上部までの高さは78㎝である。

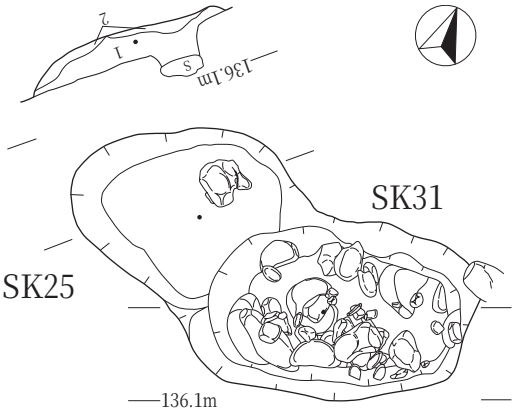
底面は南西部が一段低くなるが、ほぼ平坦である。全体に東に向かうにつれ徐々に高くなる。壁面は底面付近ではほぼ垂直に、中位程からやや開き気味に立ち上がっている。西側では角度が急で、東側では底面から壁面にかけて緩やかに立ち上がっている。

覆土は10層に分層され、ほぼ全ての層から地山粒、地山土塊が検出されているが、特に巨礫の周囲、覆土中位に多く含まれ、レンズ状に堆積する。礫は高さ70㎝、最大径50㎝程度と非常に大型で、掘方の西端にほぼ垂直に立てられていた。また、この巨大な礫は部分的に磨痕があり、特に東を向いた部分が滑らかであった。礫の立っている地点はやや掘り込まれ、覆土を観察すると、初めに礫を立てて周囲に土を入れて固めたものと推測できる。

覆土上位から粗製の縄文土器小片が１点出土した。

遺構の検出位置、遺構の形状から判断すると、土坑墓である可能性が高い。また、西部に立てられ




SK20
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)少量、
　地山土塊(φ20㎜)混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　炭化物(φ3～5㎜)少量、地山粒多量混入
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト
　しまりやや強　粘性少しあり
　地山粘土層、褐色土層に流入
4　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山粘土粒多量、炭化物少量混入
5　暗オリーブ黒色土(2.5Y3/2)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性やや強
　地山土塊(φ30～50㎜)多量混入
6　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通～弱　粘性やや弱
　炭化物(φ0.3㎜)少量、地山粘土塊多量混入
7　オリーブ黒色土(5Y3/1)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性やや強
　炭化物(φ3㎜)少量混入
　地山土塊(φ50㎜)混入
8　黒褐色土(10YR3/1)　シルト～粘土
　暗褐色土＋地山ブロック(中)の層
　しまり普通～弱　粘性やや強
9　黒褐色土(2.5Y3/2)　シルト
　しまり普通～強　粘性やや強
　炭化物(φ3㎜)少量混入

SK73
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　(灰黄粘土＋褐色粘土＋褐色土)層
　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物(φ1㎜)中量、地山粒多量混入
2　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　シルト
　しまり普通　粘性なし
　褐色土少量混入
3　暗オリーブ黒色土(2.5Y3/3)　シルト
　しまり普通　粘性やや強

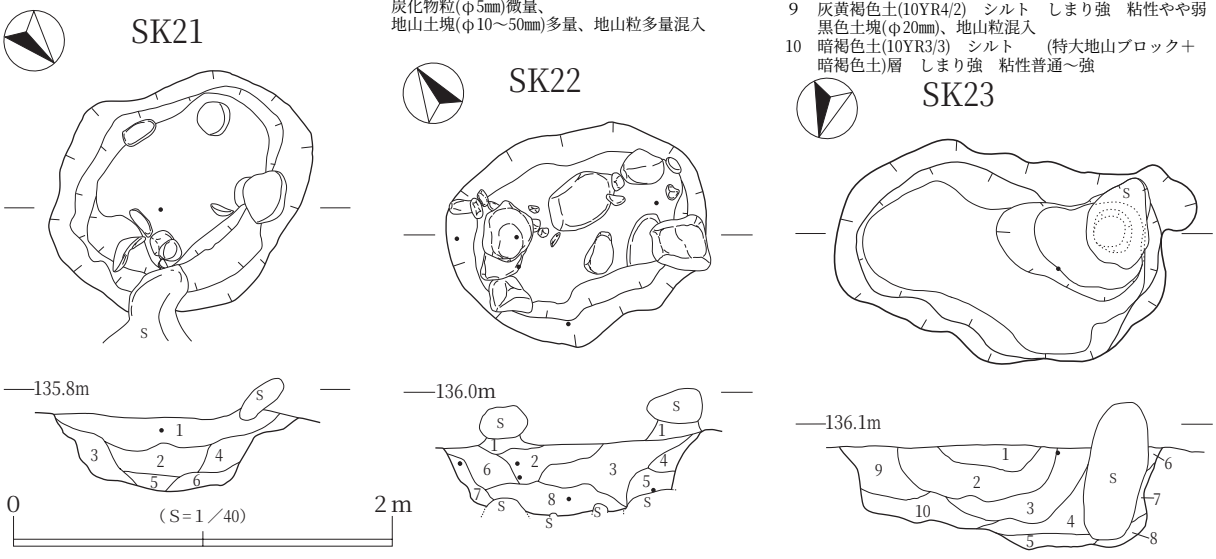
SK21
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまりやや強　粘性普通
　炭化物(φ3㎜)微量、
　地山粘土塊(φ20～30㎜)少量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性普通～強
　炭化物(φ1～3㎜)微量、
　地山粘土塊(φ5～10㎜)少量混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまりやや強　粘性普通
4　褐色土(10YR4/4)　シルト　地山粒層
　しまり普通～強　粘性やや弱
　地山粘土塊、黒褐色土多量混入
5　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　地山＋黒褐色土層
　しまり普通～弱　粘性普通
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト
　地山＋黒褐色土層　しまり普通～弱　粘性普通

SK22
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～粘土
　しまりやや強　粘性普通　炭化物粒(φ1㎜)微量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～10㎜)混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ１㎜)多量、
　地山粘土塊(φ30～50㎜)多量、地山粒多量混入
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト～粘土
　地山粒＋地山ブロック層　しまりやや強　粘性普通
5　黒褐色土(10YR3/2)　シルト～粘土
　しまり普通～やや弱　粘性普通
　地山粘土塊やや多く含む
6　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまりやや強　粘性普通～やや強
　炭化物(φ5㎜)少量、地山土塊(φ１㎜)多量、
　地山粒多量混入
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土
　しまりやや強　粘性普通　地山粘土ブロック層
8　暗褐色土(10YR3/4)　粘土　しまりやや強　粘性普通
　炭化物粒(φ5㎜)微量、
　地山土塊(φ10～50㎜)多量、地山粒多量混入

SK25
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性やや弱
　地山粒多量混入
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱

SK31
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり強　粘性やや弱
　地山土塊(φ10㎜)やや多く混入
2　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　しまりやや強
　粘性やや弱　地山土塊(φ10㎜)多量混入
3　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　黒褐色土＋地山土塊
　(φ20～50㎜)層　しまり普通～弱　粘性やや強
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土　しまり強　粘性やや強
　地山土塊(φ50～80㎜)少量混入
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘土
　しまりやや強　粘性やや弱
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘土　しまり普通　粘性強
　暗褐色土多量混入
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト～粘土　暗褐色土
　＋地山粒層　しまり普通～弱　粘性普通～弱

SK23
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや強　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)少量、地山粒やや多く混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまり強　粘性やや弱
　炭化物粒少量、地山土塊混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや強　粘性普通
　炭化物粒少量、地山土塊(φ50～80㎜)少量混入
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり強　粘性普通～強
　黒褐色土塊(φ30～50㎜)少量混入
5　褐色土(10YR4/4)　シルト　しまり極強　粘性なし
　暗褐色土少量混入
6　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや強
　粘性少しあり　地山粒多量混入
7　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　(地山粒＋暗褐色土)層
　しまり強　粘性普通～強
8　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　(暗褐色土＋地山粒)層
　しまり極強　粘性なし
9　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト　しまり強　粘性やや弱
　黒色土塊(φ20㎜)、地山粒混入
10　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　(特大地山ブロック＋
　暗褐色土)層　しまり強　粘性普通～強




**第13図　ＳＫ31配石墓、ＳＫ20・21・22・23・73土坑（墓）、ＳＫ25土坑**

た巨大な礫は明らかに意図的に配されたものであり、ゆえに、配石墓として捉えるのが妥当であるかもしれない。

**ＳＫ24土坑（墓）［第14図、第７表］**

ＬＴ29グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場北東端）にある。基本土層観察ベルトの東側のトレンチを精査中に地山漸移層で楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸127㎝、短軸73㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ44°Ｅ、深さ25㎝である。

底面はやや丸みを帯び北東へ向かい若干傾斜する。壁面は丸みを帯びつつ急に立ち上がる。

覆土は６層に分層され、壁際から底面にかけて地山を含んだ土が堆積する。

覆土上位から中位にかけて遺物が出土し、晩期のものと比定される縄文土器片が19点、石錘が１点、剥片が４点出土している。第49図15は精製土器の装飾突起の一部である。これ以外はすべて第49図16・17のような粗製土器である。第58図161の石錘は底面直上からの出土である。

遺構の検出位置、遺構の形状から土坑墓である可能性が高い。若干浅いが、当遺構を検出した地点は漸移層と遺構覆土が非常に類似しており、構築面が検出面よりも高かったと推測されるため、本来はより深さがあったものと思われる。

**ＳＫ25土坑［第13図、第７表、図版10］**

ＬＱ29グリッド（墓域中央部）にある。地山面精査中に礫を伴う黒褐色土の楕円形プランと、その東側に隣接して地山粒・塊を多量に含む方形に近い楕円形のプランを検出した。新旧関係を確定するため慎重に掘り下げたところ、当遺構のほうが古く、もう一方をＳＫ31として精査を進めた。

一部ＳＫ31に切られているが、平面形は不整な楕円形で、長軸推定120㎝、短軸推定90㎝で、長軸方向はＮ76°Ｅ、深さ17㎝である。

底面はほぼ平坦で浅く、壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は２層に分層される。確認面より上位北部に径20㎝程の扁平な礫がある。

覆土中位より縄文前期に比定される土器小片１点が出土している。

**ＳＫ26土坑［第14図、第７表］**

ＬＰ30グリッド（墓域中央部）にある。地山面精査中に黒褐色土の楕円形プランを検出した。

平面形は長軸216㎝、短軸149㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ67°Ｗ、深さ41㎝である。

底面は浅くやや丸みを帯びる。壁面も丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。北西に向かい若干傾斜する。

覆土は５層に分層される。ほぼ全体に地山粒を含み、特に１層には霜降り状に地山土塊が含まれる。

覆土中位から土器片１点が出土している。第49図18は磨消縄文が施される。

**ＳＫ27土坑（墓）［第14図、第７表、図版11］**

ＬＳ24・25、ＬＴ24グリッド（墓域南端）にある。地山漸移層精査中に基本土層観察ベルト東側のトレンチより緩やかにつながり、非常に不明瞭でいびつなプランを検出した。プランを特定するため

掘り下げたところ、３基程度の遺構が切り合っていることが判明し、南西部の１基がもっとも古いことは確認ができ、これをＳＫ59とした。他の２基の新旧関係は検出状況からは特定困難であったため、半截して土層断面を観察した結果、北側にある当遺構の方が新しく、南側のＳＫ29の北部を切っていることが判明した。

平面形は長軸171㎝、短軸130㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ78°Ｗ、深さ45㎝である。

底面はほぼ平坦でしまっており、壁面はやや急に立ち上がる。

覆土は９層に分層され、黒褐色土主体であるが、両壁際と中位に地山土の混入が顕著である。

覆土上位から中位にかけて縄文土器片10点が出土している。第49図19は注口土器の口縁部であり、刻目文と平行沈線が施される。第49図20は注口土器の底部付近であり、沈線により直線・曲線文が施される。同一個体と思われる破片が他に４点出土している。

遺構の検出位置、遺構の形状から判断すると土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ28配石墓［第14図、第７表］**

ＬＰ28・29グリッド（墓域東部）にある。地山漸移層精査中に北側に弧状に礫を伴う楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸227㎝、短軸167㎝の方形に近い楕円形で、長軸方向はＮ73°Ｅ、深さ59㎝、礫上部までの高さ82㎝である。

底面付近で段丘礫層にあたるため、礫が露出する。底面はやや丸みを帯び、南へ若干傾斜する。壁面は南側は急で、北側は非常に緩やかに立ち上がる。

覆土は10層に分層され、地山土の含まれる層が交互に堆積する。礫は覆土中位以上でみられ、平面的には北部に集中して検出した。遺構の検出面付近に比較的大型の礫が多い。

覆土中位以上で縄文土器片が８点出土しているが、摩滅が著しく時期は特定できない。

礫の検出状況、遺構の検出位置から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ29土坑（墓）［第14図、第７表、図版11］**

ＬＳ24・ＬＴ24グリッド（墓域南端）にある。検出に至る経過はＳＫ27で述べたとおりである。

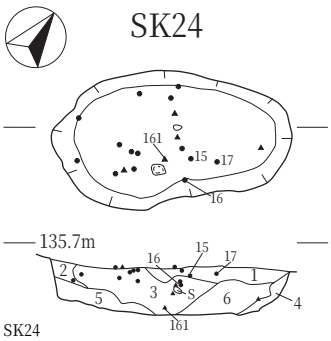
平面形は長軸134㎝、短軸推定110㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ74°Ｗ、深さ55㎝である。

底面はほぼ平坦でしまっており、壁面はやや急に立ち上がる。

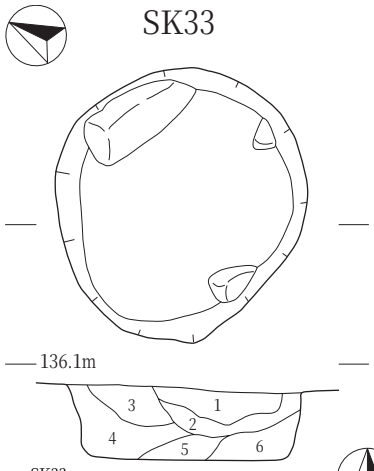
覆土は４層に分層される。

覆土上位から下位にかけて縄文土器片28点が出土している。約半数が精製土器片である。第49図21は深鉢形土器の頸部で、平行沈線と列点文が施される。第49図22は鉢形土器胴部であるが、上部には羊歯状文、下部は磨消文様が施されるが、表面の摩滅が著しく、縄文原体は残っていない。第49図23は深鉢形土器口縁部であり、口唇部には刻目が連続する。口縁部には平行沈線が横走し、部分的に刻目が入る。第49図24も深鉢形土器胴部で、平行沈線・ＬＲ縄文が施される。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断すると土坑墓である可能性が高い。

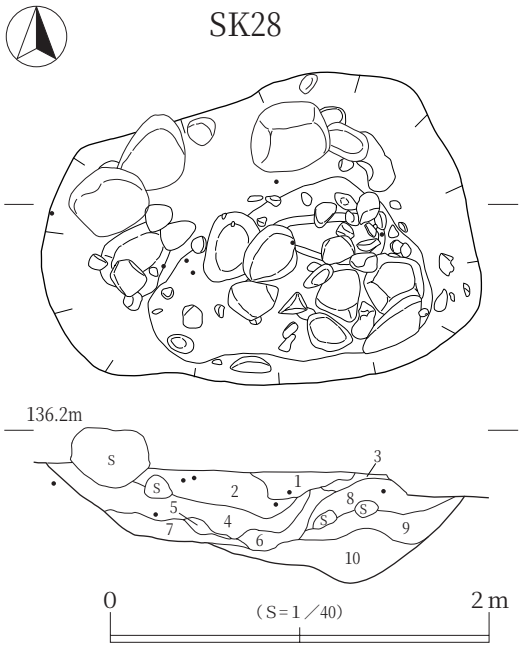


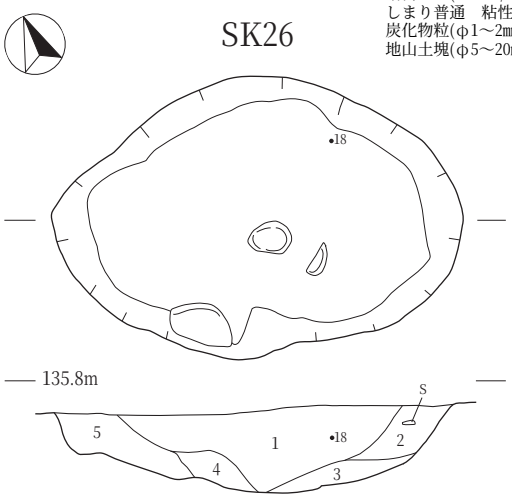

SK24
1　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまりやや強　粘性強
　炭化物(φ2～5㎜)3%、
　酸化した鉄分多量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～5㎜)1%、地山土塊
　(φ5～10㎜)3%、酸化した鉄分少量混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト＋細砂
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ2～5㎜)1%、
　酸化した鉄分少量混入
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山土50%混入
5　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　炭化物(φ1～3㎜)1%、地山土30%混入
6　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ1～3㎜)1%、地山土50%、
　酸化した鉄分少量混入



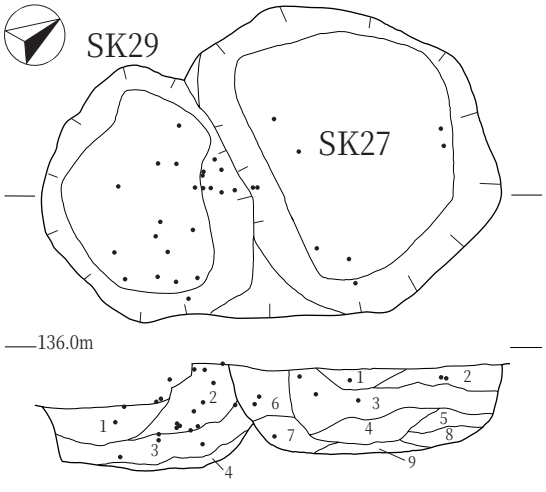

SK33
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性弱
　地山土塊(φ10～20㎜)40%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性弱
　炭化物粒(φ2～5㎜)1%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性弱
　地山土粒(φ5～10㎜)3%混入
4　黒褐色土(10YR3/1)　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性弱
　炭化物粒(φ2～5㎜)1%、
　地山土粒(φ2～5㎜)1%混入
5　黒褐色土(10YR3/2)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性弱
6　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性弱
　炭化物粒(φ1～2㎜)1%、
　地山土塊(φ5～20㎜)30%混入

SK28
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや弱　炭化物(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱　地山粒(φ1～5㎜)5%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性普通
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまりやや弱　粘性やや強
　炭化物(φ1～2㎜)1%、地山土20%混入
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりやや弱　粘性普通　炭化物(φ1～3㎜)10%混入
6　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり弱　粘性強　炭化物(φ1㎜)1%、地山土3%混入
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト
　しまり普通　粘性強　地山土30%混入
8　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性普通　地山粒10%混入
9　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり強　粘性やや強
10　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり弱　粘性強　地山土3%混入




SK26
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや強
　中央部に地山粘土塊(φ10～20㎜)が集中する
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや強
3　黒褐色土(10YR3/2)　シルト～粘土　しまり弱　粘性やや強
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト　しまり普通～強　粘性普通
5　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　漸移層　しまり普通～強　粘性普通




SK27
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりなし　粘性なし
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりなし　粘性なし
　暗褐色土25%混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりなし　粘性なし
　黒褐色土10%混入
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性なし
　暗褐色土少量、炭化物粒(φ1～2㎜)1%混入
5　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり弱　粘性なし
　暗褐色土少量混入
6　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりなし　粘性なし
　暗褐色土微量混入
7　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりなし　粘性極弱
　暗褐色土少量混入
8　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりなし　粘性極弱
　黒褐色土25%混入
9　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりなし　粘性なし
　暗オリーブ褐色土40%混入

SK29
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり極弱　粘性なし
　極暗褐色土少量混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりなし　粘性なし
　暗褐色土少量混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりなし　粘性なし
　褐色土塊(φ1～5㎜)少量混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　細砂　しまりなし　粘性なし
　暗褐色土(7.5YR3/4)　少量混入

**第14図　ＳＫ28配石墓、ＳＫ24・27・29・33土坑（墓）、ＳＫ26土坑**

**ＳＫ31配石墓［第13図、第７表、図版10］**

ＬＰ29・ＬＱ29グリッド（墓域中央部）にある。検出に至る経過はＳＫ25で述べたとおりである。

平面形は長軸推定150㎝、短軸98㎝の方形に近い楕円形で、長軸方向はＮ77°Ｅ、深さ46㎝で、礫上部までの高さは71㎝である。

深さ下位ほどから段丘礫層を掘り込んでいるため、底面は自然礫が露出し、いびつである。壁面は一旦急に立ち上がり、中位からはやや開き気味に立ち上がる。

覆土は７層に分層され、全体的に地山粒・塊が多く含まれる。中でも１・５層への混入は顕著で、特に５層下位では黒褐色土と地山層が薄く交互に堆積している。礫は覆土上位から中位にかけて径５～20㎝程度のものが散在し、南側にやや集中する。

覆土上位から粗製の縄文土器片１点が出土している。

礫の検出状況がまばらであることから、他の配石墓とは若干異なる印象を受けるが、遺構の検出位置、遺構の形状から判断すれば墓とするのが妥当である。ここでは多少なりとも複数の礫が混入し、掘方が明瞭であるため配石墓としての位置付けが妥当であると考える。

**ＳＫ33土坑（墓）［第14図、第７表、図版11］**

ＬＱ27・28グリッド（墓域中央部）にある。地山面精査中に地山粒を多量に含む円形の黒褐色のプランを検出した。

平面形は長軸144㎝、短軸133㎝の略円形で、長軸方向はＮ77°Ｅ、深さ38㎝である。

底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は６層に分層され、南側の層に地山土が含まれる。

遺物の出土はない。

平面形が当該区では希な円形であるが、掘方が非常にしっかりしており、また、遺構の検出位置などから判断すると土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ34土坑（墓）［第15図、第７表］**

ＬＴ23グリッド（墓域南端）にある。基本土層観察ベルトの東側のトレンチを精査中に地山漸移層で検出した。

平面形は長軸156㎝、短軸94㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ81°Ｅ、深さ61㎝である。

底面は東側が低く、西側はテラス状になる。壁面はやや角度を持って立ち上がる。

覆土は４層に分層される。

覆土上位から中位より４点の縄文土器片が出土した。いずれも無文で時期の特定はできない。

遺構の検出位置、遺構の形状から土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ35土坑［第15図、第７表］**

ＬＳ28・ＬＴ28グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場北東に隣接）にある。地山面を精査中に検出した。

平面形は長軸109㎝、短軸82㎝の楕円形で、長軸方向はＮ７°Ｗ、深さ28㎝である。

底面は浅くほぼ平坦であり、北へ向かい傾斜する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は２層に分層される。

遺物の出土はない。

当遺構は若干浅いが、検出した地点は漸移層と遺構覆土が非常に類似しており、構築面が検出面よりも高かったと推測されるため、本来はより深さがあったものと思われる。遺構の検出位置から判断すると土坑墓であった可能性もあるが、遺構の形状その他の要素で、墓と確定する根拠に乏しいため、ここでは土坑と判断する。

**ＳＫ37土坑［第15図、第７表］**

ＬＴ30グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場北東に隣接）にある。地山面を精査中に検出した。

平面形は長軸128㎝、短軸108㎝のずんぐりした楕円形で、長軸方向はＮ42°Ｗ、深さ22㎝である。

底面はやや丸みを帯び、若干南西に傾斜する。壁面は丸みを帯び緩やかに立ち上がる。

覆土は３層に分層される。

遺物の出土はない。

当遺構は若干浅いが、検出した地点は漸移層と遺構覆土が非常に類似しており、構築面が検出面よりも高かったと推測されるため、本来はより深さがあったものと思われる。遺構の検出位置から判断すると土坑墓であった可能性もあるが、遺構の形状その他の要素で墓と確定する根拠に乏しいため、ここでは土坑と判断する。

**ＳＫ38土坑（墓）［第15図、第７表］**

ＬＴ29グリッド（墓域西部・ＳＴ184南西捨て場北東に隣接）にある。基本土層観察ベルトの東側トレンチの漸移層を掘り下げていたところ、不明瞭な黒褐色土のプランを検出し、さらに掘り下げ精査したところ、地山上面付近で土坑と確定するに至った。

平面形は長軸168㎝、短軸88㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ49°Ｅ、深さ24㎝である。

底面は、北東側に若干傾斜しているものの平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は単層で、地山土が多く含まれている。

覆土中から縄文土器小片が11点出土している。ほとんどが粗製土器片である。第49図25は台付浅鉢でＢ字状突起を有し、刻目文が２条連続する。第49図26は皿形のミニチュア土器である。

当遺構は若干浅いが、検出した地点は漸移層と遺構覆土が非常に類似しており、構築面が検出面よりも高かったと推測されるため、本来はより深さがあったものと思われる。遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断すると土坑墓であった可能性が高い。

**ＳＫ39土坑［第15図、第７表］**

ＬＴ30グリッド（墓域北西端）にある。地山面を精査中に黒褐色の不明瞭なプランを検出した。

平面形は長軸98㎝、短軸86㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ９°Ｗ、深さ22㎝である。

底面は北東部が窪み、全体的にも北東に傾斜している。壁面は角度を変えながら立ち上がる。

覆土は３層に分層され、底面から壁面にかけて地山土が含まれている。

遺物の出土はない。

**ＳＫ42土坑墓［第15図、第７表、巻頭図版７、図版11］**

ＬＯ28・ＬＰ28グリッド（墓域東端）にある。地山面精査中に黒褐色の楕円形プランを検出した。南西部で、一部ＳＫＰ54に切られている。

平面形は長軸204㎝、短軸110㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ51°Ｅ、深さ48㎝である。

底面はやや丸みを帯び、南西部が最も低くなる。壁面は南西から南にかけてはほぼ垂直に立ち上がり、それ以外は緩やかである。特に北東に向けては底面からの連続で非常に緩やかに立ち上がっている。

覆土は12層に分層され、黒褐色土が主体である。全体に地山土を含むが、特に北東側に顕著である。南西部には赤色顔料が霜降り状に広く検出される。土層断面でいうと11・12層にあたり、厚さ25㎝ほど堆積する。

覆土上位から４点の縄文土器片が出土したが、時期の特定はできない。

当遺構は赤色顔料が広範囲かつ明瞭に検出された唯一の遺構であり、土坑墓と特定できる。顔料の検出位置より、埋葬時の頭部方位は南西であったと推測される。

**ＳＫ45土坑［第15図、第７表］**

ＬＳ24・ＬＴ24グリッド（墓域南端）にある。地山面精査中に不明瞭なプランを検出した。南部は撹乱により一部切られている。

平面形は、長軸推定203㎝、短軸74㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ38°Ｅ、深さ90㎝である。

底面は一部を深く掘り込んである。壁面は段状に立ち上がっている。

覆土は６層に分層される。

覆土上位から縄文土器片１点が出土しているが時期の特定はできない。他に第58図162のスクレイパーが１点出土している。

**ＳＫ50配石墓［第16図、第７表］**

ＬＯ29・30グリッド（墓域東端）にある。地山漸移層精査中に東西に礫を伴う楕円形のプランを検出した。

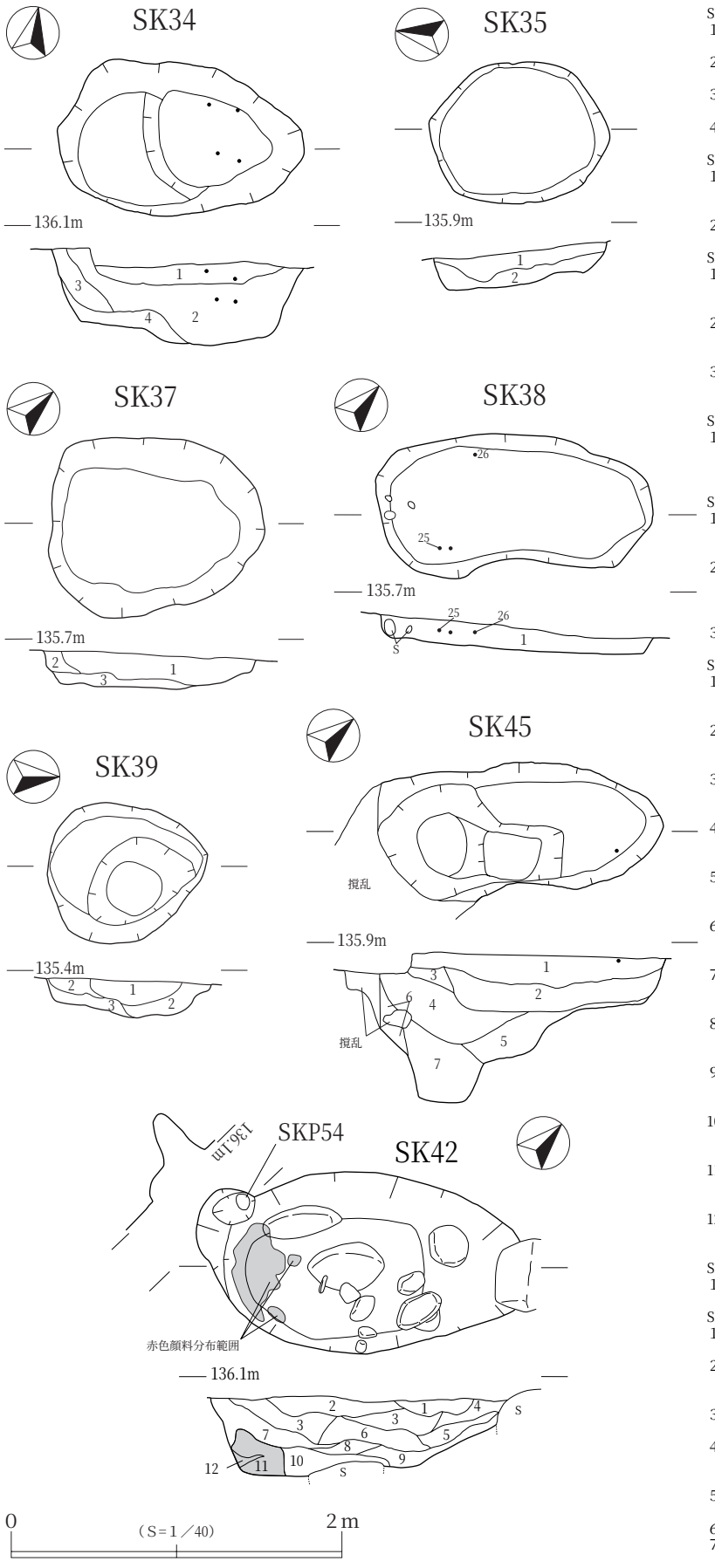
平面形は長軸164㎝、短軸114㎝の楕円形で、長軸方向はＮ79°Ｗ、深さ62㎝、礫上部までの高さは70㎝である。

深さ中位程から段丘礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに段丘礫が露出する。底面はほぼ平坦で西側へ若干傾斜する。壁面はやや角度をもって立ち上がる。

覆土は６層に分層される。暗褐色土主体で、地山粒・塊を含む層が中位にレンズ状に堆積する。礫は覆土中位以上にみられ、上位には径20～30㎝程の、中位には径10㎝以下の礫を検出した。平面的には東部と西部に集中しており、西部の方が密である。

覆土中位以上から粗製の縄文土器片４点が出土している。

礫の検出状況、遺構の検出位置、遺構の規模・形状から配石墓と位置付けた。




SK34
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりなし　粘性なし
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりなし　粘性なし　褐色土少量混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりなし　粘性なし　暗褐色土少量混入
4　暗褐色土(10YR4/3)　細砂
　しまりなし　粘性なし

SK35
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性普通
　地山粘土塊多量混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～粘土
　地山粘土層＋暗褐色土層　しまり強　粘性普通

SK37
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～5㎜)多量混入
2　黒褐色土(10YR3/1)　シルト
　しまりやや強　粘性普通～強
　炭化物(φ3㎜)少量混入
3　灰黄褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山粘土塊(φ30～50㎜)多量混入

SK38
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～5㎜)3%、地山土30%、
　酸化した鉄分少量混入

SK39
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性強
　炭化物粒(φ1～3㎜)1%、酸化した鉄分多量混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強
　地山粒(φ2～5㎜)15%、地山塊(φ10～20㎜)15%、
　酸化した鉄分多量混入
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　細砂
　しまり強　粘性弱

SK42
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　黒色土1%、地山粒(φ1～5㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山粒(φ1～3㎜)1%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや強
　炭化物(φ1㎜)1%、地山土10%混入
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%、地山土30%混入
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強
　地山土30%混入
6　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト
　しまり普通　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%、地山土70%混入
7　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや弱　粘性やや強
　地山粒(φ1～5㎜)5%、黒色土微量混入
8　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%、地山土40%混入
9　褐色土(10YR4/4)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや強
　地山土90%混入
10　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト
　しまり強　粘性なし
　地山粒(φ1～3㎜)5%、黒色土1%混入
11　暗褐色土(10YR3/4)　細砂
　しまり普通　粘性なし
　地山粒(φ1～3㎜)10%、赤色顔料1%混入
12　暗赤褐色土(10R3/3)　細砂
　しまり普通　粘性なし
　黒褐色土微量混入

SKP54
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり普通　粘性やや強　炭化物(φ1～2㎜)1%混入

SK45
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性なし
　炭化物粒(φ1～2㎜)3%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまりなし　粘性なし
　炭化物粒(φ1～2㎜)1%、褐色土少量混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり弱　粘性なし
　炭化物(φ1㎜)1%、褐色土微量混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりなし　粘性極弱
　炭化物粒(φ1～2㎜)1%、暗褐色土40%混入
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりなし　粘性なし
6　暗褐色土(10YR3/4)　細砂　しまりなし　粘性なし
7　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりなし　粘性なし

**第15図　ＳＫ42土坑墓、ＳＫ34・38土坑（墓）、ＳＫ35・37・39・45土坑**

**ＳＫ51土坑［第16図、第７表］**

ＬＮ29グリッド（墓域東端）にある。地山面を精査中に黒褐色土のプランを検出した。北部はトレンチ調査時に掘りすぎたものである。

平面形は長軸148㎝、短軸108㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ15°Ｗ、深さ20㎝である。

底面はやや丸みを帯び北西がやや窪み、壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は４層に分層される。

覆土上位から下位において縄文土器片が８点出土している。ほとんどが粗製土器である。第49図27は壺形土器片で、平行沈線・ＲＬ縄文が施される。

検出位置から土坑墓である可能性があるが、掘方がいびつであるため土坑とした。

**ＳＫ55土坑［第16図、第７表］**

ＬＯ30グリッド（墓域北東端）にある。地山面を精査中に黒褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸148㎝、短軸104㎝の楕円形で、長軸方向はＮ82°Ｅ、深さ23㎝である。

底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は３層に分層される。

遺物の出土はない。

遺構の検出位置、規模・形状からは土坑墓ともみて取れるが、掘方が浅いため土坑とした。

**ＳＫ59土坑（墓）［第16図、第７表］**

ＬＴ24グリッド（墓域南端）にある。検出に至る経過はＳＫ27で述べたとおりである。

大部分が他の遺構と切り合っているが、長軸推定96㎝、短軸推定68㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ４°Ｗ、深さ25㎝である。

底面はほぼ平坦であり、壁面は残る部分ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は２層に分層され、１層上面には赤色顔料粒が若干ではあるが検出された。

遺物の出土はない。

当遺構は小規模であり、他遺構と切り合い全体像が把握し難いが、覆土中からの赤色顔料の検出、遺構の検出位置から判断して土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ65配石墓［第16図、第７表、図版11］**

ＬＯ32・ＬＰ32グリッド（墓域北端・ＳＴ183北東捨て場南側に隣接）にある。漸移層を掘り下げ中に礫が数個並んで検出されたが、プランが不明瞭であったため、さらに地山面まで掘り下げ精査したところ、周囲に礫が巡る楕円形プランを検出した。

平面形は長軸124㎝、短軸66㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ78°Ｗ、深さ50㎝、礫上部までの高さは63㎝である。

深さ中位程から段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに段丘礫が露出する。特に底面は礫の露出が著しく、凹凸が激しい。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は５層に分層され、地山土を含む層が上位でレンズ状に堆積する。礫は覆土上位以上にあり、

外周の北半分に巡る。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の検出位置、遺構の形状から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ68配石墓［第16図、第７表］**

ＬＰ32・ＬＱ32グリッド（墓域北端・ＳＴ183北東捨て場南側に隣接）にある。地山面を精査中に中礫を伴う黒色土の長楕円形プランを検出した。

平面形は長軸149㎝、短軸82㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ85°Ｗ、深さ66㎝、礫上部までの高さは69㎝である。

深さ中位程から段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに段丘礫が露出する。底面は中央部が若干高く、東側が窪んでいる。壁面はほぼ垂直であるが、中位から若干開き気味に立ち上がる。

覆土は３層に分層され、黒色土が主体である。全体に黄褐色土が少量混入している。礫は中位以上でレンズ状にあり、北西にやや集中してみられる。径10㎝程度の礫が多い。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の検出位置、遺構の形状から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ69土坑［第16図、第７表］**

ＬＰ32・ＬＱ32グリッド（墓域北端・ＳＴ183北東捨て場南側に隣接）にある。地山面を精査中に検出した。

平面形は長軸97㎝、短軸69㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ83°Ｅ、深さ39㎝である。

底面は、自然礫が露出しているがほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は３層に分層される。

遺物の出土はない。

**ＳＫ71土坑［第17図、第７表］**

ＬＱ32グリッド（墓域北端・ＳＴ183北東捨て場南側に隣接）にある。地山面を精査中に検出した。

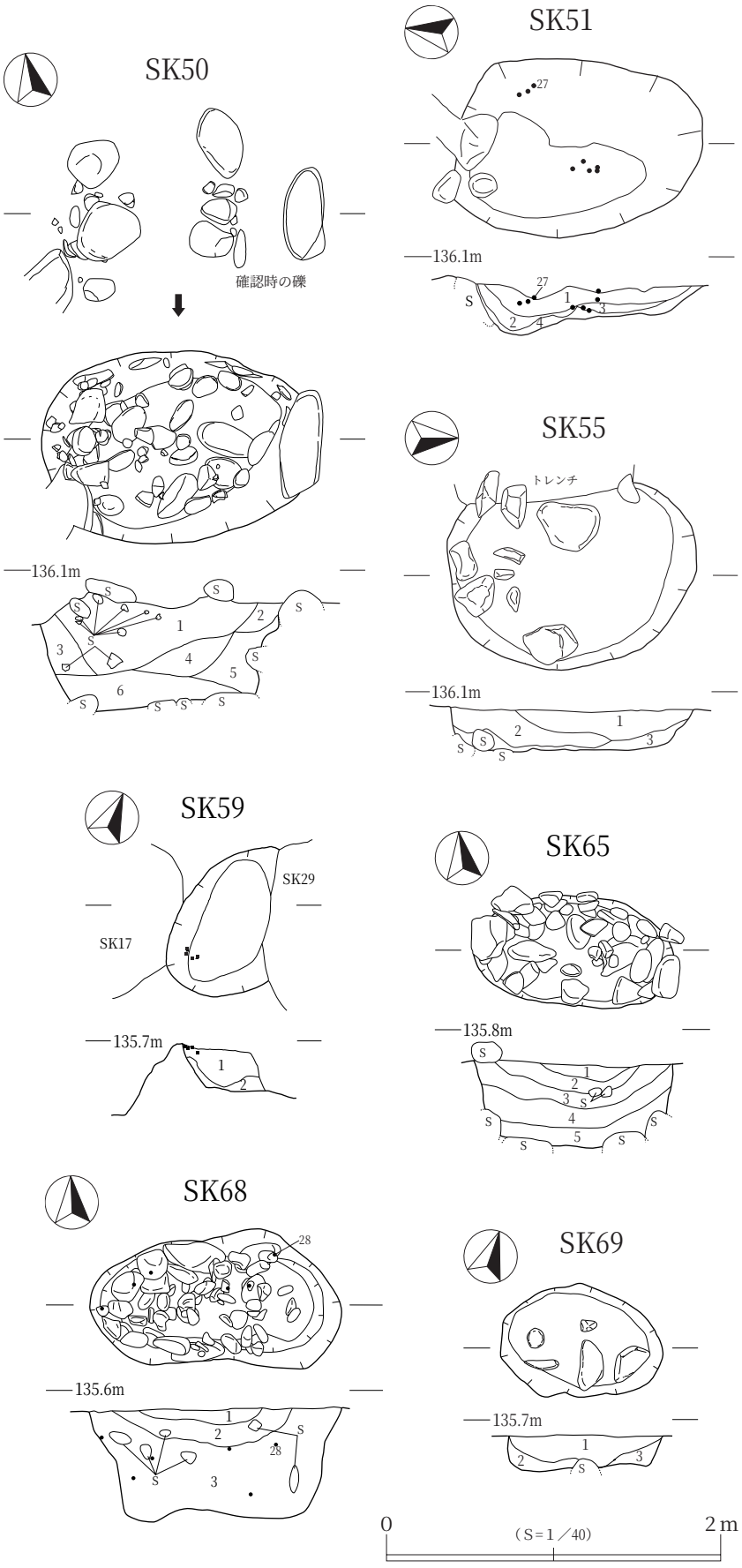
平面形は長軸140㎝、短軸82㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ60°Ｅ、深さ49㎝である。

底面は段丘礫が露出しており、凹凸が著しく、丸みを帯びる。壁は丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。

覆土は４層に分層され、地山土を含む層がレンズ状に堆積する。

覆土上位からは土器片が15点出土している。ほとんどが粗製で無文の土器である。第49図29は皿形土器口縁部で、口唇部に沈線による連続した小突起を有し、口縁裏にも刻目文が施される。口縁部には平行沈線と刻目文、胴部には磨消縄文が施される。第49図30も皿形土器口縁部で、口唇部にＢ字状突起、胴部に雲形文が施される。第49図31・32はいずれも深鉢形土器口縁部であり、口縁部には羊歯状文が、胴部にはＬＲ縄文が施される。第49図33は粗製の深鉢形土器胴部片である。

丸みを帯びた掘方が他の土坑墓とは異なるため、土坑とした。




SK50
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　炭化物(φ１㎜)1%、
　地山土粒(φ1～2㎜)1%、錆土少量混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　地山土少量混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　細砂～シルト
　しまり普通　粘性やや強
　地山土粒(φ1㎜)1%混入
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　炭化物(φ1㎜)1%、
　地山土塊(φ1～40㎜)1%、錆土微量混入
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや強
　地山土少量混入
6　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまり弱　粘性極強
　錆土少量混入

SK51
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ1～3㎜)1%、
　酸化した鉄分多量混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性強
　地山塊(φ5～10㎜)1%、
　酸化した鉄分多量混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり強　粘性強
　地山土30%、酸化した鉄分多量混入
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや弱
　地山土50%以上混入

SK55
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　明褐色土、褐色土微量混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　黄褐色土微量混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　にぶい黄褐色土40%混入

SK59
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりなし　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりなし　粘性なし
　１層土少量混入

SK65
1　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまりやや強　粘性強
　地山粒(φ10～20㎜)7%、
　酸化した鉄分多量混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　にぶい黄褐色土70%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山粒(φ10～20㎜)10%、
　酸化した鉄分混入
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1～5㎜)1%、
　酸化した鉄分少量混入
5　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～5㎜)1%混入

SK68
1　黒色土(7.5YR1.7/1)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～2㎜)1%、
　黄褐色土塊(φ1～5㎜)1%混入
2　黒色土(7.5YR1.7/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　黄褐色土塊(φ1～2㎜)7%、
　地山土15%混入
3　黒色土(10YR1.7/1)　シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　黒褐色土40%、黄褐色土塊(φ1～5㎜)2%、
　酸化した鉄分多量混入

SK69
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1～3㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや弱
　地山土30%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　２層と類似　２層よりもシルト質が強い
　しまり強　粘性やや弱

**第16図　ＳＫ50・65・68配石墓、ＳＫ59土坑（墓）、ＳＫ51・55・69土坑**

**ＳＫ72配石墓［第17図、第７表、図版11］**

ＬＳ30グリッド（墓域北西部、ＳＴ183北東捨て場とＳＴ184南西捨て場の中間）にある。地山漸移層を精査中に礫２点を検出した。プランが不明瞭であったため、さらに地山面まで掘り下げたところ、中心に焼土の広がりをもち、かつ礫を伴う黒褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸125㎝、短軸86㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ54°Ｗ、深さ60㎝、礫上部までの高さは71㎝である。

深さ中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面や壁面には、段丘礫が露出しており、凹凸が著しい。壁面は下位でほぼ垂直に、中位からやや緩やかに立ち上がる。特に南東側は緩やかで、テラス状になる。

覆土は５層に分層され、黒褐色土主体であるが、土坑上面には径15㎝程度の焼土の広がりがみられる。礫は覆土中位以上にみられ、確認時に北西でみられた礫は径50㎝程度と大型である。巨礫は南西に、細～中礫は北東に偏る。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の検出位置から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ73土坑（墓）［第13図、第７表、図版10］**

ＬＲ29・ＬＳ29 グリッド（墓域中央）にある。検出に至る過程はＳＫ20で述べたとおりである。

平面形は長軸159㎝、短軸推定95㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ83°Ｅ、深さ33㎝である。

底面はほぼ平坦であるが、東へ若干傾斜する。壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は３層に分層される。

覆土中位から粗製の縄文土器片２点が出土している。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断して土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ79土坑［第17図、第７表］**

ＬＴ25グリッド（墓域南西端・ＳＴ184南西部捨て場南東部）にある。捨て場の精査を終了し、地山面まで掘り下げたところ、黒褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸122㎝、短軸74㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ42°Ｗ、深さは93㎝である。

底面は平坦であり、壁面は南東側では内湾し、一度抉れてから外反する。他の面はほぼ垂直に立ち上がった後にやや外反する。

覆土は４層に分層され、３・４層は地山土を多量に含む。

底面から覆土上位において40点の土器片が出土し、ほとんどが粗製土器片である。第49図34はそのうち３点が接合したものであり、粗製の深鉢形土器である。他に同一個体の土器片が10点出土している。

**ＳＫ80土坑［第17図、第７表］**

ＬＴ25グリッド（墓域南西端・ＳＴ184南西部捨て場南東部）にある。捨て場の精査を終了し、地山面まで掘り下げたところ、黒褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸100㎝、短軸推定65㎝の不整な楕円形で、長軸方向はN88°W、深さ48㎝である。

底面はやや丸みを帯び若干西に傾斜する。壁面はやや角度をもって立ち上がる。北東部は巨大な段丘礫が壁の一部となる。

覆土は６層に分層され、下位の層は砂質で、地山粒を多量に含む。

遺物の出土はない。

**ＳＫ81土坑［第17図、第７表］**

ＬＲ32グリッド（墓域北部）にある。地山面を精査中に円形のプランを検出した。

平面形は長軸106㎝、短軸93㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ６°Ｅ、深さ21㎝である。

底面は、自然礫が露出しており、凹凸が著しいが、壁面にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。

覆土は２層に分層される。

遺物の出土はない。

**ＳＫ83土坑［第17図、第７表］**

ＬＲ32グリッド（墓域北端・ＳＴ183北東捨て場南側に隣接）にある。地山面を精査中に検出した。

平面形は長軸128㎝、短軸56㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はN89°W、深さ33㎝である。

底面では段丘礫層を掘り込んでいるため、段丘礫が露出しており凹凸が著しいがほぼ平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は３層に分層される。

遺物の出土はない。

**ＳＫ85配石墓［第17図、第７表］**

ＬＱ26グリッド（墓域南部）にある。漸移層精査中に中～大礫を検出、周囲を掘り下げたところ楕円形の黒褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸126㎝、短軸112㎝のずんぐりとした方形に近い楕円形で、長軸方向はN26°E、深さ23㎝、礫上部までの高さは47㎝である。

深さ中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面は段丘礫が露出しており、特に底面は凹凸が著しい。壁面は礫が露出し、ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は単一層で、中心に径80㎝の巨礫がある。

遺物の出土はない。

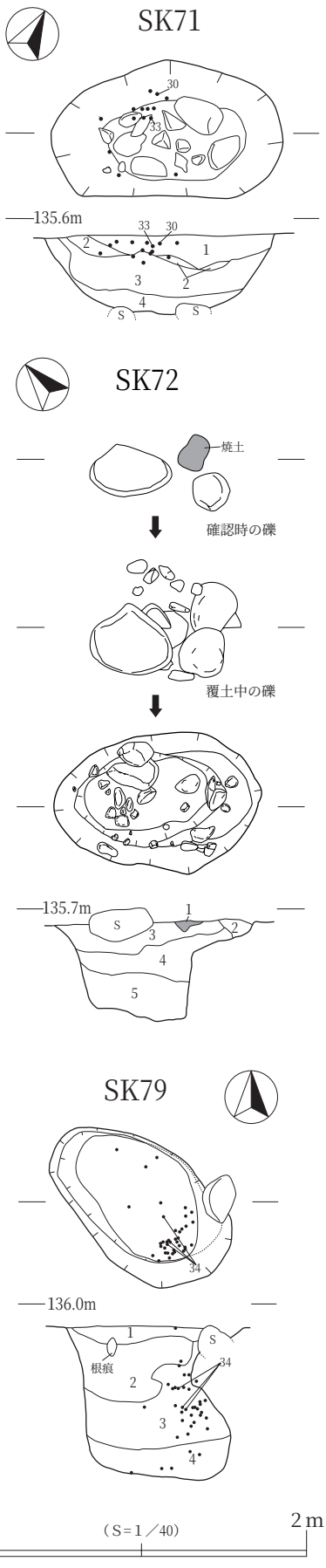
礫の出土状況、遺構の検出位置から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ93土坑（墓）［第18図、第７表］**

ＬＰ26グリッド（墓域南東端）にある。地山面精査中に楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸144㎝、短軸102㎝の楕円形で、長軸方向はN73°E、深さ24㎝である。

底面には段丘礫が露出しており、凹凸が著しいが、南西に向かいやや傾斜する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。




SK71
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ3～5㎜)5%、地山土粒(φ5～10㎜)
　7%、酸化した鉄分多量混入
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　細砂
　しまり強　粘性弱
　炭化物(φ3～5㎜)1%、1層土10%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　炭化物(φ3～5㎜)3%、地山土粒(φ5～10㎜)
　3%混入
4　黒色土(7.5Y1.7/1)　細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱

SK72
1　暗赤褐色土(5YR3/4)　シルト　焼土
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～5㎜)7%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性強
　酸化した鉄分混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ3～5㎜)3%、
　地山土粒(φ5～10㎜)1%、酸化した鉄分混入
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　酸化した鉄分混入
5　黒褐色土(10YR3/1)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強

SK79
1　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　細砂～シルト
　しまりやや弱　粘性普通
　地山粒(φ1～20㎜)15%、
　炭化物(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト
　しまり普通　粘性普通
　炭化物1%以下(φ1～3㎜)、3層土15%混入３
　暗褐色土(10YR4/5～10YR4/4)　細砂～粗砂
　しまり普通　粘性なし
4　暗褐色土(10YR4/3)　細砂～粗砂
　しまり普通　粘性なし

SK80
1　黒褐色土(10YR2/3)　細砂～シルト
　しまり普通　粘性ややなし
　炭化物(φ1～3㎜)1%未満、
　地山粒(φ1㎜)1%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　細砂
　しまり普通　粘性なし
3　暗褐色土(10YR3/3)　細砂
　しまり普通　粘性なし
　地山粒混入
4　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト
　しまりやや強　粘性普通
5　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト
　しまりやや強　粘性普通
　炭化物(φ3㎜)1%未満、地山粒5%混入
6　暗褐色土～黒褐色土(10YR2/3～10YR3/3)
　細砂～粗砂
　しまりやや強　粘性なし
　地山粒(φ20㎜)10%混入

SK81
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～3㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり強　粘性強
　地山土30%混入

SK83
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1～3㎜)1%、地山土粒少量、
　酸化した鉄分多量混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ3～5㎜)1%、地山土20%混入
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　細砂
　しまりやや強　粘性弱
　炭化物粒(φ1～3㎜)1%、黒褐色土が少量混入

SK85
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりなし　粘性やや強

**第17図　ＳＫ72・85配石墓、ＳＫ71・79・80・81・83土坑**

覆土は５層に分層される。

遺物の出土はない。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から判断して土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ94土坑（墓）［第18図、第８表、図版11］**

ＬＰ26グリッド（墓域南東端）にある。地山面精査中に楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸137㎝、短軸86㎝の楕円形で、長軸方向はN87°Ｅ、深さ34㎝である。

底面には段丘礫が露出しており凹凸が著しく、東へやや傾斜する。壁面はやや角度をもって立ち上がる。

覆土は４層に分層される。覆土上位の層に地山土が含まれる。東側底面直上には径50㎝の礫が配される。

遺物の出土はない。

遺構の検出位置、遺構の形状から判断すると土坑墓である可能性が高いが、底面東側の礫は意図的にその場所に配されたものと判断すれば、配石墓として捉えることも可能であろう。

**ＳＫ98土坑［第18図、第８表］**

ＭＡ24グリッド（墓域南端・ＳＴ184南西部捨て場南に隣接）にある。地山漸移層精査中に不明瞭な暗褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸132㎝、短軸78㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はN55°Ｅ、深さ31㎝である。

底面はほぼ平坦で狭く、北東へ傾斜する。壁面は西側が底面から緩やかに立ち上がっているのに対し、東側はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は４層に分層される。下位に地山粒を多く含む。

覆土中より縄文土器片が１点出土しているが、摩滅が著しく時期の特定はできない。

**ＳＫ102土坑（墓）［第18図、第８表］**

ＬＴ26グリッド（墓域西端・ＳＴ184南西部捨て場東部）にある。捨て場の精査を終了し、漸移層を掘り下げたところ、暗褐色土の非常に不明瞭なプランを検出した。プランを確定するため、周囲をさらに精査したところ北部と南部にそれぞれ柱穴様ピットが切り合っていることを確認した。その時点で、北部で切り合うＳＫＰ87は最も新しいことは確認状況から判断可能であったが、南部で切り合うＳＫＰ88との新旧関係の判断が困難であったため、サブトレンチを設定して掘り下げ、当遺構が最も古いことが判明した。

平面形は長軸155㎝、短軸111㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ４°Ｅ、深さ26㎝である。

底面は平坦で広いが、北へ向かい傾斜する。壁面はやや丸みを帯び、急に立ち上がる。

覆土は５層に分層され、黒褐色土主体である。全体に炭化物粒を多く含み、地山土の混入も多い。

覆土上位から縄文土器片10点、剥片１点が出土した。土器片はほとんどが粗製土器片であるが、注口土器の底部片が２点出土している。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ109配石墓［第18図、第８表］**

ＬＮ34・35グリッド（墓域北東端・ＳＴ183北東部捨て場東側に隣接）にある。地山面精査中に径10～40㎝程度の礫が集中する箇所を検出し、周囲を掘り下げたところ、中央に礫を伴う暗褐色の楕円形プランを検出した。

平面形は長軸196㎝、短軸142㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ15°Ｅ、深さ52㎝、礫上部までの高さは80㎝である。

土坑上位から段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面は段丘礫が露出している。底面は凹凸があり、南側が低く、北側がテラス状に高くなる。壁面も段丘礫が目立つが、緩やかに立ち上がる。

覆土は単層で、粘土質で酸化が著しい。礫は上位と下位に集中し、下位は礫が全体に散在しつつも周辺にやや多く、上位では中心部に集中する。

遺物は覆土全体からまんべんなく出土したが、覆土中位、つまり礫の出土層位の中間に大量の遺物が層をなしている。全部で427点の縄文土器片が出土した。そのうち同一個体のものも多く、５個体が復元できた。第50図37・39は鉢形土器で、37・38は縄文原体（ＬＲ）が施される。39は無文で、ナデの痕跡が残る。第50図36は深鉢形土器で口唇部には刻目が連続し、口縁部には２条の平行沈線が横走する。胴部にはＬＲ縄文が施される。第50図35は浅鉢形土器で、口縁部には平行沈線、胴部には雲形文が施される。

礫の検出状況、遺構の検出位置、遺構の形状から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ113配石墓［第18図、第８表］**

ＬＰ26グリッド（墓域南東端）にある。地山面精査中に円形に並んだ礫を伴うプランを検出した。

平面形は長軸138㎝、短軸86㎝の楕円形で、長軸方向はＮ51°Ｗ、深さ38㎝、礫上部までの高さ46㎝である。

底面は段丘砂礫層に達するため段丘礫が露出しているが概ね平坦であり、壁面は丸みを帯びつつ、やや角度をもって立ち上がる。

覆土は３層に分層される。礫は中位以上でレンズ状に堆積し、平面的にはやや中央に集中する。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、遺構の検出位置、遺構の規模・形状から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ144土坑（墓）［第18図、第８表、図版11］**

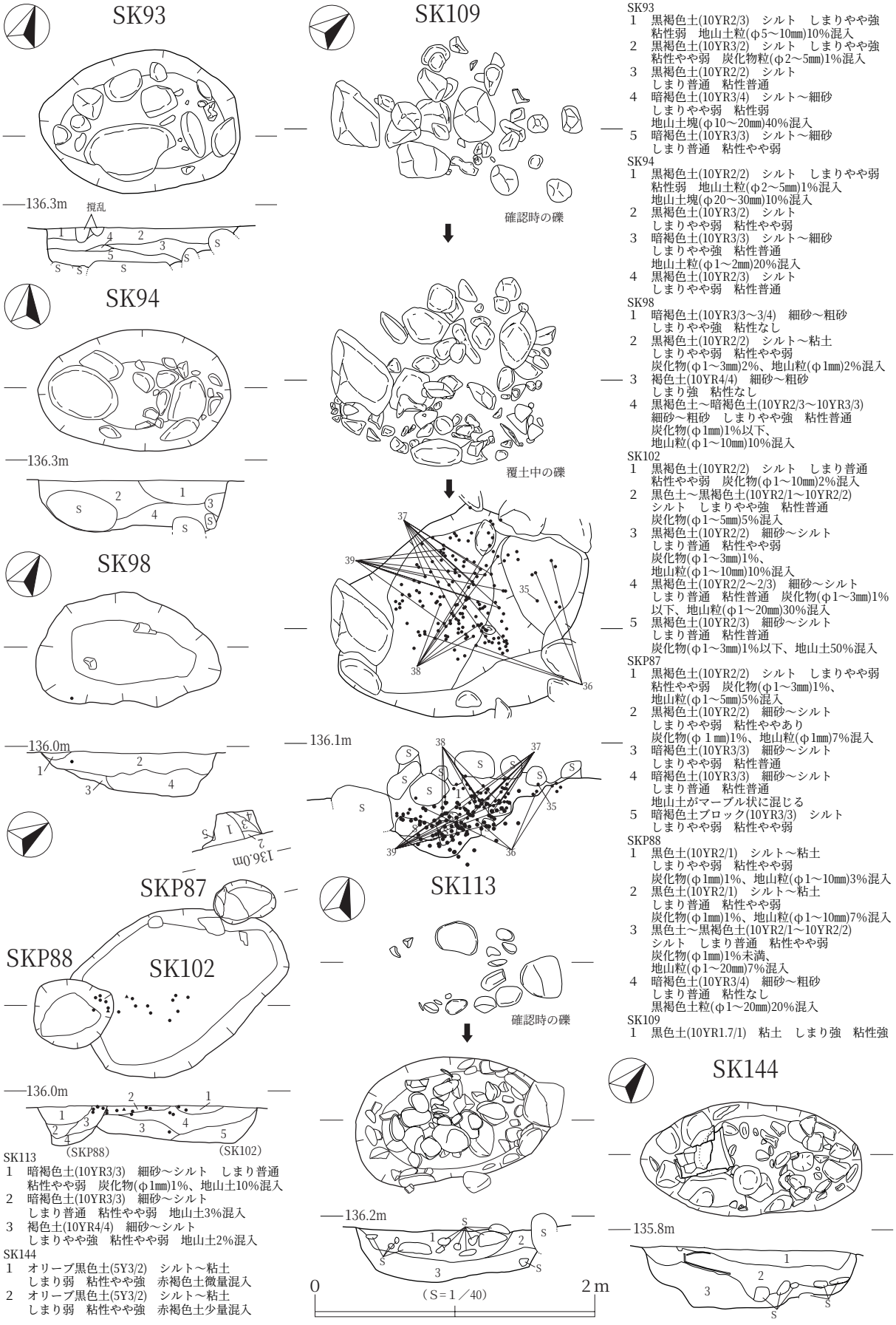
ＬＯ34・ＬＰ34グリッド（墓域北端・ＳＴ183北東部捨て場東）にある。捨て場の精査を終了し、地山面まで掘り下げたところ黒褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸158㎝、短軸81㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ54°Ｅ、深さ40㎝である。

深さ中位ほどから段丘砂礫層を掘り込んでいるため、底面・壁面ともに段丘礫が露出し、凹凸がある。壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は３層に分けられる。

覆土上～中位で大型の深鉢形土器（第50図40）が出土した。この土器は横位に押しつぶされたような状態で出土した。口径31.8㎝、高さ41.8㎝と、大型の粗製土器で器面にはＲＬ縄文が施される。




SK93
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや強　粘性弱　地山土粒(φ5～10㎜)10%混入
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまりやや強　粘性やや弱　炭化物粒(φ2～5㎜)1%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性普通
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～細砂　しまりやや弱　粘性弱　地山土塊(φ10～20㎜)40%混入
5　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂　しまり普通　粘性やや弱

SK94
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや弱　粘性弱　地山土粒(φ2～5㎜)1%混入　地山土塊(φ20～30㎜)10%混入
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂　しまりやや強　粘性普通　地山土粒(φ1～2㎜)20%混入
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや弱　粘性普通

SK98
1　暗褐色土(10YR3/3～3/4)　細砂～粗砂　しまりやや強　粘性なし
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～粘土　しまりやや弱　粘性やや弱　炭化物(φ1～3㎜)2%、地山粒(φ1㎜)2%混入
3　褐色土(10YR4/4)　細砂～粗砂　しまり強　粘性なし
4　黒褐色土～暗褐色土(10YR2/3～10YR3/3)　細砂～粗砂　しまりやや強　粘性普通　炭化物(φ1㎜)1%以下、地山粒(φ1～10㎜)10%混入

SK102
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや弱　炭化物(φ1～10㎜)2%混入
2　黒色土～黒褐色土(10YR2/1～10YR2/2)　シルト　しまりやや強　粘性普通　炭化物(φ1～5㎜)5%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや弱　炭化物(φ1～3㎜)1%、地山粒(φ1～10㎜)10%混入
4　黒褐色土(10YR2/2～2/3)　細砂～シルト　しまり普通　粘性普通　炭化物(φ1～3㎜)1%以下、地山粒(φ1～20㎜)30%混入
5　黒褐色土(10YR2/3)　細砂～シルト　しまり普通　粘性普通　炭化物(φ1～3㎜)1%以下、地山土50%混入

SKP87
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱　炭化物(φ1～3㎜)1%、地山粒(φ1～5㎜)5%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト　しまりやや弱　粘性ややあり　炭化物(φ１㎜)1%、地山粒(φ1㎜)7%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまりやや弱　粘性普通
4　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまり普通　粘性普通　地山土がマーブル状に混じる
5　暗褐色土ブロック(10YR3/3)　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱

SKP88
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～粘土　しまりやや弱　粘性やや弱　炭化物(φ1㎜)1%、地山粒(φ1～10㎜)3%混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト～粘土　しまり普通　粘性やや弱　炭化物(φ1㎜)1%、地山粒(φ1～10㎜)7%混入
3　黒色土～黒褐色土(10YR2/1～10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや弱　炭化物(φ1㎜)1%未満、地山粒(φ1～20㎜)7%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　細砂～粗砂　しまり普通　粘性なし　黒褐色土粒(φ1～20㎜)20%混入

SK109
1　黒色土(10YR1.7/1)　粘土　しまり強　粘性強

SK113
1　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや弱　炭化物(φ1㎜)1%、地山土10%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや弱　地山土3%混入
3　褐色土(10YR4/4)　細砂～シルト　しまりやや強　粘性やや弱　地山土2%混入

SK144
1　オリーブ黒色土(5Y3/2)　シルト～粘土　しまり弱　粘性やや強　赤褐色土微量混入
2　オリーブ黒色土(5Y3/2)　シルト～粘土　しまり弱　粘性やや強　赤褐色土少量混入

**第18図　ＳＫ109・113配石墓、ＳＫ93・94・102・144土坑（墓）、ＳＫ98土坑、ＳＫＰ87・88柱穴様ピット**

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から土坑墓である可能性が高い。

【Ａ区・平成13年度調査】

主にＭＣライン以西、26ライン以北に位置する遺構の調査を行った。114～142の遺構は平成12年度調査で検出し、確認状況の記録のみを行い、平成13年度に精査を行った。また、32ライン以北は遺跡内でも最も地山面の標高が低く、当該区の遺構は本来もっと深かったものと思われる。

**ＳＫ114配石墓［第19図、第８表］**

ＭＣ29グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に、ぼんやりとした楕円形の黒色土を確認した。地山面まで掘り下げてプランを確認し、これをＳＫ114とした。ＳＫ327と北側で切り合い関係にある。検出段階ではＳＫ327が新しいように見えたが、半截後、堆積状況から当遺構が新しいと判断した。

平面形は長軸126㎝、短軸110㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ78°Ｗ、深さ40㎝、礫上部までの高さは56㎝である。確認面が地山直上であったため、遺構上部配石を残して掘り下げたが、本来は深さ50㎝程度の土坑であったと思われる。

底面はほぼ平坦で北東部壁よりに径20㎝程の円礫が１点あり、壁はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は単一層である。黒色土を主体とし、炭化物が微量に混入する。覆土上位から確認面にかけて径10～30㎝程の礫が不規則に配される。また中位には中礫が投げ入れられたように散在する。

当遺構からの出土遺物は以下のとおりである。土器片32点、石匙１点、半円状扁平打製石器１点、剥片２点である。いずれも覆土上位から確認面にかけての出土が多い。半円状扁平打製石器（第58図164）は上面の配石として用いられており、石匙（第58図163）もほぼ同一面から出土している。

遺構の規模・形状、礫の検出状況等から配石墓と位置付ける。

**ＳＫ115土坑（墓）［第19図、第８表］**

ＭＣ29・ＭＤ29グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に、ぼんやりとした楕円形の黒褐色土を検出。地山面まで掘り下げてプランを確認し、これをＳＫ115とした。

平面形は長軸162㎝、短軸80㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ31°Ｗ、深さ56㎝、礫上部までの高さは74㎝である。確認面が地山直上であったため、遺構上部配石を残して掘り下げたが、本来は深さ65㎝程度の土坑であったと思われる。

底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は２層に分層される。黒褐色土を主体とし、炭化物が微量に混入する。覆土上面南東部には径50㎝程の扁平な石が置かれた状況で検出した。

遺物の出土はない。

検出位置、規模・形状から土坑墓であった可能性が高い。また、南東の確認面上で検出した扁平な礫を意図的な配置と捉えるなら配石墓としての位置付けが可能であろう。

**ＳＫ116配石墓［第19図、第８表］**

ＭＣ29・30、ＭＤ29・30グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に巨礫１点を認め、これを残したまま周囲を掘り下げた。地山面まで掘り下げた段階で黒褐色土楕円形のプランを確認しこれをＳＫ116とした。

ＳＫ320と南西で切り合う。平面観察により当遺構がＳＫ320より古いと判断した。

平面形は長軸178㎝、短軸132㎝の楕円形で、長軸方向はＮ20°Ｗ、深さ40㎝、礫上部までの高さは81㎝である。

底面は固くしまりほぼ平坦で、壁は極めて緩やかに立ち上がる。覆土は２層に分層される。黒褐色土を主体とし、１層から92点の土器片が出土した。そのほとんどが粗製の縄文土器片であり、朱塗りの土器小片が３点含まれる。剥片・チップは７点出土している。第51図43は皿形土器の胴部で、雲形文が展開し、内面にはＬＲ縄文を施された隆帯が巡る。第51図44は深鉢形土器片で、口縁部文様帯に入組三叉文が展開する。

１層上部南側に施される立石は幅60㎝、厚さ28㎝、高さ49㎝の墓標と推測できる。当遺構構築時、立石が１／３程度埋め込まれていたものと推測すると、土坑の深さは少なくとも55～60㎝程度はあったと思われる。また１層北側には10～30㎝程の礫が不規則に投げ込まれている。１・２層とも地山土を含み、埋め戻しの跡がうかがえる。

当遺構は、礫の検出状況が比較的まばらであるが、立石のように検出された礫の状況、形状等から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ117土坑［第19図、第８表］**

ＭＤ29グリッドにある。地山面精査中に礫を伴う黒褐色土の明瞭な略円形のプランを確認した。ＳＫＰ331と北東で切り合う。平面観察での新旧関係の判別は不可能だったため､半截後堆積状況から当遺構が新しいと位置付けた。

平面形は長軸93㎝、短軸88㎝の略円形で、長軸方向はＮ26°Ｅ、深さ21㎝、礫上部までの高さは31㎝である。

底面はほぼ平坦で固くしまり、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は単一層で黒褐色土を主体とする。坑底部から確認面上部にかけて大小様々な大きさの礫が雑然と重なる。

遺物の出土はない。

小規模であり、土坑墓・配石墓と判断し難いため、土坑とする。

**ＳＫ118土坑［第19図、第８表］**

ＭＣ29グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に、ぼんやりとした楕円形の黒褐色土を確認した。地山面まで掘り下げてプランを確認し、これをＳＫ118とした。ＳＫ327と南側で切り合い関係にある。切り合いの直上に中礫が有り、平面形での新旧関係の判別は不可能だったため、堆積状況から当遺構が古いと位置付けた。

平面形は長軸68㎝、短軸39㎝の方形に近い長楕円形で、長軸方向はＮ34°Ｗ、深さ８㎝である。

底面は固くしまり平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は単一層とした。

遺物の出土はない。

規模が比較的小さいため遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ123土坑（墓）［第19図、第８表］**

ＭＤ29グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ123とした。

平面形は長軸128㎝、短軸97㎝の不整な楕円形で、開口部にやや凹凸が見られる。長軸方向はＮ39°Ｅ、深さ29㎝である。

底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は単一層で、覆土中位と坑底部から礫を２点ずつ検出した。

遺物は縄文土器片21点、剥片が１点出土しているが、土器片のほとんどが粗製の小片である。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ124土坑［第20図、第８表］**

ＭＤ30グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中、ぼんやりとした黒色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ124とした。ＳＫ328と南西側で切り合う。堆積状況から当遺構が新しい。

平面形は長軸110㎝、短軸推定108㎝の不整な略円形で、長軸方向はＮ40.5°Ｗ、深さ16㎝である。

底面は平坦で固くしまり、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は単一層で黒色土を主体とし地山土が微量に混入する。

遺物の出土はない。

掘方が浅く、土坑墓とは判断し難い。

**ＳＫ126土坑［第19図、第８表］**

ＭＡ・ＭＢ31グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中、ぼんやりとした黒色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ126とした。

平面形は長軸73㎝、短軸67㎝の不整な略円形である。長軸方向はＮ87°Ｗ、深さ28㎝である。底面は丸底で、壁は南西側で緩やかに立ち上がる他はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は２層に分層される。１・２層とも地山粒を多量に含み基本的に埋め戻し土と考えられる。

小規模であり、性格の特定は困難である。

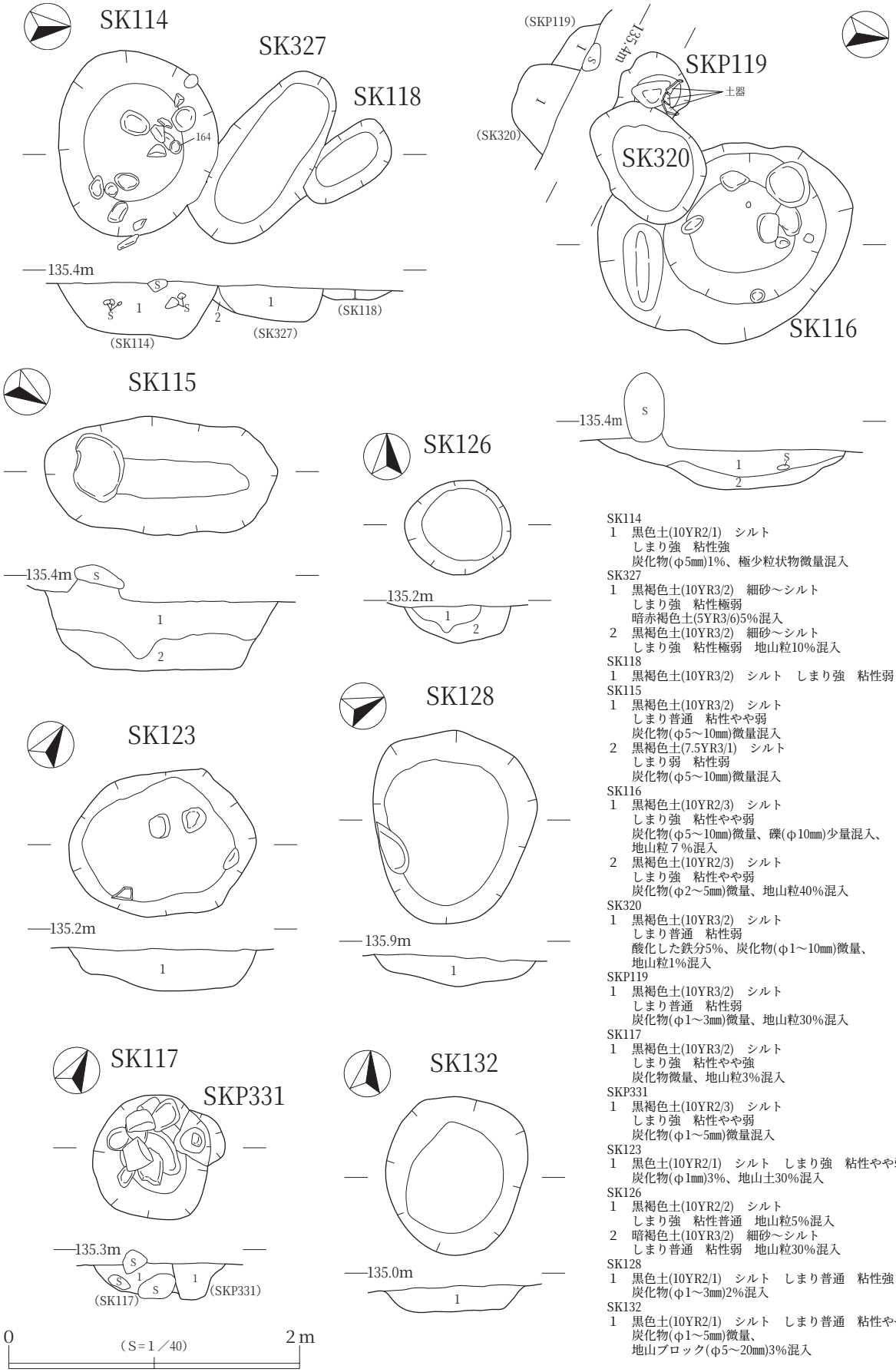
**ＳＫ128土坑（墓）［第19図、第８表］**

ＭＡ26グリッド（南西部捨て場中央）にある。地山直上を精査中、ぼんやりとした黒色土楕円形のプランを確認した。明瞭なプランが確認できなかったためサブトレンチを設定し、断面観察の結果底面及び壁の立ち上がりを認めＳＫ128とした。捨て場範囲にかかる遺構は上面でのプラン確定が困難であったため、本来はより深かったと想定される。

平面形は長軸132㎝、短軸114㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ64.5°Ｗ、深さ22㎝である。

底面は緩やかに波を打つ丸底で、壁はそのまま丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。南壁で大型の段丘礫層の自然礫が露出する。

覆土は黒色土の単一層で、下位から中位にかけて縄文土器小片51点が出土し、そのほとんどが粗製




SK114
1　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり強　粘性強
　炭化物(φ5㎜)1%、極少粒状物微量混入
SK327
1　黒褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト
　しまり強　粘性極弱
　暗赤褐色土(5YR3/6)5%混入
2　黒褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト
　しまり強　粘性極弱　地山粒10%混入
SK118
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまり強　粘性弱
SK115
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ5～10㎜)微量混入
2　黒褐色土(7.5YR3/1)　シルト
　しまり弱　粘性弱
　炭化物(φ5～10㎜)微量混入
SK116
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ5～10㎜)微量、礫(φ10㎜)少量混入、
　地山粒７%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ2～5㎜)微量、地山粒40%混入
SK320
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通　粘性弱
　酸化した鉄分5%、炭化物(φ1～10㎜)微量、
　地山粒1%混入
SKP119
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通　粘性弱
　炭化物(φ1～3㎜)微量、地山粒30%混入
SK117
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物微量、地山粒3%混入
SKP331
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)微量混入
SK123
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ1㎜)3%、地山土30%混入
SK126
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性普通　地山粒5%混入
2　暗褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト
　しまり普通　粘性弱　地山粒30%混入
SK128
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性強
　炭化物(φ1～3㎜)2%混入
SK132
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)微量、
　地山ブロック(φ5～20㎜)3%混入

**第19図　ＳＫ114・116配石墓、ＳＫ115・123・128・327土坑（墓）、ＳＫ117・118・126・132・320土坑、ＳＫＰ119・331柱穴様ピット**

土器片である。赤色塗彩の土器１点が出土。剥片９点が出土している。第51図48は浅鉢形土器片で、沈線による直線・曲線文が施される。

遺構の検出位置、遺構の形状から土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ131土坑［第20図、第８表］**

ＭＤ32グリッドにある。地山直上精査中､重複する黒褐色土楕円形のプランを確認した。ＳＫ363と南西で、ＳＫＰ364と南側で切り合う。堆積状況からＳＫ363より古く、ＳＫＰ364より新しい。

平面形は長軸推定90㎝、短軸78㎝のずんぐりした方形に近い楕円形で、長軸方向Ｎ35°Ｅ、深さ14㎝である。

底面は丸底でそのまま緩やかに壁となって立ち上がる。覆土は単一層である。重複するＳＫ363･ＳＫＰ364より黒みが強く、酸化鉄・炭化物が微量混入し、地山粒を中量含む。

出土遺物は摩滅した粗製縄文土器小片が15点、剥片５点である。

小規模であり、性格の特定は困難である。

**ＳＫ132土坑［第19図、第８表］**

ＭＤ32グリッドにある。地山直上精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ132とした。

平面形は長軸108㎝、短軸96㎝のずんぐりした楕円形で、長軸方向はＮ４°Ｗ、深さ20㎝である。

底面は平坦で、壁は緩やかかつ直線的に立ち上がる。覆土は地山土塊を含む黒色土を主体とする単一層であり、縄文土器小片６点出土した。

小規模であり、性格の特定は困難である。

**ＳＫ133土坑［第20図、第８表］**

ＭＤ32グリッドにある。Ⅶ層中を精査中、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを確認し、明瞭なプランを得るためにさらに周囲を掘り下げ、これをＳＫ133とした。ＳＫ351と南西側で切り合う。堆積状況により当遺構が古い。

平面形は長軸205㎝､短軸160㎝のずんぐりとした楕円形で､長軸方向はＮ47°Ｅ､深さ65㎝である｡底面は長軸方向南西側に落ち込み、段丘礫層の自然礫が露出し、かなり凹凸が激しい。壁はやや急な立ち上がりを見せるが、長軸方向中位から段をなし、すり鉢状に開いていく。

覆土は４層に分層される。２～３層土に含まれる地山粒は周囲の地山土に類似している。１層土に混入する地山土塊は周囲の地山土より細砂を多く含み、２～３層土と混入の状態が明らかに異なるため、当遺構外から運ばれてきた埋め戻し土の可能性も推測できる。

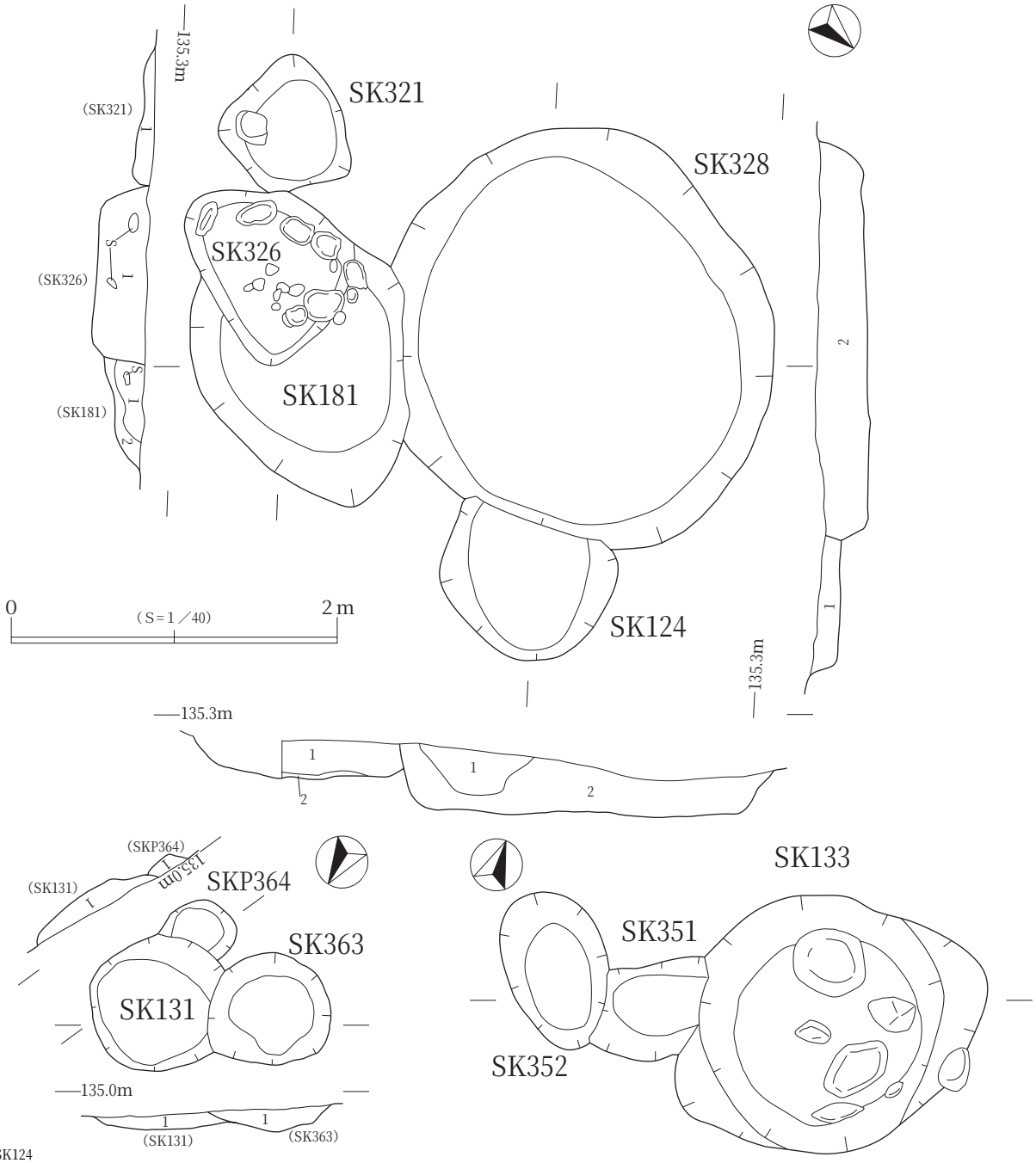
当遺構からの出土遺物は、粗製の縄文土器小片が13点、剥片が１点出土したのみである。

遺構の規模から土坑墓である可能性もあるが、形状、特に底面から判断し土坑とした。

**ＳＫ142土坑［第21図、第８表］**

ＭＢ31グリッドにある。地山直上を精査中にプランを確認、ＳＫ142とした。

平面形は長軸92㎝、短軸58㎝の楕円形で、長軸方向はＮ59°Ｅ、深さ16㎝である。底面はほぼ平坦




SK124
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性強
　黒褐色土(10YR3/1)20%、地山土微量混入
SK181
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ5～10㎜)微量、地山粒5%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり普通　粘性弱　地山粒30%混入
SK321
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり強　粘性やや強
SK326
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　炭化物(φ1～5㎜)5%、
　地山ブロック(φ50～100㎜)10%混入
SK328
1　黒褐色土(7.5YR3/2)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱
　暗褐色土(10YR3/3)5%、
　炭化物(φ2～5㎜)微量混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト
　しまり強　粘性やや弱
　褐色土(10YR4/4)5%、極少細砂多量混入

SK133
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性強
　酸化した鉄分微量、地山ブロック7%混入
2　黒色土(7.5YR2/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ5～10㎜)少量、地山粒3%混入
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト　しまり強　粘性弱
　炭化物(φ1～3㎜)３%、酸化した鉄分微量混入
4　黒褐色土(5YR2/1)　シルト　しまりやや強
　粘性やや弱　炭化物(φ1～5㎜)5%、
　酸化した鉄分微量、地山粒5%混入
SK351
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性強
　地山粒微量混入
SK352
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性強
　酸化した鉄分微量、撹乱土20%、地山粒10%混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性強
　酸化した鉄分微量、地山粒30%混入

SK131
1　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～3㎜)1%、酸化した鉄分微量、
　地山土粒(φ10～20㎜)10%混入
SK363
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通
　粘性やや弱　地山粒(φ20～30㎜)5%混入
SKP364
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ1～3㎜)微量、酸化した鉄分微量、
　極少白色粒状物少量混入

**第20図　ＳＫ326配石墓、ＳＫ181土坑（墓）、ＳＫ124・131・133・321・328・351・352・363土坑、ＳＫＰ364柱穴様ピット**

で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は単一層である。

当遺構から遺物の出土はない。

小規模であり、性格の特定は困難である。

**ＳＫ150土坑（墓）［第21図、第８表、図版12］**

ＭＤ31グリッドにある。地山直上を精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認、ＳＫ150とした。

平面形は長軸152㎝、短軸132㎝のやや不整なずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ49°Ｅ、深さ59㎝である。

底面は平坦だが、長軸方向南西側に15㎝程度の円礫、亜角礫が敷き詰められたように10数個集中する。壁は一部段丘礫層の自然礫が露出するが、概ねほぼ垂直に立ち上がり、南西部上位で段をなし開口部に向けて開いた形となる。

覆土は３層に分層される。１～２層は地山土粒・塊を含む人為的な埋め戻し土と考えられる。３層黒色土は水分をかなり多く含み、わずかに青みがかっている。

遺物の出土はない。

遺構の検出位置、遺構の規模・形状から土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ161土坑（墓）［第21図、第８表］**

ＭＢ・ＭＣ26グリッド（南西部捨て場中央西部寄り）にある。地山直上精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認した。捨て場範囲にかかる遺構は上面でのプラン確定が困難であったため、本来はより深かったと想定される。

平面形は長軸146㎝、短軸90㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ38°Ｗ、深さ28㎝である。

底面は鍋底状で東側に径30㎝程のピット状の掘り込みを有す。壁は坑底部からそのまま緩やかに丸みを帯びて立ち上がる。覆土は３層に分層される。

出土遺物は縄文土器小片24点、剥片３点であり、土器片のほとんどが粗製土器片であり、ピット状掘り込み３層土からの出土が多い。

遺構の検出位置、規模等から土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ163土坑（墓）［第21図、第８表、図版12］**

ＭＣ26グリッド（南西部捨て場東端）にある。Ⅲ層土を精査中、一箇所に集中する数個の礫を確認。さらに周囲を掘り下げたところ、黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸144㎝、短軸134㎝の不整な略円形で、長軸方向はＮ84°Ｅ、深さ74㎝である。

底面・壁ともに段丘礫層の自然礫が露出し凹凸が激しく、壁はやや急に立ち上がる。覆土は単一層としたが、やや明るめの黒褐色土が混入する。若干ではあるが地山粒を含むことから埋め戻し土と考えられる。

出土遺物は、縄文土器片140点、石槍１点、剥片類13点で、比較的多数出土した。ほとんどが晩期に比定される粗製土器片であるが、中期に比定される幅広の磨消縄文の施された土器片も数点出土した。

確認面の礫が当遺構に伴うか否かは判断が困難であり、遺構の検出位置、規模・形状から土坑墓と

して位置付けておく。

**ＳＫ165土坑［第21図、第８表］**

ＭＣ27グリッドにある。Ⅲ層土を精査中、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ165とした。

平面形は長軸83㎝、短軸58㎝の楕円形で、長軸方向がＮ72.5°Ｅ、深さ13㎝である。

覆土は２層に分層される。地山粒を多量に含む、埋め戻し土と考えられる。

遺物の出土がなく、規模も小さいことから性格の特定は困難である。直上にはＳＱ47配石遺構がある。両者の関係を推測すると、規模の割には掘り込みが深くなるため、同一遺構として捉えることは困難であろう。

**ＳＫ168土坑（墓）［第21図、第８表］**

ＭＡ27・28グリッド（南西部捨て場北側）にある。地山面精査中にぼんやりとした楕円形のプランを確認したが、明瞭なプランを得られないまま西側で重複するＳＫ169を完掘した。ＳＫ169東壁に当遺構の底面及び立ち上がりを認め、これをＳＫ168とした。ＳＫ169との新旧関係は平面・断面観察双方で明らかにできなかったが、重複する部分の覆土がＳＫ169のものであるため、当遺構が古く後にＳＫ169が掘削されたものと考えられる。

西端がＳＫ169に切られるため、平面形は長軸145㎝、短軸推定87㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ７°Ｗ、深さ32㎝である。

底面は中心部で若干盛り上がりを呈すが概ね平坦で、北西端に40㎝程の礫が置かれ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は３層に分層される。各層とも地山土粒・塊が混入し、埋め戻し土と考えられる。

１層上位からは縄文土器片41点、剥片５点が出土しているが、１層は捨て場の遺物包含層に類似しており、捨て場に伴う遺物である可能性もある。

検出位置、規模・形状から土坑墓の可能性が高い。

**ＳＫ169土坑（墓）［第21図、第８表、図版12］**

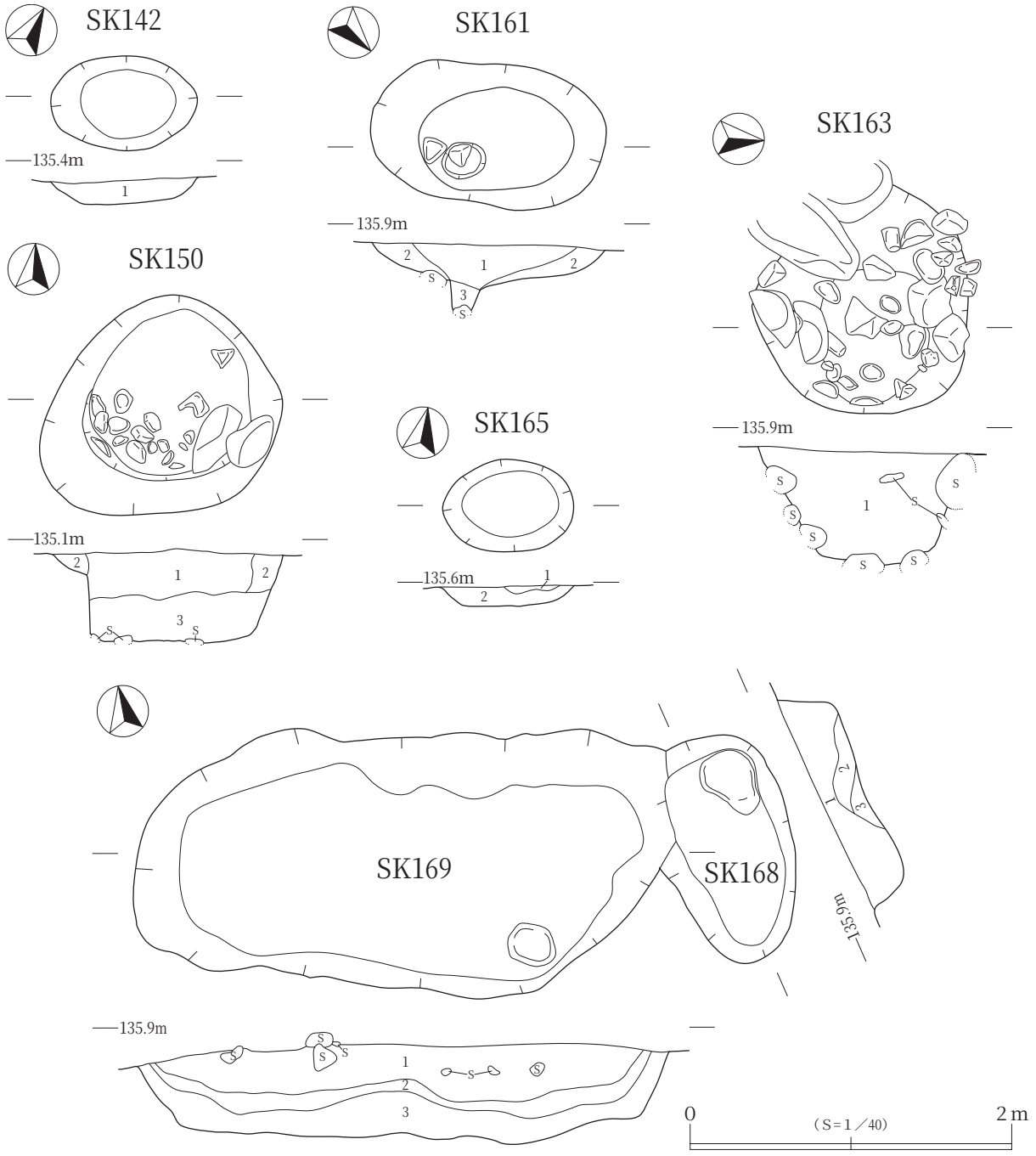
ＭＡ27・28、ＭＢ28グリッド（南西部捨て場北側）にある。地山面精査中、土器片を大量に含む大型の黒褐色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ169とした。

平面形は長軸332㎝、短軸161㎝の不整な長楕円形であり、当遺跡最大級の土坑である。長軸方向はＮ81.5°Ｗ、深さ63㎝、礫上部までの高さは70㎝である。

底面は全体的に波打ち、根穴による凹凸が激しいが、概ね平坦である。南東端から径30㎝程の礫を１点検出した。壁は南側でほぼ垂直に立ち上がり、北側でやや緩やかに立ち上がる。

覆土は３層に分層される。１層は捨て場の遺物包含層に類似しており、１層上位には直上にある捨て場と関連する可能性のある遺物が大量に混入する。２・３層は漸位的に堆積する。２・３層ともに地山粒を大量に含み、埋め戻し土と考えられる。

出土遺物は非常に多く、土器は重量にして約16kgを計測し、石器類は石鏃４点、石匙１点、磨製石




SK142
1　黒褐色土(10YR3/2)　細砂～シルト
　しまりやや弱　粘性やや弱
　地山ブロック5%混入

SK150
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり弱　粘性強
　炭化物(φ1～5㎜)微量、地山粒微量混入
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり弱　粘性強
　炭化物(φ1～5㎜)微量、地山土15%混入
3　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり弱　粘性弱
　酸化した鉄分微量混入

SK161
1　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり強　粘性強
　黒褐色土(10YR3/2)30%、炭化物(φ5㎜)微量、
　地山ブロック10%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり極強　粘性強
　地山粒50%混入
3　褐色土(10YR4/4)　細砂～シルト
　しまり極強　粘性やや弱
　地山粒20%混入

SK163
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり弱　粘性やや強
　黒褐色土(10YR3/2)15%、炭化物(φ2～5㎜)微量、
　地山粒5%混入

SK165
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　地山粒20%混入

SK168
1　黒色土(10YR2/1)　細砂～シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ5～10㎜)5%、
　地山ブロック(φ10㎜)10%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　細砂～シルト
　しまり強　粘性やや弱
3　暗褐色土(10YR3/4)　細砂～シルト
　しまり強　粘性やや弱
　地山粒30%混入

SK169
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり普通　粘性極強
　炭化物(φ5～10㎜)微量、土器片多量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト
　しまりやや強　粘性強
　炭化物(φ5～10㎜)微量、地山粒20%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山粒40%混入

**第21図　ＳＫ150・161・163・168・169土坑（墓）、ＳＫ142・165土坑**

斧１点、磨石１点、石核・二次加工のある剥片・チップ・剥片523点に及ぶ。精製土器の出土も多く、第52図67～70のように完形に復元される土器も多数出土した。

周辺の土坑墓・配石墓の規模との比較でも例外の部類に入るが、検出位置、その形状から土坑墓の可能性が高いと推測される。

**ＳＫ174土坑［第22図、第８表］**

ＭＥ29グリッドにある。Ⅶ層精査中、中礫の集中を検出し、さらに周囲を掘り下げたところ黒褐色土楕円形のプランを確認した。ＳＫ334と南東端で切り合う。堆積状況から当遺構が新しい。

平面形は長軸114㎝、短軸90㎝のやや不整なずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ59°Ｅ、深さ28㎝である。

底面は中央部に径35㎝程の扁平な自然礫がある他は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。隣接するＳＫ334覆土下位で地山面との区別がつきにくかったため、掘りすぎにより一部を失っている。

覆土は単一層とした。覆土中央部中位に亜角礫が1点､南西端覆土中位から上面にかけて礫の集中が認められる。

出土遺物は粗製縄文土器片12点、剥片が２点である。

規模・形状からは配石墓・土坑墓とは判断し難い。

**ＳＫ175土坑［第22図、第８表］**

ＭＥ29グリッドにある。検出状況はＳＫ174と同様である。ＳＫ334と北西で切り合う。堆積状況から当遺構が古い。

ＳＫ334に切られるため平面形は長軸146㎝、短軸推定76㎝の長楕円形で、長軸方向はＮ40°Ｅ、深さ31㎝、礫上部までの高さは34㎝である。

底面は段丘礫層の自然礫が若干露出するがほぼ平坦で、壁は急な立ち上がりを見せる。

覆土は単一層とした。覆土中位には径５～15㎜程の礫が多量に混入する。周囲一帯の段丘礫層には小礫・中礫が含有しており、前記の中礫は土坑掘削時の埋め戻し土と思われる。

遺物の出土はない。

礫の出土状況からは一応配石墓と捉えられなくもないが、その他の条件から判断すれば土坑としておく。

**ＳＫ177土坑［第22図、第８表］**

ＭＤ30グリッドにある。地山面精査中、黒褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ177とした。

平面形は長軸98㎝、短軸83㎝のずんぐりとした方形に近い楕円形で、長軸方向はＮ9.5°Ｅ、深さ30㎝である。

底面は緩やかに波打ちながら南西側に落ち込み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は単一層とした。地山土が混入することから、土坑掘削後すぐに埋め戻したものと考えられる。

遺物の出土はない。

**ＳＫ181土坑（墓）［第20図、第８表］**

ＭＤ29・30グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを確認し、ＳＫＰ181としたが、その後地山面まで掘り下げたところ楕円形プランの広がりを検出し、これをＳＫ181として登録した。ＳＫ326と南側で、ＳＫ328と北西側で切り合う。堆積状況からＳＫ326・ＳＫ328両遺構より古い。

ＳＫ326により１／３程切られるので、その全容は定かでないが次のように推測する。平面形は長軸推定180㎝、短軸推定142㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ26.5°Ｅ、深さ24㎝である。

底面はやや波打つがおおよそ平坦で、壁は緩やかに丸みを帯びて立ち上がる。

覆土は２層に分層される。

１層より、赤色塗彩の土器を含む縄文土器小片52点、剥片６点が出土している。２層土は地山粒を多量に含み、埋め戻しの痕跡がうかがえる。

当遺構はその規模・形態から土坑墓の可能性が高い。

**ＳＫ203土坑［第22図、第８表］**

ＭＤ27グリッドにある。Ⅲ層土中の巨礫の礫群を取り外し、地山面まで掘り下げたところ黒褐色土楕円形のプランを確認した。ＳＫ400と北側で切り合う。堆積状況から当遺構が古い。

平面形は長軸推定142㎝、短軸117㎝のずんぐりとした方形に近い楕円形と思われ、長軸方向はＮ12.5°Ｗ、深さ20㎝、礫上部までの高さは26㎝である。

底面は比較的平坦で、壁は北西部に自然礫が露出する他はやや緩やかに立ち上がる。覆土は単一層とした。地山粒を少量含み、埋め戻し土である。

遺物は摩滅した縄文土器片が７点出土したのみである。

**ＳＫ212土坑（墓）［第22図、第８表］**

ＭＤ26グリッドにある。Ⅲ層土中の巨礫の礫群を取り外し、地山面まで掘り下げたところ黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸136㎝、短軸102㎝の楕円形で、長軸方向はＮ68°Ｗ、深さ80㎝である。

底面は丸みを帯びながら西側に落ち込んでいく。壁は西側で緩やかに立ち上がるが、その他は自然礫が露出しほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は３層に分層される。１・３層に径20～50㎜の礫が混入する。地山粒の混入が認められ、連続した埋め戻し土と思われる。覆土上位から上面にかけて中～大礫を検出したが、特に規則性等は認められなかった。

遺物は粗製縄文土器片38点が出土した。

規模・形態から土坑墓の可能性が高い。

**ＳＫ320土坑［第19図、第９表］**

ＭＣ・ＭＤ29グリッドにある。ＳＫ116及びＳＫＰ119確認時、地山面を精査していたところ当遺構

を確認しＳＫ320とした。ＳＫ116と北東で、ＳＫＰ119と西側で切り合う。ＳＫ116とは平面観察により当遺構が新しいと判断し、ＳＫＰ119とは覆土堆積状況から当遺構が新しいと位置付けた。

平面形は長軸86㎝、短軸66㎝のやや不整な楕円形で、長軸方向はＮ37°Ｅ、深さ37㎝である。

底面はほぼ平坦で極めて固くしまる。壁は南西主軸方向で緩やかに立ち上がる他はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は単一層で黒褐色土を主体とするが、極わずかに地山粒と炭化物、酸化した鉄分を含む。

小規模であり、遺物の出土が無いため、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ321土坑［第20図、第７表］**

ＭＤ29グリッドにある。ＳＫ181確認面を精査中、重複する黒褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ321とした。ＳＫ326と東側で接する。

平面形は長軸86㎝、短軸84㎝の凹凸の激しい不整方形で、長軸方向はＮ58°Ｅ、深さ13㎝である。

底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は単一層とした。

遺物は朱塗りの小片を含む縄文土器片が７点出土している。

確認面が地山直上だったため底面しか残存しなかったものと思われる。

小規模で掘方も浅く、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ326配石墓［第20図、第９表］**

ＭＤ29グリッドにある。ＳＫ181確認面を精査中、重複する黒褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ326とした。ＳＫ181と北東側で切り合い、堆積状況から当遺構が新しいものとした。西側ではＳＫ321と接する。

平面形は長軸推定115㎝、短軸推定95㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ１°Ｗ、深さ32㎝である。

底面は固くしまり平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は単一層とした。覆土中位より15～20㎝程の半円状に並ぶ礫が検出された。雑然と投げ込まれたものとするよりは、意図的に並べて置かれたものと推測される。

遺物の出土はない。

礫の検出状況、規模・形態から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ327土坑（墓）［第19図、第９表］**

ＭＣ29グリッドにある。ＳＫ114・ＳＫ118確認面を精査していたところ、南側に黒褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ327とした。ＳＫ114と南側で、ＳＫ118と北側で切り合う。検出段階での新旧関係の判別は不可能だったため、半截後堆積状況から判断し、当遺構はＳＫ114より古くＳＫ118より新しいものとした。

平面形は長軸134㎝、短軸68㎝の方形に近い長楕円形で、長軸方向はＮ55.5°Ｗ、深さ26㎝である。

底面は非常に固くしまりほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は２層に分層される。隣接するＳＫ118と比べると赤みが強く、暗赤褐色土を若干含む。またＳ

Ｋ114に切られる南側２層は地山粒を含み、埋め戻しの痕跡がうかがえる。

遺構確認時ＳＫ118と切り合う直上に径50㎝程の礫が検出されている。当遺構の西0.5m程に位置するＳＫ116に伴う立石に規模形態が類似していること、また２遺構にまたがって不自然に礫が置かれていることから、前記の礫は当遺構に伴う立石が外的要因を受け、倒れたものと推測することが可能である。

遺物の出土はない。

規模・形態から土坑墓である可能性が高いが、立石様の礫を伴う配石墓の可能性が残される。

**ＳＫ328土坑［第20図、第９表、図版12］**

ＭＤ29・30グリッドにある。ＳＫ181・ＳＫ124付近を精査中に、径２m以上あるぼんやりとした暗褐色土円形のプランを確認した。地山土と類似していたため、さらに掘り下げて明確なプランを確定しこれをＳＫ328とした。ＳＫ124と北東側で、ＳＫ181と東側で切り合う。堆積状況からＳＫ124より古く、ＳＫ181より新しい。

平面形は長軸260㎝、短軸推定232㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ22°Ｅ、深さ41㎝である。

底面は平坦で粗砂を主体とし固くしまる。壁はやや急な立ち上がりをみせる。

覆土は２層に分層される。２層土は極小の細砂を多量に含み、周囲の地山土と類似していることから埋め戻し土と推測する。

プラン確認当初から竪穴住居の可能性も含めて精査したが、柱穴、炉、焼土、遺物がまったく検出されず、現状では遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ329配石墓［第22図、第９表］**

ＭＡ27グリッド（南西部捨て場中央）にある。Ⅲ層中を精査中、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを認めた。明瞭なプランが得られなかったので、南北方向にトレンチを設定し断面観察により坑底部及び壁の立ち上がりを確認しＳＫ329とした。捨て場範囲にかかる遺構は上面でのプラン確定が困難であったため、本来はより深かったと想定される。

平面形は長軸168㎝、短軸推定126㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ21.5°Ｗ、深さ30㎝である。南西に巨大な自然礫があるためゆがんだ形となる。

底面は段丘礫層の自然礫がかなり露出しているため凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は地山土の検出状況から３層に分層される。１層中位から10～15㎝程の礫が雑然と検出された。２・３層は地山粒の混入量に差があるが基本的に同時に埋め戻したものと推測する。

遺物は覆土上位以上で出土しており、縄文土器片224点、チップ２点、剥片14点、石核１点がある。完形に近い土器（第54図99～102）も多数出土した。ほとんどが粗製土器片であるが、赤色塗彩の土器片を含む精製土器片の出土も多い。

規模・形態、礫の出土状況から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ334土坑［第22図、第９表］**

ＭＥ29グリッドにある。ＳＫ174・175の明瞭なプランを得るため、地山面まで掘り下げたところ両遺構と重複する黒褐色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ334とした。ＳＫ174と北西で、ＳＫ175と南東で切り合う。堆積状況からＳＫ174より古く、ＳＫ175より新しい。

両側面で切り合っているため全体形は不明だが、次のように推定できる。平面形は長軸122㎝、短軸推定84㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ41.5°Ｅ、深さ18㎝、礫上部までの高さは27㎝である。

底面はやや丸みを帯びており、砂礫が多く非常に固くしまる。壁は比較的緩やかに立ち上がる。

覆土は単一層とした。覆土上位から中位にかけて径35㎝程の礫が４点、円形の中礫を２点出土している。いずれも土坑の北東側に集中する。この付近から赤色塗彩の土器片１点を含む縄文土器片４点が出土した。

形状から遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ351土坑［第20図、第９表］**

ＭＤ・ＭＥ32グリッドにある。ＳＫ133のプラン確定中、Ⅲ層土中南西に重複する楕円形のプランを確認しこれをＳＫ351とした。ＳＫ133と北東で、ＳＫ352と西側で切り合う。堆積状況から、ＳＫ133より新しくＳＫ352より古い。

長軸方向両端が重複し、覆土がⅦ層土と類似して坑全体の形状が捉えにくい。平面形は以下のように推測される。長軸推定90㎝、短軸60㎝の不整な楕円形と考えられ、長軸方向はＮ63.5°Ｅ、深さ15㎝である。

坑底部及び壁面もⅦ層土中であり、覆土と底面・壁の区別がつきにくく全体的に掘り過ぎている。底面は丸みを帯びた鍋底状で、丸みを帯びたまま緩やかに立ち上がっていたものと考えられる。

覆土は地山粒を含む単一層である。

遺物の出土はない。

底面のみの残存状況であり、遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ352土坑［第20図、第９表］**

ＭＥ32グリッドにある。確認状況はＳＫ351と同様である。ＳＫ351と東側で切り合い、当遺構が新しい。

平面形は長軸99㎝、短軸64㎝の楕円形で、長軸方向はＮ40.5°Ｗ、深さ23㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。覆土は地山土の混入量の差から２層に分層される。１層土上位は撹乱を受けている。

遺物の出土はない。

底面のみの残存状況であり、当遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ354土坑［第22図、第９表］**

ＭＥ31グリッドにある。地山面精査中に、ぼんやりとした黒褐色土略円形のプランを確認した。

平面形は長軸85㎝、短軸83㎝の略円形で、長軸方向はＮ52°Ｗ、深さ32㎝である。

底面はほぼ平坦で固くしまり、壁は西側に自然礫があるが、その他はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は単一層とした。中位に大礫が２点あるが人為的配置とは認めがたく、埋め戻し時に混入したものと思われる。

遺物の出土はない。

規模・形状から判断して土坑とする。

**ＳＫ355土坑［第22図、第９表］**

ＭＥ32グリッドにある。地山面精査中にプランを確認し、ＳＫ355とした。

平面形は長軸102㎝、短軸80㎝のずんぐりとしてやや不整な楕円形で、長軸方向はN4.5°W、深さ21㎝である。Ⅶ層土と覆土が類似していたため確認面が低くなったが、本来はもう少し深い土坑だった可能性が高い。

底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は炭化物と地山粒の混入量から２層に分層される。

遺物の出土はない。

規模・形状から土坑とする。

**ＳＫ363土坑［第20図、第９表］**

ＭＤ32グリッドにある。確認状況はＳＫ131と同様である。ＳＫ131と北東で切り合う。堆積状況から当遺構が新しい。

開口部は長軸推定85㎝、短軸68㎝のずんぐりとした楕円形であるが、下端は凹凸のある不整形である。長軸方向はN53.5°Ｅで、深さ18㎝である。

底面は丸底でそのまま丸みを帯び壁となって立ち上がる。

覆土は単一層とした。

土坑南西部上位から底面にかけて赤色塗彩の土器片１点を含む縄文土器小片が14点出土している。

規模・形状から土坑とする。

**ＳＫ369土坑（墓）［第22図、第９表］**

ＭＥ・ＭＦ32グリッドにある。地山直上を精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸146㎝、短軸123㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN68.5°W、深さ37㎝である。

底面は鍋底状で、壁はそのまま丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。

覆土は５層に分層される。１層は自然堆積土と思われるが、２～５層土は地山土を含むことから土坑掘削時の埋め戻し土と考えられる。

遺物の出土はない。

遺構の検出位置、規模・形状から土坑墓である可能性が高い。

**ＳＫ370土坑［第22図、第９表、図版12］**

ＭＧ32グリッドにある。地山面精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸103㎝、短軸99㎝の不整略円形で、長軸方向はＮ73°Ｗ、深さ33㎝である。

底面は南半で平坦だが北側に落ち込みをみせる。壁は南東部で垂直に立ち上がるが、その他はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は２層に分層される。２層土中に中礫２点と極小の砂礫が混入する。

遺物の出土はない。

規模・形状から詳細な性格は不明である。

**ＳＫ371土坑（墓）［第23図、第９表］**

ＭＧ32グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを確認した。覆土とⅦ層土が類似していたため周辺を掘り下げ、明瞭なプランを得た段階でＳＫ371とした。

平面形は長軸112㎝、短軸96㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ72°Ｗ、深さ45㎝である。

底面は緩やかに波を打ち、壁は南東で緩やかに立ち上がる他はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は単一層とした。地山土を多量に含む埋め戻し土である。

覆土上位からは石鏃が１点出土するが、その他の遺物は認められなかった。

底面・壁面ともにしっかりしており、若干小規模であるが土坑墓となる可能性が高い。

**ＳＫ374土坑［第23図、第９表］**

ＭＧ32・33グリッドにある。ＳＱ373精査中、Ⅶ層中でぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを確認し、ＳＫ374とした。

平面形は長軸100㎝、短軸92㎝の略円形で、長軸方向はＮ72.5°Ｗ、深さ30㎝である。

底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。覆土は単一層とした。覆土上位で撹乱を受ける。地山粒を少量含む埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の判断は困難である。

**ＳＫ376土坑（墓）［第23図、第９表、図版12］**

ＭＦ33グリッドにある。地山精査中に重複する黒褐色土楕円形のプランを確認し、西側をＳＫ376とした。ＳＫ384と東側で切り合う。堆積状況から当遺構が新しい。

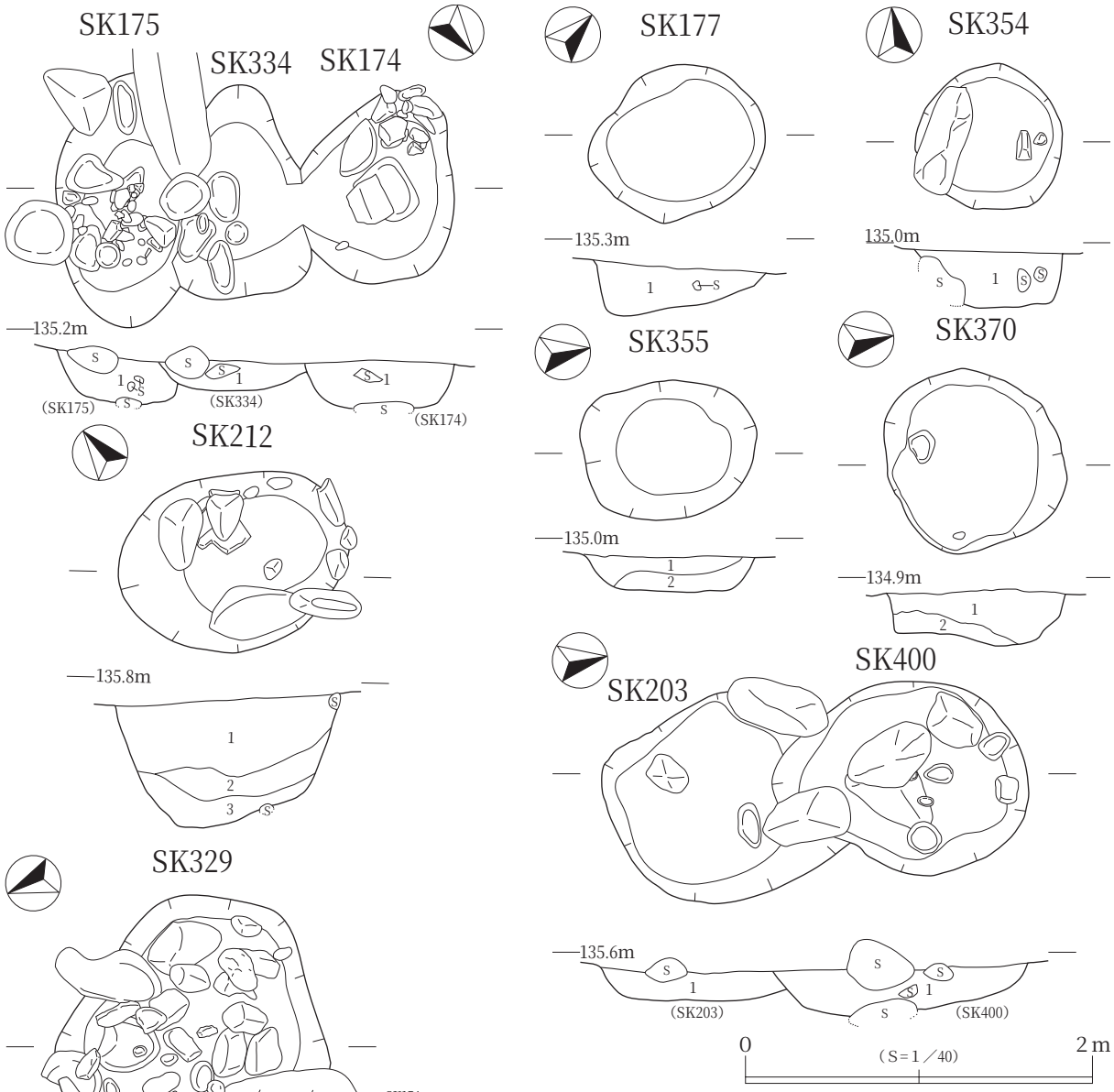
平面形は長軸推定135㎝、短軸114㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ75°Ｗ、深さ33㎝である。

底面は平坦で、水はけの悪い地区にあるためしまりが弱い。壁はまっすぐ緩やかに立ち上がる。

覆土は地山土の混入量の差から３層に分層される。土坑掘削時の埋め戻し土と考えられる。

遺物の出土はない。

切り合っているため、若干いびつではあるが規模から土坑墓である可能性が高い。




SK174
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性弱
　炭化物(φ5～10㎜)微量、酸化した鉄分微量、地山粒10%混入
SK175
1　暗褐色土(10YR3/4)　細砂～シルト　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物(φ1～3㎜)微量、酸化した鉄分微量、礫(φ5～15㎜)多量
　地山粒15%混入
SK334
1　暗褐色土(10YR3/3)　細砂～シルト　しまりやや強　粘性弱
　酸化した鉄分微量、中礫多量、地山粒30%混入
SK177
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまり強　粘性弱
　地山土多量混入
SK329
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性強
　炭化物(φ2㎜)1%、地山粒3%、土器片多量混入
2　黒色土(10YR2/1)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～2㎜)1%、地山粒50%混入
3　黒色土(10YR2/1)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～2㎜)1%、地山粒60%混入
SK354
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通　粘性やや強
　炭化物(φ1～10㎜)微量、酸化した鉄分微量、
　地山粒(φ1～5㎜)2%混入
SK212
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり弱　粘性やや弱
　炭化物(φ1～10㎜)5%、小礫(φ20～50㎜)若干混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり弱　粘性やや弱
　炭化物(φ1～3㎜)3%、地山粒5%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト　しまり弱　粘性弱
　礫(φ20～30㎜)多量、地山粒30%混入
SK203
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ1～3㎜)微量、地山粒7%混入
SK400
1　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ2～5㎜)微量、地山粒5%混入

SK355
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性強
　炭化物(φ1～3㎜)3%、地山粒5%混入
2　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　しまり強　粘性強
　地山粒７%混入
SK369
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　炭化物(φ1～3㎜)3%混入
2　黒色土(10YR2/1)　細砂～シルト
　しまりやや強い　粘性やや弱い
　炭化物(φ1㎜)1%、地山粒3%混入
3　黒褐色土(10YR1.7/1)　細砂～シルト
　しまり強　粘性普通　炭化物(φ1～3㎜)3%、
　地山ブロック(φ50㎜)1%混入
4　黒褐色土(2.5YR3/2)　細砂
　しまり普通　粘性普通
　３層土10%混入
5　黒褐色土(10YR2/1)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　炭化物(φ3～5㎜)1%、地山粒10%混入
SK370
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり極強　粘性やや強
　炭化物(φ1～2㎜)微量、酸化した鉄分少量、
　地山土5%混入
2　黒褐色土(10YR3/1)　シルト
　しまり弱　粘性やや弱
　酸化した鉄分微量、極少の砂礫少量、地山土5%混入

**第22図　ＳＫ329配石墓、ＳＫ212・369土坑(墓)、ＳＫ174・175・177・203・334・354・355・370・400土坑**

**ＳＫ377土坑［第23図、第９表］**

ＭＦ33グリッドにある。地山精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ377とした。

平面形は長軸90㎝、短軸78㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ44°Ｅ、深さ16㎝である。覆土がⅦ層土と酷似していたため地山面での確認となったが、本来はもう少し深い土坑だったと思われる。

底面は平坦であり、壁はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は単一層で、地山土塊を含む土坑掘削時の埋め戻し土と思われる。

遺物の出土はない。

小規模で、上部が削平されているため遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ381土坑［第23図、第９表］**

ＭＧ・ＭＨ32グリッドにある。地山精査中に複数が重複するプランを確認し南端に位置する当遺構をＳＫ381とした。北西側でＳＫ385と、北側でＳＫ521と切り合う。堆積状況からＳＫ385より新しく、ＳＫ521との新旧関係は不明である。

平面形は長軸114㎝、短軸80㎝の楕円形である。長軸方向はＮ17.5°Ｗ、深さ24㎝、礫上部までの高さは29㎝である。

底面はほぼ平坦だが、根穴による凹凸が激しく、壁はやや急に立ち上がる。覆土は単一層で、地山粒を少量含む埋め戻し土である。覆土中央部中位から上面にかけて径20～30㎝程の礫がまとまって配される。

遺物の出土はない。

礫を検出したが、その在り方、遺構自体の規模の小ささから配石墓・土坑墓とするには根拠に乏しい。

**ＳＫ383土坑［第23図、第９表］**

ＭＦ32グリッドにある。Ⅶ層中を精査中、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを検出したが、明瞭なプランを得るため周囲を掘り下げ、地山直上でＳＫ383とした。

平面形は長軸66㎝、短軸58㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ43°Ｗ、深さ17㎝である。底面は鍋底状で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は地山土塊の混入する単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

底面がわずかに残存するのみであり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ384土坑（墓）［第23図、第10表、図版12］**

ＭＥ・ＭＦ33グリッドにある。検出状況はＳＫ376と同様である。ＳＫ376と西側で切り合い、堆積状況から当遺構が古い。

平面形は長軸116㎝、短軸推定110㎝の略円形で、長軸方向Ｎ13°Ｗ、深さ41㎝である。

底面はしまりが弱く平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

覆土は単一層とした。地山粒が微量混入する埋め戻し土で、覆土中位から大礫が３点不規則に検出された。

遺物は覆土中位から下位にかけて、剥片が４点、赤色塗彩の土器片２点を含む縄文土器片35点が出土している。

小規模ではあるが、掘方形状から土坑墓である可能性がある。

**ＳＫ385土坑（墓）［第23図、第10表］**

ＭＧ・ＭＨ32グリッドにある。検出状況はＳＫ381と同様である。ＳＫ381と南東側で、ＳＫ393と北側で、ＳＫ521と東側で、切り合う。堆積状況からＳＫ381・ＳＫ393より古い。ＳＫ521との新旧関係は不明である。

平面形は長軸推定130㎝、短軸推定96㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ43°Ｗ、深さ43㎝である。

底面は南西方向にやや落ち込み、壁は緩やかに立ち上がっていたと考えられる。

覆土は２層に分層される。地山粒、地山土塊を含む土坑掘削時の埋め戻し土である。坑中心部の覆土中位から上位にかけて大小の礫が不整に配置される。

遺物の出土はない。

遺構の規模・形状等から一応土坑墓の可能性がある。

**ＳＫ386土坑［第23図、第10表］**

ＭＨ33グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中、黒褐色土の広がりを認め、明瞭なプランを得るために地山面近くまで掘り下げてＳＫ386とした。

平面形は長軸86㎝、短軸70㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ61°Ｗ、深さ17㎝である。

底面は鍋底状で、中央に２箇所ピット状の掘り込みを有す。平面及び断面観察で堆積状況の確認ができず、当遺構に伴うものかどうかは不明である。壁はほとんど残っていないが、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は地山土塊の混入する単一層、埋め戻し土である。坑底面中央部で、ピット状の掘り込みに挟まれるようにして円礫を１点検出したが、特に配置したものかどうかは不明である。

遺物は粗製の縄文土器小片２点が出土したのみである。

小規模であり、遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ393土坑［第23図、第10表］**

ＭＧ・ＭＨ32グリッドにある。検出状況はＳＫ381と同様である。ＳＫ385と南側で、ＳＫ521と南東で切り合う。堆積状況からＳＫ392より新しい。ＳＫ521との新旧関係は不明である。

平面形は長軸92㎝、短軸推定78㎝のずんぐりとした楕円形と考えられ、長軸方向はＮ59.5°Ｗ、深さ26㎝である。

底面は平坦で固くしまり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は地山粒が混入する単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ394土坑［第23図、第９表］**

ＭＧ・ＭＨ33グリッドにある。Ⅶ層土を掘り下げ中、ぼんやりとした黒褐色土楕円形のプランを検出。覆土がⅦ層土と類似していたため、地山面まで掘り下げてプランを確定した。ＳＫＰ397と南西で切り合う。堆積状況から当遺構が新しい。

平面形は長軸102㎝、短軸63㎝の楕円形で、長軸方向Ｎ50°Ｅ、深さ29㎝である。

底面は南西から北東にかけて落ち込み、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南西側は不明である。

覆土は２層に分層される。２層土は地山粒を大量に含む。

当遺構から遺物の出土はない。

底面が不整であるため、遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ395土坑［第23図、第９表］**

ＭＤ・ＭＥ33グリッドにある。Ⅶ層土中、２ｍ四方に集中する大礫を数点検出し、礫を残したまま地山面まで掘り下げたところ、礫集中地点の東西に２遺構の楕円形プランを確認し、西側をＳＫ395、東側をＳＫ396とした。

平面形は長軸80㎝、短軸69㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ2.5°Ｗ、深さ10㎝、礫上部までの高さは43㎝である。

底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていたものと考えられる。

覆土は地山粒を含む単一層、埋め戻し土である。

遺物は縄文土器片５点が出土している。

確認面より20～25㎝上部で検出された礫は径32㎝、径44㎝の扁平な川原石２点である。少なくとも礫確認面までは掘り込みがあったものと考えられ、最低でも30㎝以上の深さであったと推測する。

小規模であるため、配石墓と位置付けるには至らず、土坑とした。

**ＳＫ396土坑［第23図、第９表］**

ＭＤ33グリッドにある。検出状況はＳＫ395と同様である。

平面形は長軸92㎝、短軸88㎝の不整な略円形で、長軸方向はＮ74.5°Ｅ、深さ24㎝、礫上部までの高さは63㎝である。

底面は鍋底状で、壁は丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。

覆土は地山粒が混入する単一層である。遺物の多くは西側から出土し、石鏃１点、剥片２点、朱塗り１点を含む縄文土器片27点が確認された。確認面より25～35㎝上部で検出された礫は径20～30㎝程の円礫や亜角礫で、土坑の南西方向に集中して配置される。少なくとも礫確認面までは掘り込みがあったものと考えられ、最低でも50㎝以上の深さであったと推測する。

礫の検出状況は配石墓のそれに近いが、小規模であり、土坑と位置付けておく。

**ＳＫ399土坑［第23図、第10表］**

ＭＤ27グリッドにある。Ⅶ層土中の大～巨礫の礫群を取り外し、地山面まで掘り下げたところ黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸105㎝、短軸92㎝のずんぐりした楕円形で、長軸方向はＮ42.5°Ｗ、深さ36㎝、礫上部までの高さは39㎝である。

底面は段丘礫層の自然礫が露出し凹凸が激しく、壁はやや急に立ち上がる。

覆土は２層に分層される。覆土の地山粒と周辺の地山土が同様の細砂を含み、段丘礫層の中礫を含むことから、土坑掘削時の埋め戻し土と考えられる。

遺物は土器小片２点が出土するが、摩滅が激しく時期の特定は不可能である。

小規模であり、土坑とした。

**ＳＫ400土坑［第22図、第10表］**

ＭＤ27グリッドにある。検出状況はＳＫ203と同様である。ＳＫ203と南側で切り合い、堆積状況から当遺構が新しい。

平面形は長軸148㎝、短軸110㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ３°Ｅ、深さ31㎝、礫上部までの高さは45㎝である。

底面には30㎝程の自然礫が１点露出するが概ね鍋底状で、壁もそのまま丸みを帯びて立ち上がる。

覆土は単一層とした。覆土中位に礫が数点、上面には大礫が２点配置される。南西端には同規模の自然礫がある。

遺物は縄文土器片14点が出土している。

規模・形状から土坑とする。

**ＳＫ401土坑［第23図、第10表、図版13］**

ＭＣ、ＭＤ26・27グリッドにある。Ⅶ層土中の大～巨礫の礫群を取り外し、地山面まで掘り下げたところ黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸136㎝、短軸121㎝のずんぐりとした方形に近い楕円形で、長軸方向はN59°Ｗ、深さ35㎝である。

底面は鍋底状であり、壁はやや急に立ち上がる。北東側から段丘礫層の巨大な自然礫が底面の1/3程度にまで露出している。

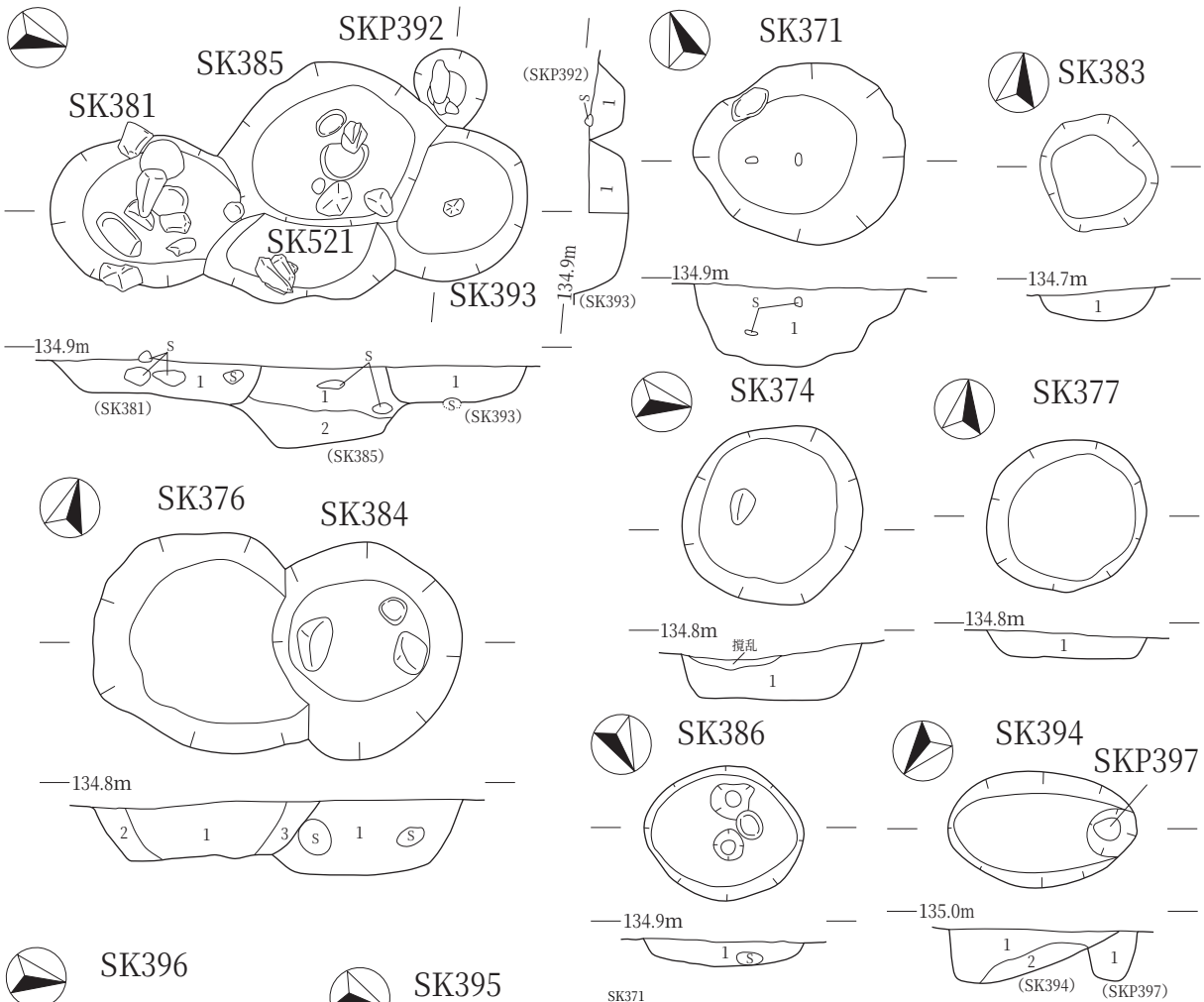
覆土は２層に分層される。１層土中微量に混入する白色微粒子が地山粒だと判別できなかったため、土坑掘削時の埋め戻し土であるかどうかは不明である。

遺物は縄文土器片37点が出土した。

規模・形状からは土坑墓と捉えられなくもないが、露出した自然礫の在り方から土坑としておく。

**ＳＫ404土坑［第24図、第10表］**

ＭＤ・ＭＥ26グリッドにある。Ⅶ層土中の大～巨礫の礫群を取り外し、地山面まで掘り下げたところ黒褐色土楕円形のプランを確認した。南西に現代のごみ捨て場があり、壁の一部が削平を受ける。




SK371
1　黒色土(10YR2/1)　細砂～シルト　しまりやや強　粘性やや弱
炭化物(φ1～2㎜)1%、地山ブロック30%混入
SK374
1　黒色土(10YR2/1)　細砂～シルト　しまりやや強　粘性普通
炭化物(φ1～5㎜)1%、地山粒(φ1～5㎜)2%混入
SK376
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性極強　酸化した鉄分多量、地山粒3%混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性極強
酸化した鉄分多量、地山ブロック(φ30㎜)5%混入
3　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性極強
酸化した鉄分多量、地山ブロック(φ50㎜)5%混入
SK384
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト　しまり普通　粘性やや強い　酸化した鉄分多量、地山粒1%混入
SK377
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト　しまりやや弱　粘性やや強
地山ブロック(φ50㎜)5%、酸化した鉄分少量混入
SK381
1　黒褐色土(10YR2/3)　細砂～シルト　しまり強　粘性やや弱
炭化物(φ1～3㎜)1%、白色粒状物微量混入
SK385
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや強　炭化物(φ1～2㎜)10%、地山粒3%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや強
炭化物(φ1～2㎜)10%、地山ブロック(φ10～15㎜)40%混入
SK393
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや強　粘性やや弱
炭化物(φ1～2㎜)1%、地山粒2%混入
SK383
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　しまり普通　粘性やや強
白色粒状物少量、地山ブロック2%混入
SK386
1　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや強
炭化物(φ１～２㎜)微量、地山ブロック10%混入
SK394
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性普通　炭化物(φ1～3㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト　しまりやや強　粘性やや弱　地山粒60%混入
SKP397
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性やや強
地山ブロック(φ10～30㎜)10%混入
SK395
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト　しまりやや弱　粘性やや強
炭化物(φ1～3㎜)2%、地山粒10%混入
SK396
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト　しまり弱　粘性やや強
炭化物(φ1～5㎜)1%、地山粒5%混入、土器片を多数含む
SK399
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり強　粘性強
炭化物(φ1～3㎜)1%、白色粒状物3%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　細砂～シルト　しまり極強　粘性弱
礫(φ5～15㎜)10%、地山粒15%混入
SK401
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり強　粘性やや強
炭化物(φ1～2㎜)5%、白色粒状物微量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり強　粘性やや強　炭化物(φ1～2㎜)3%混入

**第23図　ＳＫ371・376・384・385土坑(墓)、ＳＫ374・377・381・383・386・393～396・399・401・521土坑、ＳＫＰ392・397柱穴様ピット**

平面形は長軸123㎝、短軸推定108㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN29.5°Ｅ、深さ31㎝である。

底面はほぼ平坦だが、壁は段丘礫層の自然礫が露出し凹凸が激しく、緩やかに立ち上がる。

覆土は単一層とした。周辺の段丘礫層と同様の中礫を含むため、土坑掘削時の埋め戻し土と判断する。

遺物は縄文土器片35点、剥片類４点が出土している。

**ＳＫ407配石墓［第24図、第10表、図版13］**

ＭＤ、ＭＥ37・38グリッドにある。排土を除去した後、地山面を精査中に不整な楕円形のプランを確認した。確認面で径20～30㎝程の礫を不規則に検出した。

平面形は長軸169㎝、短軸162㎝の不整な隅丸方形で、長軸方向はN80°Ｅ、深さ50㎝である。

底面は自然礫が露出し多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。壁は西側でほぼ垂直に立ち上がり、東側はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は４層に分層される。黒色土を主体とするが、３層土のみやや明るみが増す黒褐色土となる。２・３層土には径10～30㎝程の礫が不規則かつ多量に混入する。基本的に地山土の混入する埋め戻し土である。

覆土中位からの遺物の出土が多く、赤色塗彩の土器片４点を含む縄文土器片151点、石剣（第59図173）１点、凹石２点、剥片類11点が出土している。

礫の検出状況、石剣の出土などから判断し、配石墓と位置付ける。

**ＳＫ408土坑［第24図、第10表、図版13］**

ＭＧ34・35グリッドにある。地山面精査中に黒色土略円形のプランを確認しＳＫ408とした。

平面形は長軸109㎝、短軸107㎝の不整な略円形で、長軸方向N28°Ｅ、深さ35㎝である。

底面はほぼ平坦でやわらかく、壁はやや丸みを帯びて急に立ち上がる。覆土は地山土を含む黒色土を主体とする単一層である。

遺物は縄文土器小片７点が出土した。

規模が小さく、遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ409土坑［第24図、第10表］**

ＭＦ34グリッドにある。地山面精査中に黒色土略円形のプランを確認しＳＫ409とした。

平面形は長軸92㎝、短軸91㎝の不整な略円形で、長軸方向N25°Ｅ、深さ10㎝である。

底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は地山土を含む黒色土を主体とする単一層である。坑底部のみの検出となったためその全体形は不明であるが、平面形の規模からもう少し深い土坑だったと思われる。

遺物の出土はない。

小規模であり、土坑とした。

**ＳＫ410土坑［第24図、第10表］**

ＭＧ35グリッドにある。ＳＱ361精査終了後、地山面まで掘り下げてプランを確認した。ＳＱ361直下にある。

平面形は長軸133㎝、短軸89㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ48°Ｅ、深さ17㎝である。

底面は平坦だが、東側に円形の窪みを有す。壁はやや急に立ち上がる。覆土は地山土の混入する黒色土単一層である。遺物の出土はない。

なお当遺構上部20㎝程のところでＳＱ361が確認されている。当遺構の円形の窪みから若干西にずれた場所にＳＱ361が位置する。円形の窪みがＳＱ361に伴う掘り込みかどうかは定かでないが、ＳＱ361の径と当遺構円形の窪みのそれとはほぼ一致する。当遺構の覆土とＳＱ361を検出したⅦ層土が極めて酷似していたため、堆積状況から両遺構の関係を捉えることはできなかった。当遺構がＳＱ361の下部施設である可能性もあるが、判断材料に乏しく、個別の遺構として捉えておく。

同様の遺構としてはＳＱ406とＳＫ507がある。

**ＳＫ413土坑［第24図、第10表］**

ＭＨ36グリッドにある。地山面精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ413とした。

平面形は長軸65㎝、短軸64㎝の不整な略円形で、長軸方向はＮ78°Ｅ、深さ12㎝である。

底面は平坦で、壁はやや丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。覆土は地山土が多量に混入する黒褐色土の単一層埋め戻し土である。

遺物は赤色塗彩の土器片１点を含む縄文土器片２点が出土している。

底面のみの残存であり、遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ415土坑［第24図、第10表］**

ＭＦ30グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸96㎝、短軸77㎝の凹凸の激しいずんぐりとした方形に近い不整な楕円形で、長軸方向はＮ48°Ｗ、深さ22ｃｍである。

底面は基本的に平坦であるが、西側にやや落ち込む。壁は北西側でほぼ垂直に立ち上がる他は、緩やかに立ち上がる。

覆土は地山土塊の混入する黒褐色土単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

小規模であり、土坑とした。

**ＳＫ416土坑［第24図、第10表］**

ＭＥ36グリッドにある。地山面精査中、黒褐色土円形のプランを確認した。

平面形は直径90㎝の略円形で、長軸方向はＮ46°Ｅ、深さ24㎝、礫上部までの高さは31㎝である。

底面は鍋底状で、水気を含むため非常にやわらかく、壁はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は地山土塊の混入する単一層、埋め戻し土である。

覆土上位から剥片１点、縄文土器片８点が出土している。

小規模であり、土坑とする。

**ＳＫ417・519土坑［第24図、第10表］**

ＭＥ36グリッドにある。地山面を精査中に楕円形のプランを確認しＳＫ417とした。完掘後覆土堆積状況と完掘状況とを検討し、南西部をＳＫ519とした。堆積状況からＳＫ519が新しい。

ＳＫ417の平面形は長軸推定92㎝、短軸72㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ46°Ｗ、深さ28㎝、礫上部までの高さは37㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。ＳＫ519の平面形は不明である。

覆土は両遺構とも地山粒が少量混入する埋め戻し土である。覆土上位の扁平な円礫は両遺構にかかっており、特に人為的な配置とは考えにくい。

遺物の出土はない。

両遺構とも小規模であり、遺構の詳細な性格の特定は困難である。

**ＳＫ440土坑［第24図、第10表］**

ＭＦ35グリッドにある。地山面精査中に重複する楕円形のプランを確認し、それぞれＳＫ440・441とした。東側でＳＫ441に切られ、当遺構が古い。

平面形は長軸推定84㎝、短軸78㎝の略円形で、長軸方向はＮ43°Ｗ、深さ７㎝である。覆土がⅦ層土と類似していたため地山面での確認となり、底面のみが検出された形であるが本来は数十㎝あったものと思われる。

底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっていたものと思われる。覆土は地山粒を含む単一層で、埋め戻し土である。当遺構から遺物の検出はなかった。現状では遺構の詳細な性格の特定は困難である。

**ＳＫ441土坑［第24図、第10表］**

ＭＦ35グリッドにある。検出状況はＳＫ440と同様である。ＳＫ440を西側で切っている。

平面形は長軸87㎝、短軸84㎝の略円形で、長軸方向はＮ３°Ｗ、深さ９㎝である。覆土がⅦ層土と類似していたため地山面での確認となり、底面のみが検出された形であるが本来は数十㎝あったものと思われる。

底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっていたものと思われる。覆土は地山粒を含む単一層で、埋め戻し土である。

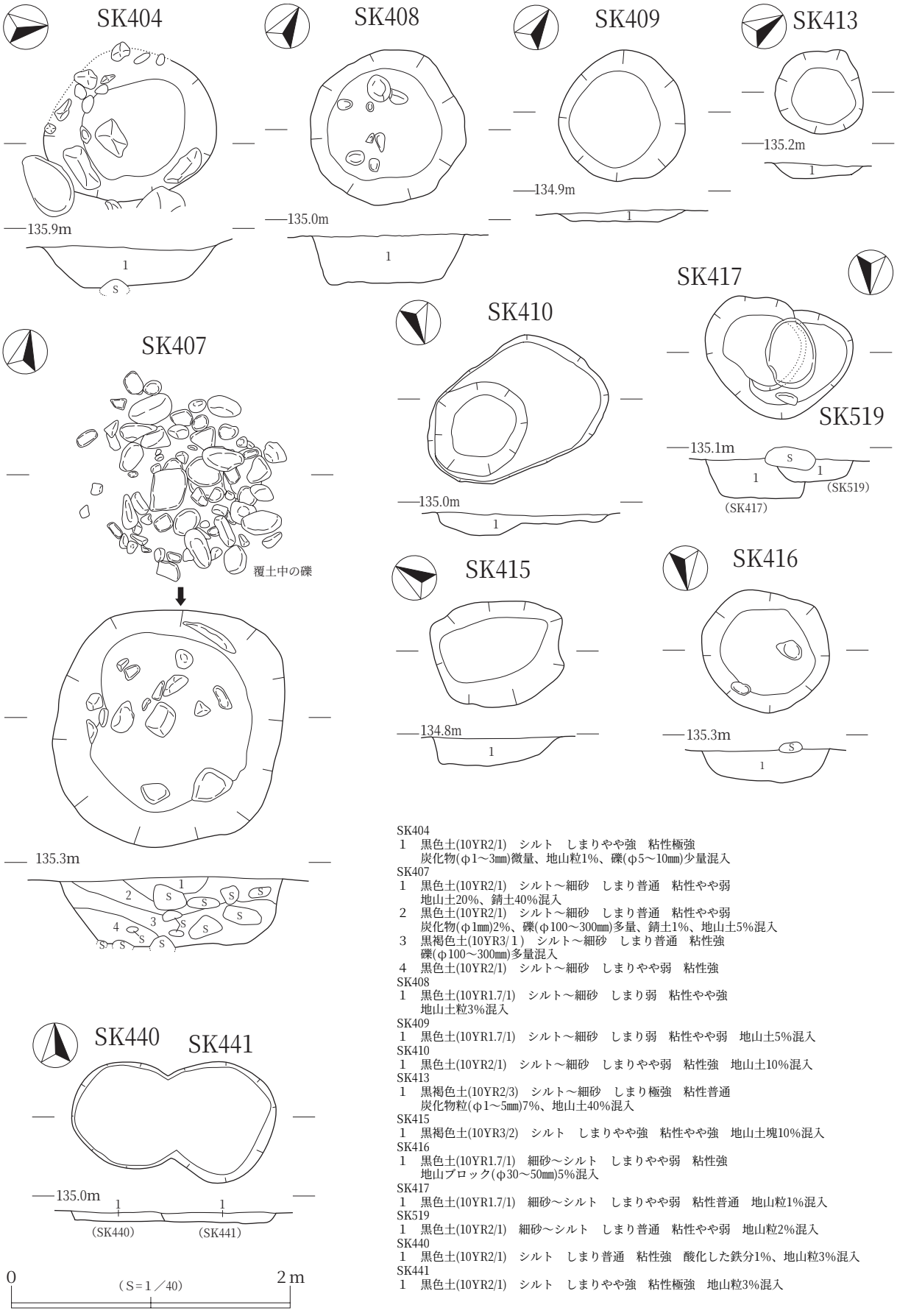
底面より粗製の縄文土器片12点が出土している。

底面のみの残存であり、遺構の詳細な性格の特定は困難である。

**ＳＫ443土坑［第25図、第10表］**

ＭＥ・ＭＦ36グリッドにある。地山面精査中に重複するプランを確認しそれぞれＳＫ443・444・445とした。ＳＫ444・445と北側で切り合い、ＳＫ445より古い。ＳＫ444との新旧関係は不明。

平面形は長軸推定95㎝、短軸推定75㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ30°Ｅ、深さ13㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていたものと思われる。




SK404
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまりやや強　粘性極強
　炭化物(φ1～3㎜)微量、地山粒1%、礫(φ5～10㎜)少量混入
SK407
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまり普通　粘性やや弱
　地山土20%、錆土40%混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1㎜)2%、礫(φ100～300㎜)多量、錆土1%、地山土5%混入
3　黒褐色土(10YR3/１)　シルト～細砂　しまり普通　粘性強
　礫(φ100～300㎜)多量混入
4　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまりやや弱　粘性強
SK408
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト～細砂　しまり弱　粘性やや強
　地山土粒3%混入
SK409
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト～細砂　しまり弱　粘性やや弱　地山土5%混入
SK410
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまりやや弱　粘性強　地山土10%混入
SK413
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂　しまり極強　粘性普通
　炭化物粒(φ1～5㎜)7%、地山土40%混入
SK415
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまりやや強　粘性やや強　地山土塊10%混入
SK416
1　黒色土(10YR1.7/1)　細砂～シルト　しまりやや弱　粘性強
　地山ブロック(φ30～50㎜)5%混入
SK417
1　黒色土(10YR1.7/1)　細砂～シルト　しまりやや弱　粘性普通　地山粒1%混入
SK519
1　黒色土(10YR2/1)　細砂～シルト　しまり普通　粘性やや弱　地山粒2%混入
SK440
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性強　酸化した鉄分1%、地山粒3%混入
SK441
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまりやや強　粘性極強　地山粒3%混入

**第24図　ＳＫ407配石墓、ＳＫ404・408・409・410・413・415・416・417・440・441・519土坑**

覆土は地山土の混入する単一層、埋め戻し土である。

遺物の検出はない。

底面付近のみの残存であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ444土坑［第25図、第10表］**

ＭＥ・ＭＦ36グリッドにある。検出状況はＳＫ443と同様である。ＳＫ443・445と東側で切り合い、ＳＫ445より古い。ＳＫ443との新旧関係は不明である。

平面形は長軸推定80㎝、短軸推定60㎝の楕円形で、長軸方向はN84.5°Ｅ、深さ15㎝である。

底面は波打ち、壁は緩やかに立ち上がっていたものと思われる。覆土は地山土の混入する単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

底面付近のみの残存であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ445土坑［第25図、第10表］**

ＭＥ36グリッドにある。検出状況はＳＫ443と同様である。ＳＫ443・444と西側で切り合う。堆積状況から、両遺構より新しい。

平面形は長軸推定95㎝、短軸推定75㎝程度のずんぐりとした方形に近い楕円形で、長軸方向はN76°Ｗ、深さ13㎝である。

底面はやや波打つが平坦に近く、壁はほぼ垂直に立ち上がっていたものと考えられる。覆土は地山土の混入する単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

底面付近のみの残存であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ447土坑［第25図、第10表］**

ＭＨ・ＭＩ34グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中に黒色土楕円形のプランを確認した。北東側でＳＫ508と切り合い、平面観察により当遺構が新しい。

平面形は長軸86㎝、短軸推定76㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN27°Ｗ、深さ12㎝である。

底面はやや波打つが概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていたものと考えられる。

覆土は地山土の混入する黒色土単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

底面付近のみの残存であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ448土坑［第25図、第10表］**

ＭＨ・ＭＩ34グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中に黒色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸98㎝、短軸89㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はN89°Ｅ、深さ25㎝である。

底面は概ね平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

覆土は３層に分層される。地山粒が全体的にうっすらと混入する埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ454土坑［第25図、第10表］**

ＭＧ・ＭＨ34グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に黒色土楕円形のプランを確認した。西側でＳＫＰ509と、南西側でＳＫＰ510と切り合う。平面観察からＳＫＰ509より当遺構が古い。ＳＫＰ510との新旧関係は不明である。

平面形は長軸106㎝、短軸99㎝の略円形で、長軸方向はＮ44°Ｗ、深さ30㎝である。

底面はほぼ平坦で、壁は全体的にやや急に立ち上がるが、西壁のみ緩やかな傾斜を持つ。

覆土は４層に分層される。全体に炭化物、地山土が混入する。

遺物は縄文土器片17点が出土している。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ460土坑［第25図、第10表］**

ＭＨ33グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に数基分と推測される黒色土楕円形のプランが重なるのを確認した。プラン特定のため再度掘り下げると、５基の遺構がそれぞれ切り合っていることを確認した。東がＳＸ465、北がＳＫＰ518、中央がＳＫ462、南がＳＫ461、西が当遺構である。当遺構は東側でＳＫ462と切り合い関係にあり、平面及び断面の観察からＳＫ462より当遺構が古い。

平面形は長軸推定82㎝、短軸54㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ32°Ｗ、深さ24㎝、ピット状の掘り込み底面までは44㎝である。

底面は丸みを帯び、中央西寄りにピット状の掘り込みがある。壁面はなだらかに立ち上がる。

覆土は３層に分層され、１層には微量の炭化物が、２・３層には地山土が多量に混入する。

遺物の出土はない。

小規模であり、掘方形状等から判断すると、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ461土坑［第25図、第10表］**

ＭＨ33グリッドにある。検出に至る経過は、ＳＫ460の項と同様である。当遺構は北側でＳＫ462と切り合い関係にあり、平面及び断面の観察からＳＫ462より当遺構が新しい。

平面形は長軸推定98㎝、短軸86㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ18°Ｗ、深さ41㎝である。

底面はやや丸みを帯び、壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は４層に分層され、全体に微量の炭化物が混入する。

２点の縄文土器片が出土したが、摩滅が著しく詳細は不明である。

小規模であり、掘方形状等からの判断でも、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ462土坑［第25図、第10表］**

ＭＨ33グリッドにある。検出に至る経過は、ＳＫ460の項と同様である。当遺構は北側でＳＫＰ518と、東でＳＸ465、西と南でそれぞれＳＫ460・461と切り合い関係にあり、平面及び断面の観察から、当遺構はＳＫＰ518より古く、ＳＸ465より新しいことが判明した。ＳＫ460・461との新旧関係は前述のとおりである。

平面形は長軸118㎝、短軸推定96㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ47°Ｅ、深さ44㎝である。

底面はほぼ平坦であるが、中央が若干高い。壁面はやや緩やかに直線的に立ち上がる。

覆土は４層に分層され、全体に微量の炭化物が混入する。

２点の縄文土器片が出土したが、摩滅が著しく詳細は不明である。

掘方形状等からは土坑墓であった可能性も否定できないが、切り合いによって全体像が把握しがたいこと、周辺他遺構との関係を考えれば、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ507土坑［第25図、第10表］**

ＭＨ35グリッドにある。ＳＱ406精査終了後、地山面まで掘り下げてプランを確認した。ＳＱ406直下にある。

平面形は長軸96㎝、短軸61㎝の方形に近い不整楕円形で、長軸方向はＮ31°Ｗ、深さ６㎝である。

底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていたものと考えられる。

覆土は地山土の混入する黒色土単一層である。

遺物の出土はない。

なお、当遺構上部40㎝程のところでＳＱ406が確認されている。当遺構から若干南西にずれた場所にＳＱ406が位置する。当遺構の覆土とＳＱ406を検出したⅦ層土が極めて酷似していたため、堆積状況から両遺構の関係を捉えることはできなかった。当遺構がＳＱ406の下部施設である可能性はあるが、その判断材料に乏しく、個別の遺構として捉えておく。

同様の遺構としてはＳＱ361・ＳＫ410がある。

**ＳＫ508土坑［第25図、第10表］**

ＭＨ34グリッドにある。ＳＫ447完掘時坑底部北西に黒褐色土の堆積を確認し、ＳＫ508とした。平面観察により、ＳＫ447の明瞭なプランを得ており当遺構が古い。

平面形は長軸推定78㎝、短軸61㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ43°Ｅ、深さ22㎝である。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

覆土は地山粒の混入する黒色土単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ512土坑（墓）［第25図、第10表］**

ＭＤ36グリッドにある。Ⅶ層中を精査中、遺物の集中を確認した。当初は遺構と判断できず遺物の

取り上げを進めたところ、不整な楕円形の掘り込みを認めＳＫ512とした。

平面形は長軸113㎝、短軸89㎝のずんぐりとした方形に近い不整な楕円形で、長軸方向はＮ８°Ｅ、深さ20㎝である。

底面は中央にピット状の掘り込みを有するが、その他は平坦である。壁は緩やかにまっすぐ立ち上がる。

覆土は極めて固くしまり、炭化物と地山土が混入する。

出土した遺物は、縄文土器片45点、石剣（第60図176）１点、石皿（第59図174）１点、磨石（第60図175）１点、剥片18点、石核４点である。いずれも確認面付近からの出土である。当遺構はたびたび水没する地区にあり、早い時期に遺構として判断できていれば遺構の性格をつかめた可能性がある。底面のみの残存で、掘方の詳細は不明であるが、出土遺物から、土坑墓であった可能性は高い。

**ＳＫ521土坑［第23図、第10表］**

ＭＧ・ＭＨ32グリッドにある。平面観察の際にはＳＫ385と考えられたが､周辺の重複する遺構を完掘した後、各遺構の底面・下端・土坑の形状を再検討した。その結果、確認時のＳＫ385東部に重複する土坑が存在すると認定しＳＫ521とした。ＳＫ381と南側で、ＳＫ385と西側で、ＳＫ393北西で切り合う。各遺構との新旧関係は捉えることができなかった。

平面形は三方で重複するため不明である。底面はやや固くしまり、概ね平坦である。壁は東側でほぼ垂直に立ち上がる他は不明である。

覆土はＳＫ385に酷似し、南西端の中位から底面にかけて、25㎝程の亜角礫が積み重ねられるように四重に配置される。

遺物の出土はない。

四重に配される礫が人為的である可能性は高いが、他遺構との切り合いが多く、掘方形状が不明確なため、配石墓とするには根拠に乏しい。

【Ｂ区・平成13年度調査】

**ＳＫ186土坑［第26図、第８表］**

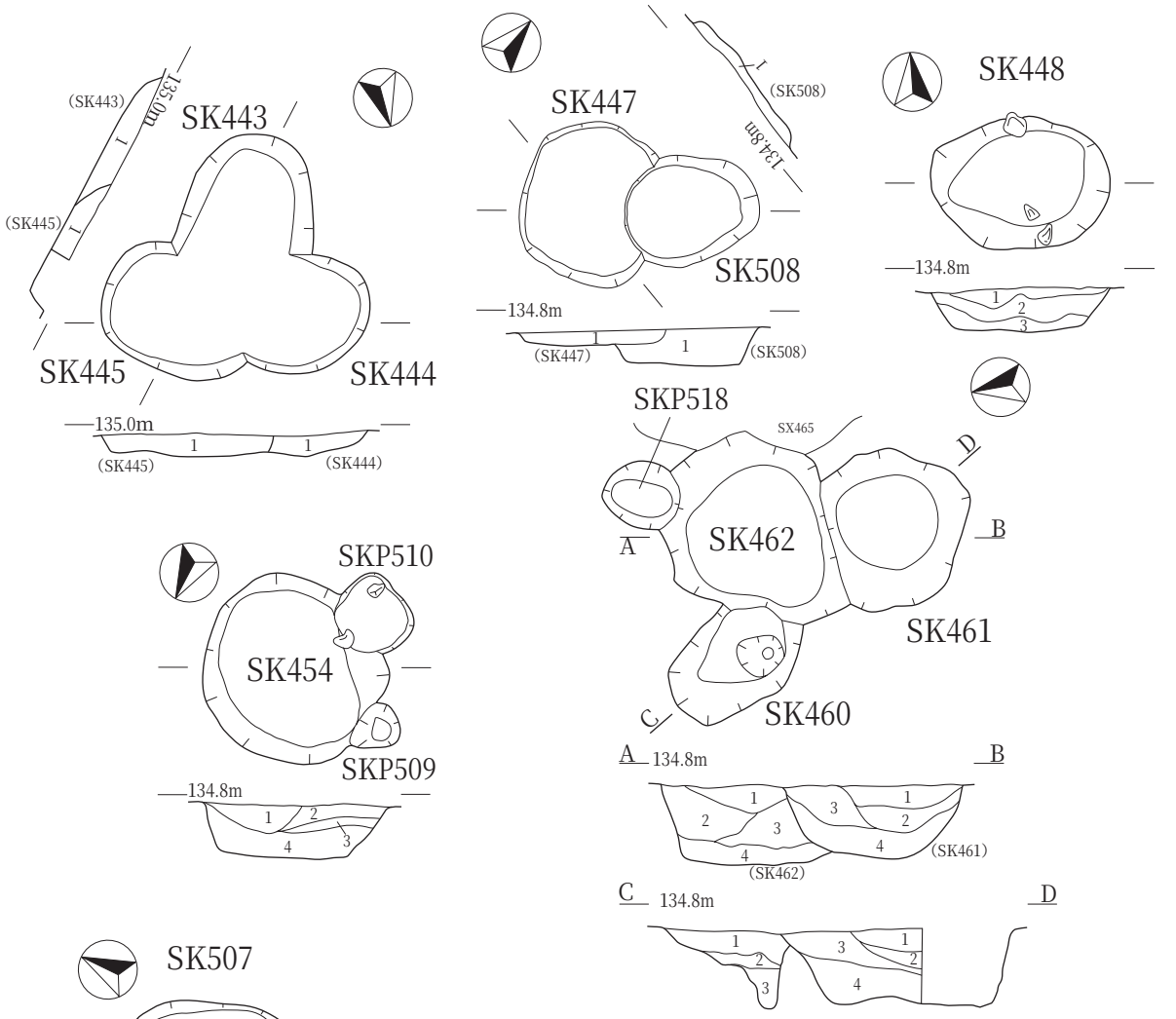
ＮＬ25・26グリッドにある。地山上面精査中に数基が重複する暗褐色土のプランを確認、サブトレンチを設定し、断面観察によりＳＫ186とした。東側でＳＫ187と、西側でＳＫ218と切り合い、両遺構より古い。

遺構の切り合いが激しいため遺構の正確な形態・規模は不明である。深さ18㎝の不整楕円形だったと考えられ、立ち上がりはやや緩やかだったと思われる。残存部の底面は平坦である。

覆土は単一層である。

遺物は覆土上位、確認面近くより縄文土器片15点、剥片４点が出土した。

推定の規模・形状からは土坑墓の可能性も考えられるが、判断材料が乏しいため遺構の性格の特定は困難である。




SK443
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性強
　酸化した鉄分微量、炭化物微量、
　地山土5%混入
SK444
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり弱　粘性弱
　酸化した鉄分少量　地山土5%混入
SK445
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト
　しまり弱　粘性やや弱
　酸化した鉄分微量、炭化物(φ1～3㎜)微量、
　地山土3%混入
SK447
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまりやや強　粘性強
　炭化物粒(φ0.1～10㎜)5%、地山土5%混入
SK508
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性やや強
　地山土2%混入
SK448
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり極強　粘性極強
　炭化物粒(φ1㎜)微量、地山土3%、
　白色土粒少量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性やや強　地山土3%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂　しまり強
　粘性やや弱　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土2%混入
SK454
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性強
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土5%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性強
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土5%、鐳土7%混入
3　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性強　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
4　黒色土(10YR1.7/1)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性強
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土塊5%混入

SK460
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや強
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性普通　地山土40%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや強　地山土50%混入
SK461
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性弱　炭化物粒(φ1㎜)2%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　1層よりやや明るめ
　しまり普通　粘性弱　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性普通
　炭化物粒(φ1～3㎜)1%混入
4　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや強　地山土5%混入
SK462
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまり極強　粘性普通
　炭化物粒(φ1～2㎜)1%、鐳土40%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1㎜)2%混入
4　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1～2㎜)2%混入
SK507
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物粒(φ0.1～1㎜)10%、地山土粒20%混入
SK512
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物粒(φ0.1～1㎜)10%混入

**第25図　ＳＫ443～445・447・448・454・460～462・507・508・512土坑、ＳＫＰ509・510・518柱穴様ピット**

**ＳＫ187土坑［第26図、第８表］**

ＮＬ25・26グリッドにある。検出状況はＳＫ186と同様である。西側でＳＫ186と切り合い、当遺構が新しい。また南側でＳＫ188と接している。

遺構の切り合いが激しいため遺構の形態・規模は明確ではないが、長軸146㎝、短軸推定88㎝の方形に近い不整な長楕円形で、長軸方向はＮ45°Ｅ、深さ12㎝である。

残存部の底面は平坦であり、壁はやや緩やかに立ち上がっていたものと推測する。

覆土は単一層である。

遺物は覆土中確認面近くから、縄文土器片９点、二次加工のある剥片１点が出土した。

推定の規模・形状からは土坑墓の可能性も考えられるが、判断材料が乏しいため遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ188土坑［第26図、第８表］**

ＮＬ25グリッドにある。検出状況はＳＫ186と同様である。北側でＳＫ187と接している。東側は覆土と地山土の区別が付きにくく掘り過ぎている。堆積状況からＳＫ193より新しい。また南側でＳＫ216と切り合い、当遺構が古い。

平面形は長軸推定190㎝、短軸推定140㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ29°Ｗ、深さ34㎝である。

底面には自然礫が露出するものの、概ね固くしまり平坦である。壁は、掘方が浅いためその形状は不明である。

覆土は３層に分層される。２・３層に地山粒が混入する。

遺物は粗製の縄文土器片を主体とし26点、剥片４点が出土している。

底面が平坦なことから土坑墓の可能性も否定できないが、遺構の性格に関する判断は困難である。

**ＳＫ191土坑［第26図、第８表］**

ＮＫ25・26グリッドにある。地山上面を精査中に暗褐色土のプランを確認した。北東側でＳＫ192と切り合うが、新旧関係は不明である。

平面形は長軸推定75㎝、短軸56㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ75°Ｅ、深さ28㎝である。

底面は東側に落ち込み、壁は急に立ち上がる。

遺物は縄文土器片５点、二次加工のある剥片１点が出土している。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ192土坑［第26図、第８表］**

ＮＫ24・25グリッドにある。地山上面を精査中に暗褐色土楕円形のプランを確認した。南西でＳＫ191と切り合う。新旧関係は不明である。

平面形は長軸推定125㎝、短軸推定90㎝のやや不整な楕円形で、長軸方向はＮ81°Ｗ、深さ32㎝である。

底面は遺構西側がやや窪んでいるがほぼ平坦であり、やや急に立ち上がる。

覆土は３層に分層される。２・３層に地山土の混入がみられる。

遺物は粗製縄文土器片38点を検出した。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ193土坑［第26図、第８表］**

ＮＫ・ＮＬ25グリッドにある。検出状況はＳＫ186と同様である。南側は撹乱を受けており、西側は掘り過ぎによりＳＫ188との新旧関係は不明である。

平面形は長軸推定190㎝、短軸162㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ45°Ｅ、深さ42㎝である。

底面は段丘礫層の自然礫が露出し、かなり凹凸が激しい。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は５層に分層される。

遺物は縄文土器片12点、剥片１点が出土している。

規模・形状からは土坑墓の可能性が想定できるが、判断材料に乏しいため、土坑としておく。

**ＳＫ194土坑［第26図、第８表］**

ＮＫ25グリッドにある。地山上面を精査中に暗褐色土楕円形のプランを確認した。西側でＳＫ193と接する。

平面形は長軸96㎝、短軸93㎝の不整な略円形で、長軸方向はＮ22°Ｅ、深さ21㎝である。

底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ちあがる。

覆土は単一層で地山土の混入がある。

出土遺物は縄文土器片２点である。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ197土坑［第27図、第８表、図版13］**

ＮＫ26グリッドにある。地山面精査中暗褐色土の広がりを検出したが、プランの輪郭がはっきりしなかったためさらに精査を進めたところ、複数が重複するプランを確認した。本遺構と直接重複している遺構は北西側のＳＫ276のみであるが、これに連なるような形でＳＫ288・ＳＫ299・ＳＫ309がある。堆積状況から当遺構の方がＳＫ276よりも新しい。

平面形は直径103㎝のやや不整な略円形で、長軸方向はＮ56°Ｗ、深さ28㎝、礫上部までの高さ38㎝である。

底面は多少波打つが概ね平坦であり、壁はやや急に立ち上がる。

覆土は２層に分層される。２層土に地山土が混入することから埋め戻し土と考えられる。

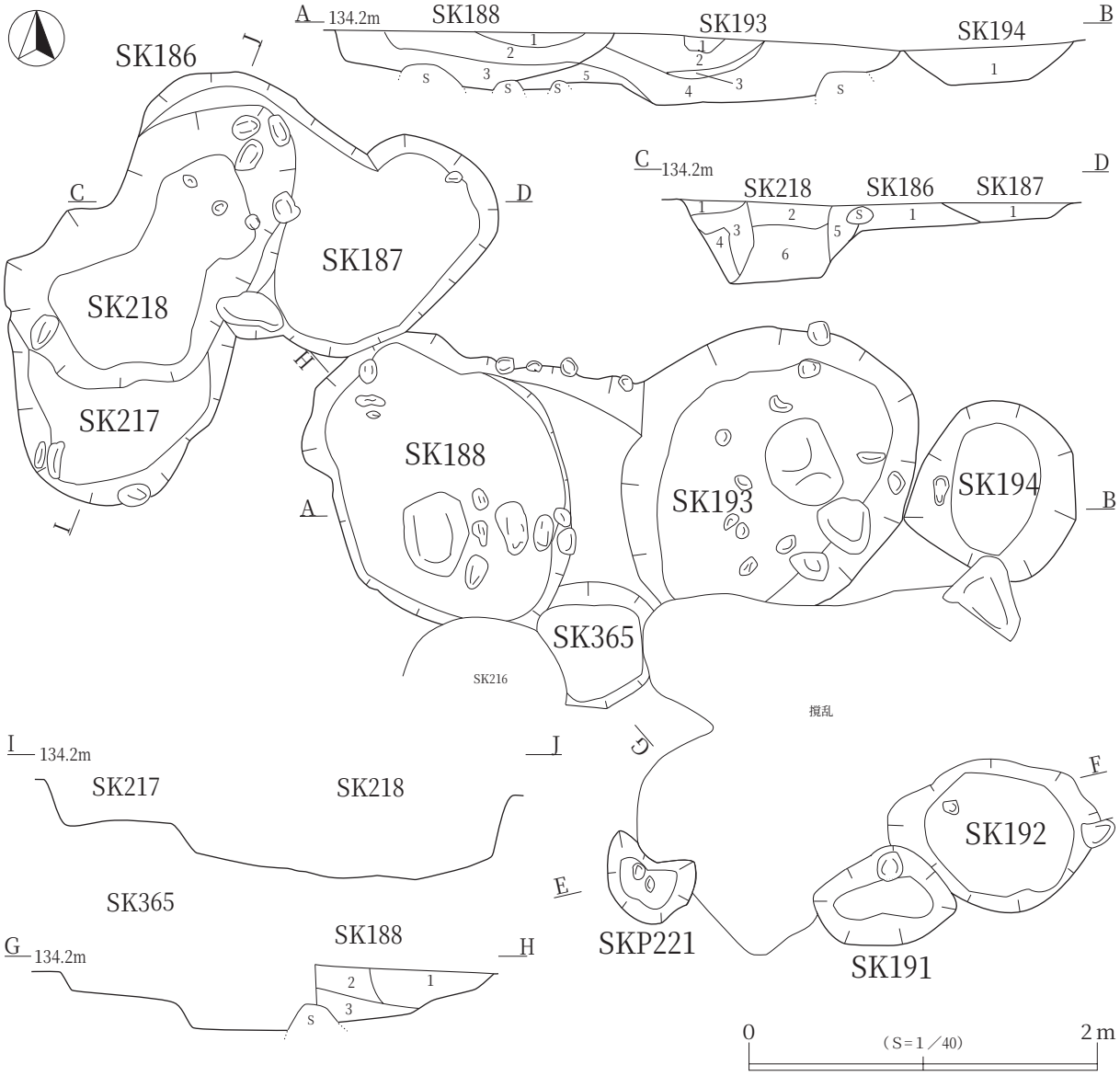
覆土上面から中位にかけて数点の礫を検出したが、意図的な配置は見られなかった。

遺物の出土はない。

小規模であり、判断材料に欠けるため、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ198土坑［第27図、第８表、図版13］**

ＮＪ・ＮＫ26グリッドにある。地山面精査中、暗褐色土楕円形の重複するプランを確認し南南西を




SK186
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　粘性普通　しまりやや強
　地山土5%混入
SK187
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性やや強　しまり強
　地山土5%混入
SK188
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性やや強　しまり強
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性普通　しまり普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土40%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性やや強　しまり普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土10%混入
SK192
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性やや強　しまりやや弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性やや強　しまりやや弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土40%、地山塊20%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性やや強　しまりやや弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土50%混入

SK193
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　粘性やや強　しまり普通
　地山土粒50%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性やや強　しまり普通
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性普通　しまりやや強
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
5　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　粘性弱　しまりやや強
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土20%混入
SK194
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂　粘性やや強　しまりやや弱
　地山土粒3%混入
SK218
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　粘性やや強　しまり強
　炭化物粒(φ1～2㎜)2%、地山土5%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性やや強　しまり強
　炭化物粒(φ1～5㎜)5%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性普通　しまり強
　炭化物粒(φ1～3㎜)3%、地山土20%混入
4　黒褐色土(10YR2/3)シルト　粘性強　しまり強
5　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　粘性強　しまり強
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
6　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　粘性普通　しまり強
　炭化物粒(φ1～3㎜)3%混入
SKP221
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　粘性極弱　しまり普通
　炭化物粒(φ1～2㎜)1%混入

**第26図　ＳＫ186・187・188・191・192・193・194・217・218・365土坑、ＳＫＰ221柱穴様ピット**

ＳＫ198、他方をＳＫ277とした。堆積状況から当遺構が新しい。

平面形は長軸推定150㎝、短軸推定116㎝のずんぐりとした不整な楕円形だと考えられるが、開口部に比べ底部は小さめとなる。長軸方向はN79°Ｅ、深さ48㎝、礫上部までの高さ52㎝である。

底面は若干自然礫が露出するもののほぼ平坦である。壁はわずかに丸みを帯びて開いていくが、開口部付近で急に立ち上がる。

覆土は４層に分層される。１～３層に地山土の混入があるため人為的に埋め戻されたものと推測する。また覆土中から多数の礫を検出したが、当遺構構築時放り込まれたものか、ＳＫ277から落ち込んだものかは定かでない。

遺物は縄文土器片２点と剥片３点が出土している。

配石墓とするには判断材料が乏しく、遺構の性格の判断は困難である。

**ＳＫ199土坑［第27図、第８表］**

ＮＪ26グリッドにある。地山面精査中、黒褐色土略円形のプランを確認した。

平面形は長軸206㎝、短軸189㎝の不整な隅丸方形で、長軸方向はN41°Ｅ、深さ58㎝である。

底面は固くしまっており中心部がやや窪んで丸みを帯びている。壁は直線的に立ち上がる。

覆土は黒褐色土を主体とし３層に分層される。すべての層に炭化物と地山土を含み、２層土で細砂質となる。

ほとんどの遺物は確認面での検出であり、縄文土器片79点、剥片類９点が出土している。土器はほとんどが粗製土器である。

形状からは土坑墓の可能性が想定されるが、規模の大きさ、他の条件の乏しさから、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ213土坑［第28図、第８表］**

ＮＪ26・27グリッドにある。地山面精査中に黒褐色土プランを確認しＳＫ213とした。北側をＳＫ338と切り合い、当遺構が古い。また南側で撹乱を受けている。

平面形は長軸推定143㎝、短軸134㎝の不整な隅丸方形で、長軸方向N58°W、深さ42㎝である。

底面は固くしまり、自然礫の露出で凹凸が激しい。また壁面も底面同様自然礫が多く、立ち上がりは急である。

覆土は黒褐色土を主体とし３層に分層される。１・２層に地山粒の混入があり、すべての層に炭化物が混入する。

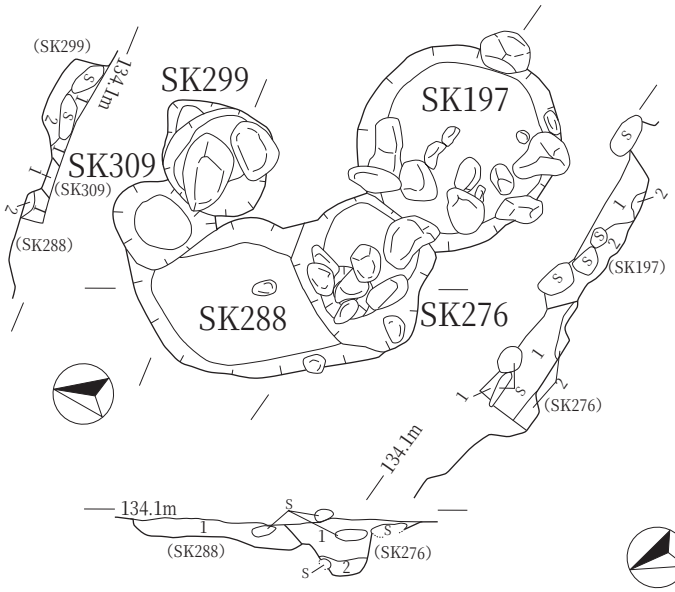
遺物は縄文土器片50点、剥片類６点が出土している。

**ＳＫ216土坑［第28図、第８表］**

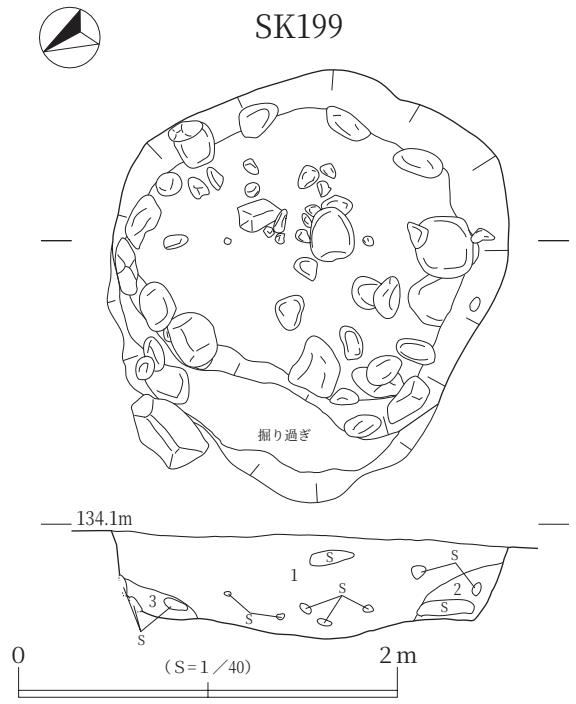
ＮＬ25グリッドにある。地山面精査中に褐色土略円形のプランを確認しＳＫ216とした。北側でＳＫ188と、北東側でＳＫ365と切り合い、両遺構より新しい。

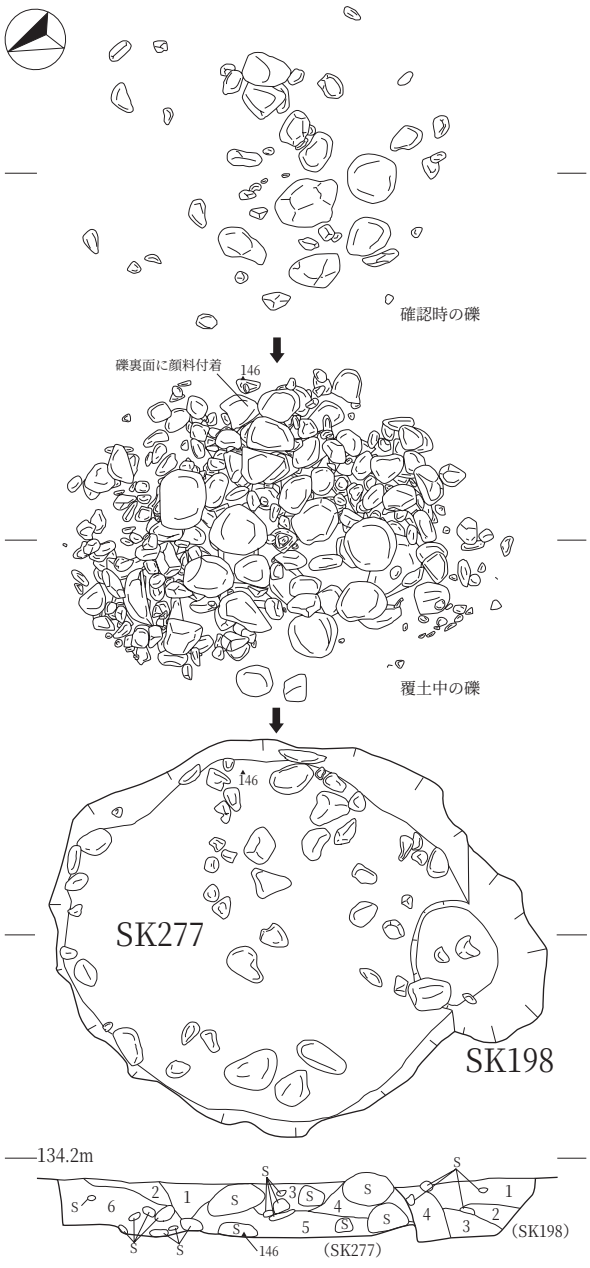
平面形は長軸101㎝、短軸95㎝の略円形で、長軸方向はN10°W、深さ14㎝である。

底面は南東側にピット状の掘り込みがあるがそれ以外は平坦である。壁はやや急に立ち上がる。




SK197
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりなし　粘性なし
2　褐色土(10YR3/4)　シルト～細砂　しまりなし　粘性なし
　地山土40%混入
SK276
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりなし　粘性なし
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～細砂　しまり弱　粘性なし
　地山土20%混入
SK288
1　暗褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通　粘性なし
　地山土30%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまり普通　粘性なし
　地山土90%混入
SK299
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通　粘性なし
　地山土50%混入
SK309
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土粒20%混入




SK198
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまり弱　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土粒10%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり強　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土40%混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまり強　粘性弱　地山土粒5%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまり弱　粘性弱
SK277
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性極強
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土5%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり極弱　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土5%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや強　粘性強　地山土15%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまり普通　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土5%混入
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～細砂　しまり普通　粘性弱
6　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～細砂　しまり普通　粘性極弱　地山土70%混入
SK199
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通　粘性極弱
　炭化物粒(φ1㎜)１%、地山土粒(φ1～5㎜)5%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂　しまり普通　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土30%混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性極弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土5%混入

**第27図　ＳＫ197・198・199・276・277・288・299・309土坑**

覆土は単一層で炭化物、地山土が混入する。

遺物は縄文土器片７点が出土している。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ217土坑［第26図、第８表］**

ＮＬ25・26、ＮＭ25グリッドにある。検出状況はＳＫ186と同様である。北側でＳＫ218と切り合い、新旧関係は不明である。

残存坑底部は南北約50㎝、東西約110㎝、深さは27㎝であり、壁はやや急に立ち上がっていたものと考えられる。

遺物は縄文土器片18点が出土している。

全体像を把握できず、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ218土坑［第26図、第８表］**

ＮＬ25・26、ＮＭ25グリッドにある。検出状況はＳＫ186と同様である。北側でＳＫ186と、南側でＳＫ217と切り合う。ＳＫ186より新しいが、ＳＫ217との新旧関係は不明である。

平面形は長軸推定191㎝、短軸推定112㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ34°Ｅ、深さ48㎝である。

底面は基本的に平坦であるが所々に多少の凹凸がある。壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土は６層に分層される。覆土の上層に地山粒が混入する。全ての層に炭化物粒が混入する。

遺物は覆土の上位から中位にかけて縄文土器片72点、剥片３点が出土している。土器片のほとんどが斜行縄文のみの粗製土器である。第53図89は器面に条痕文による曲線文が施される。

規模としては土坑墓の可能性も残されるが、形状、その他の条件からは性格の判断は困難である。

**ＳＫ223配石墓［第28図、第８表、図版13］**

ＮＬ27・28グリッドにある。Ⅲ層中を精査中に、ぼんやりとした黒色土の広がりを確認した。地山面まで掘り下げ明瞭なプランを得た段階でＳＫ223とした。

平面形は長軸125㎝、短軸104㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ３°Ｗ、深さ41㎝である。

底面は固くしまりほぼ平坦であるが、北半で段丘礫層の自然礫が露出する。壁は急に立ち上がる。

覆土は６層に分層される。黒褐色土と暗褐色土からなる層に分けられ、南側下位層で暗褐色土の割合が多くなる。１～４層には地山土が混入し、１・４層に炭化物が微量に含まれる。２層上位で検出した礫はほぼ同一レベルで略円形に配置される。底面中央より40㎝程の礫を検出した。

遺物は粗製縄文土器片が９点出土した。

規模・形状、意図的に配置されたと想定可能な礫の検出状況から判断すると、配石墓と位置付けられる。

**ＳＫ225配石墓［第28図、第８表］**

ＮＬ28グリッドにある。地山面精査中に、中礫が弧状に並ぶ暗褐色土楕円形の重複するプランを確

認し、西端をＳＫ225とした。ＳＫ293と東側で切り合い、堆積状況から当遺構が新しい。

平面形は長軸125㎝、短軸推定110㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ７°Ｅ、深さ38㎝である。

底面は段丘礫層の自然礫が露出しかなり凹凸が激しく、東側にやや落ち込む。壁は東半でほぼ垂直に立ち上がり、西半でやや外傾して立ち上がる。

覆土は暗褐色土の単一層で、微量の炭化物と地山土の混入がある。覆土上面北側で径８～17㎝程の礫が弧状に巡る。

遺物は覆土上位～中位にかけて縄文土器片24点、剥片９点を検出した。土器のほとんどは粗製土器片である。

覆土とⅢ層土が類似するため地山面での確認となったが、構築面はやや上面にあったと思われる。当遺構の西南西約２ｍに位置するＳＫ223にも弧状（円形）に巡る石組みを検出しているため、当遺構も同様の配石墓であった可能性が高い。

**ＳＫ246土坑［第28図、第９表］**

ＮＤ26グリッドにある。Ⅲ層中で径１ｍ程度の範囲に、径20㎝程度の大きさを主体とした礫の集中を確認しＳＱ246としたが、半截の結果掘り込みが深いことが判明しＳＫ246とした。周囲が段丘礫層の自然礫がかなり露出するため、遺構の見極めが極めて難しく、正確な広がりを捉えることが困難であった。

平面形は長軸161㎝、短軸102㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ４°Ｅ、深さ33㎝、礫上部までの高さは43㎝である。

底面は中央部でやや盛り上がり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面・壁面ともに段丘礫層の自然礫が露出し、極めて凹凸が激しい。

覆土は２層に分層される。２層土は径２～10㎝程の礫を多量に含む。段丘礫層を掘り込んだ際の埋め戻し土と推測する。

遺物の出土はない。

遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫ276土坑［第27図、第９表］**

ＮＫ27グリッドにある。検出状況はＳＫ197と同様である。ＳＫ197と東側で、ＳＫ288北西側で切り合う。ＳＫ197より古く、ＳＫ288より新しい。

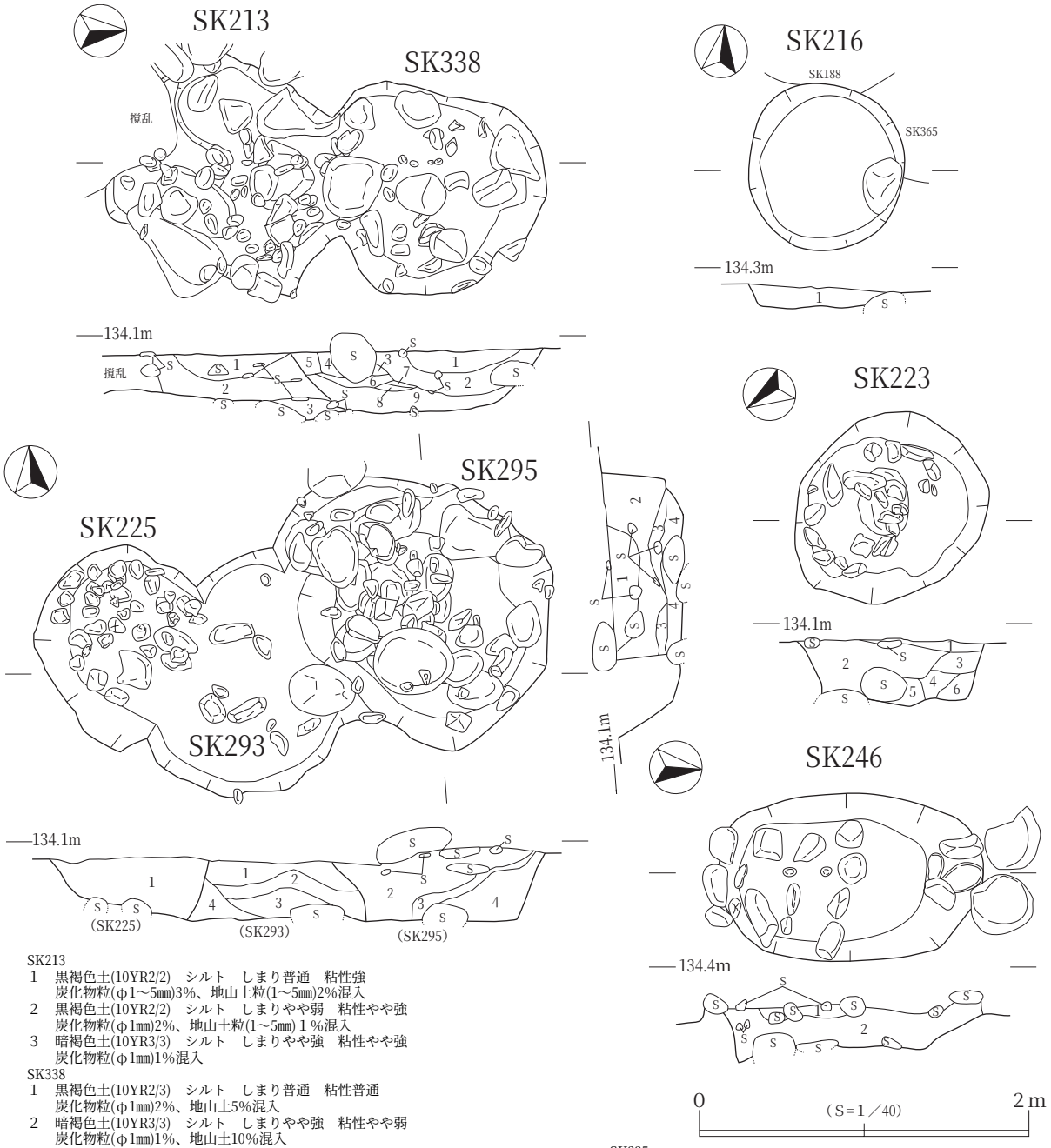
平面形は長軸推定90㎝、短軸63㎝の不整な楕円形であり、長軸方向はN61°W、深さ25㎝、礫上部までの高さ38㎝である。

底面は段丘礫層の自然礫が露出し平坦部が少なく、西端に径28㎝、深さ８㎝のピット状掘り込みを有す。壁は南東側でほぼ垂直に立ち上がるが、その他は開口部に向けて緩やかに開いた形となる。

覆土は２層に分層される。２層土に地山土が混入する。覆土上位に礫の集中を確認した。

遺物の出土はない。

小規模で、底面の形状が不整であるため、遺構の性格の特定は困難である。




SK213
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性強
　炭化物粒(φ1～5㎜)3%、地山土粒(1～5㎜)2%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや弱　粘性やや強
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土粒(1～5㎜)１%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入

SK338
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土5%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土10%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや強　粘性普通　地山土10%混入
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通　粘性普通
5　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや強　４層土10%混入
6　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1㎜)10%、４層土20%混入
7　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1㎜)5%混入
8　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり弱　粘性やや弱
　炭化物粒(φ１㎜)1%混入
9　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや強　粘性強
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土5%混入

SK216
1　褐色土(10YR4/4)　シルト　しまりやや強　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土1%混入

SK223
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり普通　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土5%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや強　粘性弱
　地山土塊(φ100～150㎜)50%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり普通　粘性普通
　地山土粒30%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりやや強　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土粒20%混入
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりやや弱　粘性なし
6　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性なし

SK225
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり普通　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土塊15%混入

SK293
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりやや弱　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土15%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりやや強　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)3%、地山土50%混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりやや強　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)3%混入
4　褐色土(10YR4/6)　シルト～細砂　しまり弱　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土30%混入

SK295
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土5%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや弱　粘性なし
　地山土5%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性弱
　地山土50%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりやや弱　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土10%混入

SK246
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまりやや強　粘性弱
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂　しまり強　粘性弱
　礫(φ20～100㎜)多量混入

**第28図　ＳＫ223・225・293・295・338配石墓、ＳＫ213・216・246土坑**

**ＳＫ277土坑［第27図、第９表、図版13］**

ＮＪ26・27、ＮＫ26・27グリッドにある。地山面精査中に暗褐色土のプランを確認した。南西側でＳＫ198と切り合い、当遺構が古い。

平面形は長軸が345㎝、短軸が319㎝の不整な略円形で、長軸方向はN60°Ｅ、深さ52㎝、礫上部までの高さ56㎝である。

底面は段丘礫層の自然礫の露出で若干凹凸があるもののほぼ平坦である。壁面と覆土の境界が判断しづらく、覆土のしまり具合の感触を手がかりに掘り進めた。礫の混入が見られなくなる付近で極めて固くしまり、壁とした。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は暗褐色土を主体とし６層に分層される。５層を除くすべての層に地山土の混入を認めた。また覆土中に混入する礫は大小様々であり、大礫が中位から上位にかけて多く見られる以外、特に規則的な配置等は見られなかった。

底面直上東側から赤色顔料の塗彩された土製小玉（第58図146）１点、裏面に少量の赤色顔料の付着する礫１点が出土した。そのほかの出土遺物は縄文土器片が10点、剥片が２点である。

副葬品と捉えられる赤色顔料塗彩の土製小玉の出土や、検出した礫に赤色顔料が付着していたことなどから判断すれば、当然墓としての性格付けがなされるが、当遺構は規模が大きすぎるため、すんなり配石墓とするには若干躊躇せざるを得ない。遺構の規模から当遺構は複数が重複していた可能性も考えられるが、断面観察からそれを捉えることはできなかった。また、当遺跡内で他に同規模で大型の配石墓は存在せず例外の部類に入る。したがって配石墓の可能性も想定しうるが、ここでは土坑と位置付けておく。

**ＳＫ282土坑［第29図、第９表］**

ＮＩ27グリッドにある。Ⅲ層中を精査中に不明瞭な暗褐色土のプランを確認。地山面まで掘り下げたところ明瞭なプランを得、ＳＫ282とした。

平面形は長軸70㎝、短軸54㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN21°Ｗ、深さ23㎝である。

底面はやや固くしまっており、南側に若干落ち込みを見せ、壁は急に立ち上がる。

覆土は暗褐色土を主体とし３層に分層される。全ての層に微量の炭化物と地山土が混入する。

出土遺物は縄文土器片１点のみである。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ283土坑［第29図、第９表］**

ＮＩ27グリッドにある。Ⅲ層精査中、ぼんやりとした黒褐色土のプランを検出。地山面まで掘り下げた段階で明瞭な楕円形プランを確認しＳＫ283とした。

平面形は長軸107㎝、短軸79㎝の不整な楕円形で、長軸方向はN85°Ｗ、深さは26㎝、礫上部までの高さ40㎝である。

底面は固くしまっておりほぼ平坦である。壁は西側でほぼ垂直に立ち上がるが、それ以外はやや丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。

覆土は黒褐色土を主体とし、２層に分層される。１層に微量の炭化物と地山土が混入する。底面付

近から数点の礫を検出した。また確認面にある40㎝程の礫は１層に半分埋まった状態で検出している。

遺物は粗製縄文土器片18点、剥片１点を検出した。

当遺構は比較的底面・壁面がしっかりしていることから土坑墓の可能性も想定されるが、小規模であるため、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ287土坑［第29図、第９表］**

ＮＫ27グリッドにある。検出状況はＳＫ197と同様である。ＳＫ299と西側で切り合い、当遺構が古い。

平面形は長軸72㎝、短軸64㎝のずんぐりとした方形に近い不整な楕円形で、長軸方向はＮ28°Ｅ、深さ12㎝である。

底面はほぼ平坦であるが北東側にピット状の掘り込みを有す。ピット状の掘り込みの底面には扁平な自然礫が露出する。壁はほとんど残っていないがほぼ垂直に近い形で立ち上がっていたものと思われる。

覆土は４層に分層される。第２層に地山土の混入が見られるが覆土の堆積状況から自然堆積と思われる。

遺物の出土はチップ１点のみである。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ288土坑［第27図、第９表］**

ＮＫ26・27グリッドにある。検出状況はＳＫ197と同様である。南側でＳＫ276と、北東側でＳＫ309と切り合い、両遺構より古い。

ＳＫ276に切られるため全体形は不明であるが、長軸推定144㎝、短軸85㎝の不整な長楕円形で、長軸方向はＮ18°Ｗ、深さ20㎝である。

底面はほぼ平坦だが南側に若干落ち込み、壁は開口部に向けて緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土は２層に分層される。暗褐色土を主体とし地山粒がかなり混入する。

粗製縄文土器片１点のみ出土した。

遺構の全体像が把握しがたく、判断材料に欠けるため、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ293配石墓［第28図、第９表］**

ＮＫ27・28、ＮＬ27・28グリッドにある。検出状況はＳＫ225と同様である。西側でＳＫ225と北東側でＳＫ295と切り合う。堆積状況から両遺構より古い。

平面形は長軸推定155㎝、短軸推定120㎝のずんぐりとした方形に近い楕円形で、長軸方向はＮ32°Ｅ、深さ37㎝である。

底面は固くしまっており平坦であるが、南側に段丘礫層の自然礫が若干露出する。残存する壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は暗褐色土を主体とし、４層に分層される。１・２・４層に地山土が混入している。また、すべての層に炭化物が微量混入している。

出土遺物は縄文土器片19点、剥片２点である。土器片は前期に比定される土器が多い。

確認面北北東と中央に礫の集中があり、規模・形状からも配石墓との判断が可能である。

**ＳＫ295配石墓［第28図、第９表］**

ＮＫ27・28グリッドにある。検出状況はＳＫ225と同様である。西側をＳＫ293と切り合い、当遺構が新しい。

平面形は長軸179㎝、短軸146㎝のずんぐりした方形に近い楕円形で、長軸方向はN37°Ｗ、深さ49㎝、礫上部までの高さは56㎝である。

底面は自然礫が多くみられるがそれ以外は固くしまりほぼ平坦である。壁は外傾してやや急に立ち上がるも、北西側では中位で段をなして平場を作り、再び急に立ち上がる。

覆土は暗褐色土を主体とし４層に分層される。すべての層に地山土が混入している。また１・４層に微量の炭化物粒の混入がある。土坑の北西半、覆土上位から下位にかけて径８～44㎝程の礫が多量に混入する。

遺物は縄文土器片９点、剥片１点が出土した。

礫の検出状況、土坑の規模・形状等から配石墓と位置付けた。

**ＳＫ299土坑［第27図、第９表］**

ＮＫ26・27グリッドにある。検出状況はＳＫ197と同様である。ＳＫ287と北東側で、ＳＫ309と西側で切り合い、両遺構より新しい。

平面形は長軸70㎝、短軸推定60㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、北東部で尖った形となる。長軸方向はN29°Ｗ、深さ24㎝である。

底面は鍋底状で固くしまる。壁は東側で垂直に立ち上がる他はやや緩やかに立ち上がる。北東部は中位で段をなしている。

覆土は２層に分層される。覆土中位１・２層にかけて扁平な礫２点を検出した。坑中央部に向かって斜位の状態で検出しているため、坑底部付近の覆土の陥没により落ち込んだものと推測する。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ301土坑［第29図、第９表］**

ＮＤ25・26グリッドにある。漸移層を掘り下げていたところ、黒褐色土楕円形のプランを検出した。

平面形は長軸108㎝、短軸82㎝の楕円形で、長軸方向はN36°Ｗ、深さ55㎝である。

底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面・壁面ともに段丘礫層中の自然礫が露出し凹凸が激しい。

覆土は黒褐色土を主体とし、混入物の違いで２層に分層される。１・２層とも炭化物や中礫が混じるが、２層土には地山粒が混入する。また２層土中位から30㎝大の礫を検出している。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ307土坑［第29図、第９表］**

ＮＬ・ＮＭ24グリッドにある。地山面精査中、暗～黒褐色土のプランを確認しＳＫ307とした。東側でＳＩ190と切り合い、当遺構が新しい。

平面形は長軸99㎝、短軸87㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ17°Ｗ、深さ31㎝である。

底面は固くしまり平坦であり、壁は急に立ち上がる。一部でオーバーハングするが、覆土中根痕が多く木根の撹乱による可能性が高い。

覆土は暗～黒褐色土を主体とし６層に分層されるが、一部木根による撹乱を受ける。すべての層に炭化物が混入している。また２～５層に地山土が混入している。

遺物は縄文土器片３点が出土している。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ309土坑［第27図、第９表］**

ＮＫ27グリッドにある。ＳＫ299を精査中、堆積状況から北西側を別遺構と認定しＳＫ309とした。ＳＫ299と南東側で、ＳＫ288と南西側で切り合う。ＳＫ299より古く、ＳＫ288より新しい。

平面形は長軸推定55㎝、短軸推定50㎝の不整な略円形と推測され、長軸方向はＮ14°Ｅ、深さ26㎝である。

底面は段丘礫層の自然礫が露出し凹凸が激しく、壁はやや急に立ち上がる。

覆土は黒褐色土の単一層であり、ＳＫ299の第１層に類似している。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ313配石墓［第29図、第９表］**

ＮＩ・ＮＪ27グリッドにある。地山面精査中に暗褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ313とした。

平面形は長軸166㎝、短軸121㎝のやや不整な楕円形で、長軸方向はＮ88°Ｗ、深さ43㎝、礫上部までの高さ43㎝である。

底面は固くしまっており、自然礫の露出による凹凸が激しい。壁はやや丸みを帯びながら急に立ち上がる。

覆土は黒褐色土を主体とし、３層に分層される。１・３層に微量の炭化物と地山土の混入がある。遺構中心部に15～29㎝程の礫が横断するように集中する。

赤色塗彩の施された土器１点を含む縄文土器片が20点、剥片４点が出土した。

礫の検出状況、遺構の規模・形状から配石墓と位置付ける。

**ＳＫ317土坑［第29図、第９表］**

ＮＩ27・28グリッドにある。地山面精査中に黒褐色土のプランを確認しＳＫ317とした。

平面形は長軸119㎝、短軸102㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ61°Ｗ、深さ24㎝である。

底面は自然礫が多くかなり凹凸があり、南東方向に落ち込んでいく。壁も底面同様、自然礫の露出

で凸凹している。北西半で一度平場を作って二段階に立ち上がる他は、緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土は黒褐色土を主体とし２層に分層される。全体に微量の炭化物と地山土の混入がある。

遺物の出土はない。

**ＳＫ319配石墓［第29図、第９表］**

ＮＨ・ＮＩ28グリッドにある。地山面精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ319とした。

平面形は長軸153㎝、短軸119㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はＮ13°Ｅ、深さ34㎝である。

底面は自然礫が多く凹凸が顕著である。壁南西側は鋭く立ち上がり、東側では自然礫が多くなだらかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色を主体とし、３層に分層される。１層に地山土の混入が、１・２層に微量の炭化物の混入がある。また覆土中に大量の礫の混入があった。

遺物は縄文土器片６点を検出している。

当遺構は確認面が地山直上だったため坑底部しか残らなかったが、本来はより深かったものと考えられ、礫の検出状況、その規模・形状、覆土の特徴などから配石墓と位置付けた。

**ＳＫ323土坑［第29図、第９表］**

ＮＨ27・28グリッドにある。地山面精査中に不整な暗褐色土楕円形のプランを確認しＳＫ323とした。

平面形は長軸148㎝、短軸115㎝のずんぐりとした不整な楕円形で、長軸方向はＮ42°Ｗ、深さ30㎝である。

底面、壁面ともに自然礫が多く凹凸が顕著である。壁はやや丸みを帯びてやや急に立ち上がる。

覆土は暗褐色土の単一層である。微量の炭化物粒と地山粒を含む。また覆土中において礫を複数検出した。

縄文土器片４点、剥片２点が出土している。

掘方形状がいびつであり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ324土坑［第29図、第９表］**

ＮＩ27・28、ＮＪ27・28グリッドにある。地山面精査中、不定形の黒褐色土のプランを確認した。

平面形は長軸144㎝、短軸138㎝の不整な方形で、長軸方向はＮ28°Ｅ、深さ37㎝であり、南側の一部で撹乱を受ける。

底面は自然礫が多く凹凸がある。壁は丸みを帯びて急に立ち上がる。

覆土は黒～暗褐色土で５層に分層される。２・３層に地山土が、４層を除くすべての層に微量の炭化物が混入している。２層は極めて固くしまり、地山土が混入する。

縄文土器片12点が出土している。

**ＳＫ338配石墓［第28図、第９表］**

ＮＪ27グリッドにある。検出状況はＳＫ213と同様である。南側でＳＫ213と切り合い、当遺構が新しい。また北東側でＳＫＰ312・325と接している。

平面形は長軸138㎝、短軸133㎝の不整な略円形で、長軸方向はN35°Ｅ、深さ42㎝、礫上部までの高さ49㎝である。

底面は固くしまり平坦であり、壁はやや丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。両面とも自然礫が露出する。

覆土は９層に分層される。黒褐色土を主体とし、１・２・６～９層に炭化物粒が少量混入する。また１～３・９層に地山土が混入する。覆土上面から中位にかけて径30～40㎝程の礫が不規則に投げ込まれる。

当遺構からの出土遺物は粗製の縄文土器片が主体である。縄文土器片41点、二次加工のある剥片１点が出土している。

底面・壁面がしっかりしており、規模・形状、礫の検出状況などから配石墓と位置付けた。

**ＳＫ365土坑［第26図、第９表］**

ＮＬ25グリッドにある。遺構北東側をＳＫ188と、南西側をＳＫ216と切り合っている。ＳＫ188との新旧関係は不明である。またＳＫ216より古い。

平面形は長軸73㎝、短軸推定55㎝の不整な略円形であり、長軸方向はN34°Ｅ、深さ19㎝である。

底面は平坦で壁はやや緩やかに立ち上がる。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

**ＳＫ366土坑［第30図、第９表］**

ＭＭ・ＭＮ25グリッドにある。地山上面を精査中に黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸123㎝、短軸102㎝のずんぐりとした方形に近い不整な楕円形で、長軸方向はN41°Ｅ、深さ25㎝である。

底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は地山粒、炭化物等の混入する単一層、埋め戻し土である。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。

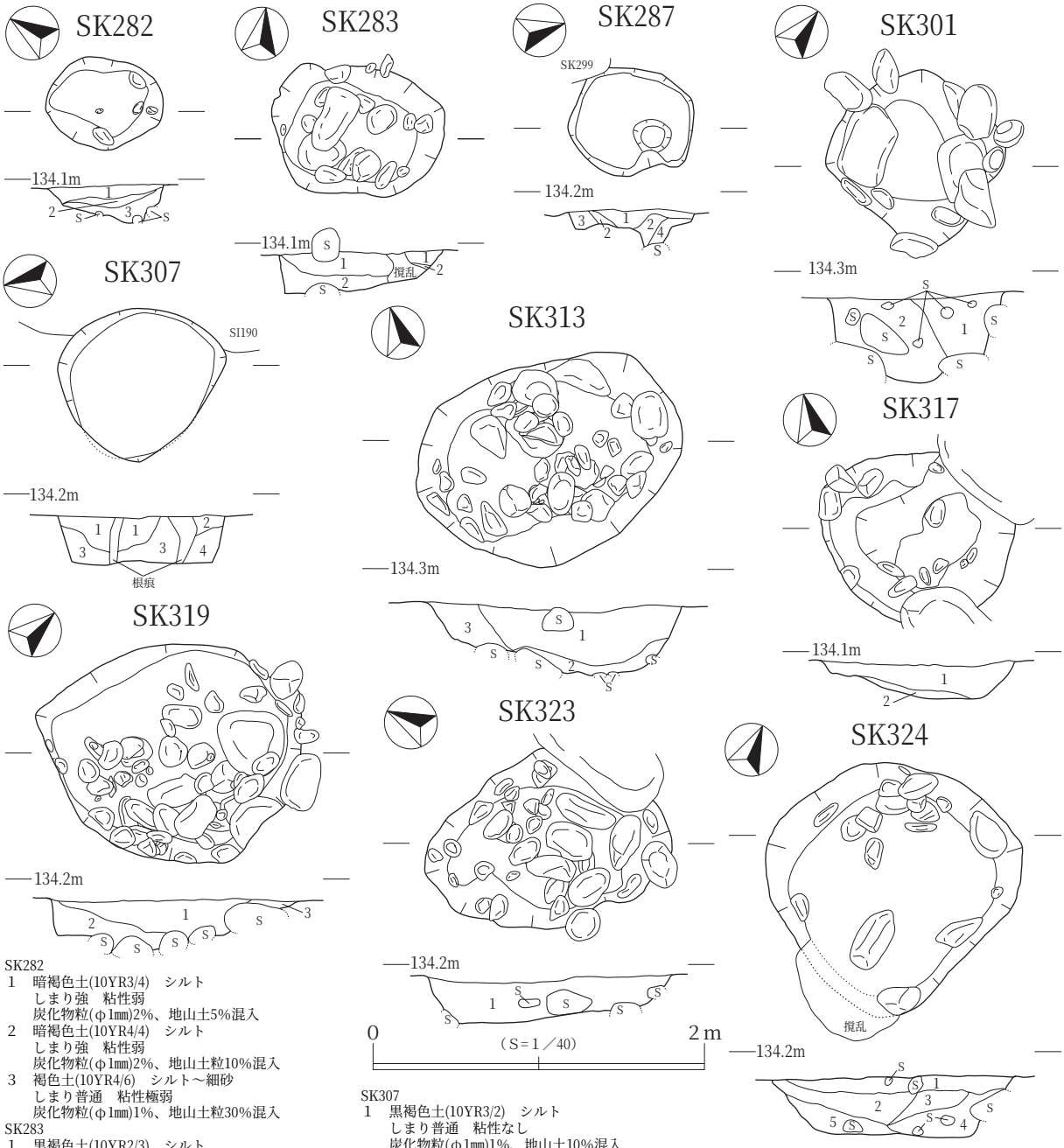
**ＳＫ387配石墓［第30図、第10表］**

ＭＴ・ＮＡ24グリッドにある。段丘礫層か人為的集石かの判断が難しかったため、24ラインに幅１ｍのトレンチを設定し地山面まで掘り下げた。地山面で検出した黒褐色土上に土器の集中を認め、さらに周辺の精査を進めたところ楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸154㎝、短軸144㎝の不整な略円形で、長軸方向はN83°Ｗ、深さ39㎝である。

底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。両面とも自然礫が露出し凹凸があり、壁面は特に激しい。

覆土は３層に分層される。１～２層土は黒褐色土を主体とし、１層土には焼土粒が混入する。２～３層土には径５～10㎝程の礫が混入し、３層土でその割合が多くなる。遺構全体からまばらに径10㎝前後の礫が検出された。若干中央に集中する。




SK282
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり強　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土5%混入
2　暗褐色土(10YR4/4)　シルト
　しまり強　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土粒10%混入
3　褐色土(10YR4/6)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性極弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土粒30%混入

SK283
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土5%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂
　しまり普通　粘性弱
　地山土30%混入

SK287
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりやや強　粘性なし
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性なし
　地山土30%混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり極強　粘性やや強
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入

SK301
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　炭化物(φ1～3㎜)1%、
　礫(φ50～100㎜)多量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや弱　粘性普通
　炭化物(φ1～3㎜)微量、礫(φ50～100㎜)多量、
　地山土粒(φ5㎜)少量混入

SK307
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土10%混入
2　褐色土(10YR4/6)　シルト　２層に類似
　しまりなし　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土80%混入
3　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)2%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりなし　粘性なし
　炭化物粒(φ1㎜)3%、地山土10%混入

SK313
1　黒褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土粒5%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり普通　粘性やや強
3　暗褐色土(10YR4/4)　シルト
　しまりやや強　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土30%混入

SK317
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり普通　粘性強
　炭化物粒(φ1～2㎜)3%、地山土5%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり普通　粘性弱
　１層土20%、地山土30%混入

SK319
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや強
　粘性普通　炭化物粒(φ1㎜)1%、
　地山土粒(φ1～10㎜)3%混入
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト～細砂　しまり普通
　粘性弱　炭化物粒(φ1㎜)1%、１層土5%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり普通　粘性弱

SK323
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性弱　炭化物粒(φ1㎜)1%、
　地山土粒(φ1～3㎜)3%混入

SK324
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや弱
　粘性普通　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり極強
　粘性弱　炭化物粒(φ1㎜)3%、地山土粒7%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり極強　粘性弱
　炭化物粒(φ1～5㎜)5%、地山土80%混入
4　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり普通　粘性普通
5　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入

**第29図　ＳＫ313・319配石墓、ＳＫ282・283・287・301・307・317・323・324土坑**

出土遺物の多くが確認面での出土であり、粗製土器片を主体とし、縄文土器片30点が出土している。

礫の検出状況、規模・形状等から、配石墓と位置付けておく。

**ＳＫ398土坑［第30図、第10表］**

ＮＨ、ＮＩ26・27グリッドにある。ＳＸ286を精査中、北壁に切り合うような形で黒褐色土のプランを確認したため、地山面を再度精査し直し平面プランを確定、ＳＫ398とした。新旧関係は不明である。

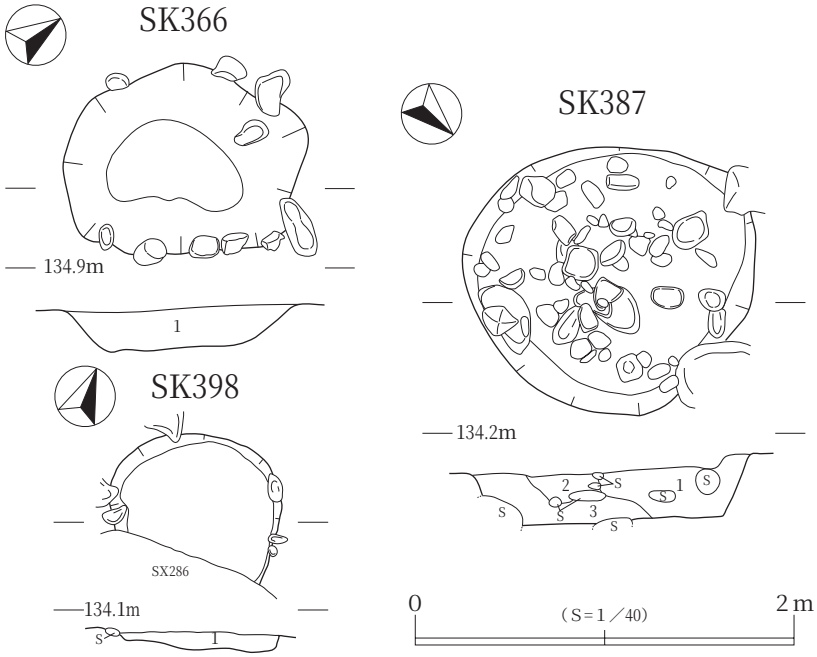
平面形は推定で径96㎝程の、不整な略円形と考えられ、長軸方向はN63°Ｗ、深さは14㎝である。

底面は固くしまり平坦で、壁はやや丸みを帯びながら急に立ち上がる。

覆土は黒褐色土の単一層で、微量の炭化物粒と地山粒を含む。

遺物の出土はない。

小規模であり、遺構の性格の特定は困難である。




SK366
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ1㎜)1%、
　地山土粒(φ1～3㎜)5%混入
SK387
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりやや弱　粘性普通
　炭化物(φ1～5㎜)5%、
　焼土(5YR3/6)粒(φ1～3㎜)3%混入
　土器片含む
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　炭化物(φ1㎜)1%、
　礫(φ5～100㎜)少量混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　礫(φ50～100㎜)多量混入
SK398
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　粘性弱　しまり普通
　炭化物粒(φ1㎜)2%、地山土粒1%混入

**第30図　ＳＫ387配石墓、ＳＫ366・398土坑**

（２）ＳＱ（配石遺構）

向様田Ａ遺跡では、多種多様な配石遺構が検出された。東西２箇所には大規模な環状配石遺構があり、東部環状配石遺構の北側には石囲炉状配石遺構をはじめとして、小規模な配石遺構が群をなす。

**【東部環状配石遺構】［第31・32図、巻頭図版５、図版５］**

平成12年度の調査範囲でＭＥライン以西の区域は、調査開始段階では、段丘礫層が露出した範囲として捉えていたが、粗掘・精査を進める過程で、部分的に明らかに人為的に礫を配置している箇所が数箇所検出された。平成12年度の段階ではこれらを一応は個別の遺構として取り扱い、記録を残した。しかし、前述のとおり、平成13年度調査で、東部環状配石遺構中心部配石（第33図）を中心に大規模な環状配石遺構が構築されていたことが判明した。したがって、今回記述する各遺構に関しては平成13年度調査段階での記述であり、全面補足調査後は若干意味合いが変わってくる可能性があろうかと思われる。

東部環状配石遺構は、中心部に直径約1.5mの円形の配石があり、その周囲には礫のない区画が巡り、さらにその外側には環状に礫が積み上げられる。その規模は積石部の直径が約13m、幅約２m、高さ約40㎝である。さらにその北側には礫のない区画が広がり、またその北に長さ約20m、幅約６m、高さ約60㎝の規模で弧状に礫が積み上げられる。この一連の大規模な配石遺構は、従来礫層が露出する箇所に構築され、人為的な部分と自然な部分の差異が明瞭ではない。また、配石に用いられている礫の大きさ、形状は様々で規則性は見られない。

**東部環状配石遺構中心部配石［第33図、巻頭図版５］**

ＭＩ24・25グリッドにある。基本土層Ⅰ層を掘り下げ、段丘礫を明らかにする過程で円形に組まれる礫を検出。平成12年度はＳＱ77配石遺構として精査を進めたが、平成13年度調査で、周囲に巡る環状配石遺構と一連のものと判断し、東部環状配石遺構中心部配石とした。

平面形は長軸152㎝（北北東－南南西）、短軸148㎝の略円形であり、南側で開いた形となる。

径10～40㎝程度の扁平な礫､円礫をおよそ30点用いている｡礫を配置する際の掘方は確認できなかった。また、下部施設の存在については調査を行っていないため詳細は不明である。

前述のとおり当配石の周囲には礫の無い区画が半径３m程の規模で巡る。

**ＳＱ43配石遺構［第32図、巻頭図版５］**

ＭＥ23・24、ＭＦ23・24グリッドにある。当該区において、基本土層Ⅰ層を掘り下げ、段丘礫を明らかにする過程で、一見乱雑で段丘礫層が露出しているものと捉えていたが、円形に礫が組まれた箇所が２つ並んでいるのを確認した。周辺を精査し、掘方等を確認することに努めたが、配石内の土と周辺の礫の含まれる層（基本土層Ⅶ・Ⅷ層）を差別化することはできなかった。東側の配石をＳＱ43、西に隣接する配石をＳＱ44として精査を進めた。

平面形は長軸77㎝、短軸64㎝の略円形である。

径25～30㎝程度の扁平な礫を主に用いている。掘方等は検出できず、円形に配された礫に囲まれた部分は、深さ20㎝ほどであり、西側に礫がみられなかった。また、配石の周囲も他の箇所と比較すれ

ば、検出面において礫があまりみられない傾向にある。

配石の外側になるが、遺構の北から第61図181の石剣が出土した。石剣の柄部分で、現存長21.4㎝、柄部分の最大径4.4㎝である。柄部分には三叉文が彫り込まれている。

**ＳＱ44配石遺構［第32図、巻頭図版５］**

ＭＦ23グリッド（Ａ２区南東部）にある。検出に至る過程はＳＱ43で述べたとおりである。

平面形は直径約63㎝の略円形である。径15～25㎝程度の扁平な礫を主に用いている。掘方等に関してもＳＱ43で述べたとおりである。

**ＳＱ76配石遺構［第33図、巻頭図版５］**

ＭＫ23グリッド（Ａ２区南西部）にある。検出に至る過程はＳＱ43と同様である。

平面形は長軸165㎝（東―西）、短軸120㎝の楕円形である。

主に径30～40㎝の礫を楕円形に配しているが、西部に礫がなく開いた形になる。掘方等の検出は不可能であり、また、下部施設の確認は行っていないため詳細は不明であるが、中心部には礫がみられず、配石周囲には礫がまばらである点は当該地区で検出した他の配石遺構と同様である。

当配石遺構の北西部に破損した石刀（第61図182）が出土し、そこから20㎝ほど北西から出土した石刀と接合した。

以上のように周辺に個別に配置された遺構が存在したこと、また、円形に礫が見られない箇所が点在することなどから、さらに精査を進めれば遺構が検出される可能性は高い。また、下部施設の存在も考えられる。

**【西部環状配石遺構】［第34図、巻頭図版６、図版６］**

Ｂ区ほぼ中央で、基本土層Ⅱ層を除去し、礫を露出させる作業を行ったところ、ＮＤ、ＮＥ25・26グリッドに扁平な礫が並んだ敷石状の配石を確認した。はじめはこれを個別の配石遺構として扱っていたが、周辺に礫が稀薄であること、その外側に比較的小さな礫がやや集中傾向にあることなどからこれらが一連の遺構であるとして、西部環状配石遺構とした。

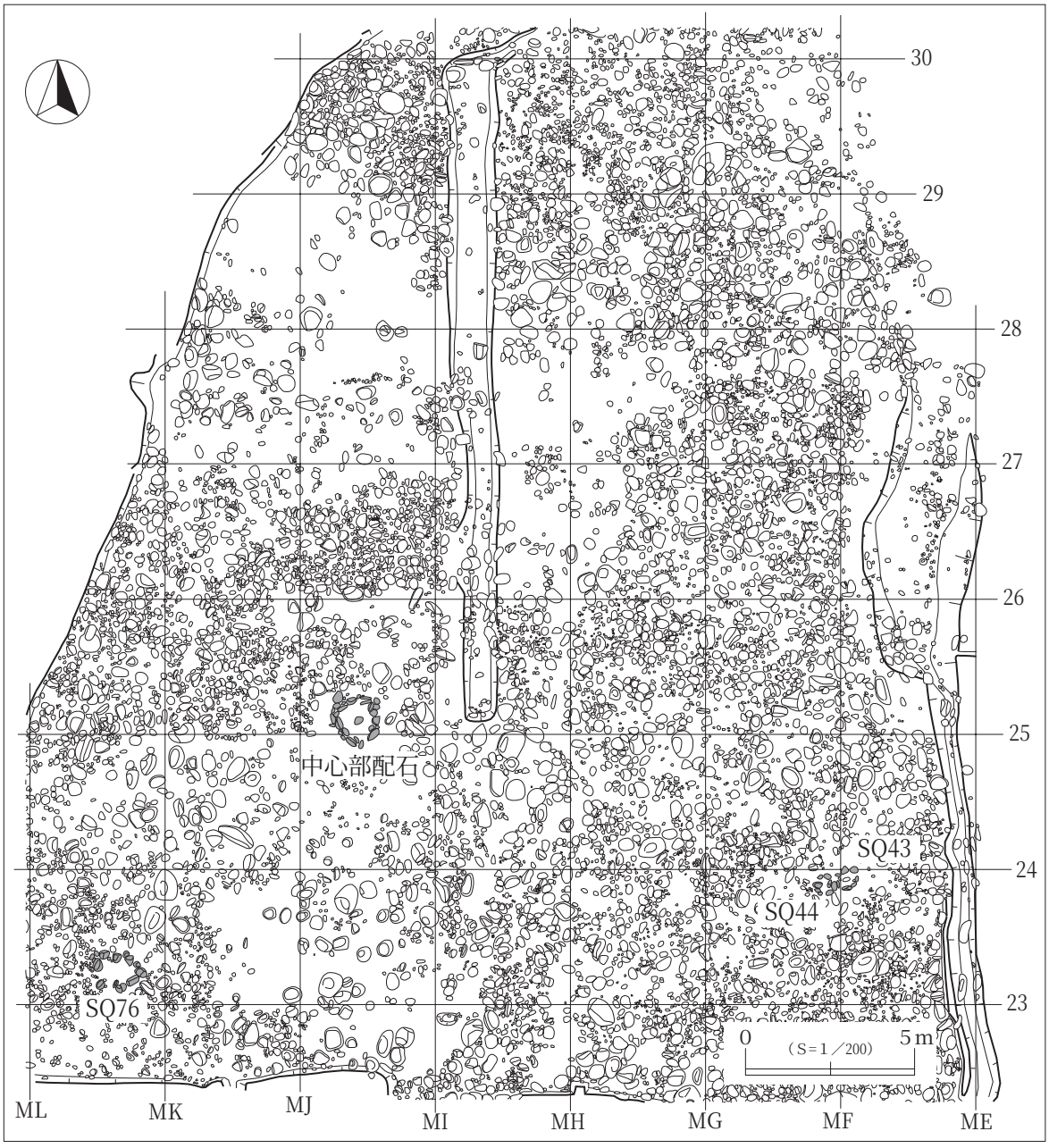
敷石部を中心として周辺（特に礫の稀薄な部分）には数基の土坑らしきプランが検出され、完掘すると、径が比較的小さく、深さのある掘方をもった遺構となった。小規模なものは柱穴として捉えたが、西部にある規模の大きなものは、一応は性格不明遺構として扱っている。しかしながら、検出位置、覆土の特徴等から、これらも柱穴として扱うことが可能かもしれない。

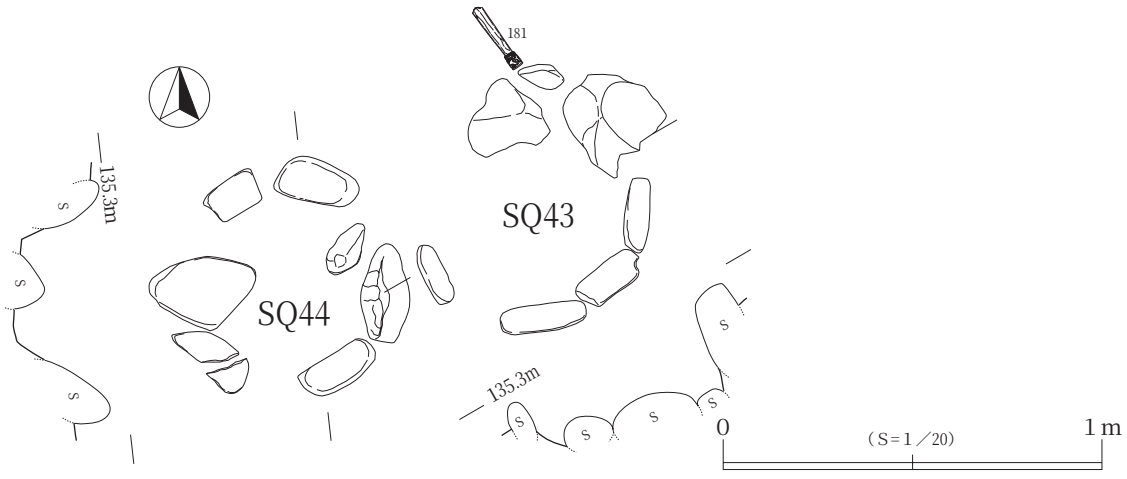
**西部環状配石遺構中心部敷石［第35図、巻頭図版６］**

ＮＤ、ＮＥ25・26グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に扁平な礫の集中を認め、漸位層まで掘り下げた段階でさらに広い範囲で敷き詰められる礫を確認した。

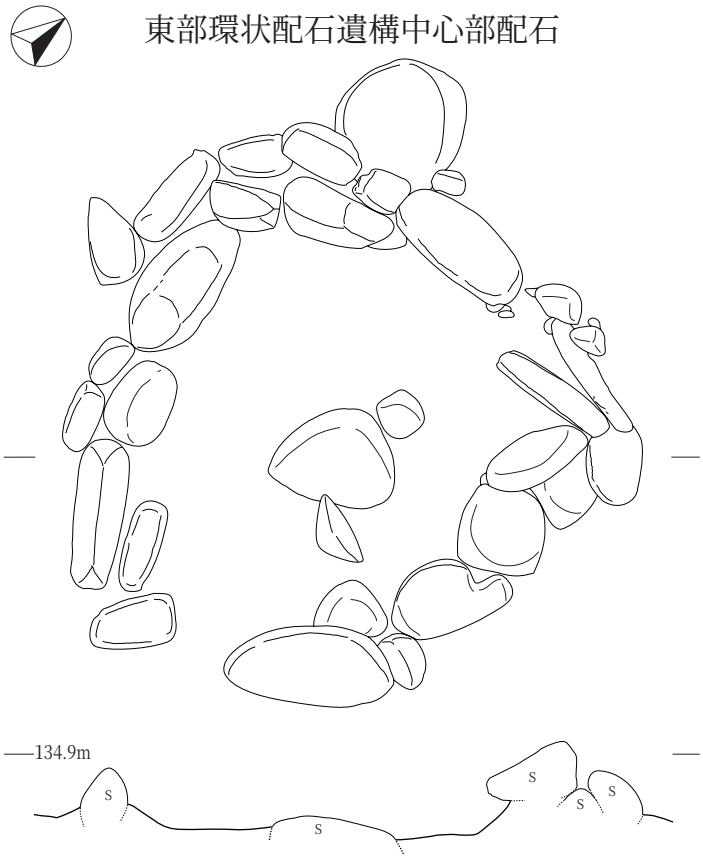
平面形は長軸385㎝（北西―南東）、短軸192㎝の不整形の範囲に扁平な礫が敷き詰められる。弧状に巡る部位の南東端に配置される礫の中央部には長径12㎝程の窪みを有す。敷き詰められる礫のほと

第31図　東部環状配石遺構

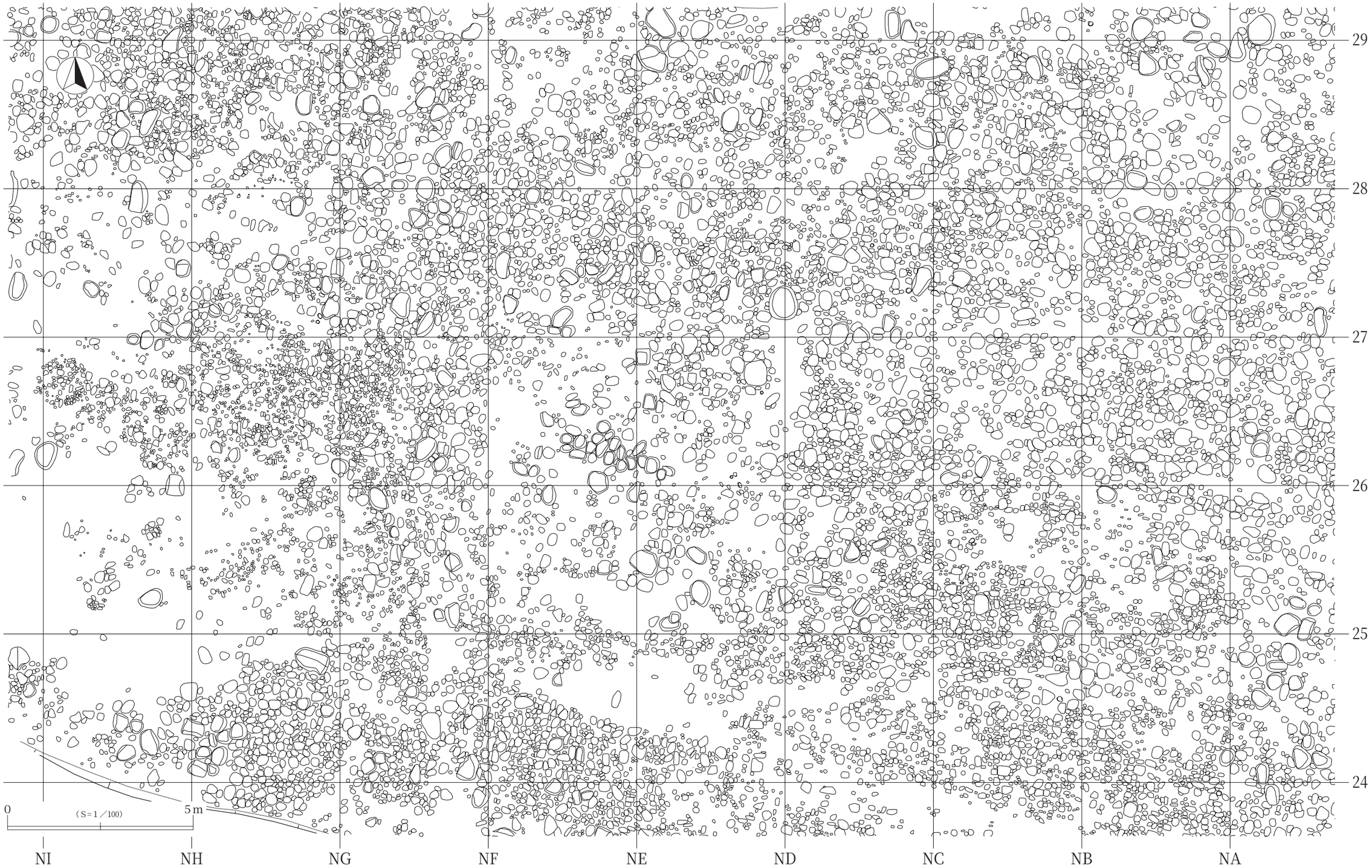


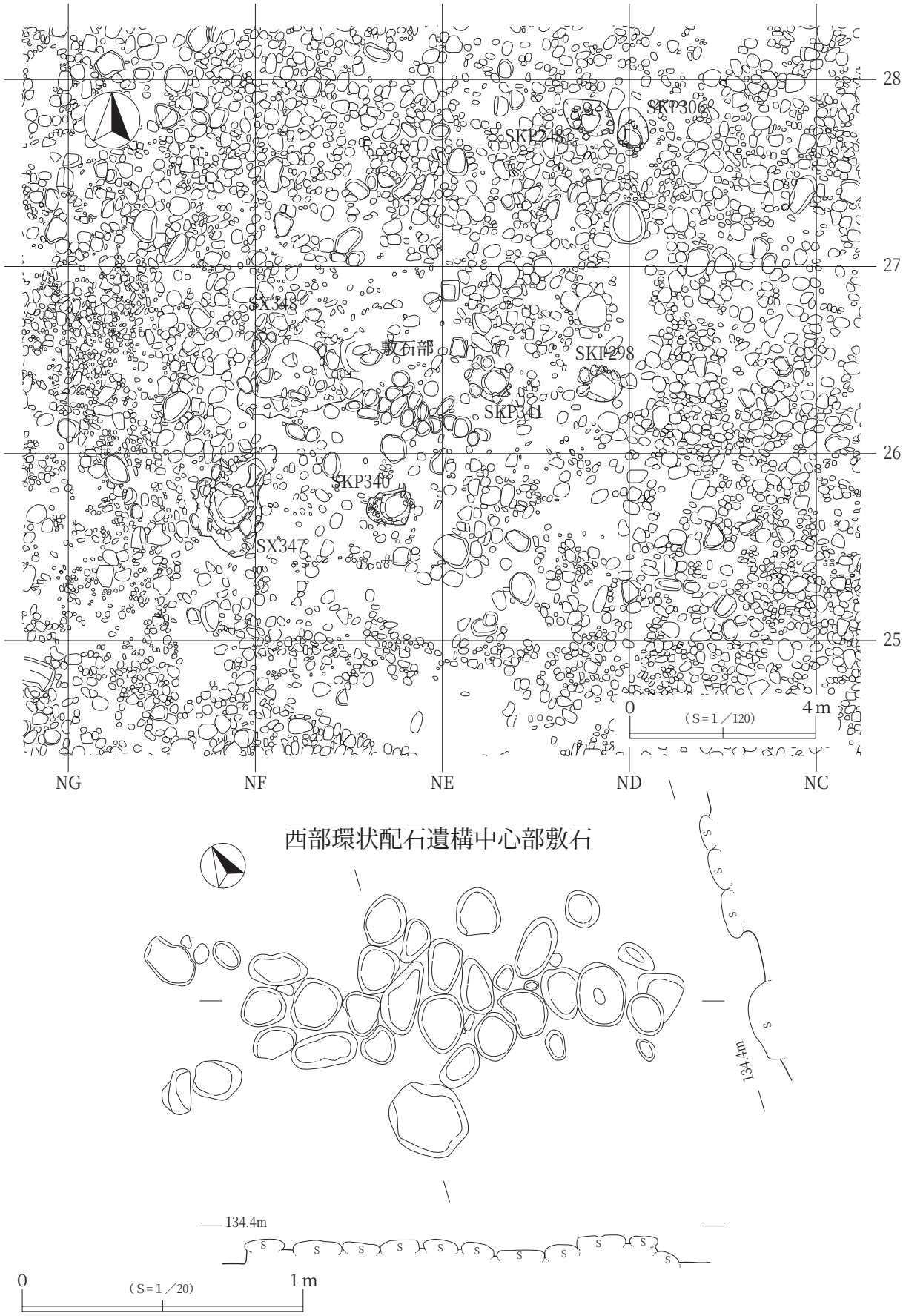

**第32図　東部環状配石遺構関連遺構位置図、ＳＱ43・44配石遺構**




**第33図　東部環状配石遺構中心部配石、ＳＱ76配石遺構**




**第34図　西部環状配石遺構**




**第35図　西部環状配石遺構関連遺構位置図、中心部敷石**

んどに扁平礫が用いられており、30～50㎝程の大きさで構成される。敷き詰められる礫上面レベルの最大差は４㎝であり、敷石全体として同時に構築された可能性が高い。扁平礫同士の隙間に中礫のはめ込みがみられるのは５箇所であり、全ての隙間に埋め込んでいるわけではなく特に規則性はみられない。

当遺構周辺からは柱穴と推測できる遺構が６基程確認されている。当遺構の東端・南端１ｍ弱の位置にそれぞれＳＫＰ341、ＳＫＰ340が掘り込まれているが、さらにその周囲にはＳＫＰ298・ＳＸ347が位置する。特にＳＫＰ340・341、ＳＸ347の埋設深度はかなり深かったと考えられ、ある程度の高さを持った柱状構造物があったと推測する。

**ＳＸ347性格不明遺構［第35・36図、巻頭図版６］**

ＮＥ25、ＮＦ25・26グリッド（西部環状配石遺構中心部敷石の南西側約４ｍ）にある。漸移層中を掘り下げ中に不明瞭なプランを検出、さらに掘り下げたところ、地山面で不整な黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸246㎝、短軸156㎝の不整な台形で、長軸方向はＮ29°Ｅ、深さ156㎝である。

底面は平坦で最大径約60㎝の楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北東壁のみ緩やかに立ち上がる。壁は全体的に自然礫の露出で凹凸が激しい。

覆土は５層に分層される。１～４層が黒褐色土、５層が暗褐色土である。断面の特徴から、１・２層が柱痕跡、３・４層が柱根固め土に相当し、５層土は高さ調節をしたものと推測する。５層上位から検出された円礫は基礎石に相当するものと考えられる。湧水の影響で底面付近の精査は困難を極めたが、泥土化した炭化物と思われるまとまりを検出している。覆土全体に径５～10㎝程の礫が混入する。

遺物は４～５層にかけて出土しており、縄文土器片10点、剥片10点である。

当遺構は柱穴である可能性が非常に高いと判断する。北東で壁が緩やかに立ち上がる形状は、柱を滑り込ませるための形状だったと推測する。隣接するＳＫＰ340・341より深く、当遺跡最大級の柱穴の可能性が想定できる。

**ＳＸ348性格不明遺構［第35・36図、図版17］**

ＮＤ・ＮＦ26グリッド（西部環状配石遺構中心部敷石の西側0.5m）にある。漸移層を掘り下げ中に、不整な黒褐色土楕円形のプランを確認した。西部環状配石遺構中心部敷石西端の礫が当遺構の上端にかかる。

平面形は長軸248㎝、短軸208㎝の不整な台形で、長軸方向はＮ57°Ｅ、深さ100㎝である。

底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。両面とも自然礫の露出で凹凸が激しい。

覆土は５層に分層される。暗褐色土を主体とし、１～３層にかけて特に礫の集中が見られる。

遺物の出土は底部４層付近からが多く、縄文土器片30点、剥片６点を検出している。規模形態から配石墓とは捉えにくく、隣接するＳＫＰ340・341等の柱穴とも明らかに形態を異にするため、現状では遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＫＰ248柱穴［第35・36図、図版17］**

ＮＤ27グリッドにある。地山面で黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸123㎝、短軸78㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ59°Ｗ、深さ73㎝、礫上部までの高さは87㎝である。

底面はほぼ平坦で固くしまり、最大径44㎝の楕円形を呈す。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、東側が中位でやや内湾する。

覆土は黒褐色土を主体とし、３層に分層される。いずれも１～５㎜程の炭化物が、２層土には地山土が混入する。

断面観察から柱痕跡を認めることができなかったが､近接するＳＫＰ306柱穴と形態が酷似していることから柱穴と推定する。当遺構から遺物の出土はない。

**ＳＫＰ298柱穴［第35・36図］**

ＮＤ26グリッドにある。漸移層中で不明瞭なプランを検出し、地山直上まで掘り下げたところ黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸86㎝、短軸70㎝の楕円形で、長軸方向はＮ76°Ｗ、深さ68㎝である。

底面は固くしまり平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、段丘礫層の自然礫が露出し凹凸が激しい。

覆土は２層に分層される。１層土と比べ２層土がやや明るい。中位から底面にかけ多量の中礫が混入し、底面付近では粗砂が混入する。

柱穴と特定したＳＫＰ340及びＳＫＰ341が隣接する西側に位置し、両遺構と形状が類似することから当遺構も柱穴と推測するが、深さが１／２程度であるため断定はできない。当遺構から出土する遺物はない。

**ＳＫＰ306柱穴［第35・36図］**

ＮＣ・ＮＤ27グリッドにある。地山面で黒褐色土楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸94㎝、短軸68㎝の不整な楕円形で、長軸方向はＮ18°Ｅ、深さ67㎝である。

底面はほぼ平坦でやや西側に落ち込む。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、段丘礫層の自然礫が露出し凹凸が激しい。

覆土は暗褐色土を主体とする３層に分層される。全体に炭化物が微量混入する。断面観察により、１層が柱痕跡、２・３層土が柱根固め土に相当するものと判断する。確認面付近に集中する礫が開口部に沿うように配されることから、柱の根固めに使用されたものと推測できよう。

したがって当遺構は柱穴と判断するが､近接するＳＫＰ248との関係､上部構造の有無については不明である。

**ＳＫＰ340柱穴［第35・36図、巻頭図版６］**

ＮＥ25グリッド（西部環状配石遺構中心部敷石の南側約0.5m）にある。地山直上を精査中に楕円形のプランを確認した。

平面形は長軸96㎝、短軸77㎝の方形に近い楕円形で、長軸方向はＮ83.5°Ｅ、深さ118㎝である。

底面は平坦で固くしまり最大径75㎝の楕円形を呈す。壁は垂直に立ち上がり、西壁は途中で段をなし開口部に向けて開いた形となる。壁面上位で段丘礫層の自然礫が露出する。

精査中降雨の流入等で断面観察による正確な覆土の堆積状況を捉えることはできなかったが、覆土上位から中位にかけて径５～30㎝程の礫が多量に混入し、不規則に散らばる。

また中位からは注口土器、朱塗り等の土器片16点、剥片１点が出土している。坑底部より30㎝付近で径40㎝前後の基礎石と思われる円礫が検出され、この礫より低い位置に礫は無く、しまりの強い細砂質の覆土となる。

遺構の形状から径30～40㎝程度の柱を立てた柱穴と考えられる。西壁で開口部が開いた形となるのは、柱を滑り込ませるためにスロープ状にしたものか、柱を抜く際に掘削したものと推測する。混入する大小の礫は柱の根固めに使用されたもの、あるいは柱を抜いた後に埋め戻したものと考えられ、出土した土器片はそのときに混入したものと推測する。

**ＳＫＰ341柱穴［第36図、図版17］**

ＮＤ26グリッド（西部環状配石遺構中心部敷石の東北東側約0.5m）にある。地山直上を精査中に楕円形のプランを確認した。南西約３ｍにはＳＫＰ340がある。

平面形は長軸99㎝、短軸73㎝の楕円形で、長軸方向はＮ19°Ｅ、深さ130㎝である。

底面は平坦で固くしまり最大径52㎝の楕円形を呈す。壁は垂直に立ち上がり、上位で段をなし開口部に向けて開いた形となる。壁面上位で段丘礫層の自然礫が若干露出する。

覆土中位には径５～30㎝程の礫が不規則に混入する。精査中降雨の流入等で断面観察による正確な覆土の堆積状況を捉えることはできなかった。

遺構の形状から径30～40㎝程度の柱を立てた柱穴と考えられ、混入する大小の礫は柱の根固めに使用されたものと推測する。

当遺構から遺物の出土はない。

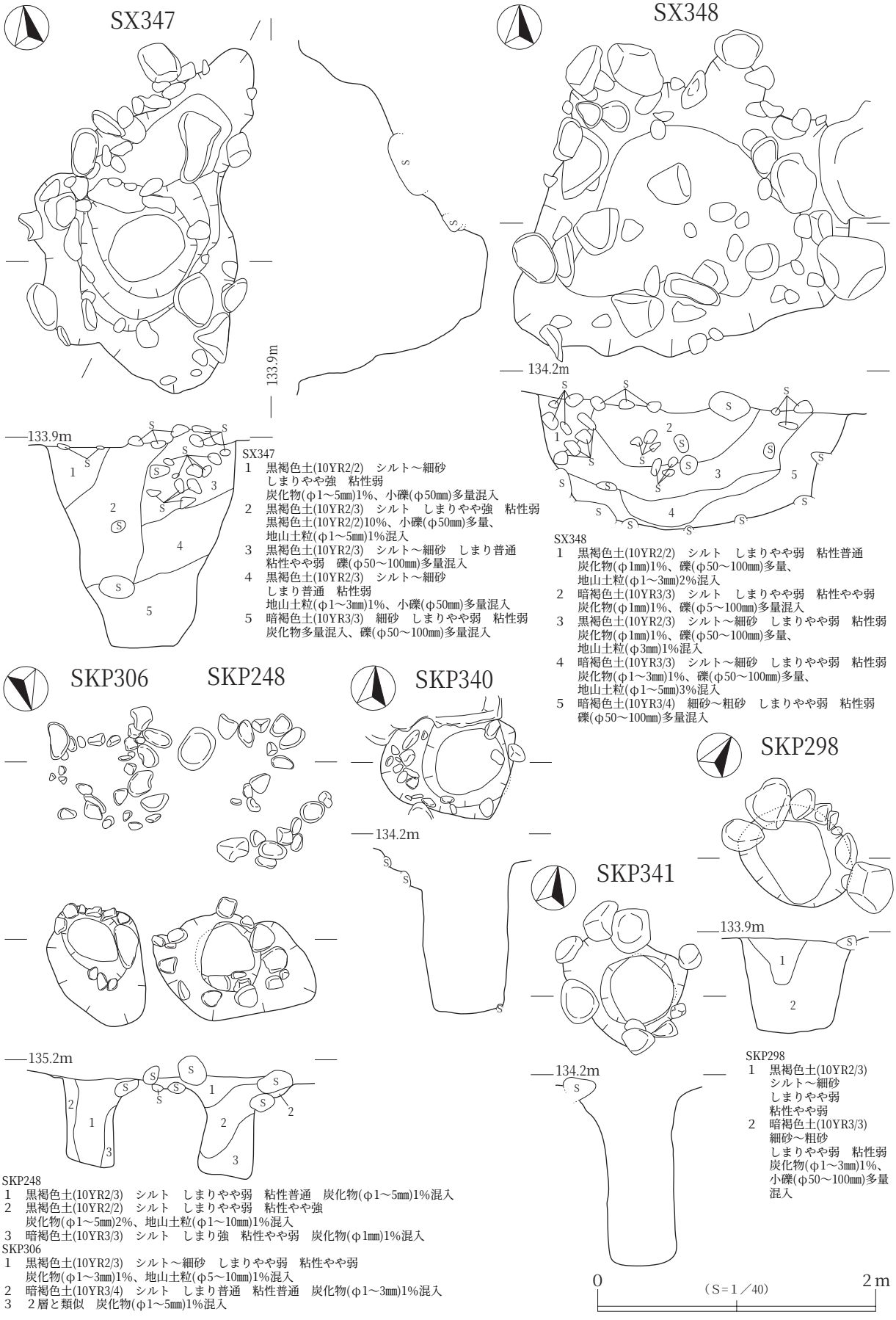
南西部捨て場においては遺物包含層である第Ⅱ層中に、遺物とともに拳大から径80㎝程度の礫がほぼ同一レベルで検出されている。平面的には遺物出土範囲とほぼ同じく全体的に検出されているが、東が開いた弧状に集中して配される傾向にある。これらの礫の中には磨石、凹石、石皿等の礫石器も含まれる。これらの礫は一見乱雑に配されているようにも見えるが、部分的に明確な意図を持って配されたと思われる箇所も存在する。広義には全体を配石遺構として捉え、その一部として捉えられるかもしれないが、ここではこれらを一応は個別の配石遺構として扱い、詳細を記述することとする。

**ＳＱ47配石遺構［第37図、巻頭図版７、図版14］**

ＭＣ27グリッド（ＳＴ184南西部捨て場内）にある。基本土層第Ⅲ層を精査中に、礫が方形に組まれ、中心に焼土の広がりを確認した。散在する礫の中での検出であったが、個別の配石遺構として取り扱った。

平面形は長軸68㎝（東―西）、短軸54㎝の方形で、中央部に確認できた掘方の深さは18㎝である。

直径10～40㎝の扁平な礫を方形に立てて配し、中央東寄りに直径約20㎝の範囲で焼土が認められる。




**第36図　ＳＸ347・348性格不明遺構、ＳＫＰ248・298・306・340・341柱穴**

確認が基本土層Ⅲ層中であるためか、礫の掘方等は確認できなかった。礫の内側には被熱痕が認められた。

**ＳＱ48配石遺構［第37図、図版14］**

ＭＣ27・28グリッド（ＳＴ184南西部捨て場中央部）にある。検出に至る経過はＳＱ47と同様である。

平面形は長軸63㎝（北東―南西）、短軸40㎝の方形に、比較的径の小さな礫が敷き詰められている。

礫上面には部分的に被熱痕が確認された。

北部配石遺構群（第38図）及びＢ区西端にて29基の配石遺構を検出した。石囲炉状を呈すものが大半を占め、焼土を伴うものもあったため、住居に伴う屋内炉の可能性も視野に入れて精査を進めたが、配石遺構とほぼ同一レベルで明瞭な床面・壁面を検出し得なかったこと、周囲から柱穴が未検出であることから竪穴住居跡であると断定し得なかった。また、北部配石遺構群周辺は水はけが悪く居住域に適さないとの判断から個別の配石遺構として扱った。

29基の配石遺構は大きく３つに分類でき、①石囲炉状配石遺構内に土器が埋設されるもの、②石囲炉状配石遺構及びそれに類するもの、③平面形が不整形なものがある。①及び②で焼土を共伴するものが多く、祭祀に関連する屋外炉と想定する。

①石囲炉状配石遺構内に土器が埋設されるもの

**ＳＱ135土器埋設石囲炉状配石遺構［第39図、図版14］**

ＭＥ31グリッドにある。Ⅶ層中を精査中、規則的に並ぶ礫を確認。さらに周辺を掘り下げたところ、ほぼ円形（環状）に礫が配され、中央に深鉢形土器が埋設されていた。礫の配置と同程度の掘方らしき黒色土のプランを確認し、北側でＳＱ353を密着した状態で検出している。両遺構の規模形態が類似していることから、当遺構はＳＱ353を模して構築された可能性もある。

平面形は長軸62㎝（北―南）、短軸56㎝の不整な略円形で、径30㎝程の細長い礫が６点配され、深さ15㎝の掘り込みを有す。掘方底部より礫上部までの高さは23㎝である。覆土は地山土が20％混入する黒色土である。

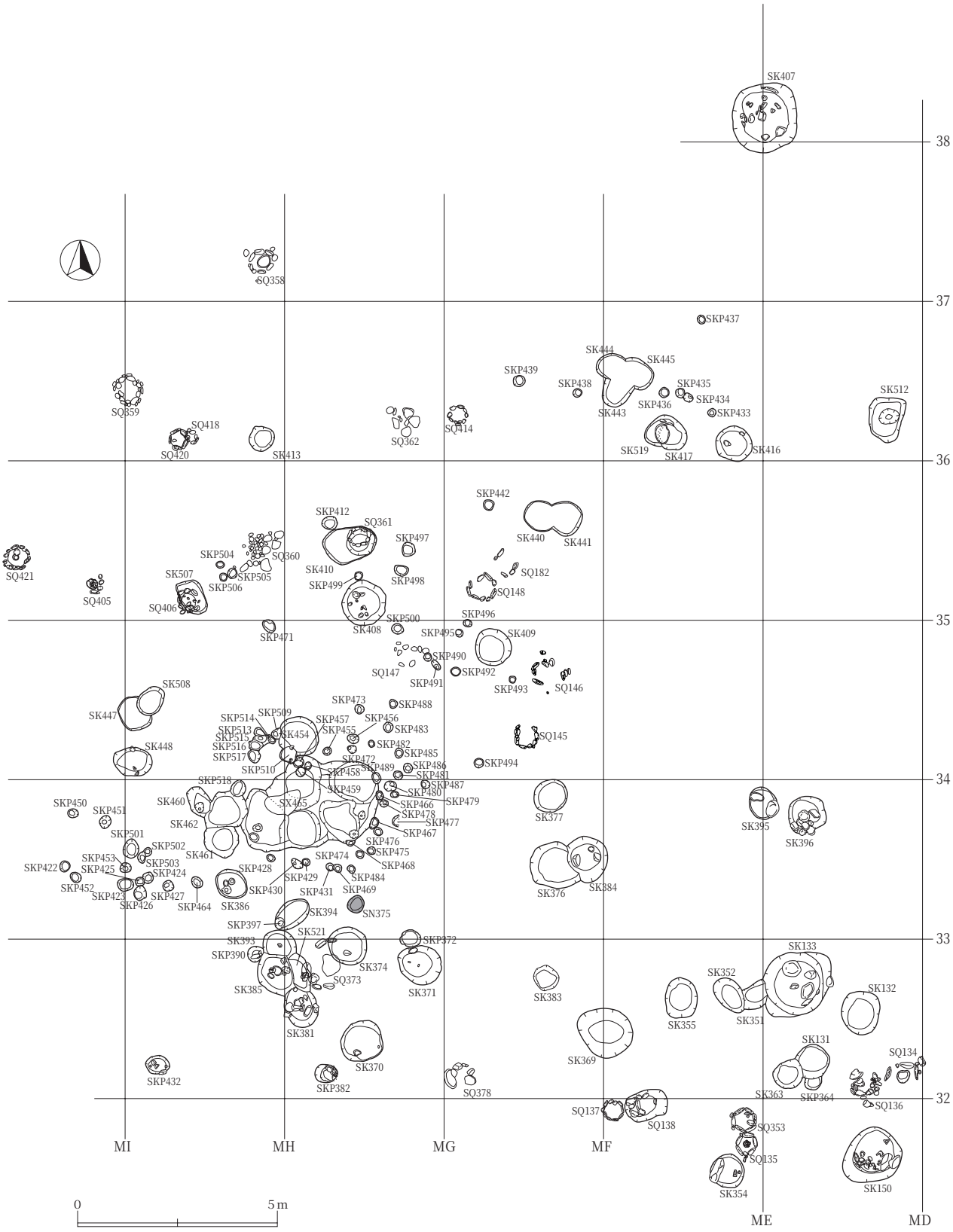
埋設される土器は粗製の深鉢形土器（第56図125）であり、礫、覆土等に被熱痕は見受けられなかった。竪穴住居跡の可能性も視野に入れて精査を進めたが、周囲から柱穴・周溝等は検出されなかった。また当遺構が住居に伴う屋内炉と仮定した場合、床面を掘り込む際にＳＱ353を破壊するはずであるが、その痕跡は認められない。本遺構の立地場所は水の流れ込みやすい場所であるため、居住域としては考えにくく、祭祀行為を行った遺構の可能性を想定する。

**ＳＱ405土器埋設石囲炉状配石遺構［第39図、図版14］**

ＭＩ35グリッドにある。Ⅶ層中を精査中規則的に並ぶ礫とその中に埋設された土器を確認しＳＱ405とした。

平面形は削平を受けるため、全容は不明だが東半で最大径54.5㎝（北北東―南南西）の半円を描く

**第37図　南西部捨て場礫検出状況、ＳＱ47・48配石遺構**




**第38図　北部配石遺構群及び検出遺構**

形となる。遺構構築当時は55～60㎝程度の規模で環状に巡っていたと思われる。配置される礫は北から３点が15㎝程度の円礫で、南に配される１点は25㎝程の扁平な礫である。埋設された土器内及び配石内部にはレンズ状に焼土が堆積する。

土器は口縁部が欠損しているが、正位に埋設された粗製の浅鉢形土器（第56図127）である。当遺構は焚き火を伴う祭祀施設であったと推測する。

**ＳＱ421土器埋設石囲炉状配石遺構［第39図、巻頭図版７、図版14］**

ＭＩ35グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認しＳＱ421とした。焼土及び正位に埋設された深鉢形土器を半截中に確認した。

平面形は長軸71㎝（北東―南西）、短軸61㎝の楕円形で15～22㎝程の完礫、破片礫で構成される。配石内北側に円礫が１点置かれるが、焼土上面の自然堆積土上にあることから当遺構に共伴しないものと思われる。Ⅶ層土中であるため礫に伴う掘方は確認できなかった。

中央にレンズ上に堆積する焼土は炭化物が混入し、最大径50㎝、厚さ20㎝に及ぶ。埋設された土器は器高約14㎝、口径14㎝の粗製深鉢形土器（第56図128）である。遺物は、凹石１点、磨石２点、石匙１点、粗製の土器小片、薄手の無文土器数点が出土している。いずれも当遺構内、あるいは石囲部から20㎝程度離れた場所より検出されている。

②石囲炉状配石遺構及びそれに類するもの

**ＳＱ78石囲炉状配石遺構［第39図、図版15］**

ＭＦ30グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に円形に並ぶ礫を確認。さらに周辺を掘り下げたところ、円形に礫が配されていた。また地山直上面まで掘り下げることにより、配石中央部に焼土を確認した。東部環状配石遺構中心部配石以外では、当遺跡中最大径を有し、配石遺構の集中する南端に位置する。

平面形は長軸132㎝（北北東―南南西）、短軸130㎝の不整な略円形で、径30～40㎝程度の細長い礫が配され、東半のみで二重に巡る。南西方向に礫がなく一部開いた形となる。礫の配置と同程度の深さ20㎝程の掘り込みを有し、中央にはレンズ状に堆積する焼土が不規則に三箇所分布する。

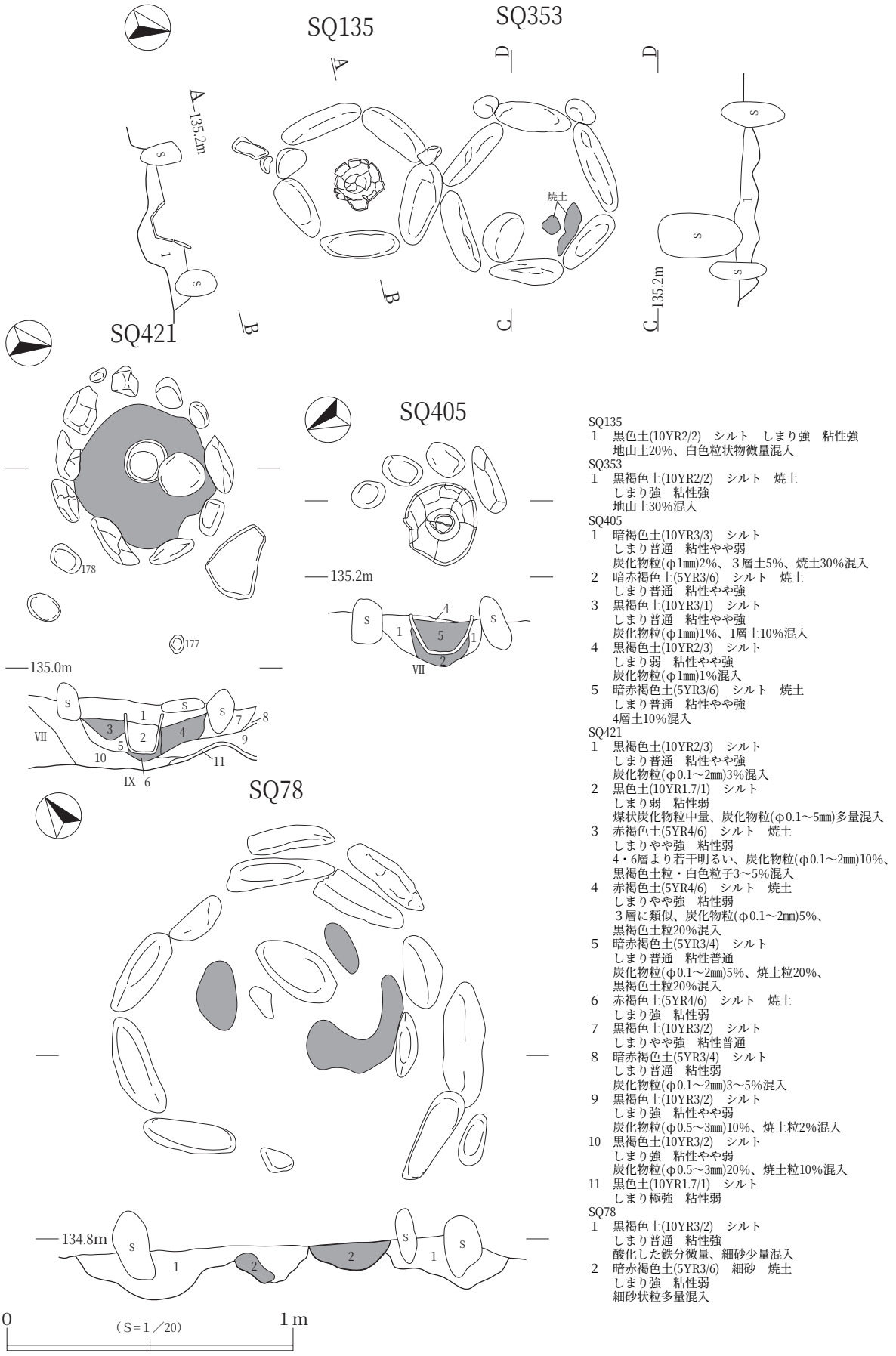
赤色顔料の付着した磨石が１点、剥片７点、土器片４点がいずれも遺構確認面付近より出土している。

遺構の検出地点は調査区の中でも低地に位置するため水はけが非常に悪く、居住域には適しておらず、また柱穴・周溝も検出されなかったことから、住居に伴う炉とは考えにくい。当遺構では焚き火を伴う祭祀行為を行った可能性を推定する。

**ＳＱ134配石遺構［第40図、図版15］**

ＭＤ32グリッドにある。Ⅶ層中を精査中にコの字状に並ぶ礫を確認。さらに地山直上面まで掘り下げたところ、礫に囲まれるようにして円形の掘り込みを確認した。

平面形は35～40㎝程の扁平な礫が北・東・西に立てて配され、東西95㎝、南北55㎝の「コ」の字状になる。配石中央部には径34㎝、深さ10㎝程の不整な楕円形の掘り込みを有す。坑底部から礫上部ま




SQ135
1　黒色土(10YR2/2)　シルト　しまり強　粘性強
　　地山土20%、白色粒状物微量混入
SQ353
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　焼土
　　しまり強　粘性強
　　地山土30%混入
SQ405
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　　しまり普通　粘性やや弱
　　炭化物粒(φ1㎜)2%、３層土5%、焼土30%混入
2　暗赤褐色土(5YR3/6)　シルト　焼土
　　しまり普通　粘性やや強
3　黒褐色土(10YR3/1)　シルト
　　しまり普通　粘性やや強
　　炭化物粒(φ1㎜)1%、1層土10%混入
4　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　　しまり弱　粘性やや強
　　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
5　暗赤褐色土(5YR3/6)　シルト　焼土
　　しまり普通　粘性やや強
　　4層土10%混入
SQ421
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　　しまり普通　粘性やや強
　　炭化物粒(φ0.1～2㎜)3%混入
2　黒色土(10YR1.7/1)　シルト
　　しまり弱　粘性弱
　　煤状炭化物粒中量、炭化物粒(φ0.1～5㎜)多量混入
3　赤褐色土(5YR4/6)　シルト　焼土
　　しまりやや強　粘性弱
　　4・6層より若干明るい、炭化物粒(φ0.1～2㎜)10%、
　　黒褐色土粒・白色粒子3～5%混入
4　赤褐色土(5YR4/6)　シルト　焼土
　　しまりやや強　粘性弱
　　３層に類似、炭化物粒(φ0.1～2㎜)5%、
　　黒褐色土粒20%混入
5　暗赤褐色土(5YR3/4)　シルト
　　しまり普通　粘性普通
　　炭化物粒(φ0.1～2㎜)5%、焼土粒20%、
　　黒褐色土粒20%混入
6　赤褐色土(5YR4/6)　シルト　焼土
　　しまり強　粘性弱
7　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　　しまりやや強　粘性普通
8　暗赤褐色土(5YR3/4)　シルト
　　しまり普通　粘性弱
　　炭化物粒(φ0.1～2㎜)3～5%混入
9　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　　しまり強　粘性やや弱
　　炭化物粒(φ0.5～3㎜)10%、焼土粒2%混入
10　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　　しまり強　粘性やや弱
　　炭化物粒(φ0.5～3㎜)20%、焼土粒10%混入
11　黒色土(10YR1.7/1)　シルト
　　しまり極強　粘性弱
SQ78
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　　しまり普通　粘性強
　　酸化した鉄分微量、細砂少量混入
2　暗赤褐色土(5YR3/6)　細砂　焼土
　　しまり強　粘性弱
　　細砂状粒多量混入

**第39図　ＳＱ135・405・421土器埋設石囲炉状配石遺構、ＳＱ78・353石囲炉状配石遺構**

での高さは54㎝である。

掘り込みの覆土はⅦ層土と類似していたため地山直上での検出となったが、本来は礫の確認面付近まで壁が立ち上がっていたものと考えられ、その形状から土器か柱状物を抜き取って埋め戻したものと推測することが可能である。

**ＳＱ136配石遺構［第40図］**

ＭＤ32グリッドにある。Ⅶ層中を精査中、集中する礫を確認。さらに掘り下げたところ礫が円形に配されていた。

平面形は直径80㎝程の不整な円形で、径10～30㎝の不規則な形の礫で構成される。北側に礫が無く開いた形となる。黒色土中での検出のため礫に伴う掘り込みは確認できなかった。遺構構築当時の原形をとどめているかどうかは定かでないが、残存部は明らかに弧状に配置されている。

**ＳＱ137石囲炉状配石遺構［第40図、図版15］**

ＭＥ31グリッドにある。Ⅶ層中で規則的に並ぶ礫を確認し、周囲を掘り下げたところ円形に並ぶ礫を検出しＳＱ137とした。礫とほぼ同様の範囲で掘方らしき黒色のプランを確認し、東側にはＳＱ138を確認した。

平面形は長軸55㎝（北西―南東）、短軸54㎝の不整な略円形で、径10～15㎝程の扁平な礫が10点配される。礫はほぼ均等に配置されるが、北部の礫１点のみやや内傾している。礫と同程度の深さ7.5㎝の掘り込みを有す。配石中央部には、１層土を中量含む暗褐色土の薄い層が堆積する。

近接するＳＱ138とほぼ同レベルに位置するが、相互の関連は判然としない。当遺構から被熱痕は認められず、遺物も出土しなかったがこのあたり一帯に同規模形態の配石遺構が多数存在することから、何らかの祭祀行為を行った屋外炉の可能性がある。

**ＳＱ138石囲炉状配石遺構［第40図］**

ＭＥ31・32グリッドにある。Ⅶ層中でＳＱ137の周辺を掘り下げていたところ、東側に近接する小規模な礫の集中を認めた。さらに掘り下げたところ礫の配置と同程度の掘方らしき黒色土のプランを確認しＳＱ138とした。

平面形は長軸77㎝（東北東―西南西）、短軸52㎝の不整形の範囲に径15～25㎝の礫が７点不規則に配置される。掘り込みに伴う覆土は地山粒・塊が混入する埋め戻し土である。礫を配置するための掘方にしては多少深さを有するため、当遺構は配石を伴う土坑であった可能性も高い。

**ＳＱ145石囲炉状配石遺構［第40図、図版15］**

ＭＦ34グリッドにある。Ⅶ層中を精査中、礫が北側で開いた方形に配置されているのを確認した。

平面形は径60㎝で、15～20㎝程度の比較的扁平な礫を立てて配している。北側に礫がなく開いているが、礫を抜いた痕跡などは確認できなかった。当遺構は基本土層Ⅶ層中に構築されており、掘方等は確認できなかった。

**ＳＱ146石囲炉状配石遺構［第40図］**

ＭＦ34グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に、いびつではあるが全体として円形に並んだ礫のまとまりを認め、これを配石遺構として精査を行った。

平面形は長軸80㎝、短軸60㎝の範囲に径10～20㎝の礫が点在する。

当遺構は基本土層Ⅶ層中に構築されており、掘方等は確認できなかった。

**ＳＱ147石囲炉状配石遺構［第40図］**

ＭＧ34グリッドにある。Ⅶ層中を精査中小規模な礫の集中を確認しＳＱ147とした。

平面形は長軸80㎝（北東―南西）、短軸69㎝の範囲に径10～20㎝の礫が10点配置される。北から東北東にかけて二重に巡っているようにも見える。東側の礫が抜け開いた形となるが、遺構構築当初は環状に巡っていたものと考えられる。Ⅶ層中であるため掘方らしき堆積土を確認することはできなかった。遺物の出土はない。

**ＳＱ148石囲炉状配石遺構［第40図、図版15］**

ＭＥ35グリッドにある。Ⅶ層中で規則的に並ぶ礫を確認し、さらに周辺を掘り下げたところ円形に配置されていた。

平面形は長軸78㎝（東北東―西南西）、短軸70㎝の不整な円形で、径20～30㎝の礫が９点配置される。北北西に礫が無く開いた形となる。Ⅶ層土中での検出だったため掘方は確認できなかった。確認面から６㎝下がったところで幅32㎝、厚さ７㎝の焼土層を認めたが、半截後の確認だったため焼土層の広がりを平面で捉えることはできなかった。当時の使用面が焼土層上面と推測できることから、礫は１／３程度まで埋置されていたものと考えられる。

壁・柱穴等の検出は認められないことから、焚き火を伴う祭祀行為を行った屋外炉と推定する。

**ＳＱ182石囲炉状配石遺構［第41図］**

ＭＦ35グリッドにある。Ⅶ層中で径60㎝程の範囲に不整に並ぶ礫を確認しＳＱ182とした。

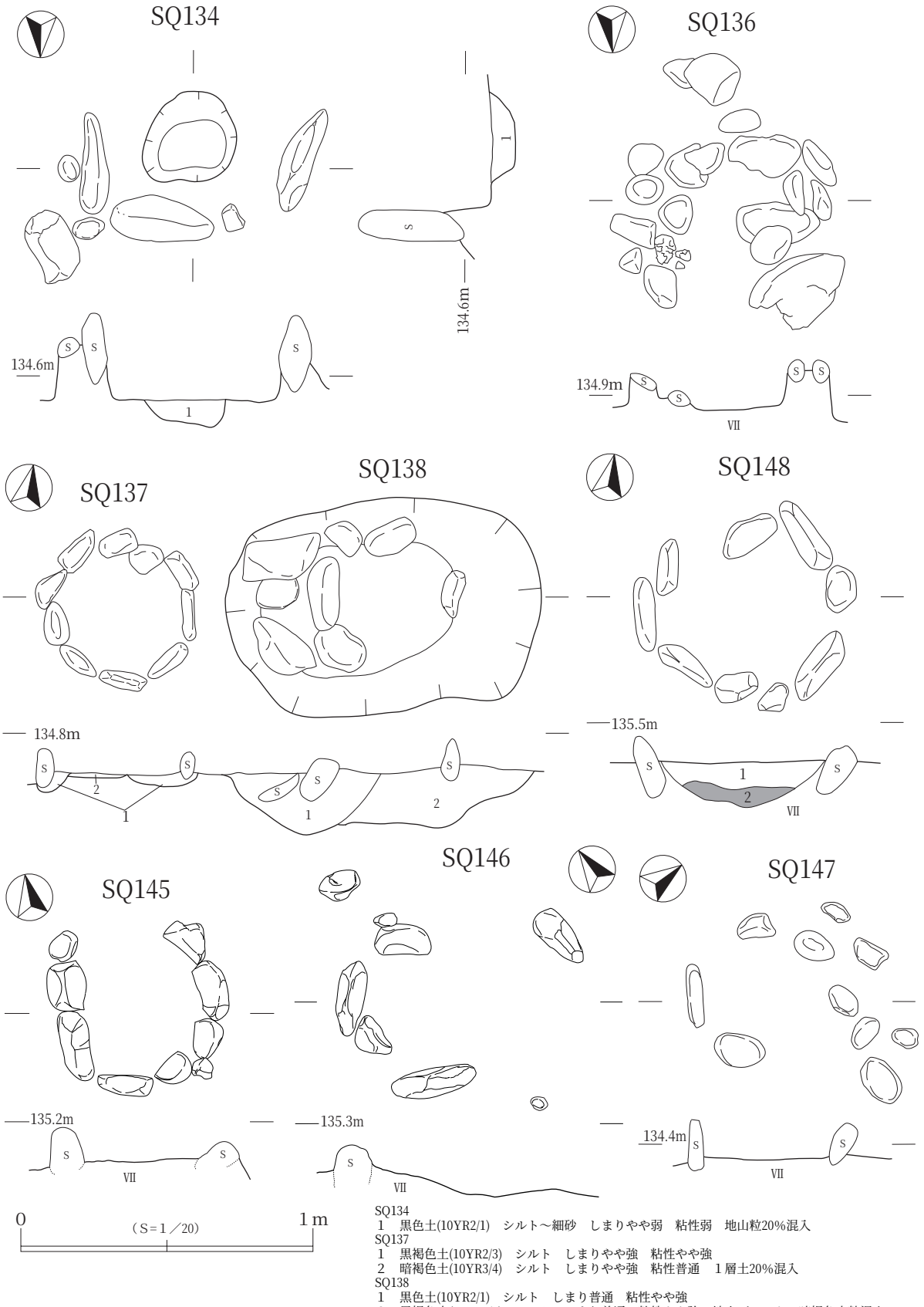
平面形は長軸62㎝（北西―南東）、短軸48㎝の不整な方形の範囲に20㎝程度の礫が５点「コ」の字状に配される。北東・西側に礫が無く開いた形となる。Ⅶ層中での検出のため掘方を確認することはできなかった。現存する礫の配置から判断すると、構築当時は「コ」の字状か方形に組まれた石囲炉状だったと推測する。

被熱痕・遺物等の検出は無かったが、遺構の立地場所等から判断し、周囲の配石遺構同様に祭祀関連遺構と考えられる。

**ＳＱ226石囲炉状配石遺構［第41図］**

ＮＫ29グリッドにある。Ⅲ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認し、ＳＱ226とした。北側にＳＱ227が近接する。

平面形は長軸79.5㎝（東―西）、短軸57㎝の楕円形で、径約８～24㎝程の礫が配される。扁平礫、円礫の組み合わせからなる。




SQ134
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまりやや弱　粘性弱　地山粒20%混入
SQ137
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまりやや強　粘性やや強
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　しまりやや強　粘性普通　１層土20%混入
SQ138
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性やや強
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性やや強　地山ブロック、暗褐色土粒混入
SQ148
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまりやや強　粘性やや強
2　赤褐色土(5YR4/8)　シルト～細砂　焼土　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)1%、鋳土多量、地山ブロック混入

**第40図　ＳＱ134・136・137・138・145・146・147・148石囲炉状配石遺構**

礫の配置と同程度の掘り込みを有し、深さは18㎝である。覆土は単一層で微量の炭化物を含む。一部の礫で被熱痕を確認したが、炉面から焼土の検出は無かった。

当遺構は竪穴住居内の炉である可能性も想定できるが、周辺は自然礫の露出等でかなり凹凸が激しく、また北側に向かって傾斜しているため居住域には適さないとの判断から、個別の配石遺構（屋外炉）として扱った。

**ＳＱ227石囲炉状配石遺構［第41図］**

ＮＫ29グリッドにある。Ⅲ層中を精査中に正位に埋設されたと思われる土器を確認しＳＲ227とする。精査を進める段階で周囲から熱を受けた礫を検出しＳＱ227とした。

土器の周囲に配置されていた石組みは原型をとどめていないが、径約10～30㎝程の礫で構成していたと考えられる。石組みの最大径は60.5㎝（北北西―南南東）である。北側に配される30㎝程の礫はかなり熱を受けた跡があった。埋設される土器は西側が消失しており詳細は不明であるが、その掘方は径27㎝である。

土器内部の覆土は黒褐色土の単一層で微量の炭化物粒を含む。

隣接するＳＱ226との関係は判然としないものの、同レベルで検出していることから少なくとも同時期に使用された可能性はあろう。ＳＱ226同様竪穴住居内の炉の可能性も否定できないが、現状では屋外炉と想定しておく。

**ＳＱ353石囲炉状配石遺構［第39図、図版14］**

ＭＥ31グリッドにある。ＳＱ135の周辺を精査していたところ、北側に隣接する礫を確認。さらに広げて精査したところ円形に配される礫を検出しＳＱ353とした。礫の配置と同程度の掘方らしき黒色のプランも同時に確認した。ＳＱ135と南側で接しているが、当遺構が５～10㎝程低い場所に位置するため、構築時期がＳＱ135より若干古い可能性もあるが、現状では明らかでない。

平面形は長軸65㎝（東―西）、短軸62㎝の略円形で、径25～30㎝程の扁平な礫が配される。礫の配置は規則的でほぼ六角形を呈しており、西側の一辺を構成する礫の両端には円礫が１点ずつ配置される。配石の内側東部には最大長29㎝の立石が施される。遺構の最大高（埋置された礫底部から立石の頂点）は45㎝である。

礫の配置と同程度の掘り込みは深さ９㎝であり、覆土上面北側に極わずかであるが焼土層を確認することができた。礫に被熱痕が認められず炉面もわずかに赤変するのみであり、恒常的には使用していなかったことが推測できよう。

周囲から柱穴・周溝等は検出されなかったことから、焚き火を伴う祭祀行為を行った屋外炉と考えられる。

**ＳＱ358石囲炉状配石遺構［第41図、図版15］**

ＭＨ37グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認した。さらに周辺を掘り下げたところ、円形に礫が配され、中央には扁平な円礫が置かれていた。

平面形は長軸76.5㎝（東北東―西南西）、短軸60.5㎝の楕円形で、径20～30㎝程の扁平な礫７点が

環状に巡る。配石内部に配置される扁平な円礫は径30㎝程で、やや北東寄りにある。この礫は環状に巡る礫と同一レベルにあることから当遺構に伴うものと判断するが、土中に埋め込んだ形跡は無く、単に置いたものと推測する。

遺物・柱穴等の確認ができなかったことから、隣接する配石遺構と同様の祭祀関連遺構と考えられる。

**ＳＱ359石囲炉状配石遺構［第41図、図版16］**

ＭＩ・ＭＪ36グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認。さらに周囲を掘り下げたところ環状二重に礫が配されていた。

平面形は長軸86.5㎝（北西―南東）、短軸73.5㎝の楕円形で、径６～28㎝程の礫27点が環状二重に巡り、外側の礫がやや小さい。平面観察では焼土の堆積を認めることができなかったが、半截後断面観察によりレンズ状に堆積する幅44㎝、厚さ11㎝の焼土層を確認した。

配石遺構の集中する地区に立地するが、明確に二重に巡るのは当遺構のみである。柱穴等の確認ができなかったことから、隣接する配石遺構と同様、焚き火を伴う祭祀行為を行ったものと推定する。

**ＳＱ361石囲炉状配石遺構［第41図］**

ＭＧ35グリッドにある。Ⅶ層中で規則的な礫の配列を確認し、さらに周辺を掘り下げたところ環状に礫が巡っていた。

平面形は長軸60.5㎝（東北東―西南西）、短軸50.5㎝の楕円形で、径10～20㎝の扁平な礫が配される。Ⅶ層土中での検出だったため掘り込みを確認できなかったが､30㎝低い地山直上でＳＫ410を検出している。当遺構に伴う下部施設である可能性もあり得る。なお詳細はＳＫ410に記載済みである。祭祀関連遺構であると推測する。

**ＳＱ373石囲炉状配石遺構［第41図、図版15］**

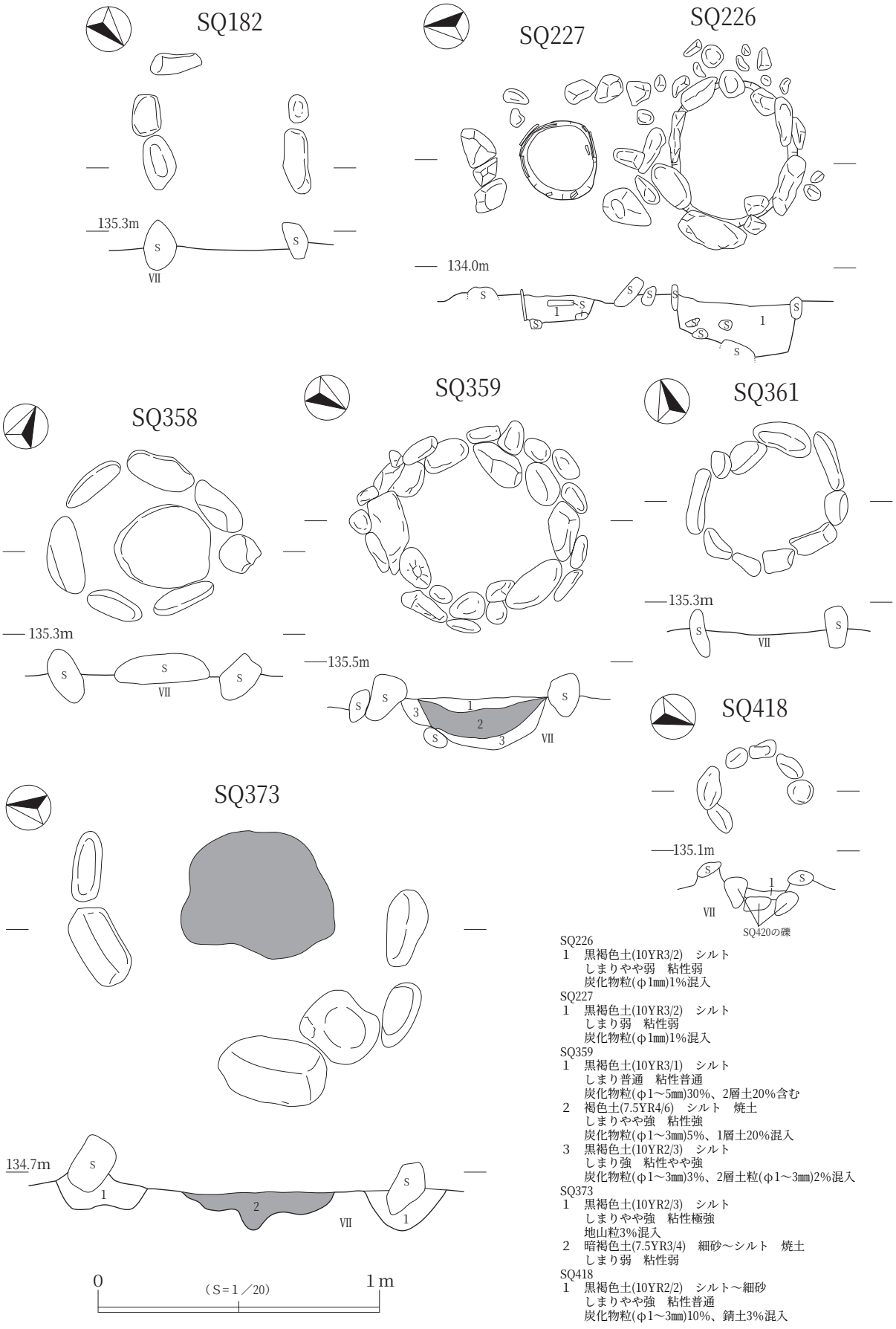
ＭＧ32・ＭＧ33グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認。さらに周囲を掘り下げたところ、半円形に礫が配され、中央には焼土が堆積していた。ＳＫ374と北東で切り合うが、当遺構の礫に伴う掘方がＳＫ374覆土中に達しているため、当遺構のほうが新しい。

平面形は径129㎝（北―南）の半円形で、東半が開いた形となる。西半礫残存部では礫が掘り込みから抜けたり、一部欠落したりしているが、遺構構築当時はＳＱ78とほぼ同規模の径を呈していた可能性が高い。礫の配置と同程度の深さ15～20㎝程の掘り込みを有し、掘方底部から礫上部までの高さは27㎝となる。中央には径55㎝の不整な範囲でレンズ状に焼土が堆積する。

剥片４点が出土したが、いずれも遺構確認面上部からのものであり、当遺構との関係は薄いものと思われる。焚き火を伴う祭祀行為に用いられたと推測する。

**ＳＱ406石囲炉状配石遺構［第42図］**

ＭＨ35グリッドにある。Ⅶ層土中を精査中、集中する礫を確認しＳＱ406とした。配石の内側には焼土層の広がりを認めた。




SQ226
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまりやや弱　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
SQ227
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり弱　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
SQ359
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト
　しまり普通　粘性普通
　炭化物粒(φ1～5㎜)30%、2層土20%含む
2　褐色土(7.5YR4/6)　シルト　焼土
　しまりやや強　粘性強
　炭化物粒(φ1～3㎜)5%、1層土20%混入
3　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～3㎜)3%、2層土粒(φ1～3㎜)2%混入
SQ373
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりやや強　粘性極強
　地山粒3%混入
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　細砂～シルト　焼土
　しまり弱　粘性弱
SQ418
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性普通
　炭化物粒(φ1～3㎜)10%、錆土3%混入

**第41図　ＳＱ182・226・227・358・359・361・373・418石囲炉状配石遺構**

平面形は長軸62㎝（北一南）、短軸58㎝の略円形で、主に15～20㎝程の礫が環状に巡る。中央には中礫が４点雑然と並べられる。南方向で一部不規則な配置になり、東側の礫が抜け開いた形となる。

断面観察から礫の配置より若干深い掘方を確認した。焼土層は多少凹凸があるもののレンズ状に堆積し、最大幅44㎝、厚さ13㎝にわたる。

Ⅶ層土中での検出だったため下部施設の確認ができなかったが、確認面より40㎝低い地山直上でＳＫ507を検出している。当遺構に伴う下部施設である可能性もあり得る。なお詳細はＳＫ507に記載済みである。焚き火を伴う祭祀行為を行った遺構と推測する。

**ＳＱ414石囲炉状配石遺構［第42図、図版16］**

ＭＦ36グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認。さらに地山直上面まで掘り下げたところ、円形に礫が配されていた。礫のやや外側には掘方と思われる黒色土のプランを確認した。

平面形は長軸57㎝（北北東一南南西）、短軸55㎝の不整な略円形で、径15㎝程の扁平な石が配される。礫の配置と同程度の深さ15㎝程の掘り込みを有し、中央部２層には地山土塊を含む黒色土が径25㎝程、深さ20㎝程のピット状に堆積する。掘り込みの形状から柱の立っていた可能性も推定でき、その後埋め戻されたものと判断する。

２層土から出土した遺物はいずれも小破片の土器片で、埋め戻し時に混入したものと推定する。当遺構はその形態から墓標の可能性も考えられるが、配石下あるいは隣接する周辺に遺体を埋葬できる掘り込みを確認できないことから、詳細な性格は不明である。

**ＳＱ418石囲炉状配石遺構［第41図］**

ＭＨ36グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認しＳＱ418とした。直下をＳＱ420と切り合い、当遺構が新しい。

平面形は最大径37㎝（北西一南東）の半円形で、10～15㎝程度の礫で構成される。北東側に礫が無く開いた形となる。遺構構築当時は環状に礫が巡っていたものと考えられるが、Ⅶ層中での検出のため掘り込みや礫の抜けた痕跡は検出できなかった。

直下にあるＳＱ420が削平を受けず残っていることから、当遺構には下部施設等は存在していなかったことが明らかである。被熱痕・遺物等の検出は無かったが、祭祀関連遺構と考えられる。

**ＳＱ420石囲炉状配石遺構［第42図、図版16］**

ＭＨ36グリッドにある。ＳＱ418精査中に直下に新たな礫の配列と焼土層の広がりを確認し、ＳＱ418完掘後、環状に巡る礫を認めＳＱ420とした。

平面形は長軸60㎝（北東一南西）、短軸52㎝の楕円形で、30㎝程の扁平な礫５点と若干小さめの円礫・亜角礫それぞれ１点ずつで構成される。東端に配置される13㎝程の亜角礫はＳＱ418の一部として捉えていたが、平面観察からＳＱ420としたほうが自然であると判断し、当遺構に組み入れた。

Ⅶ層中での検出であったため、礫を埋置するための掘り込みは確認できなかった。配石内部のレンズ状に堆積する焼土層は最大幅44㎝、厚さ８㎝に及ぶ。遺物等の検出は無かった。焚き火を伴う祭祀関連遺構と考えられる。

③平面形が不整形なもの

**ＳＱ164配石遺構［第42図］**

ＭＣ24グリッド（南西部捨て場西端）にある。Ⅶ層を精査中に平行に並ぶ礫を確認。さらに周囲を地山直上まで掘り下げたところ、掘方らしき黒褐色土円形のプランを確認した。

平面形は長さ40㎝程の礫が「Ｎ」字状に並び、直下に長軸74㎝、短軸73㎝、深さ16㎝の円形の掘り込みを有す。坑底部から礫上部までの高さは24㎝である。礫は坑底部に達していることから、円形の穴を掘った後、礫を底面に並べ埋め戻したものと思われる。当遺構から遺物の検出は無く、詳細な性格は不明である。

**ＳＱ220配石遺構［第42図］**

ＮＮ24グリッドにある。地山面精査中に「コ」の字状に組まれる礫を確認しＳＱ220とした。西側でほ場整備の際に受けたと思われる削平を受け、西半が消失している。

平面形は最大径63㎝（北北西―南南東）で、径約14～33㎝程の礫４点を「コ」の字状に組み、西側が開いた形となる。一部礫に被熱痕が認められた。礫の配置と同程度の掘り込みがあり、４層に分層される。１～２層土は炭化物が微量混入する。削平を受ける西半にも掘り込みがあることから、当遺構構築当時は方形に組んであったものと推定する。なお当遺構からは縄文土器片５点が出土している。

周囲から同規模の石囲炉を伴う竪穴住居跡を検出していることから、柱穴等の検出に努めたが、住居跡を示す根拠を認めることはできなかった。現状では屋外炉と推定しておく。

**ＳＱ360配石遺構［第42図］**

ＭＨ35グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に狭い範囲に集中する礫を確認しＳＱ360とした。

長軸102㎝（北―南）、短軸56.5㎝の不整な方形の範囲に、大小様々の礫が40点あまり集石される。礫の配置に規則性は認められなかった。Ⅶ層中のため遺構に伴う掘り込み等は確認できなかった。

周囲にこのタイプの配石遺構が存在しないことから、下部施設を伴う配石墓だった可能性も推測できるが、遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＱ362配石遺構［第42図］**

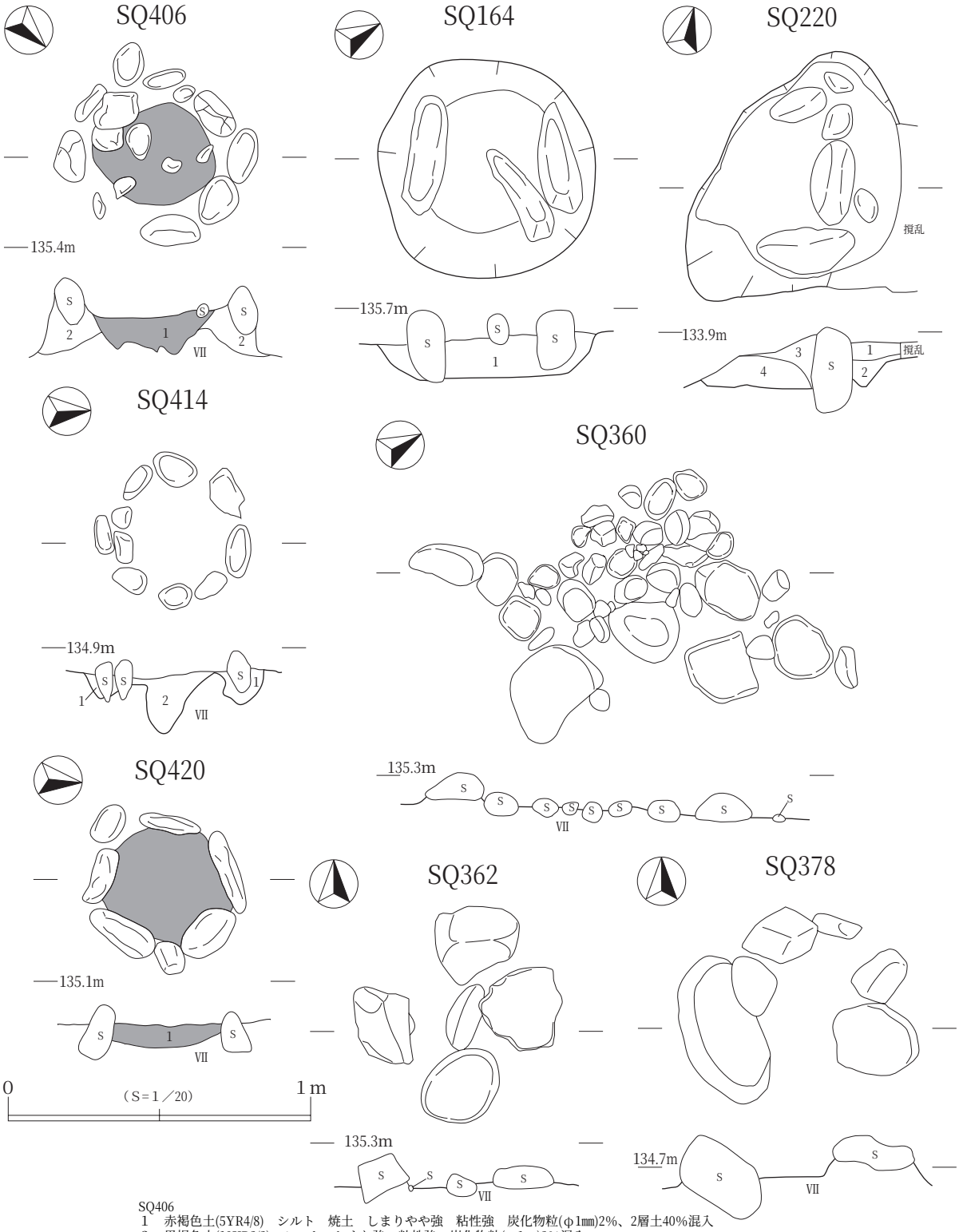
ＭＧ36グリッドにある。Ⅶ層中で小規模な礫の集中を確認しＳＱ362とした。

平面形は長軸72㎝（北―南）、短軸68㎝の方形の範囲に、径20～25㎝程の礫が５点配されている。ほぼ東西南北方向の四隅に25㎝程の礫が配置され、中央にやや小振りの礫が置かれる。四隅に配される礫の間隔がほぼ一定であるため、明らかに人為的な配置と考えられる。Ⅶ層中での検出だったため、遺構に伴う掘り込み等は確認できなかった。遺構の詳細な性格は不明である。

**ＳＱ378配石遺構［第42図］**

ＭＦ32グリッドにある。Ⅶ層中を精査中に規則的に並ぶ礫を確認。さらに周囲を掘り下げたところ、略円形に礫が配されていた。

平面形は直径80㎝（東北東―西南西）の円形で、径15～50㎝程の礫の組み合わせで構成される。南




SQ406
1　赤褐色土(5YR4/8)　シルト　焼土　しまりやや強　粘性強　炭化物粒(φ1㎜)2%、2層土40%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり強　粘性強　炭化物粒(φ1㎜)3%混入
SQ414
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト　しまり弱　粘性やや弱　地山粒20%混入
2　黒色土(10YR1.7/1)　シルト　しまり弱　粘性普通　地山粒30%、地山ブロック混入
SQ420
1　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　シルト～細砂　焼土　しまり普通　粘性普通　炭化物粒(φ１～10㎜)5%混入
SQ164
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり弱　粘性強　炭化物(φ2～5㎜)5%、地山土15%混入
SQ220
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり弱　粘性弱　炭化物粒(φ1㎜)3%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　しまり強　粘性なし　炭化物粒(φ1㎜)2%混入
3　暗褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂　しまりなし　粘性なし
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり普通　粘性弱

**第42図　ＳＱ406・414・420石囲炉状配石遺構、ＳＱ164・220・360・362・378配石遺構**

西方向に礫が無く開いた形となる。黒色土中での検出のため礫に伴う掘り込みは確認できなかった。当遺構からは遺物が検出されず、礫の配置が不規則なため詳細な性格は不明である。

### （３）ＳＲ（土器埋設遺構）

土器埋設遺構は２基のみの検出で、いずれもＡ区北東部捨て場南での検出である。

#### ＳＲ57土器埋設遺構［第43図、図版16］

ＬＯ32（墓域北端・ＳＴ183北東捨て場南に隣接）にある。地山面精査中に検出した。埋設された土器の上部の大半が欠損し、底面付近しか残存していなかった。北側にはＳＲ58が近接する。

掘方は上面では明確に捉えることができず、断面観察の結果、埋設土器とほぼ同じ大きさの掘方が確認できた。

土器内からは遺物は出土しておらず、覆土は少量の地山土が混在する黒色土の単層である。

土器は粗製の深鉢形土器（第56図129）で、底部付近のみの残存である。

#### ＳＲ58土器埋設遺構［第43図、図版16］

ＬＯ33グリッド（墓域北端・ＳＴ183北東捨て場南に隣接）にある。第Ⅱ層下部で検出した。ほぼ完全な形で検出された例である。南側にはＳＲ57が近接する。

掘方平面形は略円形で、掘方南西部に土器が正位に埋設されている。

覆土は５層に分層されるが、１層は基本土層第Ⅱ層で、２～５層には若干地山土が混入している。５層には径３～５㎜の炭化物が含まれている。

土器は大型の粗製の深鉢形土器（第56図130）で、ほぼ完形に復元できた。

### （４）ＳＸ（性格不明遺構）

#### ＳＸ103性格不明遺構［第43図、図版18］

ＬＰ34・ＬＱ34グリッド（ＳＴ183北東部捨て場のほぼ中央）にある。捨て場精査中第Ⅱ層上面で白色粘土の広がりを検出した。

範囲は80×50㎝の不定形で、厚さは最大で５㎝程度である。

#### ＳＸ286性格不明遺構［第44図、図版17］

ＮＨ・ＮＩ26グリッドにある。漸移層精査中に径約1.5mの範囲内に大量に集中する中礫を検出した。遺構か否かの判断がつかなかったため、当初の確認面の礫を図化した後取り除いた。同様にして周囲も地山面まで慎重に掘り下げたところ、黒褐色土楕円形のプランとその範囲内に大量の中礫が混入するのを確認しＳＫ286とした。その後形状を考慮しＳＸ286とした。北側でＳＫ398と切り合うが、新旧関係は不明である。

平面形は長軸223㎝、短軸152㎝のずんぐりとした楕円形で、長軸方向はN73.5°W、深さ163㎝であ

る。底面は自然礫の露出が多く、それ以外は砂質でやや固くしまっている。壁は東半でほぼ垂直に立ち上がる。西側は中位に段丘礫層の巨礫があり、その付近から開口部に向けて外傾して開いていく。壁面は全体的に段丘礫層の自然礫が露出し凹凸が激しい。

覆土は黒褐色土を主体とし２層に分層される。１層に地山土が、覆土全体に微量の炭化物が混入する。確認面から１層下位にかけて10㎝程度の礫が大量に混入するも、覆土中位にある巨礫より西側では礫が少なくなる。

遺物は縄文土器片93点を検出した。

当遺構は礫の混入具合は当遺跡内の配石墓に類似するものの、形状が不整であることから配石墓との判断は妥当でないだろう。柱穴と推測するＳＸ347と規模形状が酷似することから当遺構も柱穴と想定することも可能だが、その場合柱を抜いた後埋め戻したものと考えられる。

**ＳＸ402性格不明遺構［第44図、図版17］**

ＭＨ31グリッドにある。東部環状配石遺構の北側（ＭＨとＭＩラインの中間）にトレンチを設定し、礫を除去して掘り下げたところ、地山面直上で周囲に礫の巡る黒褐色土のプランを検出した。

平面形は長軸78㎝（北東－南西）、短軸62㎝の不整な楕円形で、掘方の深さは36㎝である。

底面から壁面にかけては段丘礫層の露出が著しく、本来の段丘礫面を掘り込んで構築された遺構であると推測可能である。

**ＳＸ465性格不明遺構［第44図、図版17］**

ＭＧ33・34グリッドにある。基本土層Ⅶ層を精査中に黒色土の比較的大きなプランを検出した。範囲が広く、プランの確定が困難だったため、さらに掘り下げたところ、地山面で長楕円形のプランを確認した。西部でＳＫ462と切り合い関係にあるが、当遺構の方が古い。

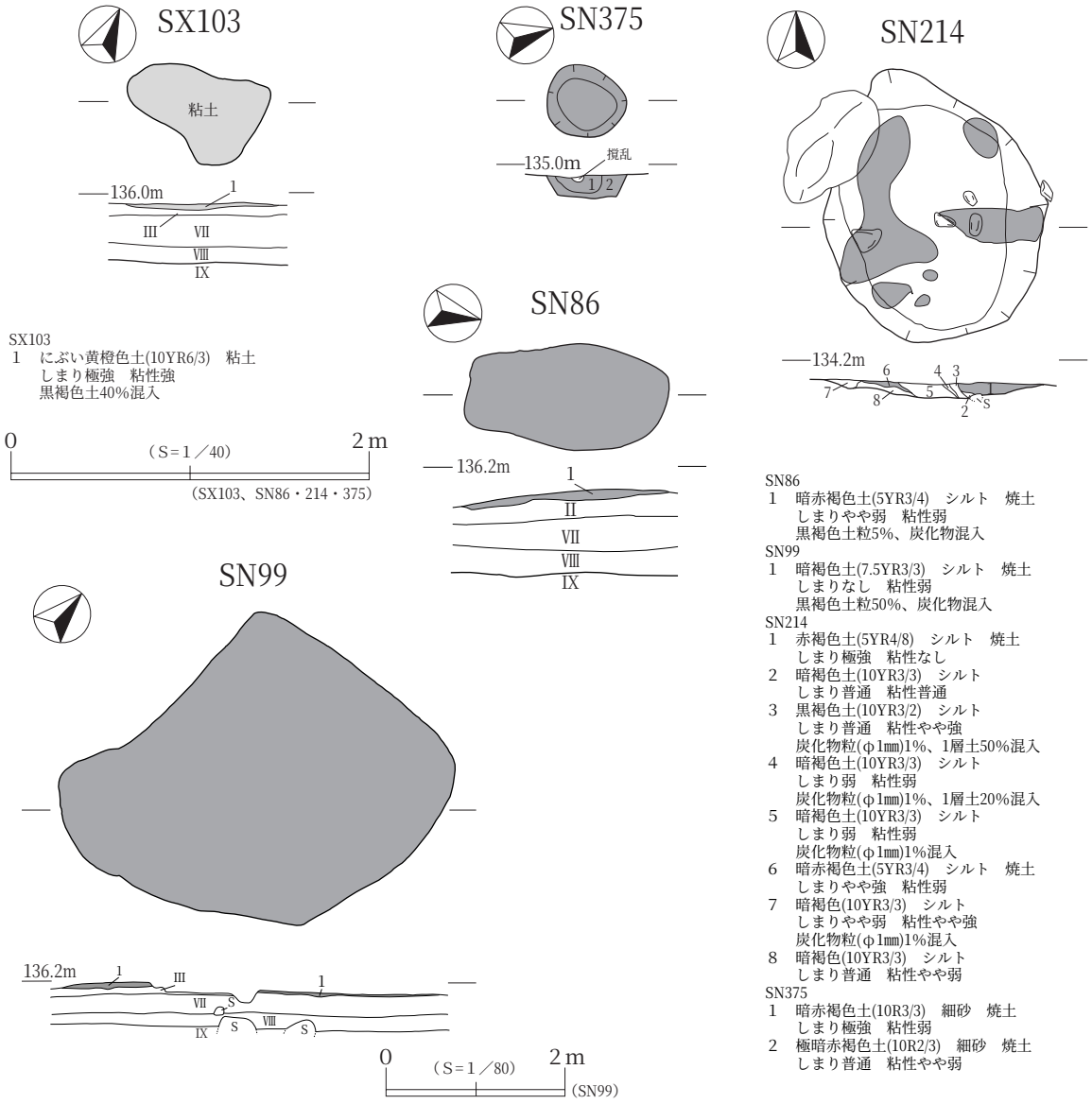
平面形はいびつな長楕円形で、長軸360㎝（北東－南西）、短軸236㎝、深さ40㎝である。掘方プランはいびつで、底面は凹凸が著しく、壁面もまた同様である。土層断面を観察すると、底面からの立ち上がり等に対応した分層が可能であるので、複数の遺構が複雑に切り合った遺構である可能性があるが、判然としない。また、遺構の周辺からは多数の柱穴様ピット（径30㎝前後）が検出されているが、上部施設を想像させる配置や、規則性などは看取されなかった。粗製の縄文土器を主体として94点の土器片が出土している。うち精製土器片は９点である。

### （５）ＳＮ（焼土遺構）

ＳＮ86・99焼土遺構は個別の遺構として扱っているが、北東部捨て場の遺物包含層（Ⅲ層）中からは捨て場範囲のほとんどから範囲の押さえられない程度の微量な焼土が検出された。上記の焼土遺構は、その中でも明瞭・顕著に焼土層が確認できた範囲であるといえる。

**ＳＮ86焼土遺構［第43図、図版18］**

ＬＰ34グリッド（ＳＴ183北東部捨て場のほぼ中央）にある。捨て場精査中焼土の広がりを検出した。



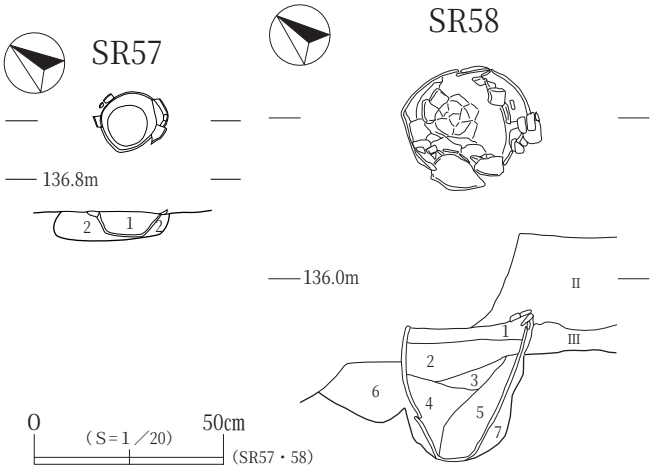

SX103
1　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　粘土
　　しまり極強　粘性強
　　黒褐色土40%混入

SN86
1　暗赤褐色土(5YR3/4)　シルト　焼土
　　しまりやや弱　粘性弱
　　黒褐色土粒5%、炭化物混入

SN99
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　シルト　焼土
　　しまりなし　粘性弱
　　黒褐色土粒50%、炭化物混入

SN214
1　赤褐色土(5YR4/8)　シルト　焼土
　　しまり極強　粘性なし
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　　しまり普通　粘性普通
3　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　　しまり普通　粘性やや強
　　炭化物粒(φ1㎜)1%、1層土50%混入
4　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　　しまり弱　粘性弱
　　炭化物粒(φ1㎜)1%、1層土20%混入
5　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　　しまり弱　粘性弱
　　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
6　暗赤褐色土(5YR3/4)　シルト　焼土
　　しまりやや強　粘性弱
7　暗褐色(10YR3/3)　シルト
　　しまりやや弱　粘性やや強
　　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
8　暗褐色(10YR3/3)　シルト
　　しまり普通　粘性やや弱

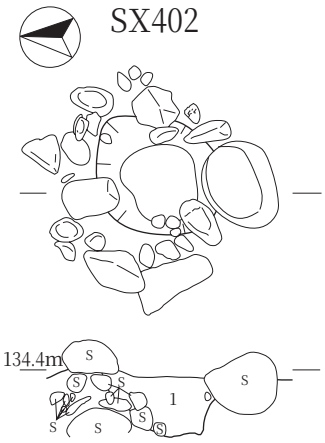
SN375
1　暗赤褐色土(10R3/3)　細砂　焼土
　　しまり極強　粘性弱
2　極暗赤褐色土(10R2/3)　細砂　焼土
　　しまり普通　粘性やや弱

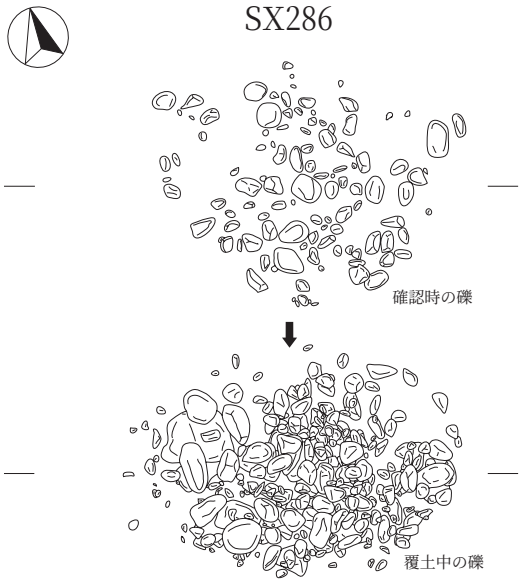



SR57
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト　しまりやや強　粘性なし
　　地山土少量混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性やや強
　　地山土粒(φ1㎜)1%混入
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
　　黒褐色土20%混入

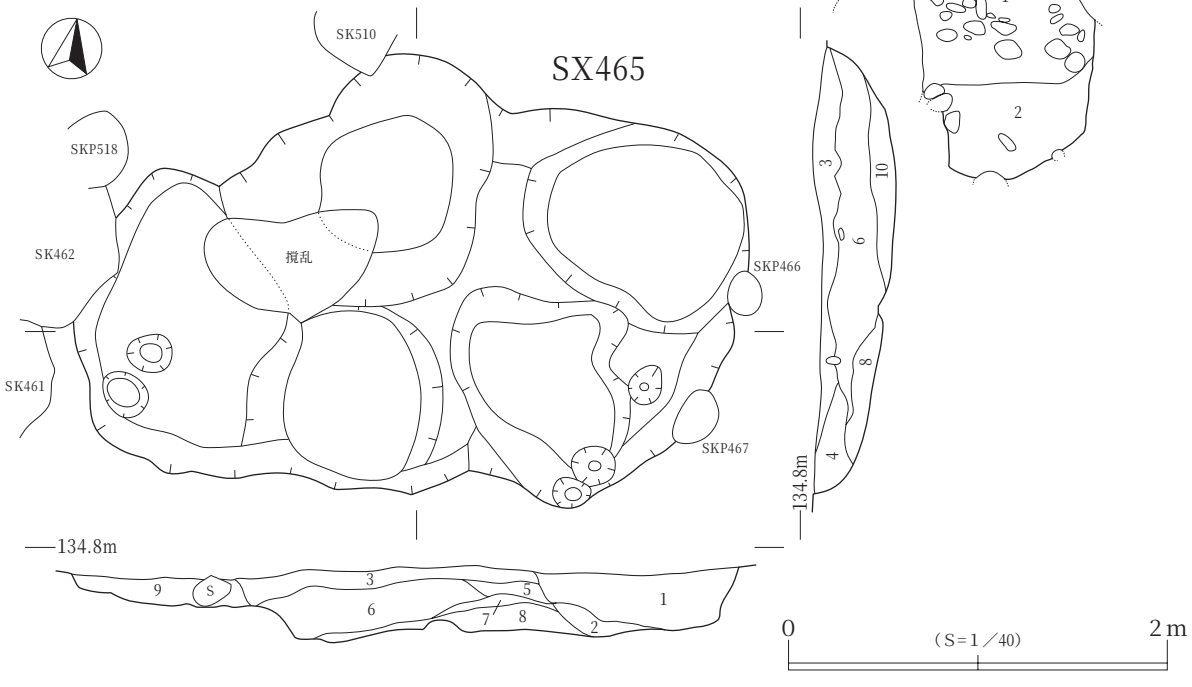
SR58
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまり強　粘性強
　　炭化物(φ3～5㎜)10%、白色粒子(φ１～３㎜)20%、
　　礫(φ10～20㎜)5%、酸化した鉄分多量混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性強
　　地山粒(φ3～5㎜)7%、酸化した鉄分混入
3　黒色土(10YR1.7/1)　シルト　しまり強　粘性強
　　地山土1%、酸化した鉄分混入
4　黒褐色土(10YR2/2)　シルト　しまり強　粘性強
　　地山土10%、酸化した鉄分混入
5　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり強　粘性強
　　炭化物(φ3～5㎜)1%、地山土10%、酸化した鉄分混入
6　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまりやや強　粘性強
　　地山土10%混入
7　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまりやや強　粘性強
　　酸化した鉄分少量混入

**第43図　ＳＸ103性格不明遺構、ＳＮ86・99・214・375焼土遺構、ＳＲ57・58土器埋設遺構**




SX286
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト　しまり強　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～10㎜)2%、礫(φ10～250㎜)多量混入
2　黒褐色(10YR2/2)　シルト　しまりやや強　粘性極強
　炭化物粒(φ1～3㎜)5%、礫(φ10～140㎜)多量混入
SX402
1　黒褐色土(10YR3/1)　シルト　しまり普通　粘性やや強
　小礫(φ3～5㎜)少量混入
SX465
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまり普通　粘性やや強
　炭化物粒(φ1～5㎜)2%混入
2　黒褐色土(10YR3/1)　シルト～細砂　しまりやや弱　粘性普通
3　黒色土(10YR2/1)　シルト～細砂　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1㎜)3%、鍜土40%混入
4　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまり普通　粘性やや強
　炭化物粒(φ1㎜)5%、鍜土10%混入
5　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまりやや弱　粘性やや強
　炭化物粒(φ1㎜)2%混入
6　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまり普通　粘性やや強
　地山土10%混入
7　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂　しまり普通　粘性強
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土30%混入
8　黒色土(10YR2/1)　シルト　しまりやや弱　粘性強
　炭化物粒(φ1～3㎜)2%混入
9　黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂　しまり普通　粘性普通
　炭化物粒(φ1㎜)1%、鍜土50%混入
10　黒褐色土(10YR3/1)　シルト～細砂　しまり普通　粘性普通




**第44図　ＳＸ286・402・465性格不明遺構**

範囲は110×60㎝程で、厚さは最大５㎝程度である。

**ＳＮ99焼土遺構［第43図］**

ＬＯ35グリッド（ＳＴ183北東部捨て場の東部）にある。

範囲は220×170㎝程で、厚さは最大４㎝程度である。

南西部で特に焼土粒・煤状炭化物の混入が顕著である。

**ＳＮ214焼土遺構［第43図、図版18］**

ＮＪ26・27グリッドにある。確認調査時のトレンチ底面の地山面で暗褐色土の楕円形プランを確認しＳＮ214とした。

平面形は長軸159㎝、短軸121㎝の楕円形の範囲に、深さは８㎝程堆積する。焼土は110㎝四方の範囲にまばらに広がる。１・６層は焼土であり、３・４層には焼土粒が混入する。３～５・７層には微量の炭化物粒が混入する。

ＳＩ200の推定範囲内に位置するものの、当遺構を若干高い位置で検出しているため、ＳＩ200埋没後、焚き火による被熱を受けたものと考えられる。

**ＳＮ375焼土遺構［第43図、図版18］**

ＭＧ33グリッドにある。地山面精査中に楕円形に広がる焼土痕を確認した。

平面形は長軸44㎝、短軸40㎝の不整な楕円形の範囲に深さ13㎝程堆積する。焼土層は２層に分層される。全体的に細砂質で１層土は極めて固くしまる。１層土上面で比較的新しいと思われる撹乱を受けている。周囲から石囲炉状配石遺構に伴って焼土が検出されているが、焼土のみの検出は当遺構の周辺では他にない。

## （６）ＳＫＰ（柱穴様ピット）

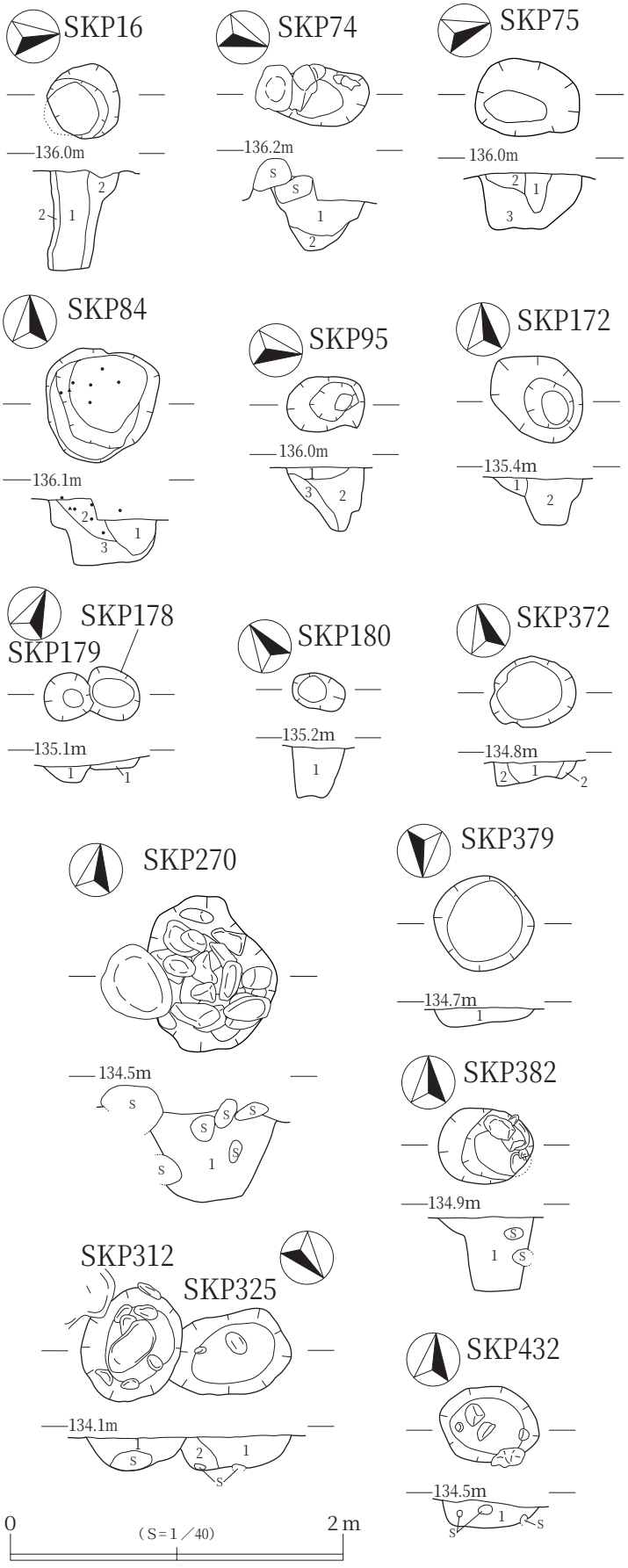
柱穴様ピットは147基検出された（第５・６表）。おもにＡ区南西部捨て場周辺やＡ区北西部での検出である。特にＡ区北西部のＳＸ465周辺で集中して検出された（第46図）。しかしながら上部施設が想定されるもの、規則性などは特に看取されなかった。

## （７）ＳＩ（竪穴住居跡）

竪穴住居跡は３軒のみの検出であり、いずれもＢ区西側での検出である。

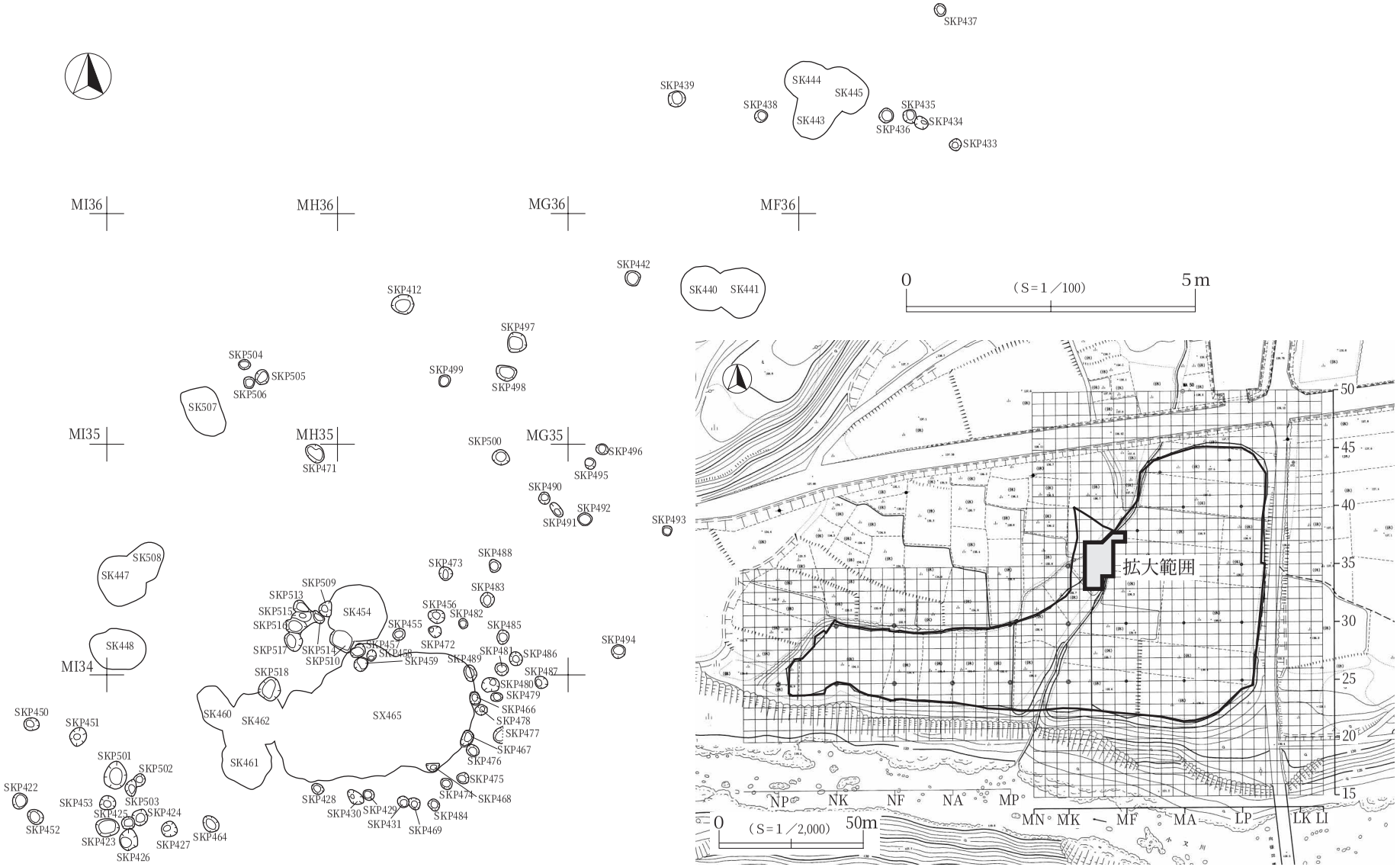
**ＳＩ190竪穴住居跡［第47図、図版18］**

ＬＮ24グリッドにある。地山面精査中に不明瞭かつ不定形な黒色土のプランを検出した。遺構と断定できなかったためサブトレンチを十字に設定したところ、南北サブトレンチ中央部やや北側底面に炉と思われる石囲の一部と焼土痕を検出し、竪穴住居跡と判断して精査を進めた。西側でＳＫ307と




SKP16
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性ややあり
　炭化物1%、地山粒１%混入
2　黒褐色土(10YR2/2～10YR2/3)　シルト
　しまりやや弱　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)1%、地山粒(φ1～20㎜)10%混入
SKP74
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～粘土
　しまりやや弱　粘性やや弱
　炭化物(φ1～3㎜)１%、地山粒(φ1～10㎜)5%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまりやや弱　粘性普通　地山土混入
SKP75
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～3㎜)1%、地山粒(φ1～20㎜)3%混入
2　黒褐色土(10YR2/2～10YR2/3)　シルト
　しまりなし　粘性やや弱
　地山粒(φ1～10㎜)5%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまりなし　粘性普通
　地山土50%混入
SKP84
1　黒色土(10YR2/1)　シルト　暗褐色土少量混入
　炭化物粒(φ1㎜)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり普通　粘性弱
　暗褐色土30%混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　２層土30%混入、炭化物粒(φ1～5㎜)1%混入
SKP95
1　黒色土(10YR2/1)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～10㎜)3%、地山粒(φ1㎜)5%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物(φ1～10㎜)1%、地山粒(φ1～50㎜)20%混入
3　暗褐色土(10YR3/3)　シルト～粘土
　しまり普通　粘性やや強
　炭化物(φ1㎜)1%以下、地山土50%混入
SKP172
1　黒褐色土(10YR3/2)　シルト
　しまり普通　粘性弱
　極少白色粒状物微量混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり普通　粘性やや強
SKP178
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性弱
　褐色土(10YR4/6)5%、地山粒5%混入
SKP179
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性弱
　地山粒5%混入
SKP180
1　黒褐色土(10YR2/3)　シルト
　しまり強　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)5%、極少白色粒状物微量混入
SKP270
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　炭化物(φ1～5㎜)5%、小礫(φ50～70㎜)少量、
　地山土粒(φ1～5㎜)2%混入
SKP312
1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト
　しまりやや強　粘性弱
　炭化物粒(φ1㎜)1%、地山土10%混入
SKP325
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1～3㎜)3%、地山土粒(φ1～10㎜)5%混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト
　しまり普通　粘性やや弱
　炭化物粒(φ1～3㎜)3%、地山土50%混入
SKP372
1　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～5㎜)1%、地山粒30%混入
2　黒色土(10YR2/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～5㎜)1%、地山粒50%混入
SKP379
1　黒色土(10YR1.7/1)　シルト
　しまり強　粘性やや強
　炭化物(φ1～2㎜)１%混入
SKP382
1　黒褐色土(10YR2/2)　細砂～シルト
　しまりやや強　粘性やや弱
　炭化物(φ1～5㎜)10%、酸化した鉄分中量混入
SKP432
1　黒褐色土(10YR2/2)　シルト
　しまり強　粘性強
　小礫(φ20～50㎜)少量、細砂少量混入

**第45図　ＳＫＰ柱穴様ピット**




**第46図　北部配石群下柱穴様ピット**

## 第５表　柱穴様ピット一覧①

| 番号 | 位置 | 平面形 | 長径（cm） | 短径（cm） | 深さ（cm） | 底面標高（m） | 備考 | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SKP16 | LS27 | 円形 | 45 | 40 | 60 | 128.10 | | 8・45 |
| SKP54 | LP28 | 楕円形 | （45） | （30） | 34 | 135.72 | SK42と重複、新旧関係不明 | 8・15 |
| SKP74 | LT27 | 楕円形 | 65 | 36 | 36 | 135.60 | 礫上部までの高さ43cm | 8・45 |
| SKP75 | LT27 | 楕円形 | 63 | 47 | 43 | 135.60 | 礫上部までの高さ51cm | 8・45 |
| SKP84 | LT24 | 円形 | 72 | 68 | 40 | 135.58 | | 8・45 |
| SKP87 | LT26 | 楕円形 | 45 | 30 | 21 | 135.66 | SK102より新しい | 8・18 |
| SKP88 | LT26 | 円形 | 55 | 49 | 28 | 135.61 | SK102より新しい | 8・18 |
| SKP95 | MA25 | 楕円形 | 90 | 64 | 76 | 135.53 | | 8・45 |
| SKP119 | MD29 | 楕円形 | （58） | 46 | 19 | 135.00 | SK320より古い | 19 |
| SKP172 | MA29 | 楕円形 | 63 | 45 | 30 | 135.19 | | 8・45 |
| SKP178 | MD30 | 楕円形 | 35 | （30） | 7 | 134.99 | SKP179より古い | 45 |
| SKP179 | MD30 | 円形 | 30 | 30 | 10 | 134.91 | SKP178より新しい | 45 |
| SKP180 | ME29 | 楕円形 | 32 | 22 | 31 | 134.89 | | 45 |
| SKP221 | NL24<br>NL25 | 楕円形 | 57 | 46 | 18 | 134.10 | | 26 |
| SKP248 | ND27 | 楕円形 | 123 | 78 | 73 | 134.35 | 礫上部までの高さ87cm | 35・36 |
| SKP270 | NA28 | 楕円形 | 113 | 77 | 56 | 133.74 | 礫上部までの高さ60cm | 45 |
| SKP298 | ND26 | 楕円形 | 86 | 70 | 68 | 133.44 | | 35・36 |
| SKP306 | NC27<br>ND27 | 楕円形 | 94 | 68 | 67 | 134.43 | | 35・36 |
| SKP312 | NJ27 | 楕円形 | 70 | 59 | 20 | 133.86 | SKP325より新しい | 45 |
| SKP325 | NI27<br>NJ27 | 楕円形 | （75） | 50 | 22 | 133.83 | SKP312より古い | 45 |
| SKP331 | MD29 | 楕円形 | 40 | 34 | 27 | 134.94 | SK117より新しい | 19 |
| SKP340 | NE25 | 楕円形 | 96 | 77 | 118 | 132.82 | | 35・36 |
| SKP341 | ND26 | 楕円形 | 99 | 73 | 130 | 132.86 | | 35・36 |
| SKP364 | MD32 | 楕円形 | （51） | 41 | 10 | 134.90 | SK131より古い | 20 |
| SKP372 | MG32 | 楕円形 | 52 | 43 | 16 | 134.60 | | 45 |
| SKP379 | MG33 | 円形 | 60 | 58 | 12 | 134.65 | | 45 |
| SKP382 | MG32 | 楕円形 | 58 | 45 | 45 | 134.38 | | 45 |
| SKP392 | MG32<br>MH32 | 円形 | 43 | 38 | 18 | 134.47 | | 23 |
| SKP397 | MG33<br>MH33 | 楕円形 | （30） | 25 | 27 | 134.63 | SK394より古い | 23 |
| SKP412 | MH35 | 円形 | 37 | 34 | 12 | 134.80 | | 46 |
| SKP422 | MI33 | 楕円形 | 29 | 25 | 21 | 134.49 | | 46 |
| SKP423 | MH33<br>MI33 | 楕円形 | 40 | 31 | 14 | 134.55 | | 46 |
| SKP424 | MH33 | 円形 | 29 | 27 | 18 | 134.52 | | 46 |
| SKP425 | MH33 | 円形 | 24 | 23 | 24 | 134.46 | SKP424より新しい | 46 |
| SKP426 | MH33 | 楕円形 | 38 | 32 | 30 | 134.40 | | 46 |
| SKP427 | MH33 | 円形 | 29 | 26 | 23 | 134.47 | | 46 |
| SKP428 | MH33 | 楕円形 | 21 | 18 | 8 | 134.62 | | 46 |
| SKP429 | MG33 | 円形 | 21 | 19 | 14 | 134.62 | | 46 |
| SKP430 | MG33 | 楕円形 | 33 | 20 | 24 | 134.50 | | 46 |
| SKP431 | MG33 | 円形 | 22 | 20 | 12 | 134.64 | SKP469より新しい | 46 |
| SKP432 | MH32 | 楕円形 | 61 | 47 | 17 | 134.29 | | 45 |
| SKP433 | ME36 | 円形 | 22 | 21 | 11 | 134.81 | | 46 |
| SKP434 | ME36 | 楕円形 | 25 | 21 | 20 | 134.72 | SKP435と重複、新旧関係不明 | 46 |
| SKP435 | ME36 | 円形 | 25 | 24 | 23 | 134.70 | SKP434と重複、新旧関係不明 | 46 |
| SKP436 | ME36 | 円形 | 26 | 26 | 14 | 134.77 | | 46 |
| SKP437 | ME36 | 円形 | 23 | 20 | 21 | 134.75 | | 46 |
| SKP438 | MF36 | 円形 | 23 | 22 | 21 | 134.75 | | 46 |
| SKP439 | MF36 | 楕円形 | 32 | 27 | 33 | 134.59 | | 46 |
| SKP442 | MF35 | 円形 | 26 | 26 | 11 | 134.76 | | 46 |
| SKP450 | MI33 | 円形 | 27 | 24 | 34 | 134.32 | | 46 |
| SKP451 | MI33 | 円形 | 32 | 28 | 18 | 134.52 | | 46 |
| SKP452 | MI33 | 楕円形 | 40 | 24 | 22 | 134.48 | | 46 |

## 第６表　柱穴様ピット一覧②

| 番号 | 位置 | 平面形 | 長径（cm） | 短径（cm） | 深さ（cm） | 底面標高（m） | 備考 | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SKP453 | MH33<br>MI33 | 楕円形 | 28 | 24 | 44 | 134.24 | | 46 |
| SKP455 | MG34 | 円形 | 23 | 20 | 18 | 134.60 | | 46 |
| SKP456 | MG34 | 円形 | 28 | 26 | 9 | 134.70 | | 46 |
| SKP457 | MG34 | 楕円形 | 28 | 22 | 25 | 134.50 | SKP510より新しい | 46 |
| SKP458 | MG34 | 楕円形 | 20 | 15 | 27 | 134.47 | | 46 |
| SKP459 | MG34 | 楕円形 | 27 | 23 | 28 | 134.46 | | 46 |
| SKP464 | MH33 | 楕円形 | 31 | 25 | 22 | 134.50 | | 46 |
| SKP466 | MG33 | 楕円形 | 24 | 18 | 20 | 134.52 | | 46 |
| SKP467 | MG33 | 楕円形 | 28 | 10 | 16 | 134.54 | | 46 |
| SKP468 | MG33 | 楕円形 | 22 | 16 | 60 | 134.14 | | 46 |
| SKP469 | MG33 | 楕円形 | 24 | 19 | 29 | 134.46 | SKP431より古い | 46 |
| SKP471 | MH34 | 楕円形 | 37 | 28 | 24 | 134.50 | | 46 |
| SKP472 | MG34 | 楕円形 | 23 | 19 | 15 | 134.62 | | 46 |
| SKP473 | MG34 | 円形 | 24 | 23 | 23 | 134.58 | | 46 |
| SKP474 | MG33 | 円形 | 21 | 20 | 12 | 134.60 | | 46 |
| SKP475 | MG33 | 円形 | 24 | 22 | 10 | 134.64 | | 46 |
| SKP476 | MG33 | 円形 | 23 | 20 | 12 | 134.60 | | 46 |
| SKP477 | MG33 | ― | ― | ― | 22 | 134.52 | 撹乱を受け平面形は不明 | 46 |
| SKP478 | MG33 | 楕円形 | 21 | 18 | 20 | 134.54 | | 46 |
| SKP479 | MG33 | 楕円形 | 21 | 16 | 31 | 134.46 | | 46 |
| SKP480 | MG33 | 円形 | 30 | 28 | 24 | 134.60 | | 46 |
| SKP481 | MG34 | 円形 | 24 | 23 | 27 | 134.50 | | 46 |
| SKP482 | MG34 | 円形 | 18 | 16 | 20 | 134.56 | | 46 |
| SKP483 | MG34 | 円形 | 26 | 24 | 11 | 134.68 | | 46 |
| SKP484 | MG33 | 楕円形 | 22 | 19 | 22 | 134.52 | | 46 |
| SKP485 | MG34 | 円形 | 24 | 22 | 16 | 134.62 | | 46 |
| SKP486 | MG34 | 円形 | 25 | 22 | 34 | 134.46 | | 46 |
| SKP487 | MG33 | 円形 | 24 | 21 | 19 | 134.60 | | 46 |
| SKP488 | MG34 | 楕円形 | 24 | 19 | 20 | 134.58 | | 46 |
| SKP489 | MG33<br>MG34 | 楕円形 | 28 | 20 | 37 | 134.36 | | 46 |
| SKP490 | MG34 | 楕円形 | 21 | 18 | 22 | 134.52 | | 46 |
| SKP491 | MG34 | 楕円形 | 29 | 16 | 27 | 134.52 | | 46 |
| SKP492 | MF34 | 円形 | 25 | 24 | 25 | 134.46 | | 46 |
| SKP493 | MF34 | 円形 | 19 | 17 | 18 | 134.52 | | 46 |
| SKP494 | MF34 | 円形 | 26 | 24 | 31 | 134.42 | | 46 |
| SKP495 | MF34 | 円形 | 20 | 19 | 19 | 134.56 | | 46 |
| SKP496 | MF34 | 円形 | 22 | 20 | 10 | 134.66 | | 46 |
| SKP497 | MG35 | 円形 | 36 | 34 | 27 | 134.54 | | 46 |
| SKP498 | MG35 | 楕円形 | 36 | 27 | 31 | 134.48 | | 46 |
| SKP499 | MG35 | 円形 | 22 | 20 | 26 | 134.54 | | 46 |
| SKP500 | MG34 | 円形 | 30 | 27 | 13 | 134.64 | | 46 |
| SKP501 | MH33<br>MI33 | 楕円形 | 49 | 40 | 12 | 134.54 | | 46 |
| SKP502 | MH33 | 楕円形 | 25 | (19) | 20 | 134.50 | SKP503より古い | 46 |
| SKP503 | MH33 | 楕円形 | 29 | 20 | 28 | 134.40 | SKP502より新しい | 46 |
| SKP504 | MH35 | 楕円形 | 22 | 17 | 18 | 134.58 | | 46 |
| SKP505 | MH35 | 円形 | 28 | 25 | 4 | 134.70 | | 46 |
| SKP506 | MH35 | 円形 | 22 | 20 | 7 | 134.68 | | 46 |
| SKP509 | MH34 | 楕円形 | 29 | 18 | 15 | 134.65 | SK454より新しい | 25・46 |
| SKP510 | MG34<br>MH34 | 楕円形 | (44) | 43 | 23 | 134.51 | SK454と重複、新旧関係不明<br>SKP457より古い | 25・46 |
| SKP513 | MH34 | 楕円形 | 32 | 19 | 16 | 134.56 | SKP515と重複、新旧関係不明 | 46 |
| SKP514 | MH34 | 楕円形 | 26 | 19 | 8 | 134.64 | SKP515と重複、新旧関係不明 | 46 |
| SKP515 | MH34 | 楕円形 | 42 | 24 | 19 | 134.54 | SKP513・514・516と重複、新旧関係不明 | 46 |
| SKP516 | MH34 | 楕円形 | 33 | 20 | 11 | 134.62 | SKP515・517と重複、新旧関係不明 | 46 |
| SKP517 | MH34 | 楕円形 | 33 | 24 | 9 | 134.63 | SKP516と重複、新旧関係不明 | 46 |
| SKP518 | MH33 | 円形 | 41 | 37 | 18 | 134.48 | SK462より新しい | 25・46 |

切り合い、堆積状況から当遺構が古い。

平面形は東西346㎝、南北356㎝の不整な略円形で、南部二隅で隅丸となる。壁高は約11～20㎝程である。

覆土と地山土の区別がつきにくかったため、土のしまり具合を手がかりに掘削したところ、床及び壁を検出した。床面はほぼ平坦で極めて固くしまり、南側で小又川右岸の段丘崖方向にやや落ち込む。壁はほぼ垂直に立ち上がる箇所が多いが、一部外傾して緩やかに立ち上がる。

柱穴は５本確認した。大きさはそれぞれ径29～37㎝で、深さは約15～22㎝である。底面はＰ２以外平坦で、Ｐ２底面には扁平な自然礫が露出する。

炉は住居中央部北よりに位置する。最大径72㎝で、10個の扁平な河原石を不整な方形に組む石囲炉である。炉内には焼土を検出し、北側に偏って礫に被熱痕が認められる。焼土層は1.5㎝である。炉の南約0.8ｍに位置する焼土痕は長軸46㎝、短軸38㎝の不整な楕円形の範囲に堆積し、炭化物が多量に混入する。厚さは13.5㎝である。地床炉もしくは使用されなくなった炉跡と推測する。

覆土は８層に分層し、４・６・７層に微量の炭化物が含まれる。覆土の状態から自然堆積だと推定する。

遺物は縄文時代前期・中期・晩期の土器片が104点、剥片類23点が出土している。

当遺構は出土遺物などから縄文時代中期末～後期にかけていずれかの時期に構築、使用されたと推測するが、正確な時期は不明である。

**ＳＩ200竪穴住居跡［第47図、図版18］**

ＮＡ26グリッドにある。地山面精査中、「コ」の字状に並ぶ石組みを確認。配石遺構として登録したが、精査を進め複式炉であることが判明した。周囲から柱穴や壁の立ち上がりなどを認めることはできなかったが、竪穴住居に伴う炉と考えられる。

炉は長軸189㎝で長軸方向Ｎ14.5°Ｗ、深さ17㎝である。土器埋設部と推測される部位、敷石を施した配石部、前庭部とよばれる石を配した掘り込み部分からなる典型的な複式炉である。配石部は径72㎝で、板状礫を北側に２、東西側面各１の計４個を「コ」の字状に立て、底部に扁平な礫を敷き詰めている。土器埋設部との境界にある板状礫、石組み部側面の礫、敷石部にはっきりと熱を受けた痕跡があり、敷石部ではそれが顕著である。前庭部は径99㎝程で敷石部よりも１段高く、テラス状になっている。「ハ」の字状に扁平な河原石を立てており、中間にもう一つ扁平な河原石を施している。前庭部に被熱痕は見受けられなかったが、硬化面があった。土器埋設部と推定される部位の径は49㎝である。

覆土は土器埋設部が２層、配石部が２層に分層される。土器埋設部があったと推測される掘り込みは、地山土が混入することから土器を抜き取った後の埋め戻し土、配石部の２層は自然堆積と考えられる。

遺物は配石部、敷石よりやや上部から縄文時代中期末葉の土器片11点が出土した。

**ＳＩ291竪穴住居跡［第47図、図版18］**

ＮＫ28・29、ＮＬ28・29グリッドにある。Ⅲ層中を精査中、不定形の黒色土のプランが確認された

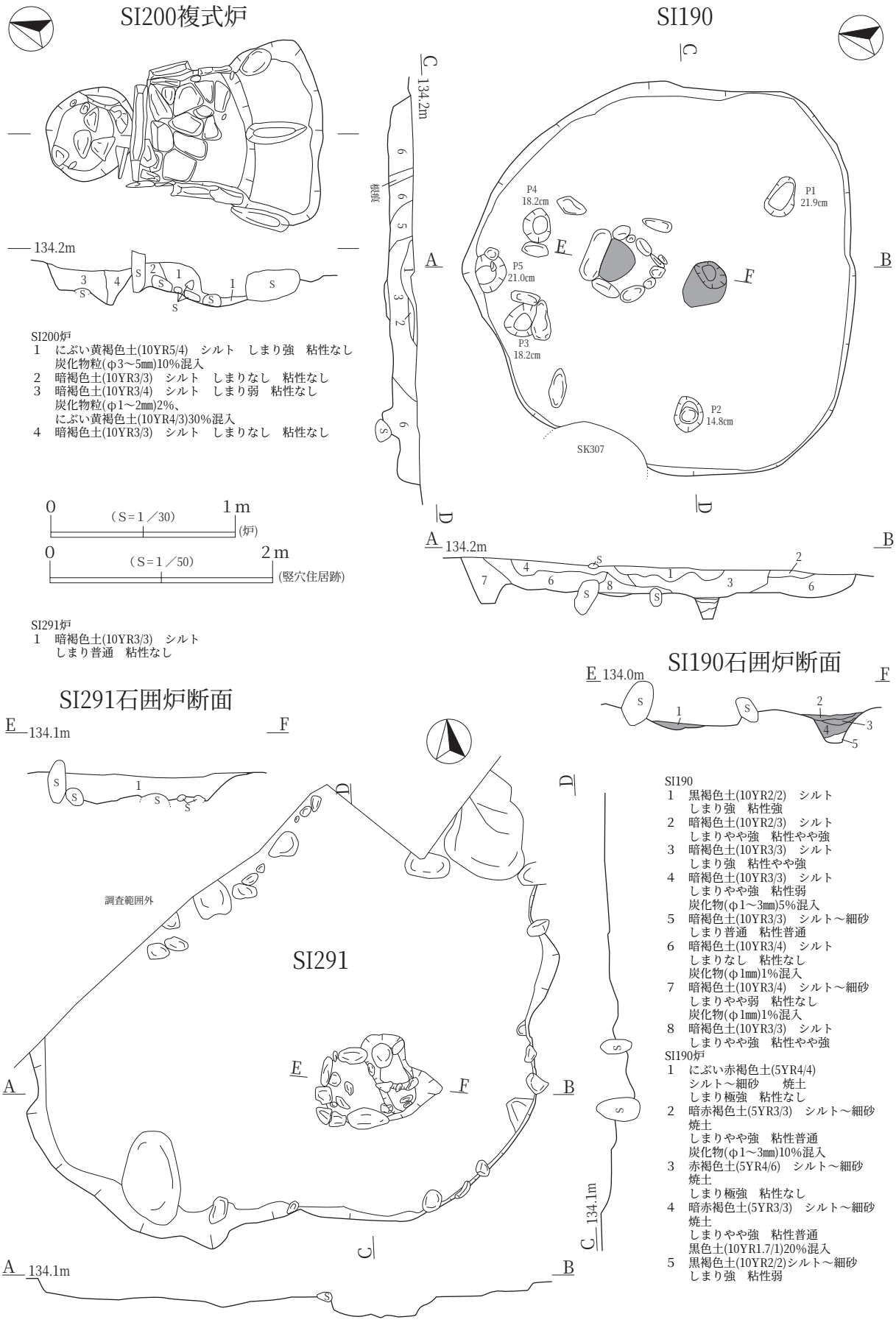
がⅢ層土と酷似していたことと、調査範囲西端から調査範囲外に続く沢の落ち込みがあったことから、遺構と断定できないまま調査を継続した。ＮＬ28グリッド北東側に石組みを確認し、周囲を地山面まで掘り下げたところ一部に掘り込みらしき段差を認めＳＩ291とした。

北東側が調査範囲外であるため遺構の正確な規模は不明であるが、東西463㎝、壁高約７～14㎝の規模である。

床面は一部段丘礫層の自然礫が露出するものの概ね平坦であり、炉周辺でやや固くしまっていた。調査区外にあたる周辺は沢へ落ち込む部分で、ほ場整備の際に盛り土したと思われる礫が大量に堆積していた。壁の立ち上がりは一部のみの確認であるが、やや緩やかに立ち上がる。

炉は床面南東側に位置する。径15～35㎝程の礫を「コ」の字状に組んでおり、東側が開いた形となる。礫の抜ける東側で掘り込みを確認しており、もともとは方形あるいは円形の石囲炉と推定する。炉内東側の狭い範囲で焼土を少量検出し、西側の礫に被熱痕を確認した。炉内の覆土は１層のみでありⅢ層土に類似する。柱穴は検出できなかった。

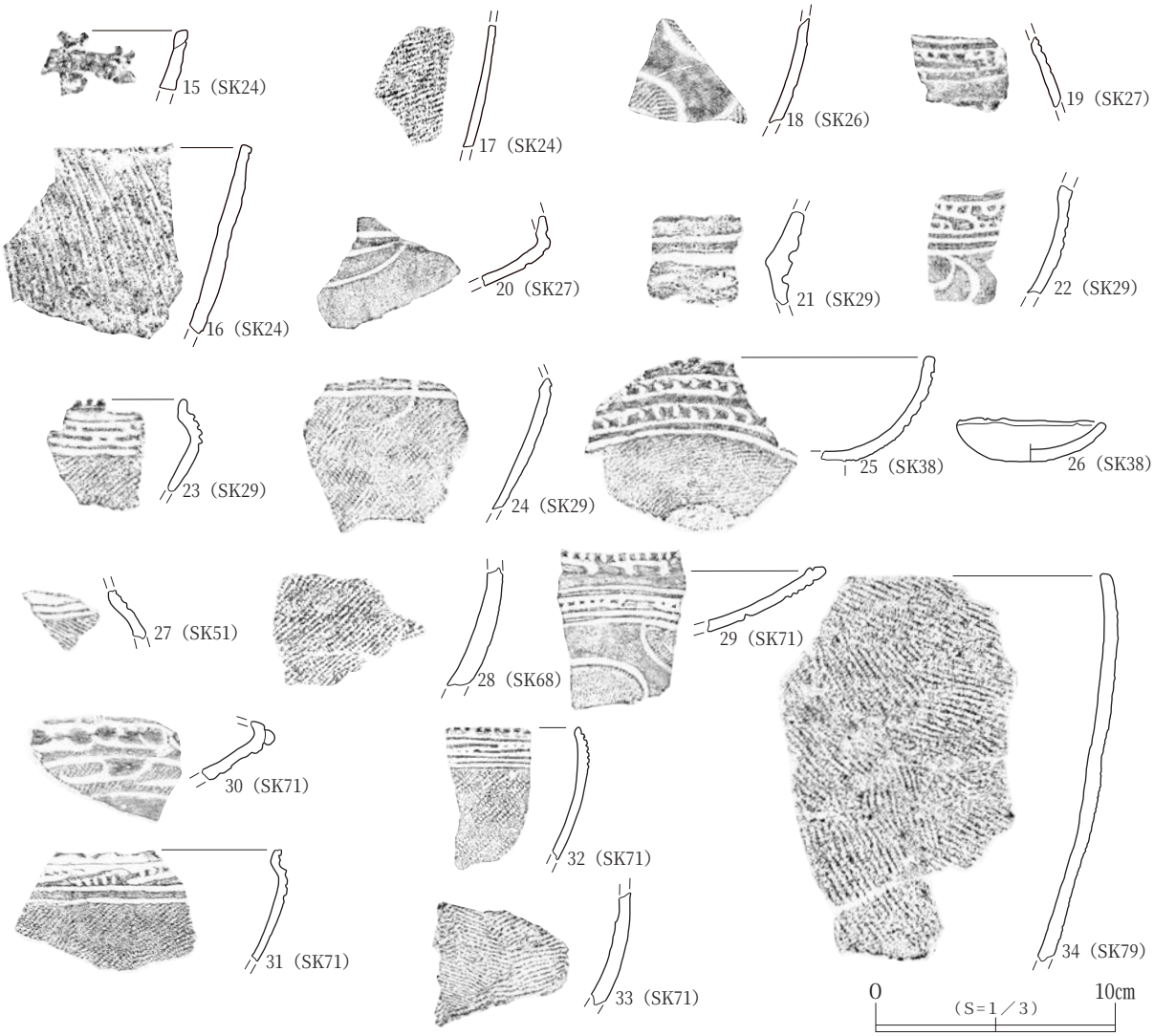
遺物は縄文土器片45点、剥片２点が出土した。




**第47図　ＳＩ190・200・291竪穴住居跡**

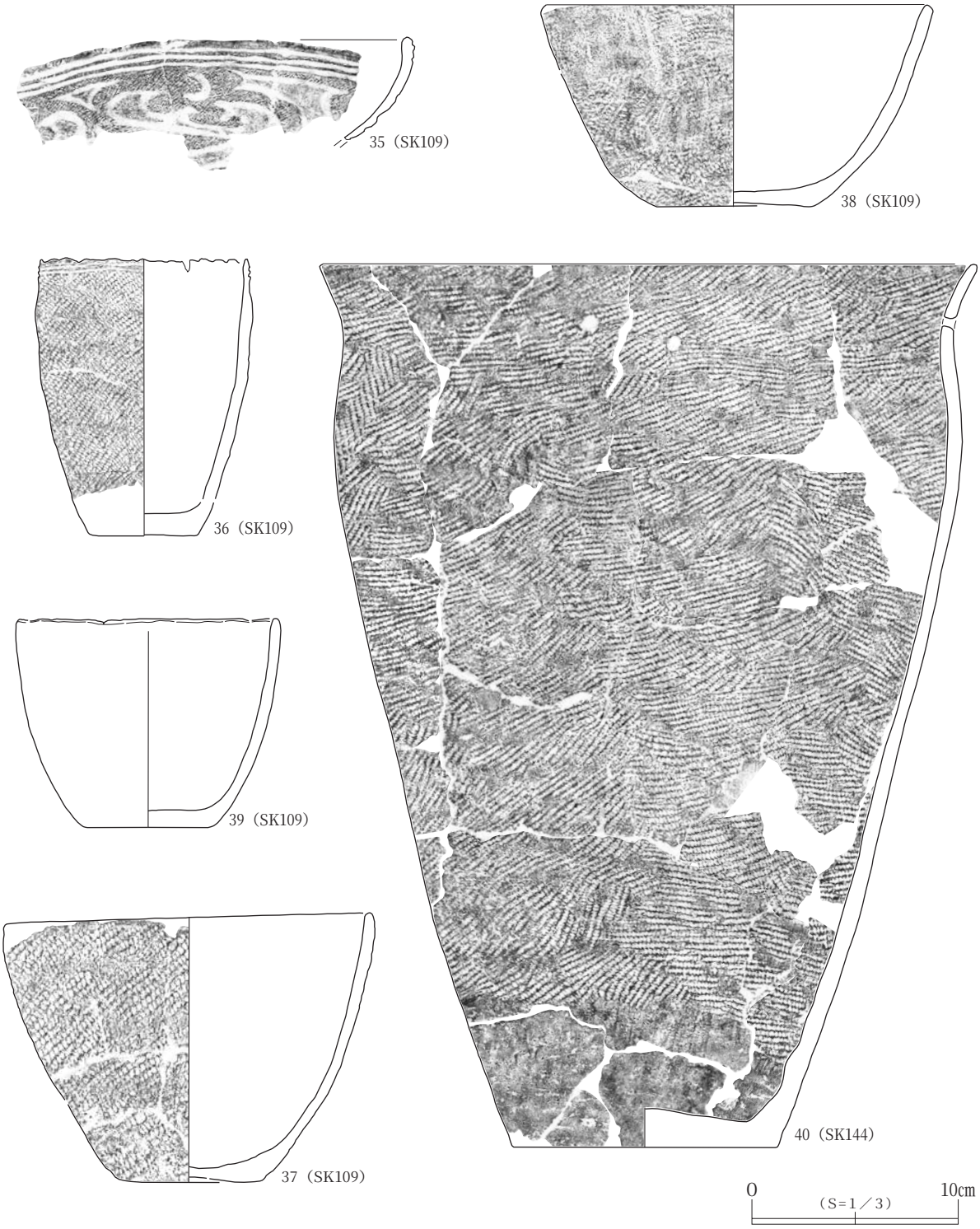
| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SK05 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 胴部：ＲＬ縄文 | | にぶい黄 | - | - | - | - |
| 2 | SK06 | 注口 | 口縁部 | 精製 | 小波状縁・Ｂ字状突起（連続）、口縁部：入組文・羊歯状文→刻目文・Ｂ字状突起 | 赤色塗彩 | 黒 | (32.0) | - | - | - |
| 3 | SK06 | 注口 | 口縁部 | 精製 | 口縁部：平行沈線→刻目文→Ｋ字文 | 赤色塗彩 | 黒 | - | - | - | - |
| 4 | SK07 | 浅鉢 | 口縁～胴部 | 精製 | 平縁、胴部：平行沈線→雲形文（ＬＲ縄文） | | 黄褐 | - | - | - | - |
| 5 | SK07 | 深鉢 | 口縁～胴部 | 半精製 | 平縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 6 | SK07 | （深鉢） | 口縁～胴部 | 半精製 | 平縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＲＬ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 7 | SK11 | （深鉢） | 胴部 | 粗製 | 胴部：条痕文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 8 | SK17 | 浅鉢 | 口縁部 | 精製 | 平縁・Ｂ字状突起、口縁部：雲形文（ＬＲ縄文） | | にぶい黄橙 | - | - | - | - |
| 9 | SK17 | （深鉢） | 口縁部 | 半精製 | 平縁・刺突、口縁部：入り組み三叉文・ＬＲ縄文 | | 褐 | - | - | - | - |
| 10 | SK18 | （注口） | 口縁部 | 精製 | 平縁・Ｂ字状突起、口縁部：沈線（曲線・過巻文） | | 褐灰 | - | - | - | - |
| 11 | SK19 | 浅鉢 | 口縁～胴部 | 精製 | 平縁・Ｂ字状突起（×２）→４単位？、口縁部：平行沈線（２条）＋Ｂ字状突起 | 赤色塗彩 | 黒褐 | (9.4) | - | - | - |
| 12 | SK19 | （深鉢） | 胴部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 褐 | - | - | - | - |
| 13 | SK19 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 14 | SK20 | 深鉢 | 口縁～胴部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | (29.0) | - | - | - |

**第48図　遺構内出土土器①**



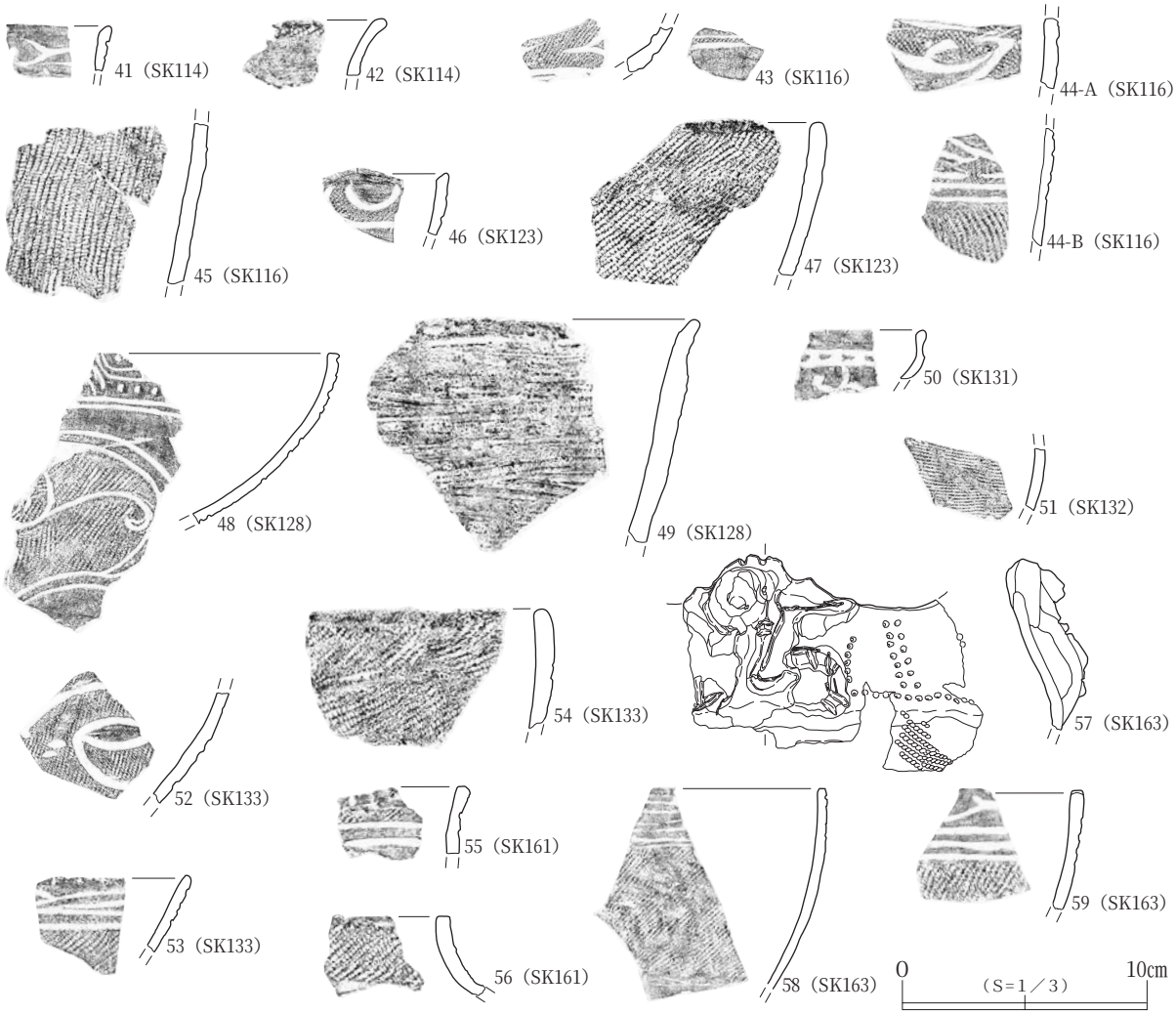

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | SK24 | - | 口縁部 | 精製 | 装飾突起 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 16 | SK24 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：条痕文 | | にぶい褐 | - | - | - | - |
| 17 | SK24 | （深鉢） | 胴部 | 粗製 | 胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 18 | SK26 | （深鉢） | 胴部 | 精製 | 胴部：磨消（ＲＬ縄文） | | 褐 | - | - | - | - |
| 19 | SK27 | 注口 | 口縁 | 精製 | 口縁部：刻目文・沈線 | | 褐灰 | - | - | - | - |
| 20 | SK27 | 注口 | 底部 | 半精製 | 底部：沈線 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 21 | SK29 | 深鉢 | 頸部 | 半精製 | 頸部：沈線・列点文 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 22 | SK29 | 鉢 | 胴部 | 精製 | 胴部：羊歯状文・磨消 | | 黒 | - | - | - | - |
| 23 | SK29 | 深鉢 | 口縁～胴部 | 半精製 | 平縁・刻目（連続）、口縁部：平行沈線（刻目）、胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 24 | SK29 | 深鉢 | 胴部 | 半精製 | 胴部：平行沈線・ＬＲ縄文 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 25 | SK38 | （浅鉢） | 口縁～胴部 | 精製 | 平縁・Ｂ字状突起、口縁部：刻目文（２列）・平行沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 26 | SK38 | 皿形土器 | 完形 | 粗製 | 無文 | ミニチュア | にぶい黄褐 | (6.2) | 1.8 | - | - |
| 27 | SK51 | 壺 | 頸～胴部 | 半精製 | 頸部：平行沈線、胴部：ＲＬ縄文 | | 黄褐 | - | - | - | - |
| 28 | SK68 | 深鉢 | 胴部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 黄褐 | - | - | - | - |
| 29 | SK71 | 皿 | 口縁部 | 精製 | 平縁・沈線による連続突起、口縁部裏：刻目文、口縁部：刻目文、胴部：磨消文（ＲＬ縄文） | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 30 | SK71 | 注口 | 肩部 | 精製 | 肩部：沈線・Ｂ字状突起、胴部：雲形文（ＲＬ縄文） | | 灰黄褐 | - | - | - | - |
| 31 | SK71 | 深鉢 | 口縁部 | 精製 | 平縁・Ｂ字状突起、口縁部：羊歯状文・平行沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 32 | SK71 | 深鉢 | 口縁部 | 精製 | 平縁・刻目、口縁部：羊歯状文、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 33 | SK71 | （深鉢） | 胴部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 34 | SK79 | 深鉢 | 口縁～胴部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |

**第49図　遺構内出土土器②**



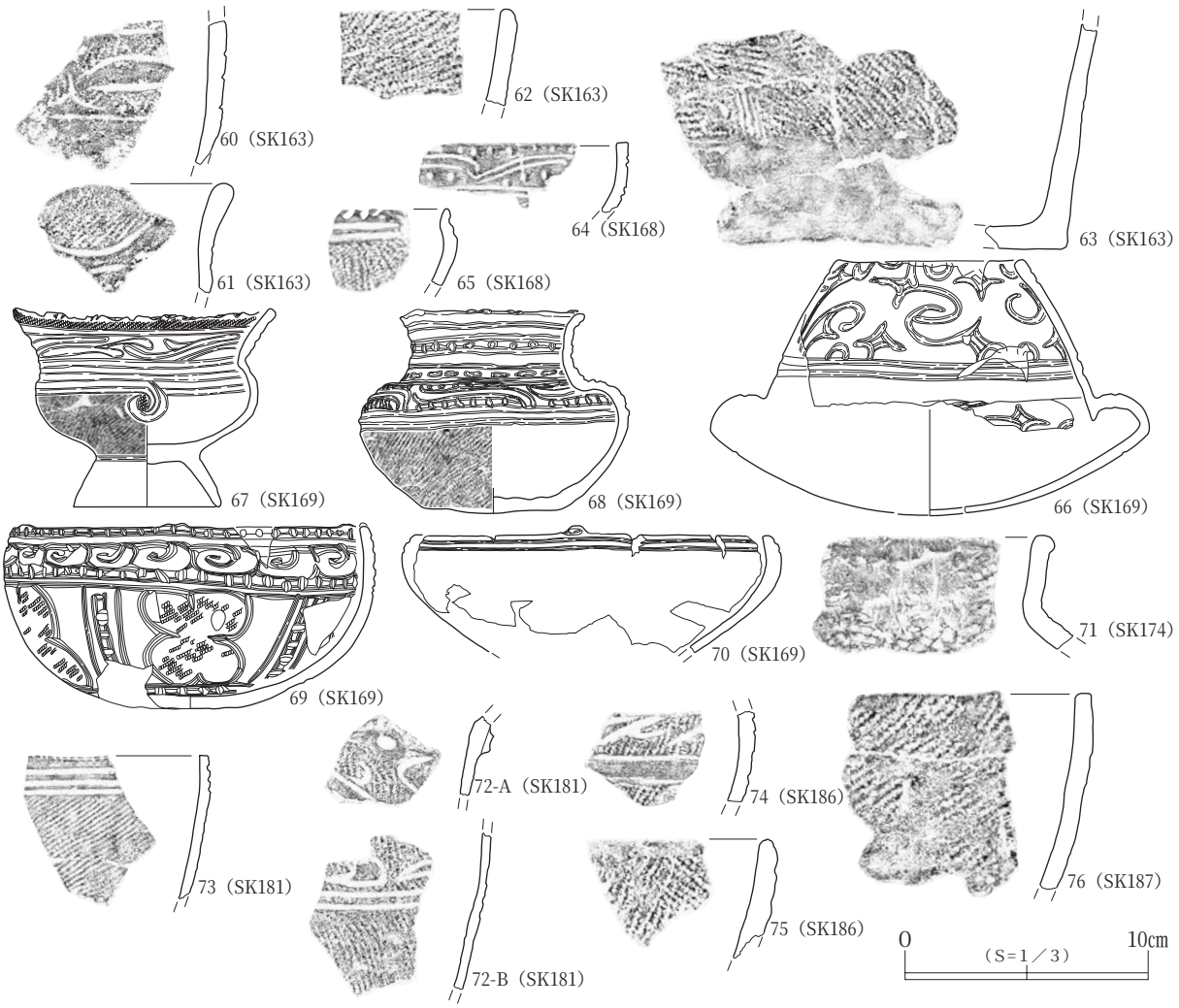

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 35 | SK109 | 浅鉢 | 口縁～胴部 | 精製 | 平縁、口縁部：平行沈線（×３）、胴部：雲形文（ＬＲ縄文） | | 暗褐 | (17.9) | - | - | - |
| 36 | SK109 | 深鉢 | 完形 | 粗製 | 刻目による小波状縁、口縁部：平行沈線（×２）、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | (10.0) | (13.3) | (5.2) | - |
| 37 | SK109 | 鉢 | 完形 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄褐 | 16.0 | 12.9 | (5.1) | (17.9) |
| 38 | SK109 | 鉢 | 完形 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄褐 | 18.9 | 9.7 | 7.3 | - |
| 39 | SK109 | 鉢 | 完形 | 粗製 | 平縁、胴部：ナデ | | 黒褐 | 12.8 | 11.0 | (6.2) | - |
| 40 | SK144 | 深鉢 | 完形 | 粗製 | 胴部：ＲＬ縄文・補修孔×２ | | にぶい黄褐 | 31.8 | 41.8 | 12.8 | - |

**第50図　遺構内出土土器③**



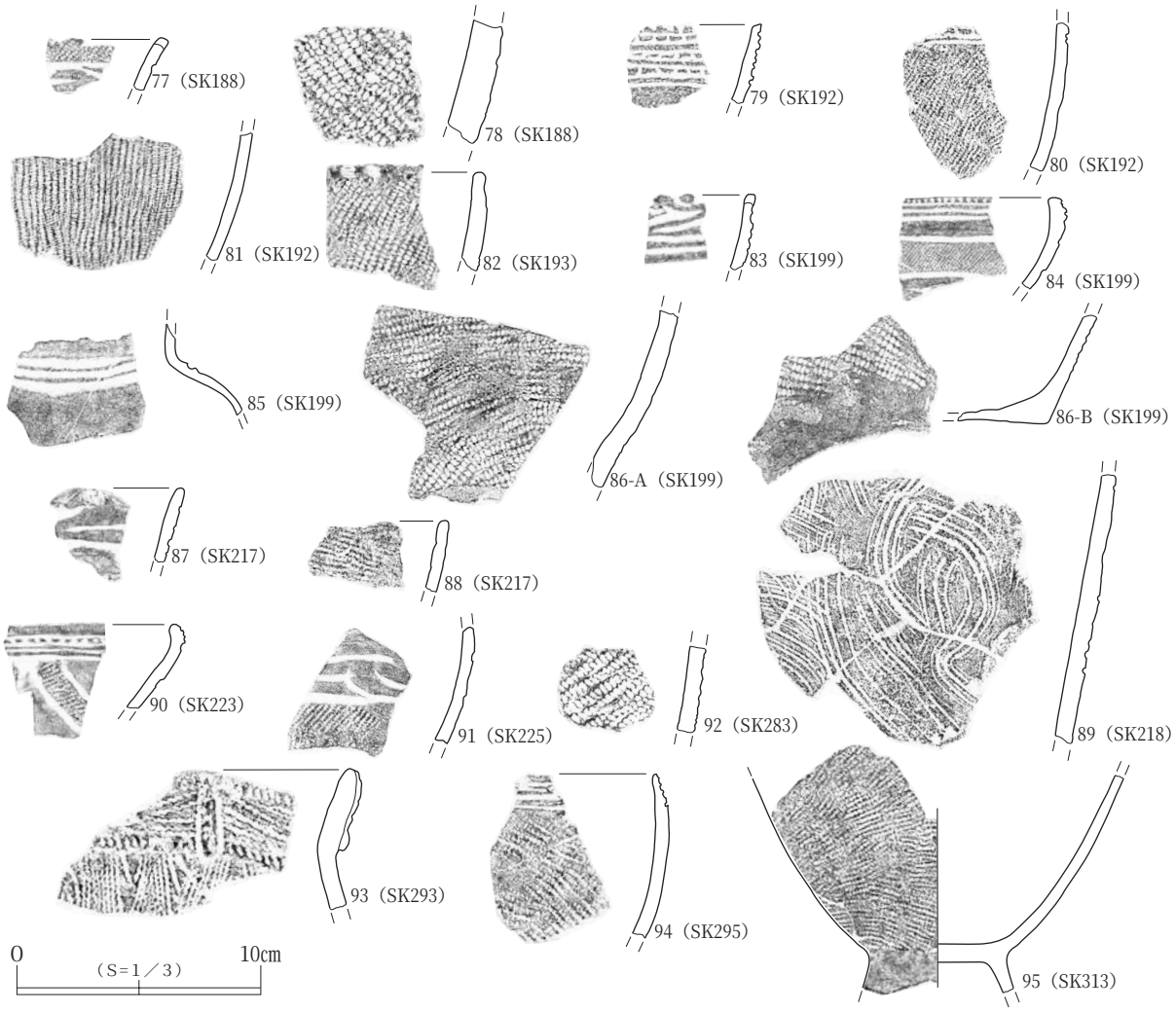

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 41 | SK114 | （深鉢） | 口縁部 | 精製 | 平縁、口縁部：玉抱三叉文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 42 | SK114 | 壺 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、口縁部：ＬＲ縄文→ナデ | | 黄灰 | - | - | - | - |
| 43 | SK116 | 皿 | 胴部 | 精製 | 雲形文（ＬＲ縄文）、内：隆帯（ＬＲ縄文） | | 褐 | - | - | - | - |
| 44-A | SK116 | 深鉢 | 胴部 | 精製 | 入組三叉文→磨消（ＲＬ縄文） | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 44-B | SK116 | 深鉢 | 胴部 | 精製 | 磨消→ＲＬ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 45 | SK116 | 深鉢 | 胴部 | 粗製 | ＲＬ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 46 | SK123 | （鉢） | 口縁部 | 精製 | 小波状縁？、口縁：磨消（ＲＬ縄文） | | 褐 | - | - | - | - |
| 47 | SK123 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 48 | SK128 | 浅鉢 | 口縁～胴部 | 精製 | 平縁、口縁部：沈線・刺突、胴部：沈線（曲線）・ＲＬ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 49 | SK128 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ナデ（横） | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 50 | SK131 | 鉢 | 口縁部 | 精製 | 平縁、口縁部：刻目文・三叉文？ | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 51 | SK132 | 深鉢 | 胴部 | 半精製 | 胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 52 | SK133 | 浅鉢 | 胴部 | 精製 | 胴部：入組文・磨消（ＬＲ縄文） | | 黒 | - | - | - | - |
| 53 | SK133 | 深鉢 | 口縁部 | 精製 | 小波状縁、口縁部：三叉文、胴部：ＬＲ縄文 | | 灰黄褐 | - | - | - | - |
| 54 | SK133 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 55 | SK161 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 山形突起・刻目をもつ平縁、口縁部：ＬＲ縄文→平行沈線 | | 橙 | - | - | - | - |
| 56 | SK161 | （深鉢） | 口縁部 | 粗製 | 平縁、口縁部：ＬＲ縄文→沈線 | | 明褐 | - | - | - | - |
| 57 | SK163 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 突起をもつ波状口縁、口縁部：橋状突起＋貼付の円形の隆帯による突起・連続円形刺突・刻目をもつ隆帯、胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄橙 | - | - | - | - |
| 58 | SK163 | 深鉢 | 口縁～胴部 | 精製 | 平縁、口縁部：沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | 灰黄褐 | - | - | - | - |
| 59 | SK163 | 深鉢 | 口縁部 | 精製 | 平縁・Ｂ字状突起、口縁部：三叉文→平行沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |

**第51図　遺構内出土土器④**



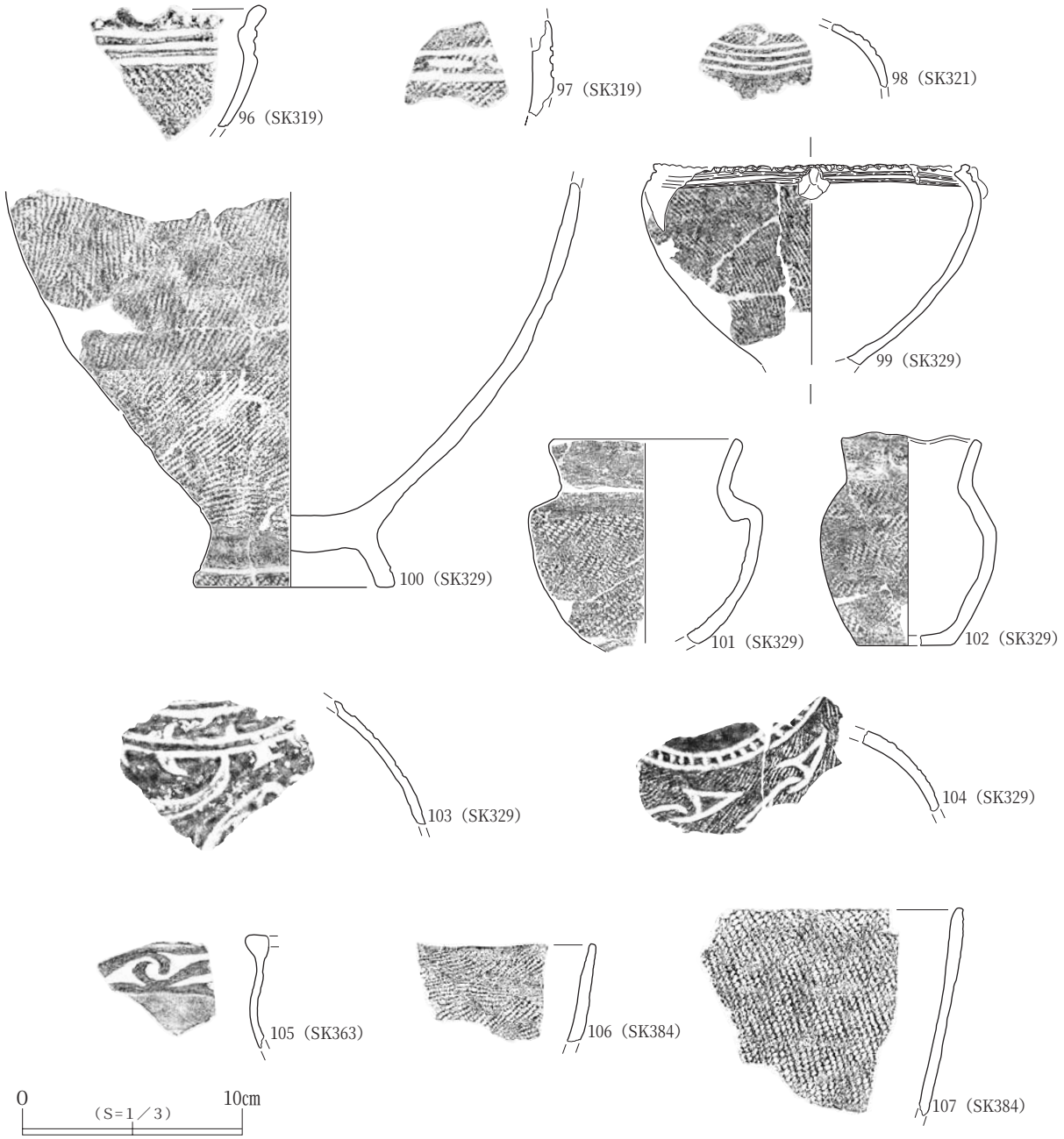

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 60 | SK163 | 深鉢 | （口縁部） | 半精製 | 口縁部：入組文・ＲＬ縄文 | | 灰黄褐 | - | - | - | - |
| 61 | SK163 | （深鉢） | 口縁部 | 半精製 | 波状口縁、口縁部：ＬＲ縄文→沈線 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 62 | SK163 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 63 | SK163 | 深鉢 | 底部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 64 | SK168 | （深鉢） | 口縁部 | 精製 | 平縁、口縁部：入組平行沈線＋刻目文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 65 | SK168 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 刻目による小波状縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＲＬ縄文 | | 褐 | - | - | - | - |
| 66 | SK169 | 注口 | 口縁～肩部 | 精製 | 口縁部：沈線による入組文（正面のみ）→平行沈線、肩部：沈線による入組文（正面のみ） | | 黒褐 | (7.6) | (10.4) | - | (18.0) |
| 67 | SK169 | 台付鉢 | 完形 | 精製 | Ｂ字状突起と沈線による小波状突起、口縁部：ＬＲ縄文→入組三叉文、<br>肩部：平行沈線・４単位の垂下する渦巻文、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | (10.4) | 8.1 | (6.0) | - |
| 68 | SK169 | 壺 | 完形 | 精製 | ２個１単位のＢ字状突起を５単位もつ平縁、口縁～頸部：平行沈線→列点文×２、<br>肩部：羊歯状文、胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | (7.4) | 8.3 | 5.0 | 11.1 |
| 69 | SK169 | 浅鉢 | 完形 | 精製 | Ｂ字状突起５単位をもつ平縁、口縁部：刻目文→渦巻文→刻目文、<br>胴部：垂下する平行沈線＋刻目文・<br>クローバー形に縄文帯を残した磨消による文様構成５単位→刻目文 | | 暗褐色 | (14.5) | 7.5 | (4.1) | (15.2) |
| 70 | SK169 | 浅鉢 | 口縁～胴部 | 精製 | Ｂ字状突起をもつ平縁、口縁部：平行沈線、全面に赤漆 | 赤漆 | 暗赤褐 | (14.4) | - | - | - |
| 71 | SK174 | 壺 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＲＬ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 72-A | SK181 | （深鉢） | （口縁部） | 半精製 | Ｂ字状突起（横位）・磨消（ＲＬ縄文） | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 72-B | SK181 | 深鉢 | （口縁～胴部） | 半精製 | 磨消（ＲＬ縄文）→平行沈線 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 73 | SK181 | 深鉢 | 口縁～胴部 | 半精製 | 刻目をもつ口縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 74 | SK186 | （深鉢） | （口縁部） | 半精製 | 口縁部：三叉文・ＬＲ縄文→磨消 | | 黒 | - | - | - | - |
| 75 | SK186 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 76 | SK187 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | ＬＲ縄文 | | 黄褐 | - | - | - | - |

**第52図　遺構内出土土器⑤**



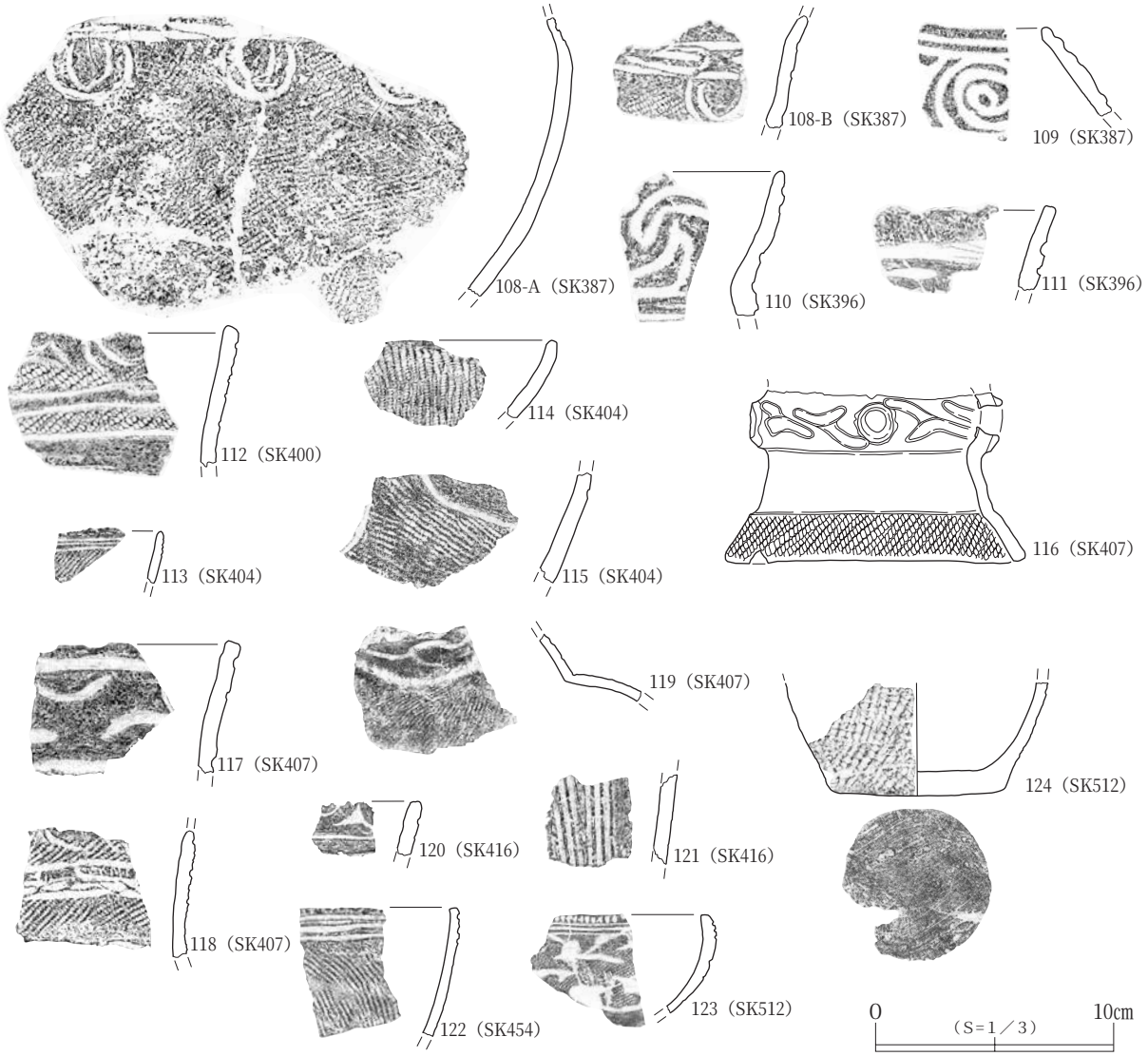

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 77 | SK188 | （深鉢） | 口縁部 | 精製 | Ｂ字状突起をもつ平縁、口縁部：ＬＲ縄文→三叉文？ | | 黒 | - | - | - | - |
| 78 | SK188 | 深鉢 | 胴部 | - | 胴部：ＬＲ縄文 | 繊維含有 | 明褐 | - | - | - | - |
| 79 | SK192 | （深鉢） | 口縁部 | 精製 | 刻目付平縁、口縁部：刻目文×３列 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 80 | SK192 | 深鉢 | 胴部 | 半精製 | 胴部：沈線→ＬＲ縄文 | | 灰黄褐 | - | - | - | - |
| 81 | SK192 | （深鉢） | 胴部 | 半精製 | 胴部：ＲＬ縄文 | | 黄褐 | - | - | - | - |
| 82 | SK193 | 深鉢 | 口縁部 | - | 平縁・指頭押圧、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 83 | SK199 | 深鉢 | 口縁部 | 精製 | Ｂ字状突起付平縁、口縁部：（三叉文） | | にぶい黄橙 | - | - | - | - |
| 84 | SK199 | 浅鉢 | 口縁部 | 精製 | 平縁、口縁部：刻目文、胴部：磨消（ＬＲ縄文） | | 黒 | - | - | - | - |
| 85 | SK199 | 壺 | 頸～肩部 | 半精製 | 肩部：平行沈線 | 赤色塗彩 | 黒褐 | - | - | - | - |
| 86-A | SK199 | 深鉢 | 胴部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 86-B | SK199 | 深鉢 | 底部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 褐 | - | - | - | - |
| 87 | SK217 | （深鉢） | 口縁部 | 精製 | 刻目付波状口縁、口縁部：（三叉文） | | にぶい赤褐 | - | - | - | - |
| 88 | SK217 | （深鉢） | 口縁部 | 半精製 | 丸い突起付波状口縁、胴部：ＲＬ縄文 | 黒漆塗彩 | 黒 | - | - | - | - |
| 89 | SK218 | 深鉢 | 胴部 | 粗製 | 胴部：条痕文による曲線文 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 90 | SK223 | 浅鉢 | 口縁部 | 精製 | 平縁、口縁部：刻目文、胴部：磨消（ＬＲ縄文） | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 91 | SK225 | 深鉢 | （口縁部） | 精製 | 口縁部：入組文（三叉文？）、胴部：ＬＲ縄文 | | 褐 | - | - | - | - |
| 92 | SK283 | （深鉢） | 胴部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 93 | SK293 | 深鉢 | 口縁部 | - | 波状口縁、口唇部：刻目、口縁部：隆帯垂下－横走＋刻目・原体押圧（ＲＬ縄文）、胴部：木目状線条体 | | 褐 | - | - | - | - |
| 94 | SK295 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 平縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＲＬ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 95 | SK313 | 台付(深鉢) | 胴～台部 | 半精製 | 胴部：ＲＬ縄文、台部：ナデ | | にぶい黄橙 | - | - | - | - |

**第53図　遺構内出土土器⑥**



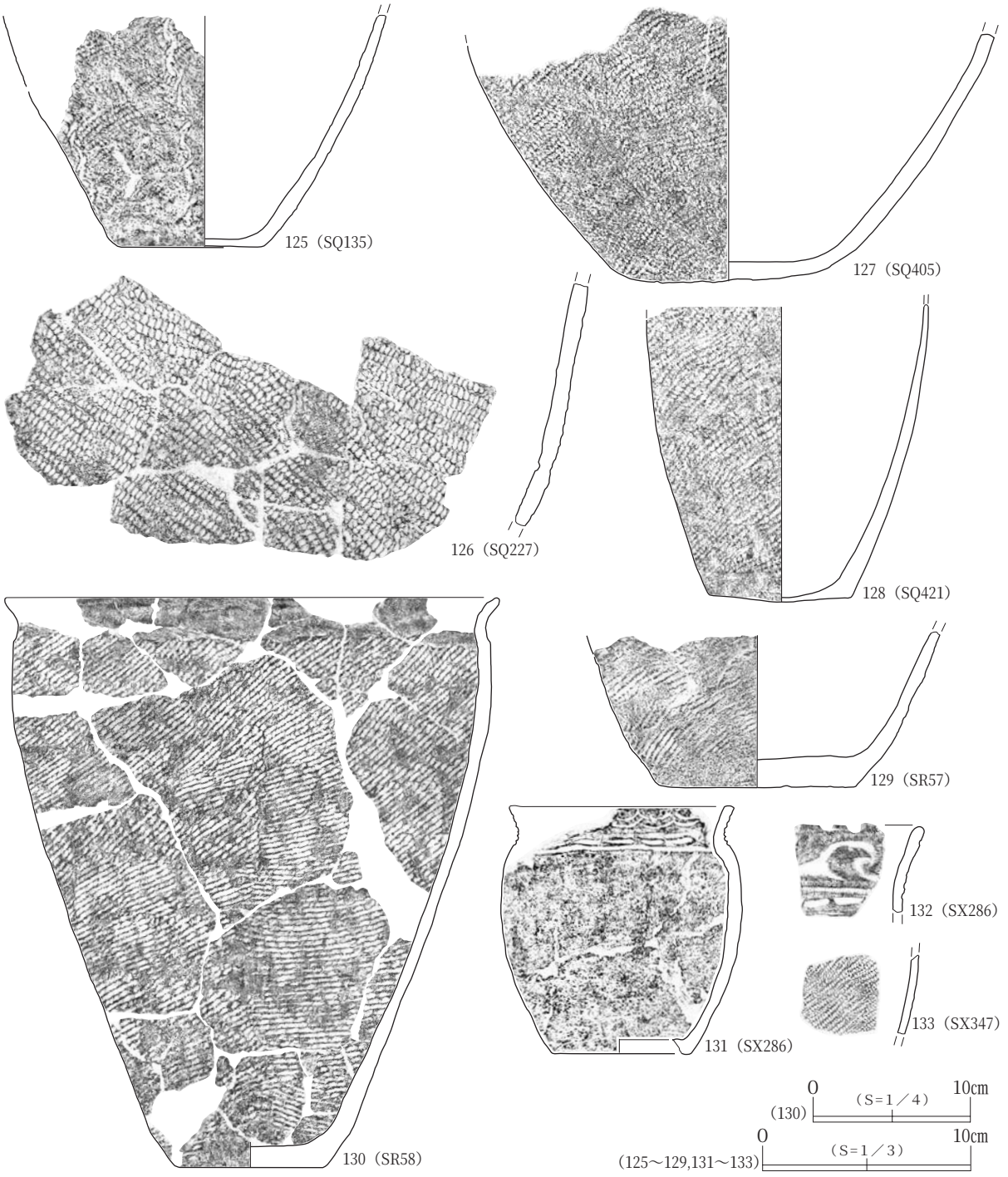

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 96 | SK319 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 大きな二山の突起と小突起による波状口縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 97 | SK319 | （深鉢） | （口縁部） | 半精製 | 口縁部：平行沈線・列点文・ＬＲ縄文 | | 暗褐 | - | - | - | - |
| 98 | SK321 | 壺 | 肩部 | 精製 | 肩部：ＬＲ縄文→平行沈線 | 赤色塗彩 | 赤褐 | - | - | - | - |
| 99 | SK329 | 台付鉢 | 口縁～胴部 | 半精製 | 刻目付平縁、口縁部：平行沈線＋Ｂ字状突起×１、胴部：ＲＬ縄文 | | にぶい黄褐 | 14.4 | (9.1) | - | - |
| 100 | SK329 | 台付(深鉢) | 胴～台部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文、台部：沈線→ＬＲ縄文 | | にぶい黄褐 | - | (18.3) | 9.1 | - |
| 101 | SK329 | 壺 | 口縁～胴部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | 褐灰 | (8.8) | (9.2) | - | 10.6 |
| 102 | SK329 | 壺 | ほぼ完形 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄橙 | 6.3 | 9.3 | 4.3 | 8.0 |
| 103 | SK329 | 壺 | 肩部 | 精製 | ノの字文（沈線区画）→雲形文 | 赤色塗彩 | 黒 | - | - | - | - |
| 104 | SK329 | 浅鉢 | 胴部 | 精製 | 変形三叉文（ＬＲ縄文）→刻目文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 105 | SK363 | 壺 | 口縁部 | 精製 | 連結三叉文 | 赤色塗彩 | 極暗赤褐 | - | - | - | - |
| 106 | SK384 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 107 | SK384 | 深鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＲＬ縄文 | | 褐灰 | - | - | - | - |

**第54図　遺構内出土土器⑦**



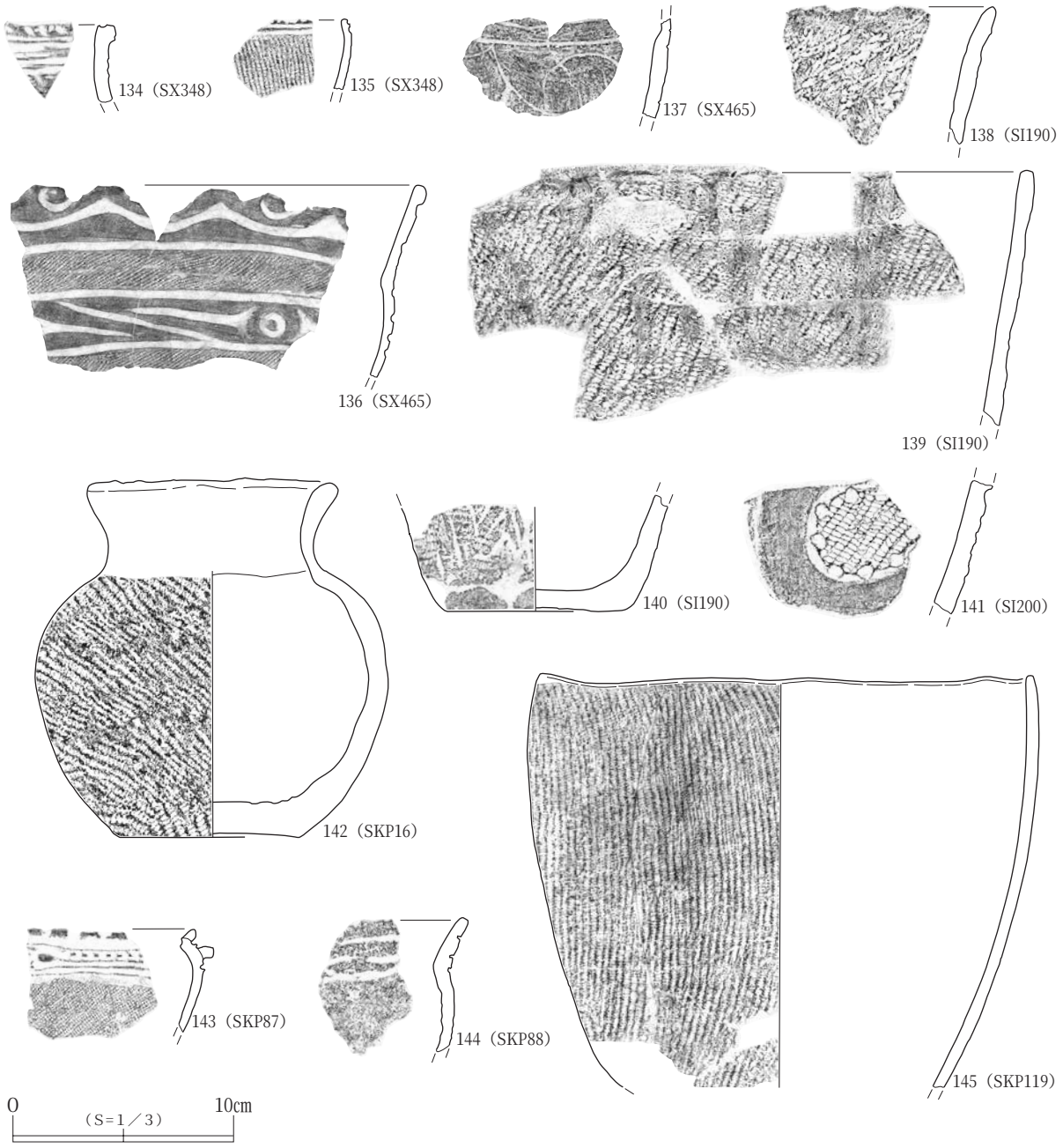

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 108-A | SK387 | （鉢） | 胴部 | 半精製 | 平行沈線＋半円状文→ＬＲ縄文 | | 黄褐 | - | - | - | - |
| 108-B | SK387 | （鉢） | 口縁～胴部 | 半精製 | 平行沈線＋列点文→ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 109 | SK387 | （注口） | 口縁部 | 精製 | 口縁部：渦巻文 | | 黄褐 | - | - | - | - |
| 110 | SK396 | （深鉢） | 口縁部 | 半精製 | 口縁部：入組文？ | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 111 | SK396 | （深鉢） | 口縁部 | 半精製 | 小波状口縁（指頭押圧）、口縁部：沈線→列点文？ | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 112 | SK400 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 波状口縁、磨消（ＬＲ縄文） | | 暗灰黄 | - | - | - | - |
| 113 | SK404 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 刻目付平縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 114 | SK404 | 鉢 | 口縁部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＲＬ縄文 | | 暗褐 | - | - | - | - |
| 115 | SK404 | （深鉢） | 胴部 | 粗製？ | 磨消（ＬＲ縄文）？ | | 黄褐 | - | - | - | - |
| 116 | SK407 | （台付？） | 台部 | 精製 | 台部：穿孔×４・三叉文→ＬＲ縄文 | | にぶい黄橙 | - | - | - | - |
| 117 | SK407 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 平縁（指頭押圧）、口縁部：沈線・沈線による弧状文の連続 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 118 | SK407 | 深鉢 | 胴部 | 半精製 | 胴部：ＬＲ縄文・沈線＋刻目＋列点 | | 暗褐 | - | - | - | - |
| 119 | SK407 | 壺 | 肩～頸部 | 精製 | 頸部：三叉文？、肩部：ＬＲ縄文 | 赤色塗彩 | にぶい赤褐 | - | - | - | - |
| 120 | SK416 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 小波状口縁、口縁部：三叉文 | | にぶい黄橙 | - | - | - | - |
| 121 | SK416 | 深鉢 | 胴部 | 粗製 | 条痕文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 122 | SK454 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 刻目付平縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＲＬ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 123 | SK512 | 浅鉢 | 口縁～胴部 | 精製 | 平縁、口縁部：刻目文→平行沈線、胴部：雲形文（ＬＲ縄文） | | 褐灰 | - | - | - | - |
| 124 | SK512 | （深鉢） | 底部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文、底部：条痕文 | | 灰黄褐 | - | - | 7.2 | - |

**第55図　遺構内出土土器⑧**



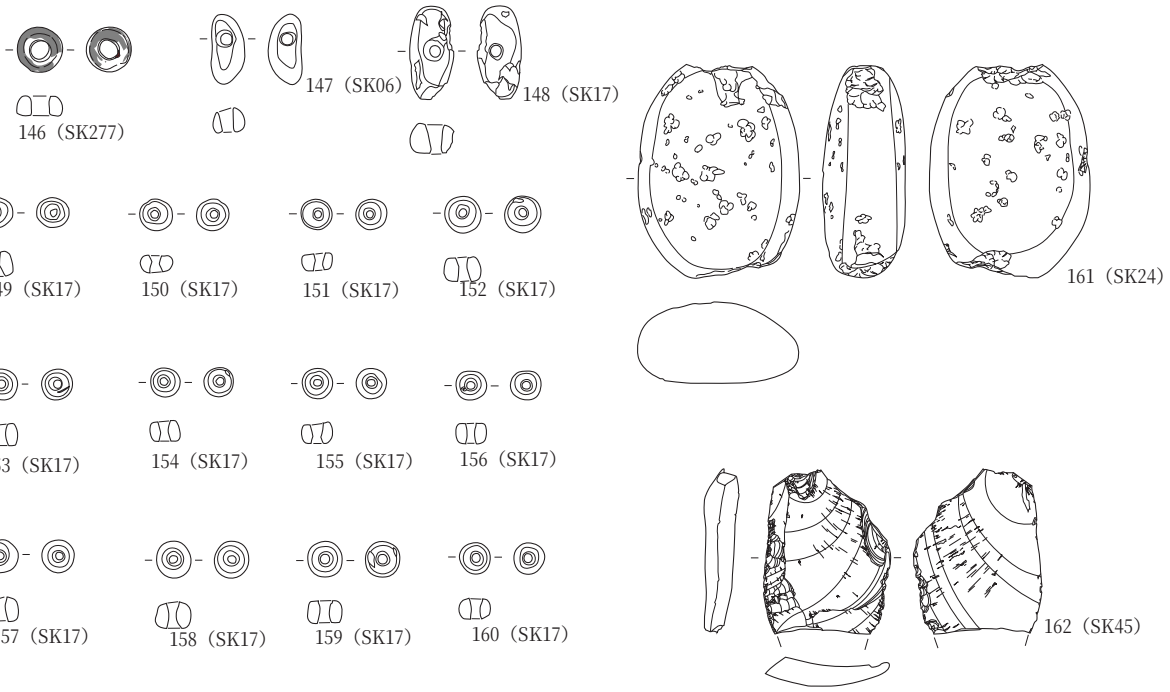

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 125 | SQ135 | 深鉢 | 胴～底部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 126 | SQ227 | 深鉢 | 胴部 | - | 胴部：ＬＲ縄文 | | 暗褐 | - | - | - | - |
| 127 | SQ405 | （鉢） | 胴～底部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 黄褐 | - | - | 10.4 | - |
| 128 | SQ421 | 深鉢 | 胴～底部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | 内面に被熱痕 | 明黄褐 | - | - | 6.4 | - |
| 129 | SR57 | (深鉢) | 底部 | 粗製 | 胴部：ＬＲ縄文 | | 褐 | - | - | 9.1 | - |
| 130 | SR58 | 深鉢 | 完形 | 粗製 | ＬＲ縄文 | | 黒褐 | 31.6 | 36.5 | 9.0 | - |
| 131 | SX286 | 鉢 | ほぼ完形 | 半精製 | 平縁、口縁部：平行沈線による波状文→列点文、胴部：ナデ（横） | | 暗褐 | (10.7) | 11.9 | (6.6) | (11.5) |
| 132 | SX286 | 深鉢 | 口縁部 | 精製 | 刻目付波状縁、口縁部：連結三叉文→列点文 | | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 133 | SX347 | （深鉢） | 胴部 | 半精製 | 胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |

**第56図　遺構内出土土器⑨**



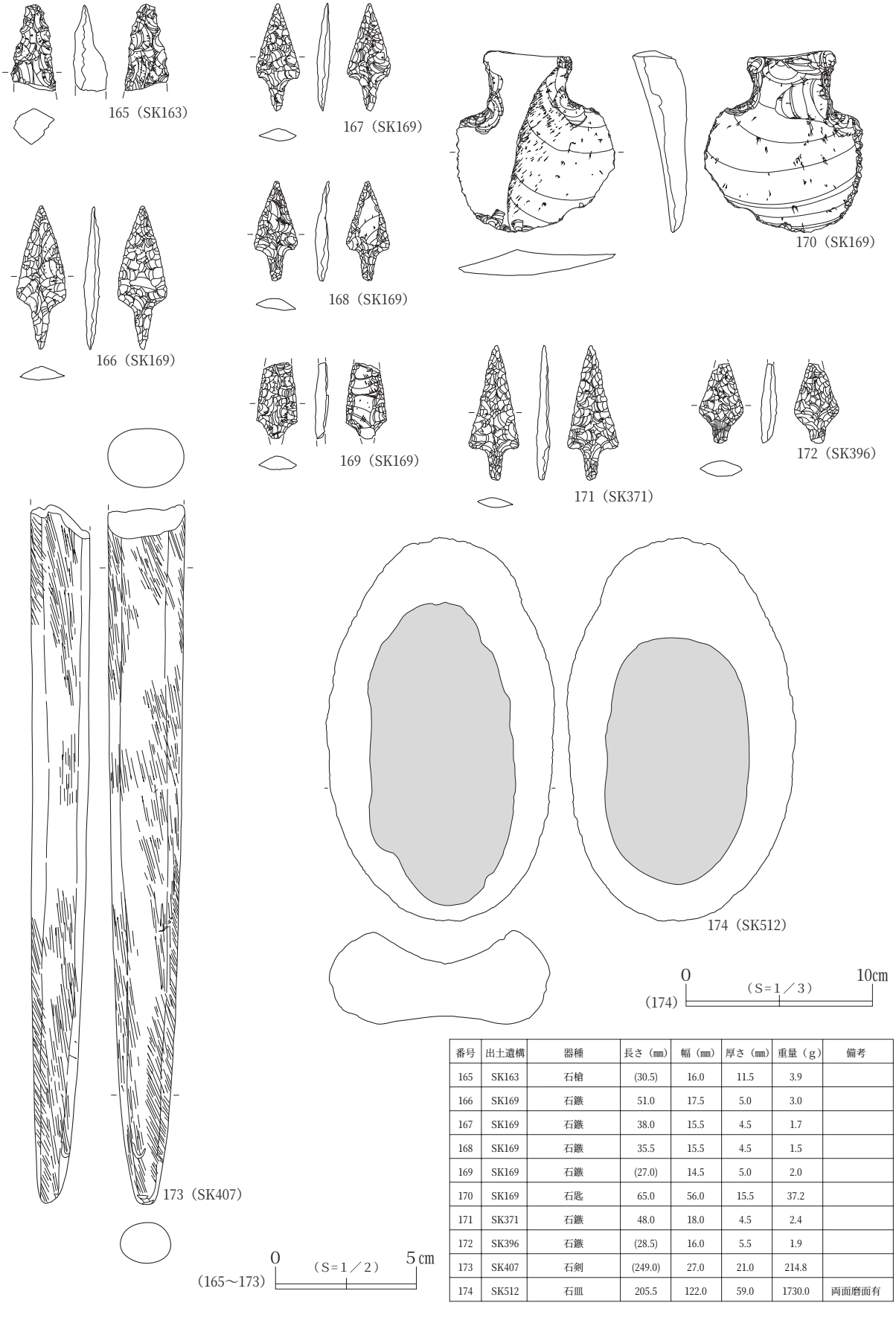

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 部位 | 器面装飾 | 文様・調整等 | 備考 | 色調 | 口径 | 器高 | 底径 | 最大径 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 134 | SX348 | 壺 | 口縁部 | 精製 | 沈線による小波状口縁、口唇部：沈線、口縁部：平行沈線 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 135 | SX348 | 深鉢 | 口縁部 | 半精製 | 刻目付小波状縁、口縁部：平行沈線、胴部：ＲＬ縄文 | | 黒 | - | - | - | - |
| 136 | SX465 | 深鉢 | 口縁部 | 精製 | 波状口縁、口縁部：波状沈線→縄文帯（ＲＬ縄文）→変形三叉文＋円形文 | | 橙 | - | - | - | - |
| 137 | SX465 | 深鉢 | 胴部 | 粗製 | 胴部：沈線による入組文？ | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 138 | SI190 | 深鉢 | 口縁部 | - | 小波状口縁（指頭押圧・爪形残る）、胴部：原体押圧？ | 繊維含有 | 褐 | - | - | - | - |
| 139 | SI190 | 深鉢 | 口縁部 | - | 平縁、胴部：ＲＬ縄文 | 繊維含有 | にぶい黄褐 | - | - | - | - |
| 140 | SI190 | （深鉢） | 底部 | - | 胴部：ＬＲ縄文＋条痕 | 繊維含有 | にぶい黄褐 | - | - | 8.0 | - |
| 141 | SI200 | 深鉢 | 胴部 | - | 胴部：磨消し（ＲＬ縄文）＋縄文帯周囲に円形刺突 | | 明黄褐 | - | - | - | - |
| 142 | SKP16 | 壺 | 完形 | 粗製 | 平縁、胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | (7.5) | 10.6 | 5.3 | 10.6 |
| 143 | SKP87 | （深鉢） | 口縁～胴部 | 精製 | Ｂ字状突起付小波状縁、口縁部：刻目文＋Ｂ字状突起→平行沈線、胴部：ＬＲ縄文 | | 黒褐 | - | - | - | - |
| 144 | SKP88 | （深鉢） | 口縁部 | 粗製 | （平縁）、口縁部：列点文？ | | 褐 | - | - | - | - |
| 145 | SKP119 | 深鉢 | 口縁～胴部 | 粗製 | 平縁、胴部：ＲＬ縄文 | | 黒褐 | (22.1) | - | - | 23.2 |

**第57図　遺構内出土土器⑩**



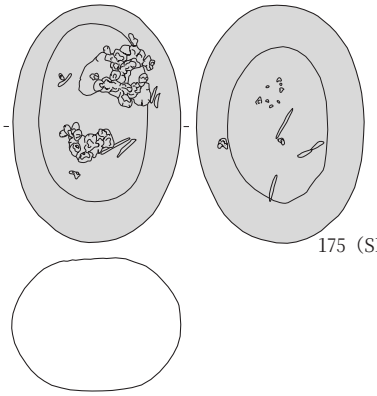

| 遺物№ | 出土遺構 | 器種 | 長さ（㎜） | 幅（㎜） | 厚さ（㎜） | 重量（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 146 | SK277 | 土製小玉 | 12.0 | 12.0 | 5.0 | 0.7 | 赤色顔料付着 |
| 147 | SK06 | 小玉 | 18.5 | 9.0 | 6.5 | 2.2 | ヒスイ製 |
| 148 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.5 | 7.0 | 4.1 | ヒスイ製 |
| 149 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.5 | 4.5 | 0.4 | 緑色凝灰岩 |
| 150 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.0 | 4.5 | 0.4 | 緑色凝灰岩 |
| 151 | SK17 | 小玉 | 10.0 | 10.0 | 6.0 | 0.4 | 緑色凝灰岩 |
| 152 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.0 | 6.0 | 0.7 | 緑色凝灰岩 |
| 153 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.0 | 5.5 | 0.4 | 緑色凝灰岩 |
| 154 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.0 | 5.5 | 0.4 | 緑色凝灰岩 |
| 155 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.0 | 5.0 | 0.4 | 緑色凝灰岩 |
| 156 | SK17 | 小玉 | 8.5 | 9.0 | 6.5 | 0.4 | 緑色凝灰岩 |
| 157 | SK17 | 小玉 | 10.0 | 9.0 | 7.0 | 0.5 | 緑色凝灰岩 |
| 158 | SK17 | 小玉 | 9.5 | 9.0 | 6.0 | 0.7 | 緑色凝灰岩 |
| 159 | SK17 | 小玉 | 8.0 | 8.0 | 5.5 | 0.6 | 緑色凝灰岩 |
| 160 | SK17 | 小玉 | 25.0 | 12.0 | 8.0 | 0.4 | ヒスイ製 |
| 161 | SK24 | 石錘 | 56.5 | 42.0 | 22.0 | 77.1 | |
| 162 | SK45 | スクレイパー | (43.5) | 33.5 | 9.0 | 12.3 | |
| 163 | SK114 | 石匙 | 87.0 | 32.5 | 11.0 | 35.1 | |
| 164 | SK114 | 半円状偏平打製石器 | 104.0 | 66.0 | 34.0 | 292.8 | |

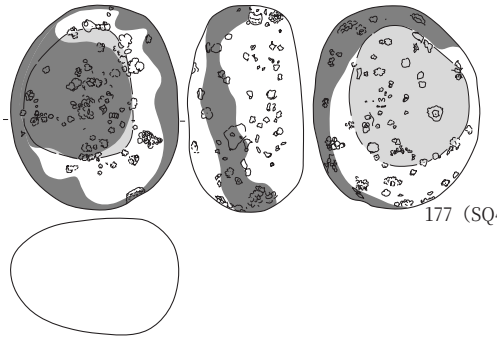
**第58図　土製品・遺構内出土石器①**

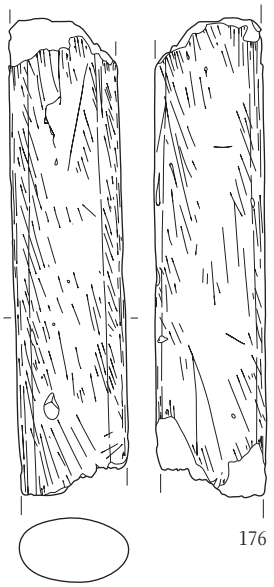


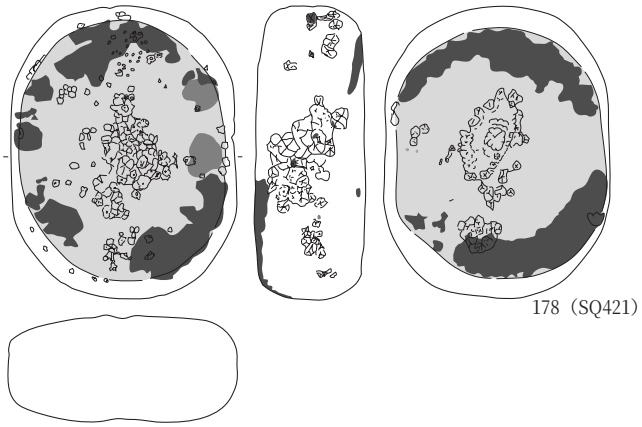

| 番号 | 出土遺構 | 器種 | 長さ（㎜） | 幅（㎜） | 厚さ（㎜） | 重量（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 165 | SK163 | 石槍 | (30.5) | 16.0 | 11.5 | 3.9 | |
| 166 | SK169 | 石鏃 | 51.0 | 17.5 | 5.0 | 3.0 | |
| 167 | SK169 | 石鏃 | 38.0 | 15.5 | 4.5 | 1.7 | |
| 168 | SK169 | 石鏃 | 35.5 | 15.5 | 4.5 | 1.5 | |
| 169 | SK169 | 石鏃 | (27.0) | 14.5 | 5.0 | 2.0 | |
| 170 | SK169 | 石匙 | 65.0 | 56.0 | 15.5 | 37.2 | |
| 171 | SK371 | 石鏃 | 48.0 | 18.0 | 4.5 | 2.4 | |
| 172 | SK396 | 石鏃 | (28.5) | 16.0 | 5.5 | 1.9 | |
| 173 | SK407 | 石剣 | (249.0) | 27.0 | 21.0 | 214.8 | |
| 174 | SK512 | 石皿 | 205.5 | 122.0 | 59.0 | 1730.0 | 両面磨面有 |

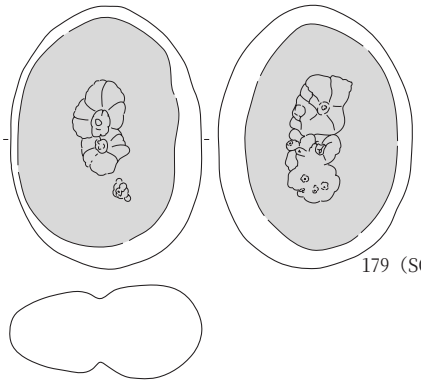
**第59図　遺構内出土石器②**

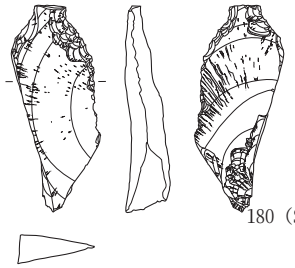

175（SK512）


177（SQ421）


176（SK512）


178（SQ421）


179（SQ421）

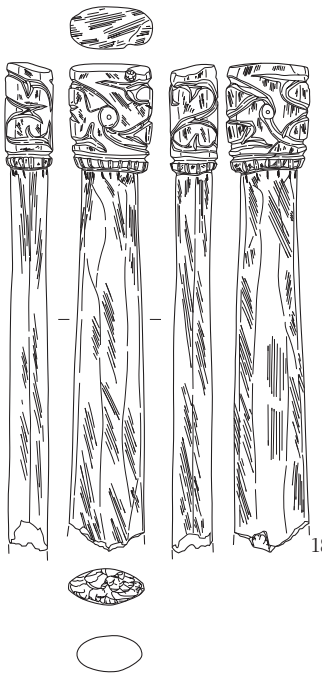

180（SQ421）

0　（S=1／2）　5cm
（176,180）

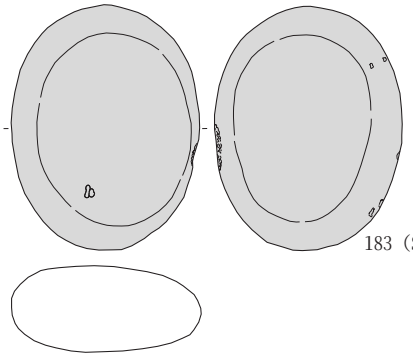
0　（S=1／3）　10cm
（175,177～179）

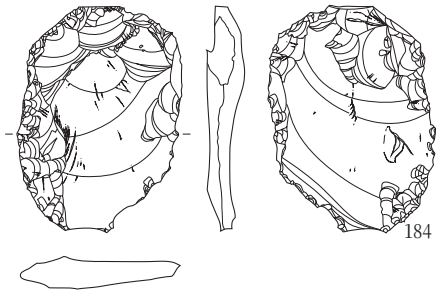
| 番号 | 出土遺構 | 器種 | 長さ（㎜） | 幅（㎜） | 厚さ（㎜） | 重量（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 175 | SK512 | 磨石 | 94.5 | 67.0 | 53.0 | 508.9 | 両面磨面、片面凹み |
| 176 | SK512 | 石剣 | (127.0) | 29.0 | 16.5 | 115.8 | |
| 177 | SQ421 | 磨石 | 81.5 | 67.0 | 46.0 | 381.7 | 両面磨面、ほぼ全面に赤色顔料付着 |
| 178 | SQ421 | 凹石 | 116.0 | 90.0 | 44.0 | 781.8 | 両面磨面、部分的に顔料付着、アスファルト付着 |
| 179 | SQ421 | 凹石 | 105.0 | 75.5 | 37.0 | 394.8 | 両面磨面 |
| 180 | SQ421 | 石匙 | 54.5 | 21.0 | 11.0 | 9.8 | |

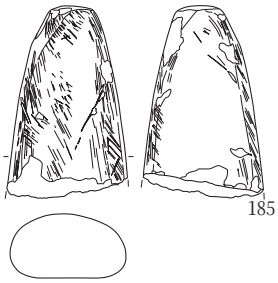
**第60図　遺構内出土石器③**


181（SQ43）

182（SQ76）


183（SQ78）


184（SQ234）


185（SI190）

0　（S＝1／2）　5㎝
（184）

0　（S＝1／3）　10㎝
（181～183,185）

| 番号 | 出土遺構 | 器種 | 長さ（㎜） | 幅（㎜） | 厚さ（㎜） | 重量（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 181 | SQ43 | 石剣 | (214.0) | 34.0 | 16.0 | 181.0 | |
| 182 | SQ76 | 石刀 | 321.0 | 44.0 | 11.5 | 233.6 | |
| 183 | SQ78 | 磨石 | 97.5 | 75.5 | 34.0 | 359.2 | 全面磨面・全面赤色顔料付着 |
| 184 | SQ234 | スクレイパー | 60.0 | 43.5 | 10.0 | 30.3 | |
| 185 | SI190 | 磨製石斧 | (76.5) | 48.5 | 25.5 | 149.3 | |

**第61図　遺構内出土石器④**

# 第５章　自然科学的分析

## 第１節　向様田Ａ遺跡出土炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県北秋田郡森吉町に所在する向様田Ａ遺跡は、森吉山麓を西に流れる小又川右岸の段丘上に立地する。今回の発掘調査により、いわゆる捨て場や配石遺構群が検出されており、縄文時代晩期前半の祭祀遺跡と考えられている。今回の発掘調査では、検出された捨て場や土坑から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施し、その年代に関する資料を得る。また、炭化材の樹種同定を行い、用材についても検討する。

１．試料

試料は、捨て場（ＳＴ184・ＳＴ183）から採取した５点と、土坑（ＳＫ04・ＳＫ17）から採取した２点の計７点の炭化物である。試料は、基本的には炭化材であるが、ＳＴ184（ＭＢ28Grid）から出土したものは種実遺体であった。試料は、全点について放射性炭素年代測定と樹種同定・種実同定を実施する。試料の詳細は表１に示す。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は、（株）地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社（BETA ANALYTIC INC.）の協力を得た。

（２）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（３）種実同定

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を特定した。

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

結果を表１に示す。年代値は、ＳＴ184（ＭＡ28Grid）・ＳＴ184（ＭＢ28Grid）・ＳＴ183（ＬＱ33Grid）・ＳＴ183（ＬＲ33Grid）・ＳＫ17から出土した炭化材が約2900～3000年前、ＳＴ184（ＭＡ27Grid）出土炭化材が約1200年前、ＳＫ04出土炭化材が約1300年前の値を示す。

なお、表中の$\delta^{13}$Ｃの値は、試料炭素の$^{13}$Ｃ／$^{12}$Ｃ原子比を質量分析器で測定し、標準にＰＤＢを用いて標準値からのずれをパーミルで表した値である。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

（２）樹種同定（図版23～25）

結果を表１に示す。試料番号４と５にはそれぞれ３種類の炭化材が認められた。これらの炭化材は、合計で針葉樹１種類（ヒノキ科）と広葉樹６種類（ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・カツラ・エゴノキ属・トネリコ属）に同定された。また、種実遺体はオニグルミに同定された。炭化材の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ブナ属（*Fagus*）　　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

試料は年輪界で割れている。ほとんどが晩材部のみであるが、年輪界に僅かに残る翌年の道管径から環孔材と判断した。小道管は、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、１～20細胞高。

・エゴノキ属（*Styrax*）　　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または２～４個が複合して散在し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。

・トネリコ属（*Fraxinus*）　　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～20細胞高。

（３）種実同定（図版25）

結果を表１に示す。同定された個体は、オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. sieboldiana （Maxim）Kitamura）の核の細片数個体であった。大きさはいずれも１㎝程度と小さいが、木質で非常に堅い点、表面にしわ模様が存在する点、縫合線が確認できる個体がある点、内側に子葉が入っていたくぼみが確認できる点などからオニグルミとした。

## ４．考察

### （１）遺構の年代について

ＳＴ184（ＭＡ28Grid）・ＳＴ184（ＭＢ28Grid）・ＳＴ183（ＬＱ33Grid）・ＳＴ183（ＬＲ33Grid）・ＳＫ17から出土した炭化材５点の年代値は、約2900～3000年前を示す。この値は、キーリ・武藤（1982）らによれば、縄文時代晩期に相当する。測定試料の７点のうち、５点の年代値が約2900～3000年前に集中することから、測定年代値が捨て場遺構と土坑の構築年代または廃絶された年代を示す可能性がある。よって、これらの遺構の構築年代は、縄文時代晩期頃と考えられる。この結果は、出土遺物などから本遺跡が縄文時代晩期前半と考えられていることと調和的である。

一方、ＳＴ184（ＭＡ27Grid）出土炭化材が約1200年前、ＳＫ04出土炭化材が約1300年前の値を示す。この値は７世紀中頃～８世紀中頃に相当し、上記の測定試料の年代値とは異なる。この２試料の出土地点は捨て場と土坑で異なるが、樹種はいずれも上記の５試料には認められない針葉樹のヒノキ科である。以上のことに加え、年代値が炭化材のもととなった植物の死滅した年代値であることを考慮すると、遺構廃絶後に形成された炭化材が、遺構が埋積する過程で混入した可能性が高い。

### （２）炭化材・種実遺体について

捨て場から出土した木材・種実遺体は、全て炭化していることから、何らかの人間活動に伴って炭化したものが廃棄されたと考えられる。炭化材には６種類が認められた。一方、土坑から出土した炭化材は、ＳＫ04がヒノキ科、ＳＫ17がエゴノキ属であった。いずれも有用材となる種類であり、秋田県内でこれまでに行われた調査でも住居構築材や燃料材に確認されている。このことから、本遺跡でもこれらの木材が住居構築材や燃料材として利用されていた可能性がある。ただし、ＳＫ04のヒノキ科は、放射性炭素年代測定結果を考慮すると、後世に使用された燃料材の残渣が捨てられた可能性がある。

確認された木材のうち、ブナ属やコナラ節は、秋田県内では極相林を構成する種類である。また、その他の落葉広葉樹や針葉樹も、現在の秋田県内では比較的普通にみられる種類である。これらの結果から、本遺跡周辺の植生は、現在と似た植生でブナ属やコナラ節を主構成種とする落葉広葉樹林がみられたと考えられる。

引用文献

キーリ Ｃ．Ｔ．・武藤康弘（1982）「縄文時代の年代」『縄文文化の研究１　縄文人とその環境』 ｐ.246-275　雄山閣

**表１　放射性炭素年代測定および樹種・種実同定結果**

| No. | 採取地点 | 試料の質 | 種　　類 | 測定年代 BP | δ13C (‰) | 補正年代 BP | Code.No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ST184(MA28Grid) | 炭化材 | クリ | 2880±40 | -27.0 | 2850±40 | Beta-153447 |
| 2 | ST184(MB28Grid) | 種実遺体 | オニグルミ | 2960±40 | -26.3 | 2940±40 | Beta-153446 |
| 3 | ST184(MA27Grid) | 炭化材 | ヒノキ科 | 1160±40 | -25.5 | 1150±40 | Beta-153445 |
| 4 | ST183(LQ33Grid) | 炭化材 | ブナ属<br>トネリコ属<br>カツラ | 2950±50 | -27.4 | 2910±50 | Beta-153444 |
| 5 | ST183(LR33Grid) | 炭化材 | ブナ属<br>クリ<br>コナラ属コナラ亜属コナラ節 | 2990±40 | -25.8 | 2980±40 | Beta-153443 |
| 6 | SK04 | 炭化材 | ヒノキ科 | 1340±50 | -27.2 | 1300±50 | Beta-153442 |
| 7 | SK17 | 炭化材 | エゴノキ属 | 2920±40 | -26.1 | 2900±40 | Beta-153448 |

## 第２節　黒曜石製剥片の原産地推定

藤根　久（パレオ・ラボ）

### １．試料と方法

原産地推定を行った黒曜石剥片は、向様田Ａ遺跡から出土した剥片９試料である。試料はアルコールで超音波洗浄して、比較的平坦な面（あるいは凸面）を選んで測定面とした。

原産地の推定は、望月・堤（1996）が示した蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。

測定に用いた蛍光Ｘ線分析計は、セイコー電子工業（株）製の卓上型蛍光Ｘ線分析計SEA-2001Ｌである。Ｘ線管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、Ｘ線検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10㎜、電流5～10μA、電圧50KV、測定室真空である。

測定した元素は、主成分元素のカリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）と微量元素のルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素である。各元素は、定量計算は行わずＸ線強度（cps）のみ測定した。

### ２．測定結果

黒曜石の原産地推定は、望月・堤（1996）などの黒曜石の産地推定法を適用した。

原石試料および剥片は、測定した元素強度（cps）から以下に示す指標値を計算した。

１）．Rb分率＝Rb強度×100/(Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度)

２）．Sr分率＝Sr強度×100/(Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度)

３）．Mn強度×100/Fe強度　　４）．log(Fe強度/K強度)

［黒曜石原石］

黒曜石原石は、北海道・東北・栃木地域の黒曜石原産地として、北海道（白滝１群、白滝２群、余市郡赤井川）、青森県（木造町出来島、深浦町岡崎浜）、秋田県男鹿市（脇本海岸１、脇本海岸２、金ヶ崎温泉）、山形県（西川町月山荘前）、栃木県高原山（七尋沢、宮川、枝持沢、甘湯沢）、新潟県（新発田市板山牧場、新津市金津）である。また、中部日本地域の長野県（和田峠、男女倉、霧ケ峰、蓼科）、神奈川県箱根、静岡県伊豆柏峠、東京都神津島、九州の大分県姫島である。なお、これら原石試料は、沼津高等専門学校の望月昭彦氏にご協力いただいた。

各元素のＸ線強度を測定し、これらＸ線強度から算出した先の指標値から、第１図および第２図に示す判別図を作成した。その結果、北海道・東北・栃木地域の黒曜石原産地のRb分率－Mn×100/Fe判別図（第１図）およびSr分率－log(Fe/K）判別図（第２図）では、白滝や赤井川の一群、高原山群（七尋沢・宮川・枝持沢）、高原山甘湯沢、脇本海岸１と金ヶ崎温泉、月山荘前、出来島、金津、板山牧場などに判別される。なお、脇本海岸で採取される淡黒色の黒曜石は、広い分布範囲を示し、脇本海岸１と金ヶ崎温泉の原石群と一部重複するものがある。

［剥片試料］

第１表は、各剥片黒曜石の元素強度と計算による指標値である。また、これらの指標値は、北海道・東北・栃木地域の黒曜石と共に、第１図のSr分率－log(Fe/K）判別図と第２図のRb分率－Mn×100/Fe判別図にプロットした。

判別図にプロットした結果、試料ＬＰ35－Ｂ、ＬＱ38、ＭＢ28－Ｃ、ＭＢ28－Ａ、ＭＢ28－Ｄ、ＭＢ27－Ｄ、ＭＣ35は、相互に比較的隣接してプロットされ、脇本海岸１と金ヶ崎温泉の一群に近い。

一方、試料ＬＯ34－ＤとＬＮ34－Ｃは第２図のRb分率－Mnx100/Fe判別図において他の試料とは独立してプロットされる。

## ３．原産地の推定

第１表に、原産地の推定結果を示す。

試料ＬＰ35－Ｂ、ＬＱ38、ＭＢ28－Ｃ、ＭＢ28－Ａ、ＭＢ28－Ｄ、ＭＢ27－Ｄ、ＭＣ35は、脇本海岸１あるいは金ヶ崎温泉が原産地と推定される。これらの黒曜石は、淡褐色系の黒曜石であり、脇本海岸１あるいは金ケ崎温泉で採取される原石試料と同じ色調をもつ。

一方、試料ＬＯ34－ＤとＬＮ34－Ｃは、標準試料が少ないが、脇本海岸２の可能性が高い。なお、この剥片はいずれも円礫を加工した剥片であり、黒色系の均質な黒曜石からなる。脇本海岸では黒色系の黒曜石が採取されるが（脇本海岸２）、これらの原石は小さく出土した剥片ほど大きくはない。また、この脇本海岸で採取される原石は、２群から構成される可能性（形成期などが異なる）があるため、今後原石の数を増やすなど検討が必要である。

なお、中部日本地域の黒曜石原産地と比較した場合、該当する原産地は見当たらない。

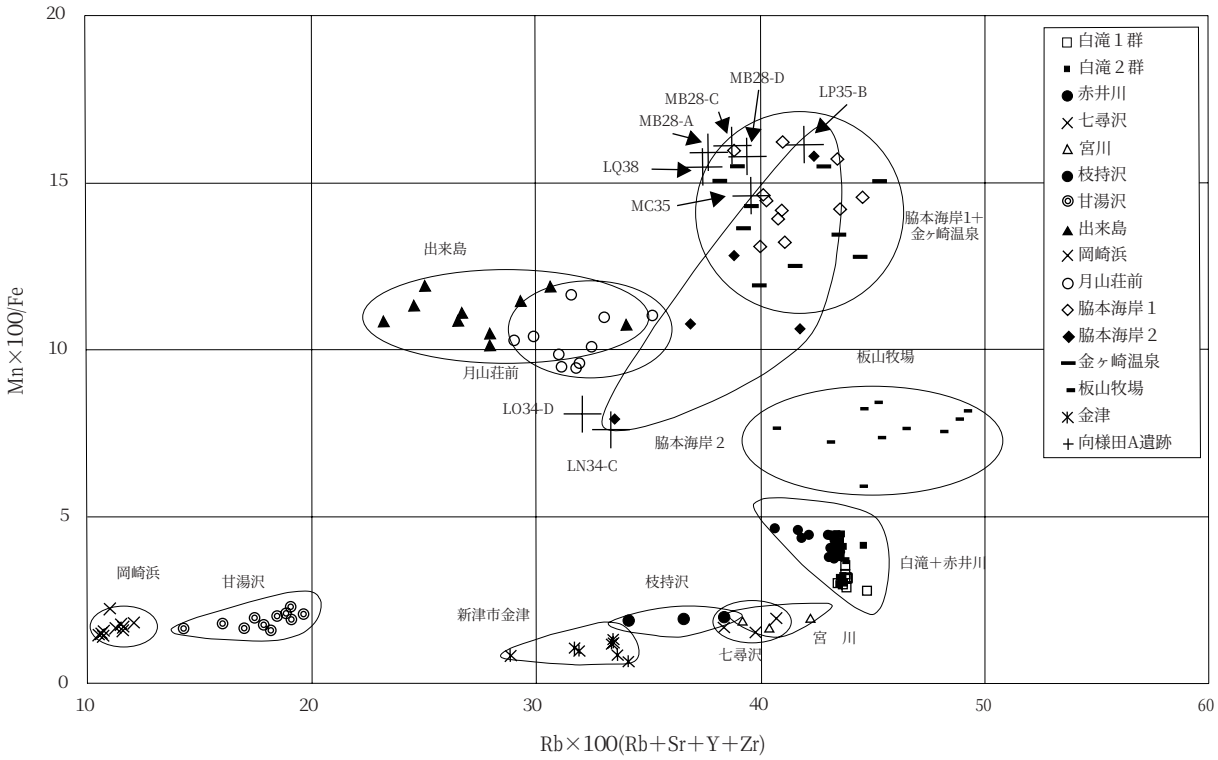
引用文献

望月昭彦・堤　隆（1996）「黒曜石の産地推定による南関東の細石刃文化の研究（Ⅰ）」

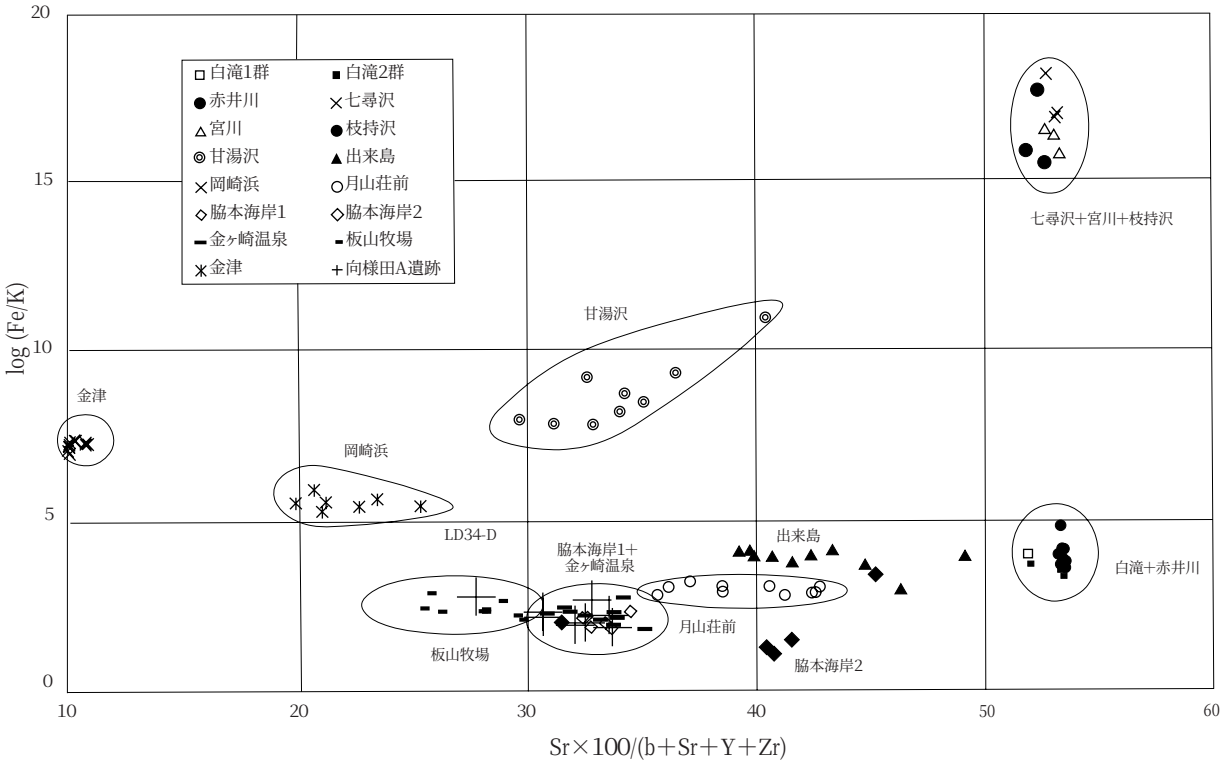
『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』112－113

**表１　黒曜石製剥片試料とＸ線強度および指標値**

| 試料 | 種類 | Ｘ線強度 | | | | | | | Ｘ線強度による指標値 | | | | 原産地推定 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | K | Mn | Fe | Rb | Sr | Y | Zr | Rb分率 | Mnx100/Fe | Sr分率 | log(Fe/K) | |
| LN34-C | 剥片 | 32.8640 | 4.9300 | 61.0850 | 5.9050 | 4.1990 | 2.6010 | 5.7110 | 32.0645 | 8.0707 | 22.8008 | 0.2692 | 脇本海岸２ |
| LO34-D | 剥片 | 40.7080 | 5.8840 | 77.5470 | 8.3740 | 4.4600 | 3.6110 | 8.7000 | 33.3028 | 7.5877 | 17.7371 | 0.2799 | 脇本海岸２ |
| LP35-B | 剥片 | 34.2720 | 9.1430 | 56.6990 | 10.9900 | 5.4200 | 3.6590 | 6.1330 | 41.9434 | 16.1255 | 20.6854 | 0.2186 | 脇本海岸１＋金ヶ崎温泉 |
| LQ38 | 剥片 | 26.8570 | 6.6150 | 42.8150 | 8.7840 | 5.2870 | 3.1670 | 6.2400 | 37.4137 | 15.4502 | 22.5190 | 0.2025 | 脇本海岸１＋金ヶ崎温泉 |
| MA28-C | 剥片 | 32.2770 | 8.7230 | 54.2220 | 9.8280 | 5.9810 | 2.9560 | 6.6330 | 38.6960 | 16.0876 | 23.5491 | 0.2253 | 脇本海岸１＋金ヶ崎温泉 |
| MB28-A | 剥片 | 39.7410 | 9.7860 | 61.6360 | 11.1410 | 7.0020 | 3.7810 | 7.6470 | 37.6754 | 15.8771 | 23.6786 | 0.1906 | 脇本海岸１＋金ヶ崎温泉 |
| MB28-D | 剥片 | 37.0520 | 9.1870 | 58.2460 | 10.9630 | 6.1420 | 4.0680 | 6.6740 | 39.3687 | 15.7728 | 22.0562 | 0.1965 | 脇本海岸１＋金ヶ崎温泉 |
| MC35 | 剥片 | 33.6640 | 8.4440 | 57.8780 | 10.4920 | 5.4830 | 3.8490 | 6.6970 | 39.5611 | 14.5893 | 20.6742 | 0.2353 | 脇本海岸１＋金ヶ崎温泉 |
| 最大値 | | 40.7080 | 9.7860 | 77.5470 | 11.1410 | 7.0020 | 4.0680 | 8.7000 | 41.9434 | 16.1255 | 23.6786 | 0.2799 | |
| 最小値 | | 26.8570 | 4.9300 | 42.8150 | 5.9050 | 4.1990 | 2.6010 | 5.7110 | 32.0645 | 7.5877 | 17.7371 | 0.1906 | |




**第１図　北海道・東北・栃木地域の黒曜石原石と剥片のRb分率－Mn×100/Fe判別図**




**第２図　北海道・東北・栃木地域の黒曜石原石と剥片のSr分率－log（Fe/K）判別図**

## 第３節　向様田Ａ遺跡出土石製品の石質について

**表１　石製玉類半定量析結果表**

| 試料番号 | 試料内容 | 石　　質 | 検出された元素* | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | Na | Mg | Al | Si | P | S | Cl | K | Ca | Ti | Cr | Mn | Fe |
| 1 | SK17　RQ13-1 | 緑色凝灰岩 | ・ | ・ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 2 | SK17　RQ13-2 | 緑色凝灰岩 | ・ | ・ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 3 | SK17　RQ13-3 | 緑色凝灰岩 | ・ | ・ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 4 | SK17　RQ13-4 | 緑色凝灰岩 | ・ | ・ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 5 | SK17　RQ13-5 | 緑色凝灰岩 | ・ | ・ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 6 | SK17　RQ13-6 | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 7 | SK17　RQ13-7 | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 8 | SK17　RQ01 | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 9 | SK17　RQ02 | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 10 | SK17　RQ03 | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | △ | | | △ |
| 11 | SK17　RQ04 | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 12 | SK17　RQ10 | 緑色凝灰岩 | ・ | ・ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | △ | | | △ |
| 13 | SK17　RQ12 | ヒスイ | △ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | | | | ・ |
| 14 | SK06 | ヒスイ | △ | △ | ○ | ◎ | | ・ | | ・ | △ | | | | |
| 15 | ST183　LT35-D | ヒスイ | △ | △ | ○ | ◎ | | | | | △ | | | | ・ |
| 16 | MA32-C | ヒスイ | △ | △ | ○ | ◎ | | | | | ・ | | | | |
| 17 | ST183　LQ33-A | ヒスイ | △ | △ | ○ | ◎ | | | | | △ | | | | ・ |
| 18 | ST183　LN35-A | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 19 | ST183　LT38 | 緑色凝灰岩 | ・ | △ | ○ | ◎ | | | | △ | △ | ・ | | | △ |
| 20 | ST184　MA27-A | 緑色凝灰岩 | △ | ・ | ○ | ◎ | | | | △ | ・ | | | | ・ |
| 21 | ST184　LT29-B | ヒスイ | △ | △ | ○ | ◎ | | | | | △ | | | | ・ |
| 22 | ST183　LP33-C | ヒスイ | △ | ・ | ○ | ◎ | | | | | ・ | | | | |
| 23 | ST183　LR35-C | ヒスイ | △ | △ | ○ | ◎ | | | | | △ | | | | |

凡例　　*　◎　多い
○ やや多い
△やや少ない
・ごく少ない

| | |
|---|---|
| 分析に使用した機器 | 日本電子　走査型電子顕微鏡JSM-6300 |
| | オックスフォード　リンクQX2000 エネルギー分散型Ｘ線スペクトロメータ |
| 加速電圧 | 15ｋＶ |
| 分析範囲 | 0.5mm × 0.4mm |
| 蒸着の有無 | なし |
| 分析時間 | 45秒 |
| 分析年月日 | 平成13年12月16日 |
| 分析担当者 | 宮島　宏 |
| 分析機関 | フォッサマグナミュージアム |

## 第４節　向様田Ａ遺跡における赤色顔料の由来について

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

本遺跡（秋田県北秋田郡森吉町に所在）は、森吉山北麓を西に流れる小又川右岸の段丘上に位置する。発掘調査によって、捨て場、土坑墓群（配石墓を含む）からなる墓域、土器埋設遺構、配石遺構群などが検出されており、これらが複合した縄文時代晩期前半の祭祀遺跡であることが明らかにされている。

検出された土坑墓群のうちＳＫ42では、床面から壁面にかけての一部に赤色顔料が認められた。そこで今回の分析調査では、ＳＫ42で検出された赤色顔料の素材推定を目的として、Ｘ線回折分析を実施した。

## １．試料

縄文時代晩期の土坑墓であるＳＫ42は、埋積物が１層～12層に分層されており、この内の11層付近に赤色顔料が混入するとされている（図１）。試料は11層から層位的に採取され、ここより赤色物質を抽出してＸ線回折分析を行った。なお、試料採取層位名は、添付された図面に基づく。

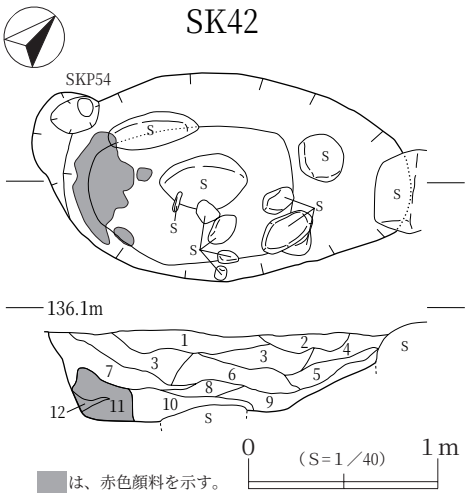



**図１　赤色顔料の分布範囲**

## ２．分析方法

土塊中に含まれる赤色顔料を抽出し、105℃で２時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉砕した。この微粉砕試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、Ｘ線回折測定試料とした。作成したＸ線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した（足立，1980；日本粘土学会，1987）。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から、原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をＸ線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐，未公表）により検索した。

| | |
|---|---|
| 装　置：島津制作所製ＸＤ－３Ａ | Time Constant：1.0sec |
| Target ：Ｃｕ（Ｋα） | Scanning Speed：2 °/min |
| Filter　：Ｎｉ | Chart Speed：2cm/min |
| Voltage：30KVP | Divergency：1 ° |
| Current：30mA | Recieving Slit：0.3mm |
| Count Full Scale：5,000C/S | Scanning Range：3～45 ° |

## ３．結果

Ｘ線回折図を図２に示す。検出された鉱物は石英（quartz）、斜長石（plagioclase）、カリ長石（K-feldspars）および赤鉄鉱（hematite）の４鉱物である。なお、回折図において約20 ° 付近からバックグラウンドが高くなっていることから、試料中には比較的鉄が多く含まれていることが予想される。

## ４．考察

一般に遺跡などで検出される代表的な赤色顔料にはベンガラ（赤鉄鉱；hematite［α－$Fe_2O_3$］）のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar［HgS］）、鉛丹（鉛丹；minium［$Pb_3O_4$］）などがある。今回の試料については検出鉱物中に顔料鉱物である赤鉄鉱（hematite）の存在が確認されたことから、本赤色顔料がいわゆるベンガラである可能性が指摘される。

引用文献

足立吟也（1980）「６章 粉末Ｘ線回折法　機器分析のてびき３」 p.64-76　化学同人

日本粘土学会編（1987）「粘土ハンドブック　第二版」 1289ｐ　技報堂出版

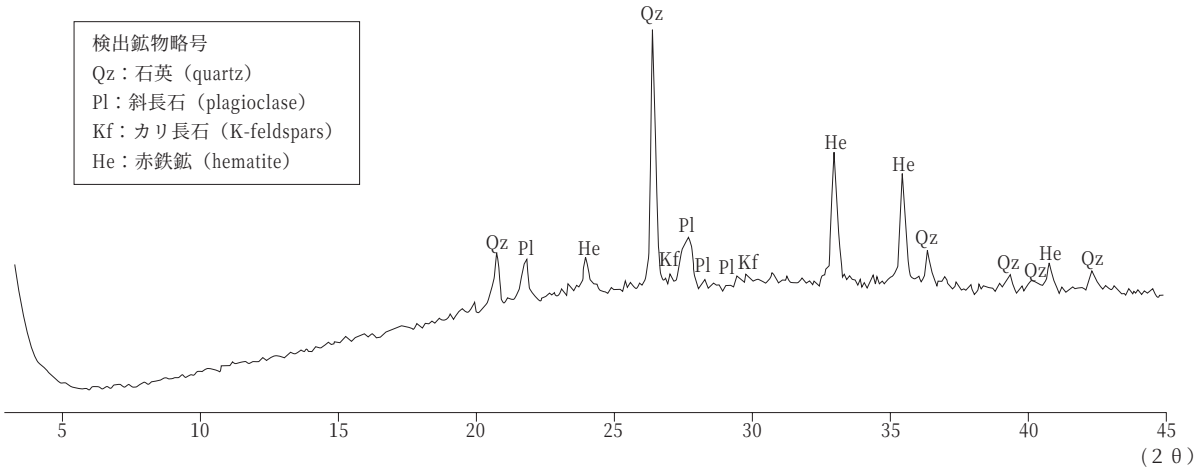



**図２　赤色顔料のＸ線回折図**

## 第５節　向様田Ａ遺跡の遺構内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

本遺跡（秋田県北秋田郡森吉町に所在）は、森吉山北麓を西に流れる小又川右岸の段丘上に位置する。今回の発掘調査によって、捨て場、土坑墓群（配石墓を含む）からなる墓域、土器埋設遺構、配石遺構群などが検出されており、これらが複合した縄文時代晩期前半の祭祀遺跡であることが明らかにされている。

今回の分析調査では、土器埋設遺構および捨て場内から出土した土器内に遺体が埋納されていたか検証するために、土壌理化学分析を実施した。なお、分析項目としては、動植物の体組織に多く含まれる腐植、全窒素、リン酸、カルシウムの含量測定を選択した。

### １．試料

土器埋設遺構であるＳＲ58の土器内に充填した土壌について上部（試料Ａ）・中部（試料Ｂ）・下部（試料Ｃ）の３点が採取され（図１）、このうち中部から採取された試料について分析を行う。

また、南西部捨て場ＳＴ184で出土した土器（№1334）の内部に充填した土壌、および基本土層Ⅱ層から試料が採取され、これらも分析試料とした。以上、土壌理化学分析の分析点数は計３点である。なお、分析試料には試料番号１～３が付されている。詳細は、結果とともに表示する。

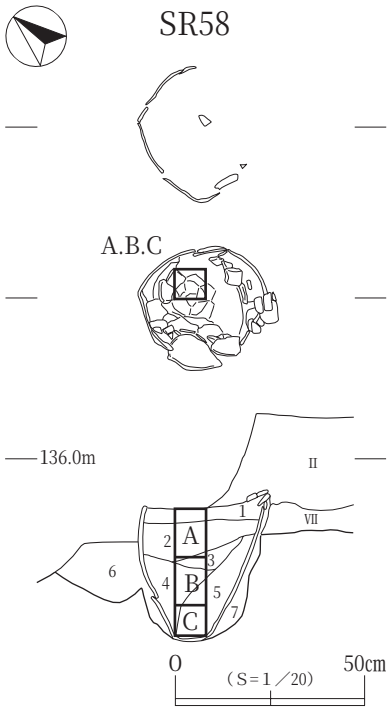



**図１　ＳＲ58の試料採取位置**

### ２．分析方法

腐植はチューリン法、窒素はケルダール法、リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法でそれぞれ行った（土壌養分測定法

委員会，1981）。以下に各項目の操作工程を示す。

＜試料の調整＞

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜φの篩を全通させる（微粉砕試料）。

＜腐植＞

微粉砕試料0.100～0.500ｇを100ml三角フラスコに正確に量りとり、0.4Ｎクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2Ｎ硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて、腐植含量（%）を算出する。

＜全窒素＞

微粉砕試料1.000ｇを200mlケルダールフラスコに正確に量りとり、分解促進剤（硫酸カリ９＋硫酸銅１）約３ｇと硫酸約10mlを加え、３～４時間加熱分解を行う。放冷後、内容物を100ml雌フラスコに全て移し、蒸留水で定容する。定容した試料液の一定量を正確に採取し、塩入・奥田法の窒素蒸留装置によって蒸留を行い、抽出された窒素（アンモニア態窒素）を２%ホウ酸液に捕集する。捕集液の1/50Ｎ硫酸標準液で滴定し、試料中の全窒素量（Ｎ乾土%）を求める。

＜リン酸・カルシウム＞

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（$P_2O_5$）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計により、カルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（$P_2O_5$㎎/ｇ）とカルシウム含量（CaO㎎/ｇ）を求める。

## ３．結果

結果を表１に示す。いずれの試料も砂壌土であり、理化学成分を吸着・保持しにくい砂分が多く、潜在的な成分保持能力が低い土性である。

腐植含量は、5.28～6.25%で、試料番号１で最も高い。全窒素は、0.22～0.26%であり、３試料ともほぼ類似した値である。リン酸含量は、2.76～6.13$P_2O_5$㎎/ｇであり、試料番号２で高い。カルシウム含量は、3.62～3.70CaO㎎/ｇであり、３試料ともほぼ類似した値である。

**表１　土壌理化学分析結果**

| 試料番号 | 層位等 | 土性 | 土色 | | 腐植含量(%) | 全窒素(%) | $P_2O_5$(mg/g) | CaO(mg/g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SR58（試料Ｂ） | SL | 10YR1.7/1 | 黒 | 6.25 | 0.26 | 2.76 | 3.62 | |
| 2 | ST184出土土器（No.1334）内覆土 | SL | 10YR2/1 | 黒 | 5.28 | 0.22 | 6.13 | 3.70 | |
| 3 | MA28Grid基本土層Ⅱ層 | SL | 10YR1.7/1 | 黒 | 5.89 | 0.22 | 4.18 | 3.70 | 対照試料 |

注１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修，1967）による。

注２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。SL：砂壌土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）

## ４．考察

骨の主成分の一つであるカルシウムが土壌中に普通に含まれる量、いわゆる天然賦存量は、普通1～50CaOmg/gとされており（藤貫，1979）、含量幅が大きい。また、窒素含量は、耕地土壌でも特殊な場合を除いて、0.02～0.5%の範囲におさまるとされている（岡島，1976）。今回、カルシウム含量および窒素含量は、３試料ともほぼ類似した値を示しており、これらの成分が富化された痕跡を認めることができない。

腐植含量は、各試料とも全体的に高い値である。これより、植物に由来する土壌腐植が集積していることがわかる。一方、リン酸は、2.76～6.13$P_2O_5$mg/gであり、試料間により有意差が認められる。リン酸量の天然賦存量については、Bowen（1983）、Bolt & Bruggenwert（1980）、川崎ほか（1991）、天野ほか（1991）などの報告例がある。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0$P_2O_5$mg/g程度と推定され、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5$P_2O_5$mg/gという報告例もある（川崎ほか，1991）。また、骨片が認められる土壌では、6.0$P_2O_5$mg/gを越える場合が多い（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表資料）。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべて$P_2O_5$mg/gで統一した。これらの値を著しく越える土壌では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が指摘できる。

以上のことから、次のことが推定される。試料番号１では、リン酸が天然賦存量の範囲内にあり、しかも腐植含量が対照試料である基本土層Ⅱ層よりも高い。これより、今回の結果から見る限り、ＳＲ58の内部にリン酸が富化された痕跡はなく、内部に遺体が埋納されていた可能性は低い。これに対して試料番号２では、対照試料と比較すると腐植含量が低く、リン酸含量が高い。特にリン酸含量は、天然賦存量を大きく上回る。したがって、ＳＴ184出土土器（№1334）の内部には、何らかの動物遺体が埋納されていた可能性がある。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量　農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen,H.J.M.（1983）「環境無機化学 －元素の循環と生化学－」．浅見輝男・茅野充男訳，297ｐ.，博友社［Bowen,H.J.M.（1979）*Environmental Cemistry of Elements*］．

Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.（1980）「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309ｐ.，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）*SOIL　CHEMISTRY*］，p.235-236.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」．440ｐ.，養賢堂.

藤貫　正（1979）カルシウム．地質調査所化学分析法，52，p.57-61，地質調査所.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.

農林水産省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

岡島秀夫（1976）「土壌肥沃度論」，235ｐ.，社団法人農山漁村文化協会.

ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」．156ｐ.，博友社.

# 第６節　向様田Ａ遺跡における土坑・土器埋設遺構の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

本遺跡（秋田県北秋田郡森吉町に所在）は、森吉山北麓を西に流れる小又川右岸の段丘上に位置する。今回の発掘調査によって、土器捨て場、土坑墓群（配石墓を含む）からなる墓域、土器埋設遺構、配石遺構群などが検出されており、縄文時代晩期前半の祭祀遺跡であることが想定されている。

今回の分析調査では、検出された縄文時代晩期の土坑や土器埋設遺構の内容物について検証するために、遺構埋積物に残留する脂肪酸を抽出し、同定することにした。

## １．試料

試料は、ＳＫ05から６点（試料Ａ～Ｆ）、ＳＫ06から６点（試料Ａ～Ｆ）、ＳＫ17から５点（試料Ａ～Ｅ）、ＳＫ23から６点（試料Ａ～Ｆ）、ＳＫ42の11層、ＳＲ58から３点（試料Ａ～Ｃ）、ＳＴ184出土土器（№1334）内覆土、および対比試料として、ＭＡ28Grid基本土層Ⅱ層の合計29点が採取された。これら全点について、脂肪酸分析を実施する。図１に、ＳＫ05～ＳＫ42およびＳＲ58の試料採取位置を示す。

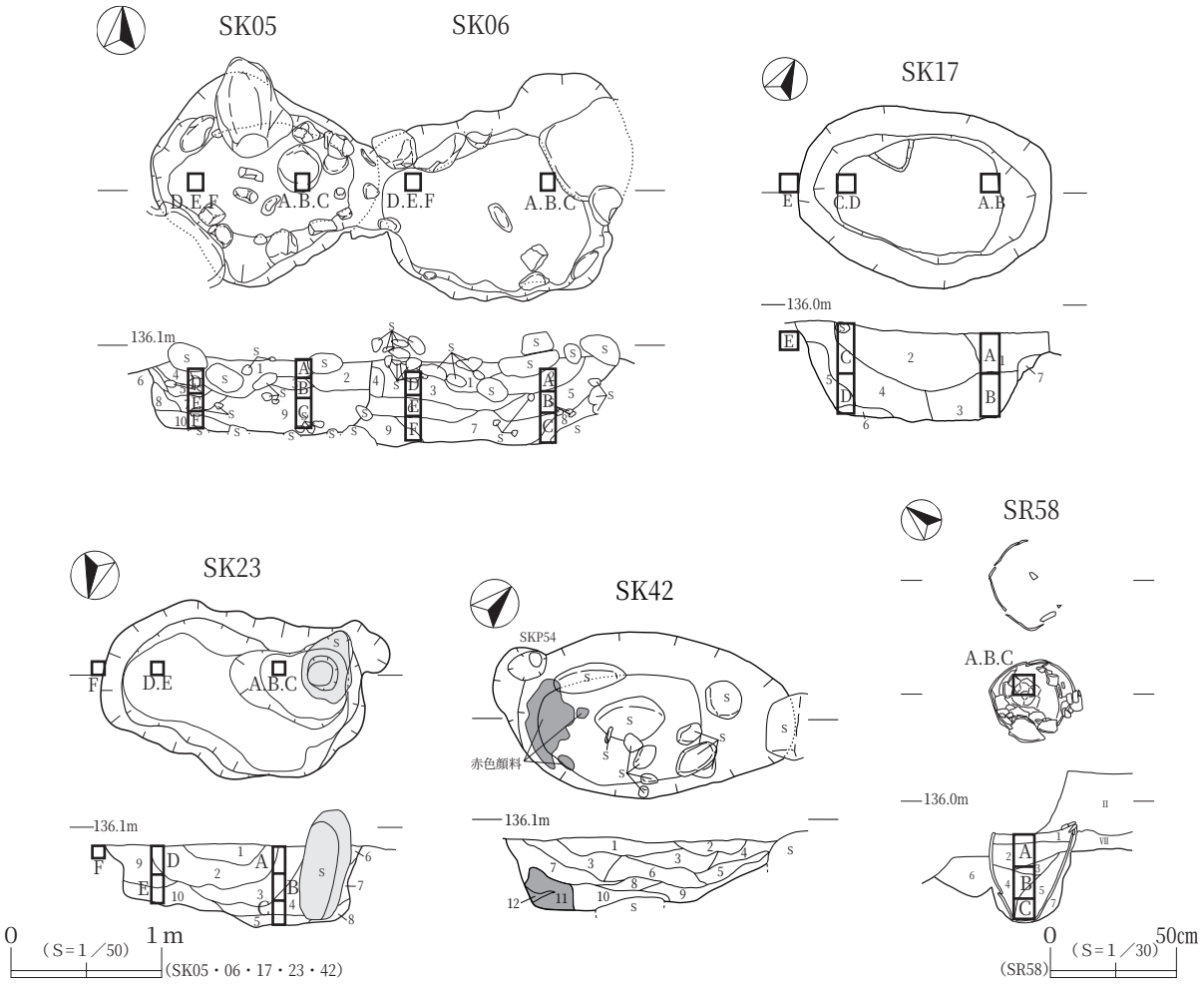



**図１　ＳＫ05・06・17・23・42土坑、ＳＲ58土器埋設遺構の土層断面と試料採取位置**

## ２．分析方法

分析は、坂井ほか（1995）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール（２：１）を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸－メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム（ULBON，HR-SS-10，内径0.25㎜，長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（ＧＣ－14A，SHIMADZ）を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム（Ｊ＆W SCIENFIC，DB－１，内径0.36㎜、長さ30m）を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

## ３．結果

結果を図２・３に示す。脂肪酸組成は、Ｃ14～Ｃ18の中級脂肪酸がどの試料でも多い。Ｃ20以上の高級脂肪酸との比率は、平均して4：1の割合で中級脂肪酸が高くなっている。個々の試料の比率を詳しくみると、平均値付近の試料が大半であるが、これと異なる試料も存在する。ＳＫ05試料Ｆ、ＳＫ06試料Ｃ、ＳＫ23試料Ａ、ＳＫ23試料Ｂの各試料では、中級脂肪酸が90%近くを占め、他の試料よりも高い。反対にＳＫ05試料Ｂ、ＳＫ06試料Ｆ、ＳＫ17試料Ａ、ＳＫ23試料Ｆ、ＳＫ42の11層、ＳＴ184出土土器（№1334）内覆土、ＭＡ28Grid基本土層Ⅱ層は、高級脂肪酸が30%以上検出される。中級脂肪酸では、パルチミン酸（Ｃ16）、パルミトレイン酸（Ｃ16:1）、ステアリン酸（Ｃ18）、オレイン酸（Ｃ18:1）が高い。また、高級脂肪酸ではアラキジン酸（Ｃ20）、ベヘン酸（Ｃ22）、リグノセリン酸（Ｃ24）が高い。飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比率は、平均して7:3で飽和脂肪酸の方が高い。各試料についてみると、ＳＫ17試料Ｅ、ＳＫ23試料Ｆ、ＳＫ42の11層、ＭＡ28Grid基本土層Ⅱ層で飽和脂肪酸が85～90%近くを占めるが、ＳＫ05試料Ａ、ＳＫ06試料Ｃ・Ｅで不飽和脂肪酸の割合が40%近くを占める。不飽和脂肪酸は、パルミトレイン酸（Ｃ16:1）やオレイン酸（Ｃ18:1）など１価の中級脂肪酸が多く、２価以上の脂肪酸や不飽和高級脂肪酸が少ない傾向にある。

一方、ステロール組成をみると、試料によってばらつきがみられる。ＳＫ23試料Ｂ・Ｃ、ＳＲ58試料Ａ、ＭＡ28Grid基本土層Ⅱ層ではステロールが抽出されなかった。また、ＳＫ05試料ＡとＳＫ06試料Ａがコレステロールのみ、ＳＫ06試料Ｃ・Ｄ・ＥとＳＫ23試料Ｄ・Ｅがカンペステロールのみからなる。その他の試料では、複数のステロールが得られている。ステロールが複数みられる試料の多くは、動物由来のステロールであるコレステロールと、植物由来のステロールであるカンペステロール、エルゴステロール、シトステロールが存在する。植物由来のステロールの方が多い試料が大半であるが、ＳＫ05試料ＤとＥとＳＫ23試料Ｆでは、コレステロールの割合が高い。また、細菌由来のコプロスタノールが、ＳＫ17試料ＤとＥとＳＲ58試料Ｃで比較的多く検出される。

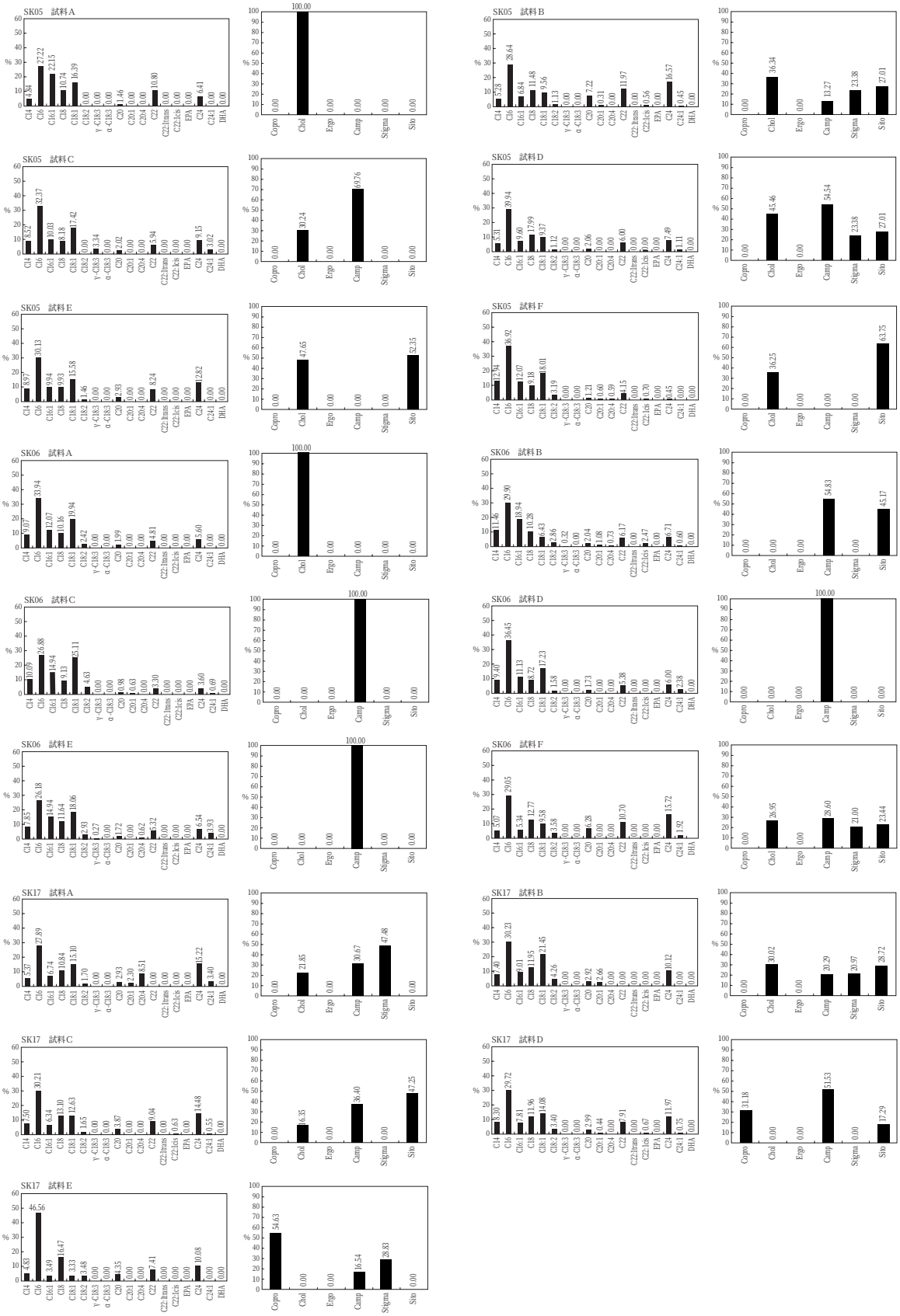



**図２　脂肪酸・ステロール組成（１）ＳＫ05・06・17土坑**

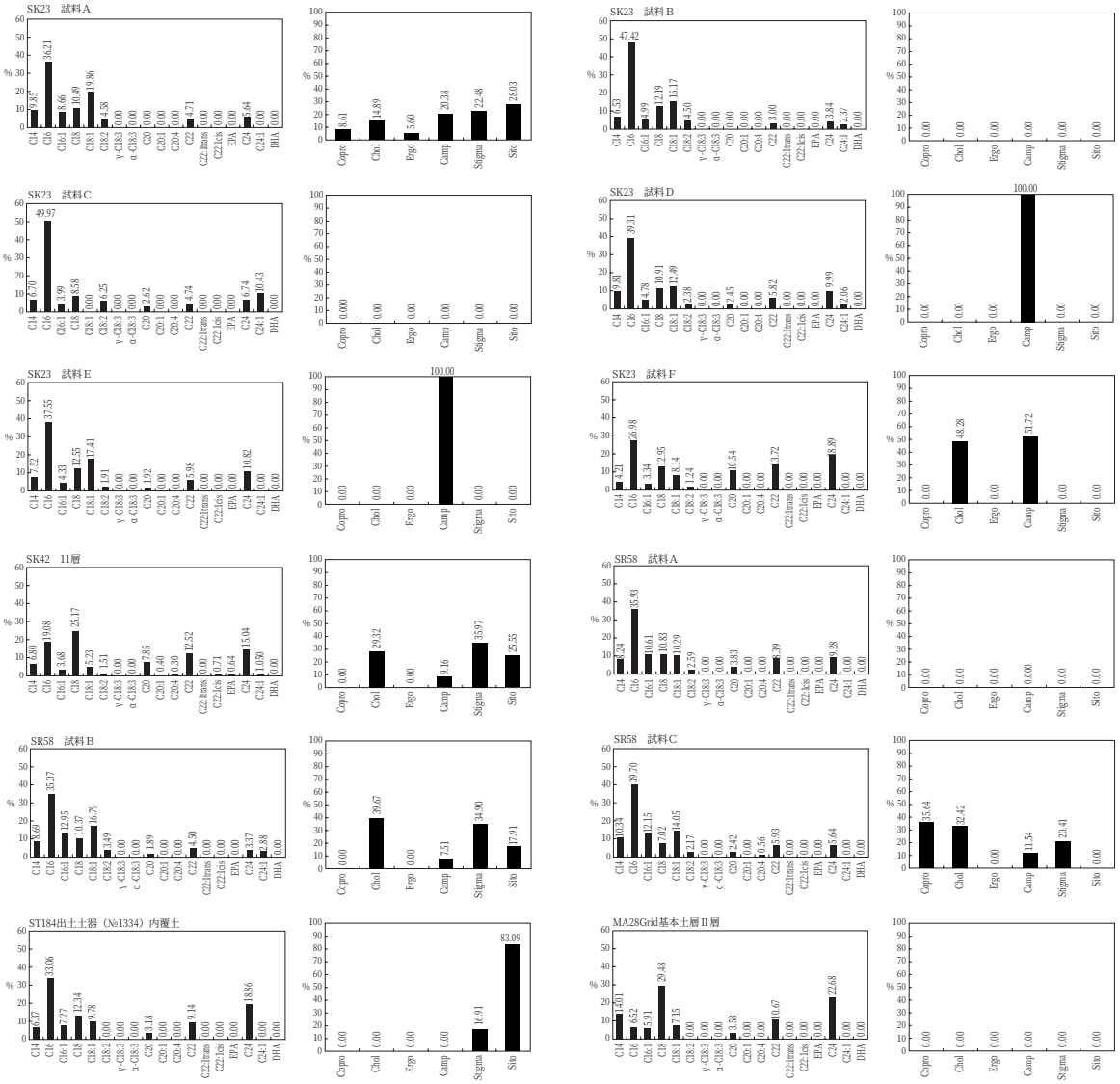



**図３　脂肪酸・ステロール組成（２）ＳＫ23・42、ＳＲ58その他**

## ４．考察

自然状態では、土壌中の脂肪酸などの化学組成は均質になるが、動物遺体などの埋葬などが行われた場合には、場所によって組成にばらつきが生じる（小山，1995）と考えられる。今回の結果をみると、土坑や対照試料において、組成の異なる試料が複数存在し、脂肪酸組成やステロール組成にばらつきがみられることから、遺体等の埋納の痕跡が残されていると推定される。

今回抽出されたステロールは、全体的に少ない。特に、ステロールが１～２種類のみ検出された試料で少ない傾向がある。ステロールは比較的安定な物質であることから、微量であれば植物や土壌生物などによって、自然状態でも蓄積される可能性がある。このため、抽出量が少ない場合は、人為的に埋めたものと、天然に存在したものとの区別がつかないことが予想される。また、アラキジン酸・ベヘン酸・リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸は、動物の臓器由来の脂肪酸としてコレステロールとともに遺体埋納位置などの推定に用いられている（中野，1993；1995）。このため、高級脂肪酸と

ステロールについては強い正の相関があると思われるが、今回の場合では相関係数－0.07で、無相関である。これは、ステロールの抽出量や種類数が少ないため、ある種のステロールが偶発的に検出された可能性を示しており、百分率で表すことは統計的な信頼性に問題があることを意味する。このため、ＳＫ05試料Ａ・Ｃ～Ｆ、ＳＫ06試料Ａ～Ｅ、ＳＫ23試料Ｂ～Ｆ、ＳＲ58試料Ａ、ＳＴ184出土土器（№1334）内覆土、ＭＡ28Grid基本土層Ⅱ層に関しては、ステロール組成からみた内容物推定は差し控えたい。ステロールのうち、コレステロールは動物に特有なステロールで、細胞膜、血清中に多く存在してその機能に関与するだけでなく、胆汁やホルモン合成の前駆体としても重要である（菅原ほか，1987ａ；菅原ほか1987ｂ）。ＳＫ05試料Ｂ、ＳＫ06試料Ｆ、ＳＫ17試料Ａ～Ｃ、ＳＫ23試料Ａ、ＳＫ42の11層、ＳＲ58試料Ｂ・Ｃでコレステロールが検出され、またＳＫ17試料Ｄ・Ｅ、ＳＫ23試料Ａ、ＳＲ58試料Ｃでコプロスタノールが検出される。コプロスタノールはコレステロールが大腸菌などによって分解されて生じるもので、遺体の腹部や糞などに多くみられるステロールである（中野，1993；1995）。このことから、これらの試料については動物遺体の埋納が想定される。また、シトステロール、スティグマステロール、カンペステロールは、植物に多くみられるステロールである（菅原ほか，1987ａ；菅原ほか，1987ｂ）。これらのステロールは、植物に広く含まれるため、土壌腐植などに由来する可能性があり、植物を埋納したことに直接結びつくとはかぎらない。

一方、脂肪酸の組成から埋納物を推定する手段として、「種特異性相関」を求める方法がある（中野ほか，1993）。手法の違いから、今回数値を直接用いることは難しいが、大筋の傾向を述べると次のようになる。飽和脂肪酸と高級脂肪酸がともに多い試料は動物の臓器に、飽和脂肪酸と中級脂肪酸が多い試料は動物の体脂肪に、中級脂肪酸がやや多く不飽和脂肪酸を含むものは植物に、中級脂肪酸が非常に多いものは土壌に、不飽和脂肪酸と高級脂肪酸がともに多いものは魚介類にあたるとされる。今回の分析結果では、飽和脂肪酸と高級脂肪酸がともに多い試料が多く、動物の臓器が埋納されたことが示唆される。 そこで、今少し検討をすすめたい。上記のうち、中級脂肪酸に着目すると、試料によるばらつきがあるが、パルチミン酸、パルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸が多く検出される。これらは、動物油、植物油ともに多く含まれる成分である（島薗，1988）。このような分子量の小さい脂肪酸が高いのは、分子量の大きい脂肪酸や不飽和脂肪酸は分解されやすいので（坂井・小林，1995）、経年変化により分子量の小さい脂肪酸の割合が相対的に高くなったためと考えられる。また、土壌中の脂肪酸には土壌微生物の細胞膜由来のリン脂質が含まれており、パルチミン酸、パルミトレイン酸、オレイン酸などが多くみられる（荒尾ほか，1995）。したがって、これらの中級脂肪酸は土壌由来のものであり、埋納の指標にはならないと推定される。なお、今回の試料では、高級飽和脂肪酸が全ての試料で見られ、少ない試料でも10%、多い試料で40%近くを占める。この中でもアラキジン酸は動物リン脂質の一種で、生体膜の構成成分として重要である（島薗，1988）。また、アラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸は、脳や神経に多く含まれる脂肪酸である（中野，1993）。このように、20以上の脂肪酸は、動物遺体の埋納位置等の推定に関しては、有用な脂肪酸であると言える。

以上、今回の分析結果では、いずれの試料でもＣ20以上の脂肪酸が高いことから、全ての試料においての遺体埋納の痕跡が認められる。特に、ＳＫ05試料Ｂ、ＳＫ06試料Ｆ、ＳＫ17試料Ａ、ＳＫ23試料Ｆ、ＳＫ42の11層、ＳＴ184出土土器（№1334）内覆土はその値が高い。さらにこれらの試料の中で

もＳＫ05試料Ｂ、ＳＫ06試料Ｆ、ＳＫ17試料Ａ、ＳＫ42の11層は、コレステロールの値も高いことから、遺構内に脳や内臓など遺体の中心部に近い部位があった可能性がある。なお、今回の結果では、対照試料であるＭＡ28Grid基本土層Ⅱ層でも、土坑・土器内と同様に高級飽和脂肪酸が高い。基本土層の採取位置などにもよるが、脂肪酸成分の拡散や、当時の生活面への脂肪酸の蓄積などが考えられる。今回は対照試料が１点のみなので、この分析値が遺跡に分布する土壌が本来持っていた値なのか、偶発的に脂肪酸の濃集部が採取されたのかは不明である。今後は、対照試料についても、複数点数分析することが望まれる。

引用文献

荒尾知人・岡野正豪・金森哲夫（1995）GC-MSによる土壌中のリン脂質脂肪酸組成の分析．日本土壌肥料学会関東支部群馬大会講演要旨集，p.9.

小山陽造（1995）東北地方の脂肪酸分析結果．考古学ジャーナル，386，p.17-21.

中野益男（1993）脂肪酸分析法.「第四紀試料研究法２　研究対象別分析法」, p.388-403, 東京大学出版会.

中野益男・福島道広・中野寛子・明瀬雅子・長田正宏（1993）西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析.「奈良国立文化財研究所学報52　西隆寺発掘調査報告書」，p.94-100，奈良国立文化財研究所.

中野益男（1995）脂肪酸分析の現状と課題．考古学ジャーナル，386，p.2-8.

坂井良輔・小林正史・藤田邦雄（1995）灯明皿の脂質分析．富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第７集「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）　第二分冊」，p.24-37，財団法人　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.

坂井良輔・小林正史（1995）脂肪酸分析の方法と問題点．考古学ジャーナル，386，p.9-16.

島薗順雄（1988）標準栄養化学・生化学．205ｐ.，医歯薬出版株式会社.

菅原龍幸・福沢美喜男・青柳康夫・大川博徳・小泉典子（1987ａ）食品学総論．233ｐ.，建帛社.

菅原龍幸・加藤隆夫・高宮和彦・三浦　洋・田所忠弘・國崎直道（1987ｂ）食品学各論．270ｐ.,建帛社.

# 第６章　まとめ

発掘調査の結果、縄文時代晩期を主とする333遺構が検出された。遺構の内訳は、配石墓32基、土坑墓、もしくは土坑墓の可能性が高いもの39基、土坑104基、配石遺構36基、土器埋設遺構２基、性格不明遺構６基、焼土遺構４基、柱穴様ピット107基、竪穴住居跡３軒である。

基本的に遺構内出土の遺物量は少なく、遺構に確実に共伴する遺物は特に少ない。そのため、各遺構の時期の特定は非常に困難であるが、確実に時期を特定できる遺構を基に考えれば、概ね縄文時代晩期前半に属するとして差し支えないと考える。

検出遺構の主体は、縄文時代晩期前半の配石墓・土坑墓を含む土坑群と、配石遺構群である。

## １　土　　坑

発掘調査では、広義の土坑は175基検出された。前述の通り、遺構に確実に共伴する遺物の出土は稀で、土坑の性格を特定する根拠に乏しいということは否めない。しかしながら、わずかではあるが小玉などの副葬品を伴うもの、赤色顔料が検出されたものも存在する。こうした土坑は概ね人の遺体を埋葬した土坑墓と考えられる。これらの土坑墓の形態、検出位置などから判断して、「墓」という用途を直接性格づけすることが困難な土坑に関しても、一応「墓」という用途を想定した。また、向様田Ａ遺跡において特徴的なのは、覆土上面及び覆土中に、大小様々な形状の礫が不規則に配置（混入という表現のほうが適切かもしれないが）された土坑の存在である。一見すると不規則であり、配する礫にも選別されたような特徴もないため性格付けは困難であるが、そのうち、小玉を検出したものもあることや、掘方形状が土坑墓としたものと類似することから墓としての用途を想定し、「配石墓」とした。

175基検出した土坑のなかから「墓」としての性格を想定したものを、それぞれ土坑墓・配石墓としたが、全土坑の検出位置・形状・出土遺物・覆土の堆積状況等から総合的に判断したうえで、土坑の性格付けを行った。その判断基準を以下に記す。

［土坑墓の判断基準］

ア　赤色顔料が撒布されている土坑

イ　玉の出土した土坑

［配石墓の判断基準］

ウ　土坑上面に配石や集石を有する土坑

エ　意図的に配した礫または不規則に配した礫を坑内に有する土坑

以上の基準を満たすものは「墓」としての用途を想定した。また、これに関連して、こうした土坑はある一定区域に偏在することなどから、以下の条件を満たすものも一応「墓」として扱った。

オ　平面形が楕円形で、底面が平坦である土坑形状を有する土坑

カ　その遺構の検出位置から、他の「墓」と一群の土坑群を形成するもの

## （１）分　　布

遺跡内における平面上の分布からＡ～Ｄ群に分類した。（第62図）

＜Ａ群＞

東部環状配石遺構の東に位置し、62基の土坑からなる。群の広がりは南北約50m、東西約30mに及び、南西部捨て場の東側に分布する。他群と比較すると切り合いを持つ土坑の割合は少ない傾向にある。平面形は楕円形（不整含む）の占める率が高く、各群より規模の大きいものが多い。赤色顔料の撒布を認めたのはＳＫ04・17・42・59の４基であり、Ａ群のみの検出である。また副葬品の出土する土坑はＳＫ06・17の２基である。検出65基中の２／３を土坑墓・配石墓に認定しており、残る１／３も土坑墓・配石墓と非常に規模形状が酷似しているため、Ａ群は墓域と位置付けることとした。

＜Ｂ群＞

Ａ群の西側から北部配石群に向かって分布し、74基の土坑からなる。Ａ群との境界設定は多少曖昧である。平面形は楕円形（ズ）の割合が高い。Ｂ群中央部に位置するＳＫ115・116は扁平な巨礫が標柱の様に配されるが、Ａ群のＳＫ23のように立石が坑底部まで埋置されるわけでなく、覆土上面に置かれる。この周囲で重複する土坑を多数検出しているが、規模形状は様々であり、墓と認定し得ない土坑が多くなる。北部配石遺構群はこれより北に位置する。ＳＫ410・507の直上では石囲炉状配石遺構が検出されている。土坑が地山面での検出だったため、配石遺構との重なりを確認できた例である。配石遺構の確認面が黒褐色土中であり、掘り込みが確認しづらかったことを考えると、このような例は他にも可能性があったと推測する。出土遺物量はＡ群より少なく、副葬品の出土も皆無であるが、比較的大型の土坑については墓と考えても差し支えないと思われる。

＜Ｃ群＞

西部環状配石遺構の西側、遺跡の西端に位置し、35基の土坑からなる。切り合いを持つ土坑の割合が極めて高く、規模形状のばらつきは各群に比して群を抜く。小玉の出土したＳＫ277は、Ａ・Ｂ群における土坑墓の規模形状と明らかに異なる様相のため、土坑墓としては扱っていない。遺体を埋葬しうる平面規模を有す土坑が大勢を占めるが、出土遺物は極めて少なくその性格の判断は極めて厳しい。Ｃ群は墓以外の可能性も高く、広義の意味での土坑という判断にとどめておきたい。

＜Ｄ群＞

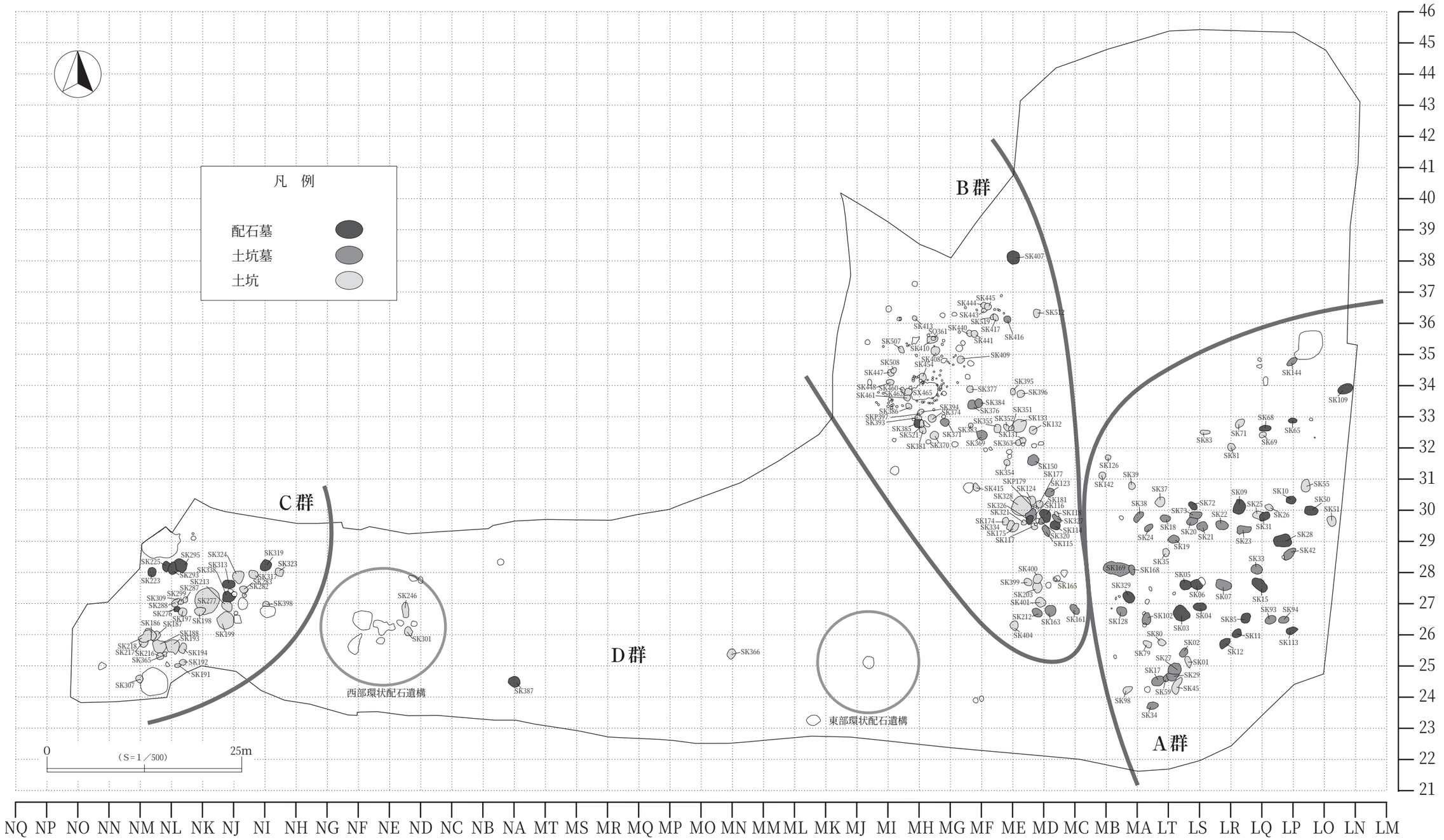
Ｂ群とＣ群の間、段丘礫層中に４基が点在する。このうちＳＫ387のみを配石墓と位置付けた。東西の環状配石遺構の間に個別の遺構はこの４基のほかに存在しない。段丘礫層中の自然礫の露出が激しいため、遺構の構築を忌避したものと思われる。

## （２）形　　態

全検出土坑類の平面形を概観すると、基本的には楕円形と円形に分けられる。さらに、細部の点で４つに分けられ、基本的には以下の分類とした。

①楕　円　形　　長軸と短軸に差があり、向かい合う辺が緩く弧を描くもの。長軸と短軸の比（以下長短比という）が１：1.5以上～2.2未満の範囲である。

②楕円形（ズ）　楕円形ではあるが、長軸と短軸にあまり大きな差がなく、ずんぐりとした形のもの。長短比が１：1.1以上～1.5未満のもの。




**第62図　土坑種別分類分布図**

③楕円形（長）　楕円形ではあるが、短軸に対する長軸の比が非常に大きいもの。長短比が１:2.2以上のもの。

④円　　形　長軸と短軸にほとんど差がなく、平面形が円形であるもの。長短比が１：1.1未満のもの。

※(隅　　丸)　向かい合う辺が各々平行で、方形に近い形で四隅が弧を描くもの。また、短辺がわずかに弧を描くものもこの類とし、上記４つの分類に補足した。

※不　　整　いびつで、平面形の特定が困難なものは比較的近い分類とし、不整という要素を付した。

（３）規　　模

完掘状態での各土坑類の規模は土坑観察表（第７～10表）に記した。この結果をまとめたものが第63図である。また、第64図はＡ群土坑類の規模を種類毎に示したものである。

各群の長軸短軸の平均値はＡ群が約157㎝×106㎝、Ｂ群が約112㎝×91㎝、Ｃ群が約134㎝×110㎝、Ｄ群が約136㎝×107㎝である。やはり「墓域」と性格づけたＡ群の土坑類は規模が大きく、また、Ａ群のなかでも配石墓・土坑墓としたものは規模が大きく、その規模も比較的まとまっているということがいえる。

（４）主軸方向

主軸方向については、第65図に全土坑類の主軸方向と各群での主軸方向を、第66図にはＡ群検出土坑類の種類別主軸方向をそれぞれ図示した。全体、各群での主軸方向をみてみると、規則性は看取されない。Ａ群は配石墓、土坑墓としたものが最も多く、遺跡内でも「墓域」と位置付けたまとまりであるが、そこについてみてみると、どの種類においてもやや方位的な偏りはあるとしても、それを規則性というには無理があるように感じられる。また、他の遺跡などでみられるような、ある一定の施設（例えば広場など）を向くなどといった規則性は全く看取されない。

このように、全体として規則性は看取されないが、たとえば、ＳＫ05・06、ＳＫ11・12などの隣接しあう同一種類の土坑類（これらは配石墓であるが）については、ほぼ主軸方向が同一方向をむいているといえる。

（５）赤色顔料の撒布、及び副葬品

検出土坑類全175基中、赤色顔料を検出したものはＳＫ04・17・42・59のわずか４基である。しかも、ＳＫ42は面的な広がりと厚さを確認できたが、他の３基は微量の赤色顔料粒をかろうじて確認できた程度である。可能性としては他の土坑類でも、こうした微量の赤色顔料が存在したことも考えられるが、いずれにせよ一般的にいわれている死者に塗る、もしくは掛けるといった行為を想定するには余りにも微量である。

いわゆる副葬品といえる遺物が出土した遺構は、ＳＫ06配石墓、ＳＫ17土坑墓、ＳＫ277土坑のわずか３基である。いずれも玉類の出土であるが、ＳＫ06、277はそれぞれ１個づつのみの出土である。ＳＫ277は、覆土中に礫が多数混入しており、配石墓として捉えることも可能であったかもしれない

## 第７表　土坑観察表①

| 遺構番号 | 検出グリッド | 所属群 | 分類 | 規模 | | | | 長軸方向 | 平面形 | 顔料・副葬品等 | 出土遺物 | | | 備考 | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | 高さ | | | | 土器 | 石器 | 剥片等 | | |
| ＳＫ01 | ＬＳ25 | Ａ群 | 土坑 | 150 | 70 | 18 | | N16°W | 不整楕円形(長) | | | | | | ８・９ |
| ＳＫ02 | ＬＳ25 | Ａ群 | 土坑(墓) | 127 | 86 | 44 | | N40°E | 楕円形(隅丸) | | | | | | ８・９ |
| ＳＫ03 | ＬＳ26 | Ａ群 | 配石墓 | 176 | (120) | 71 | 83 | N82°E | 不整楕円形 | | 8 | | | | ８・９ |
| ＳＫ04 | ＬＳ26・27<br>ＬＲ26・27 | Ａ群 | 配石墓 | 163 | 102 | 47 | 73 | N88°W | 楕円形 | 赤色顔料 | | | | | ８・９ |
| ＳＫ05 | ＬＳ27 | Ａ群 | 配石墓 | 150 | 140 | 48 | 59 | N87°E | 不整略円形 | | 3 | | 1 | ＳＫ06より新しい | ８・10 |
| ＳＫ06 | ＬＲ・ＬＳ27 | Ａ群 | 配石墓 | (175) | 128 | 58 | 78 | N86°E | 不整楕円形 | 小玉1点 | 9 | 1 | | ＳＫ05より古い | ８・10 |
| ＳＫ07 | ＬＱ・ＬＲ27 | Ａ群 | 土坑(墓) | 196 | 136 | 26 | | N70°W | 不整楕円形 | | 15 | | | | ８・10 |
| ＳＫ09 | ＬＱ29・30 | Ａ群 | 配石墓 | 176 | 150 | 71 | 89 | N55°E | 楕円形(ズ) | | | | | | ８・11 |
| ＳＫ10 | ＬＯ・ＬＰ30 | Ａ群 | 配石墓 | 128 | 95 | 49 | 79 | N87°W | 不整楕円形 | | | | | | ８・11 |
| ＳＫ11 | ＬＱ25・26 | Ａ群 | 配石墓 | 137 | 105 | 63 | 87 | N55°E | 楕円形 | | 6 | | | | ８・11 |
| ＳＫ12 | ＬＲ25 | Ａ群 | 配石墓 | 167 | 101 | 54 | 57 | N48°E | 不整楕円形(長) | | | | | | ８・11 |
| ＳＫ15 | ＬＰ・ＬＱ27 | Ａ群 | 配石墓 | 227 | 137 | 44 | 60 | N53°W | 楕円形(長) | | | | | | ８・12 |
| ＳＫ17 | ＬＴ25 | Ａ群 | 土坑墓 | 167 | 118 | 70 | | N62°E | 楕円形 | 赤色顔料・小玉13点 | 46 | 13 | 3 | | ８・12 |
| ＳＫ18 | ＬＳ・ＬＴ29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 136 | 88 | 24 | | N89°W | 不整楕円形 | | 3 | | | | ８・12 |
| ＳＫ19 | ＬＳ28・29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 143 | 101 | 51 | | N90°W | 不整楕円形 | | 8 | | | | ８・12 |
| ＳＫ20 | ＬＳ29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 156 | 108 | 38 | | N57°E | 楕円形 | | 7 | | | ＳＫ73より新しい | ８・13 |
| ＳＫ21 | ＬＲ29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 142 | 127 | 39 | 60 | N88°E | 楕円形(ズ) | | 1 | | | | ８・13 |
| ＳＫ22 | ＬＲ29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 137 | 115 | 38 | 64 | N77°W | 楕円形(ズ) | | 5 | | | | ８・13 |
| ＳＫ23 | ＬＲ28 | Ａ群 | 土坑(墓) | 174 | 110 | 55 | 78 | N82°E | 不整楕円形 | | 1 | | | | ８・13 |
| ＳＫ24 | ＬＴ29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 127 | 73 | 25 | | N44°E | 不整楕円形(長) | | 19 | 1 | 4 | | ８・14 |
| ＳＫ25 | ＬＱ29 | Ａ群 | 土坑 | (120) | (90) | 17 | | N76°E | 不整楕円形 | | 1 | | | ＳＫ31より古い | ８・13 |
| ＳＫ26 | ＬＰ30 | Ａ群 | 土坑 | 216 | 149 | 41 | | N67°W | 不整楕円形 | | 1 | | | | ８・14 |
| ＳＫ27 | ＬＳ24・25<br>ＬＴ24 | Ａ群 | 土坑(墓) | 171 | 130 | 45 | | N78°W | 不整楕円形 | | 10 | | | ＳＫ29より新しい | ８・14 |
| ＳＫ28 | ＬＰ28・29 | Ａ群 | 配石墓 | 227 | 167 | 59 | 82 | N73°E | 楕円形(隅丸) | | 8 | | | | ８・14 |
| ＳＫ29 | ＬＳ・ＬＴ24 | Ａ群 | 土坑(墓) | 134 | (110) | 55 | | N74°W | 不整楕円形(ズ) | | 28 | | | ＳＫ27より古い<br>ＳＫ59より新しい | ８・14 |
| ＳＫ31 | ＬＰ・ＬＱ29 | Ａ群 | 配石墓 | (150) | 98 | 46 | 71 | N77°E | 楕円形(隅丸) | | 1 | | | ＳＫ25より新しい | ８・13 |
| ＳＫ33 | ＬＱ27・28 | Ａ群 | 土坑(墓) | 144 | 133 | 38 | | N77°E | 略円形 | | | | | | ８・14 |
| ＳＫ34 | ＬＴ23 | Ａ群 | 土坑(墓) | 156 | 94 | 61 | | N81°E | 不整楕円形(長) | | 4 | | | | ８・15 |
| ＳＫ35 | ＬＳ・ＬＴ28 | Ａ群 | 土坑 | 109 | 82 | 28 | | Ｎ７°Ｗ | 楕円形 | | | | | | ８・15 |
| ＳＫ37 | ＬＴ30 | Ａ群 | 土坑 | 128 | 108 | 22 | | N42°W | 楕円形(ズ) | | | | | | ８・15 |
| ＳＫ38 | ＬＴ29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 168 | 88 | 24 | | N49°E | 楕円形(長) | | 11 | | | | ８・15 |
| ＳＫ39 | ＬＴ30 | Ａ群 | 土坑 | 98 | 86 | 22 | | Ｎ９°Ｗ | 楕円形(ズ) | | | | | | ８・15 |
| ＳＫ42 | ＬＯ・ＬＰ28 | Ａ群 | 土坑墓 | 204 | 110 | 48 | | N51°E | 楕円形(長) | 赤色顔料 | 4 | | | ＳＫＰ54との新旧関係不明 | ８・15 |
| ＳＫ45 | ＬＳ・ＬＴ24 | Ａ群 | 土坑 | (203) | 74 | 90 | | N38°E | 楕円形(長) | | 1 | 1 | | | ８・15 |
| ＳＫ50 | ＬＯ29・30 | Ａ群 | 配石墓 | 164 | 114 | 62 | 70 | N79°W | 楕円形 | | 4 | | | | ８・16 |
| ＳＫ51 | ＬＮ29 | Ａ群 | 土坑 | 148 | 108 | 20 | | N15°W | 不整楕円形 | | 8 | | | | ８・16 |
| ＳＫ55 | ＬＯ30 | Ａ群 | 土坑 | 148 | 104 | 23 | | Ｎ８°Ｗ | 楕円形 | | | | | | ８・16 |
| ＳＫ59 | ＬＴ24 | Ａ群 | 土坑(墓) | (96) | (68) | 25 | | Ｎ４°Ｗ | 不整楕円形 | 赤色顔料 | | | | ＳＫ29より古い | ８・16 |
| ＳＫ65 | ＬＯ・ＬＰ32 | Ａ群 | 配石墓 | 124 | 66 | 50 | 63 | N78°W | 楕円形(長) | | | | | | ８・16 |
| ＳＫ68 | ＬＰ・ＬＱ32 | Ａ群 | 配石墓 | 149 | 82 | 66 | 69 | N85°W | 不整楕円形(長) | | | | | | ８・16 |
| ＳＫ69 | ＬＰ・ＬＱ32 | Ａ群 | 土坑 | 97 | 69 | 39 | | N83°E | 不整楕円形 | | | | | | ８・16 |
| ＳＫ71 | ＬＱ32 | Ａ群 | 土坑 | 140 | 82 | 49 | | N60°E | 不整楕円形(長) | | 15 | | | | ８・17 |
| ＳＫ72 | ＬＳ30 | Ａ群 | 配石墓 | 125 | 86 | 60 | 71 | N54°W | 不整楕円形 | | | | | | ８・17 |
| ＳＫ73 | ＬＲ・ＬＳ29 | Ａ群 | 土坑(墓) | 159 | (95) | 33 | | N83°E | 不整楕円形(長) | | 2 | | | ＳＫ20より古い | ８・13 |
| ＳＫ79 | ＬＴ25 | Ａ群 | 土坑 | 122 | 74 | 93 | | N42°W | 不整楕円形 | | 40 | | | | ８・17 |
| ＳＫ80 | ＬＴ25 | Ａ群 | 土坑 | 100 | (65) | 48 | | N88°W | 不整楕円形 | | | | | | ８・17 |
| ＳＫ81 | ＬＲ32 | Ａ群 | 土坑 | 106 | 93 | 21 | | Ｎ６°Ｅ | 楕円形(ズ) | | | | | | ８・17 |
| ＳＫ83 | ＬＲ32 | Ａ群 | 土坑 | 128 | 56 | 33 | | N89°W | 不整楕円形(長) | | | | | | ８・17 |
| ＳＫ85 | ＬＱ26 | Ａ群 | 配石墓 | 126 | 112 | 23 | 47 | N26°E | 楕円形(隅丸・ズ) | | | | | | ８・17 |
| ＳＫ93 | ＬＰ26 | Ａ群 | 土坑(墓) | 144 | 102 | 24 | | N73°E | 楕円形 | | | | | | ８・18 |

## 第８表　土坑観察表②

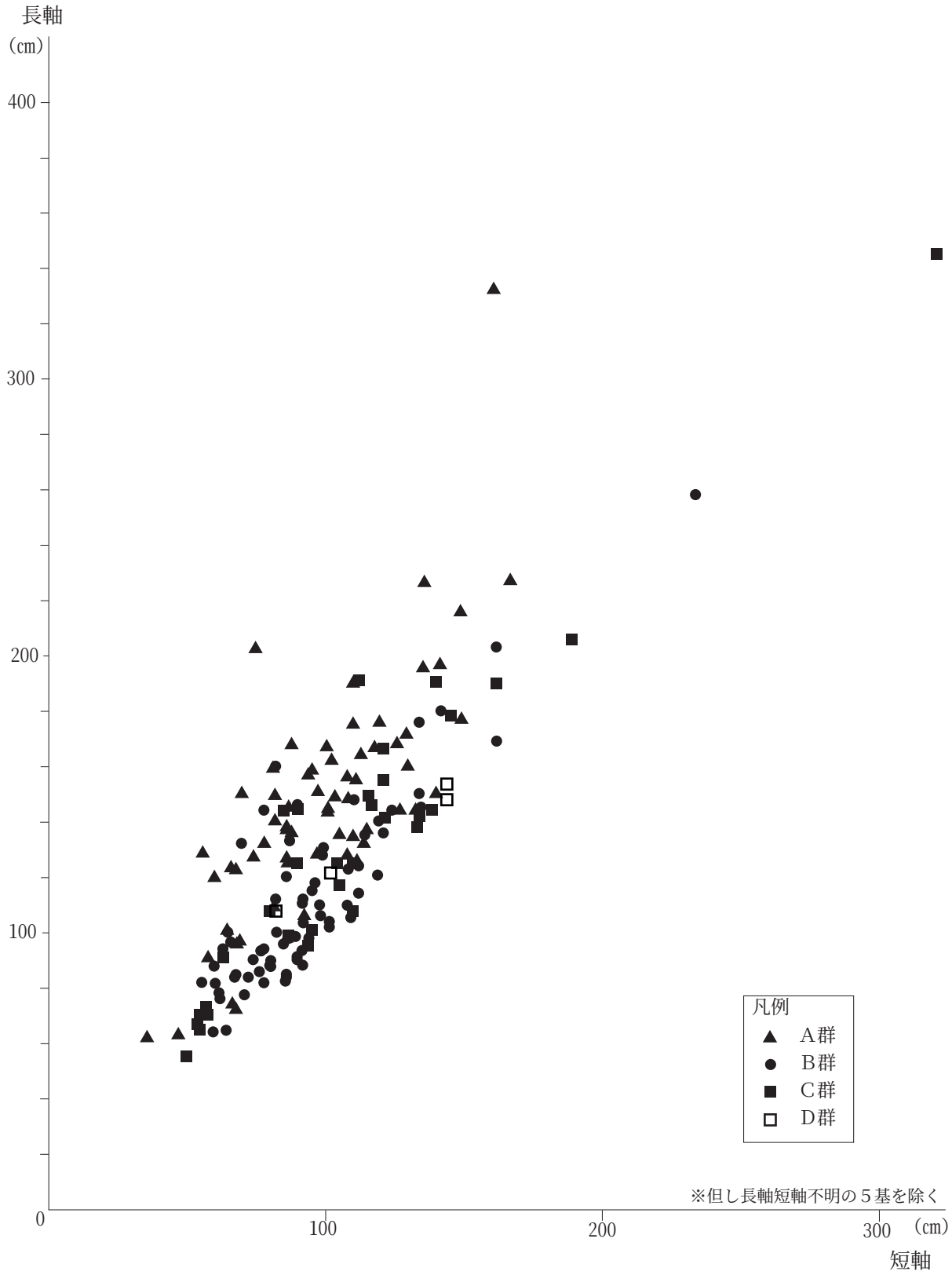
| 遺構番号 | 検出グリッド | 所属群 | 分類 | 規模 | | | | 長軸方向 | 平面形 | 顔料・副葬品等 | 出土遺物 | | | 備考 | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | 高さ | | | | 土器 | 石器 | 剥片等 | | |
| ＳＫ94 | ＬＰ26 | Ａ群 | 土坑(墓) | 137 | 86 | 34 | | Ｎ87°Ｅ | 楕円形 | | | | | | ８・18 |
| ＳＫ98 | ＭＡ24 | Ａ群 | 土坑 | 132 | 78 | 31 | | Ｎ55°Ｅ | 不整楕円形(長) | | 1 | | | | ８・18 |
| ＳＫ102 | ＬＴ26 | Ａ群 | 土坑(墓) | 155 | 111 | 26 | | Ｎ４°Ｅ | 不整楕円形 | | 10 | | 1 | ＳＫＰ87・88より古い | ８・18 |
| ＳＫ109 | ＬＮ34・35 | Ａ群 | 配石墓 | 196 | 142 | 52 | 80 | Ｎ15°Ｅ | 不整楕円形 | | 427 | | | | ８・18 |
| ＳＫ113 | ＬＰ26 | Ａ群 | 配石墓 | 138 | 86 | 38 | 46 | Ｎ85°Ｅ | 楕円形 | | | | | | ８・18 |
| ＳＫ114 | ＭＣ29 | Ｂ群 | 配石墓 | 126 | 110 | 40 | 56 | Ｎ78°Ｗ | 楕円形(ズ) | | 32 | 2 | 2 | ＳＫ327より古い | 19 |
| ＳＫ115 | ＭＣ・ＭＤ29 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 162 | 80 | 56 | 74 | Ｎ31°Ｗ | 楕円形(長) | | | | | | 19 |
| ＳＫ116 | ＭＣ・ＭＤ29<br>ＭＣ・ＭＤ30 | Ｂ群 | 配石墓 | 178 | 132 | 40 | 81 | Ｎ20°Ｗ | 楕円形 | | 92 | | 7 | ＳＫ320より古い | 19 |
| ＳＫ117 | ＭＤ29 | Ｂ群 | 土坑 | 93 | 88 | 21 | 31 | Ｎ26°Ｅ | 略円形 | | | | | ＳＫＰ331より古い | 19 |
| ＳＫ118 | ＭＣ29 | Ｂ群 | 土坑 | 68 | 39 | 8 | | Ｎ34°Ｗ | 楕円形(隅丸・長) | | | | | ＳＫ327より古い | 19 |
| ＳＫ123 | ＭＤ29 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 128 | 97 | 29 | | Ｎ39°Ｅ | 不整楕円形 | | 21 | | 1 | | 19 |
| ＳＫ124 | ＭＤ30 | Ｂ群 | 土坑 | 110 | (108) | 16 | | Ｎ40.5°Ｗ | 不整略円形 | | | | | ＳＫ328より新しい | 20 |
| ＳＫ126 | ＭＡ・ＭＢ31 | Ａ群 | 土坑 | 73 | 67 | 28 | | Ｎ87°Ｗ | 不整略円形 | | | | | | ８・19 |
| ＳＫ128 | ＭＡ26 | Ａ群 | 土坑(墓) | 132 | 114 | 22 | | Ｎ64.5°Ｗ | 楕円形(ズ) | | 51 | | 9 | | ８・19 |
| ＳＫ131 | ＭＤ32 | Ｂ群 | 土坑 | (90) | 78 | 14 | | Ｎ35°Ｅ | 楕円形(隅丸・ズ) | | 15 | | 5 | ＳＫ363より古い<br>ＳＫＰ364より新しい | 20・38 |
| ＳＫ132 | ＭＤ32 | Ｂ群 | 土坑 | 108 | 96 | 20 | | Ｎ４°Ｗ | 楕円形(ズ) | | 6 | | | | 19・38 |
| ＳＫ133 | ＭＤ32 | Ｂ群 | 土坑 | 205 | 160 | 65 | | Ｎ47°Ｅ | 楕円形(ズ) | | 13 | | 1 | ＳＫ351より古い | 20・38 |
| ＳＫ142 | ＭＢ31 | Ａ群 | 土坑 | 92 | 58 | 16 | | Ｎ59°Ｅ | 楕円形 | | | | | | ８・21 |
| ＳＫ144 | ＬＯ・ＬＰ34 | Ａ群 | 土坑(墓) | 158 | 81 | 40 | | Ｎ54°Ｅ | 不整楕円形(長) | | 1 | | | | ８・18 |
| ＳＫ150 | ＭＤ31 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 152 | 132 | 59 | | Ｎ49°Ｅ | 不整楕円形(ズ) | | | | | | 21・38 |
| ＳＫ161 | ＭＢ・ＭＣ26 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 146 | 90 | 28 | | Ｎ38°Ｗ | 楕円形(長) | | 24 | | 3 | | 21 |
| ＳＫ163 | ＭＣ26 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 144 | 134 | 74 | | Ｎ84°Ｅ | 不整略円形 | | 140 | 1 | 13 | | 21 |
| ＳＫ165 | ＭＣ27 | Ｂ群 | 土坑 | 83 | 58 | 13 | | Ｎ72.5°Ｅ | 楕円形 | | | | | | 21 |
| ＳＫ168 | ＭＡ27・28 | Ａ群 | 土坑(墓) | 145 | (87) | 32 | | Ｎ７°Ｗ | 楕円形(長) | | 41 | | 5 | ＳＫ169より古い | ８・21 |
| ＳＫ169 | ＭＡ27・28<br>ＭＢ28 | Ａ群 | 土坑(墓) | 332 | 161 | 63 | 70 | Ｎ81.5°Ｗ | 不整楕円形(長) | | 多数 | 7 | 523 | ＳＫ168より新しい | ８・21 |
| ＳＫ174 | ＭＥ29 | Ｂ群 | 土坑 | 114 | 90 | 28 | | Ｎ59°Ｅ | 不整楕円形(ズ) | | 12 | | 2 | ＳＫ334より新しい | 22 |
| ＳＫ175 | ＭＥ29 | Ｂ群 | 土坑 | 146 | (76) | 31 | 34 | Ｎ40°Ｅ | 楕円形(長) | | | | | ＳＫ334より古い | 22 |
| ＳＫ177 | ＭＤ30 | Ｂ群 | 土坑 | 98 | 83 | 30 | | Ｎ9.5°Ｅ | 楕円形(隅丸・ズ) | | | | | | 22 |
| ＳＫ181 | ＭＤ29・30 | Ｂ群 | 土坑(墓) | (180) | (142) | 24 | | Ｎ26.5°Ｅ | 不整楕円形(ズ) | | 52 | | 6 | ＳＫ326・328より古い | 20 |
| ＳＫ186 | ＮＬ25・26 | Ｃ群 | 土坑 | — | — | 18 | | — | 不整楕円形 | | 15 | | 4 | ＳＫ187・218より古い | 26 |
| ＳＫ187 | ＮＬ25・26 | Ｃ群 | 土坑 | 146 | (88) | 12 | | Ｎ45°Ｅ | 不整楕円形(隅丸・長) | | 9 | | 1 | ＳＫ186より新しい | 26 |
| ＳＫ188 | ＮＬ25 | Ｃ群 | 土坑 | (190) | (140) | 34 | | Ｎ29°Ｗ | 不整楕円形 | | 26 | | 4 | ＳＫ193との新旧関係不明<br>ＳＫ216より古い | 26 |
| ＳＫ191 | ＮＫ25・26 | Ｃ群 | 土坑 | (75) | 56 | 28 | | Ｎ75°Ｅ | 不整楕円形 | | 5 | | 1 | ＳＫ192との新旧関係不明 | 26 |
| ＳＫ192 | ＮＫ24・25 | Ｃ群 | 土坑 | (125) | (90) | 32 | | Ｎ81°Ｗ | 不整楕円形 | | 38 | | | ＳＫ191との新旧関係不明 | 26 |
| ＳＫ193 | ＮＫ・ＮＬ25 | Ｃ群 | 土坑 | (190) | 162 | 42 | | Ｎ45°Ｅ | 不整楕円形(ズ) | | 12 | | 1 | ＳＫ188との新旧関係不明 | 26 |
| ＳＫ194 | ＮＫ25 | Ｃ群 | 土坑 | 96 | 93 | 21 | | Ｎ22°Ｅ | 不整略円形 | | 2 | | | | 26 |
| ＳＫ197 | ＮＫ26 | Ｃ群 | 土坑 | 103 | 103 | 28 | 38 | Ｎ56°Ｗ | 不整略円形 | | | | | ＳＫ276より新しい | 27 |
| ＳＫ198 | ＮＪ・ＮＫ26 | Ｃ群 | 土坑 | (150) | (116) | 48 | 52 | Ｎ79°Ｅ | 不整楕円形(ズ) | | 2 | | 3 | ＳＫ277より新しい | 27 |
| ＳＫ199 | ＮＪ26 | Ｃ群 | 土坑 | 206 | 189 | 58 | | Ｎ41°Ｅ | 不整方形(隅丸) | | 79 | | 9 | | 27 |
| ＳＫ203 | ＭＤ27 | Ｂ群 | 土坑 | (142) | 117 | 20 | 26 | Ｎ12.5°Ｗ | 楕円形(隅丸・ズ) | | 7 | | | ＳＫ400より古い | 22 |
| ＳＫ212 | ＭＤ26 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 136 | 102 | 80 | | Ｎ68°Ｗ | 楕円形 | | 38 | | | | 22 |
| ＳＫ213 | ＮＪ26・27 | Ｃ群 | 土坑 | (143) | 134 | 42 | | Ｎ58°Ｗ | 不整方形(隅丸) | | 50 | | 6 | ＳＫ338より古い | 28 |
| ＳＫ216 | ＮＬ25 | Ｃ群 | 土坑 | 101 | 95 | 14 | | Ｎ10°Ｗ | 略円形 | | 7 | | | ＳＫ188・365より新しい | 28 |
| ＳＫ217 | ＮＬ25・26<br>ＮＭ25 | Ｃ群 | 土坑 | — | — | 27 | | — | — | | 18 | | | ＳＫ218との新旧関係不明 | 26 |
| ＳＫ218 | ＮＬ25・26<br>ＮＭ25 | Ｃ群 | 土坑 | (191) | (112) | 48 | | Ｎ34°Ｅ | 不整楕円形(長) | | 72 | | 3 | ＳＫ186より新しい<br>ＳＫ217との新旧関係不明 | 26 |
| ＳＫ223 | ＮＬ27・28 | Ｃ群 | 配石墓 | 125 | 104 | 41 | | Ｎ３°Ｗ | 楕円形(ズ) | | 9 | | | | 28 |
| ＳＫ225 | ＮＬ28 | Ｃ群 | 配石墓 | 125 | (110) | 38 | | Ｎ７°Ｅ | 不整楕円形 | | 24 | | 9 | ＳＫ293より新しい | 28 |

## 第９表　土坑観察表③

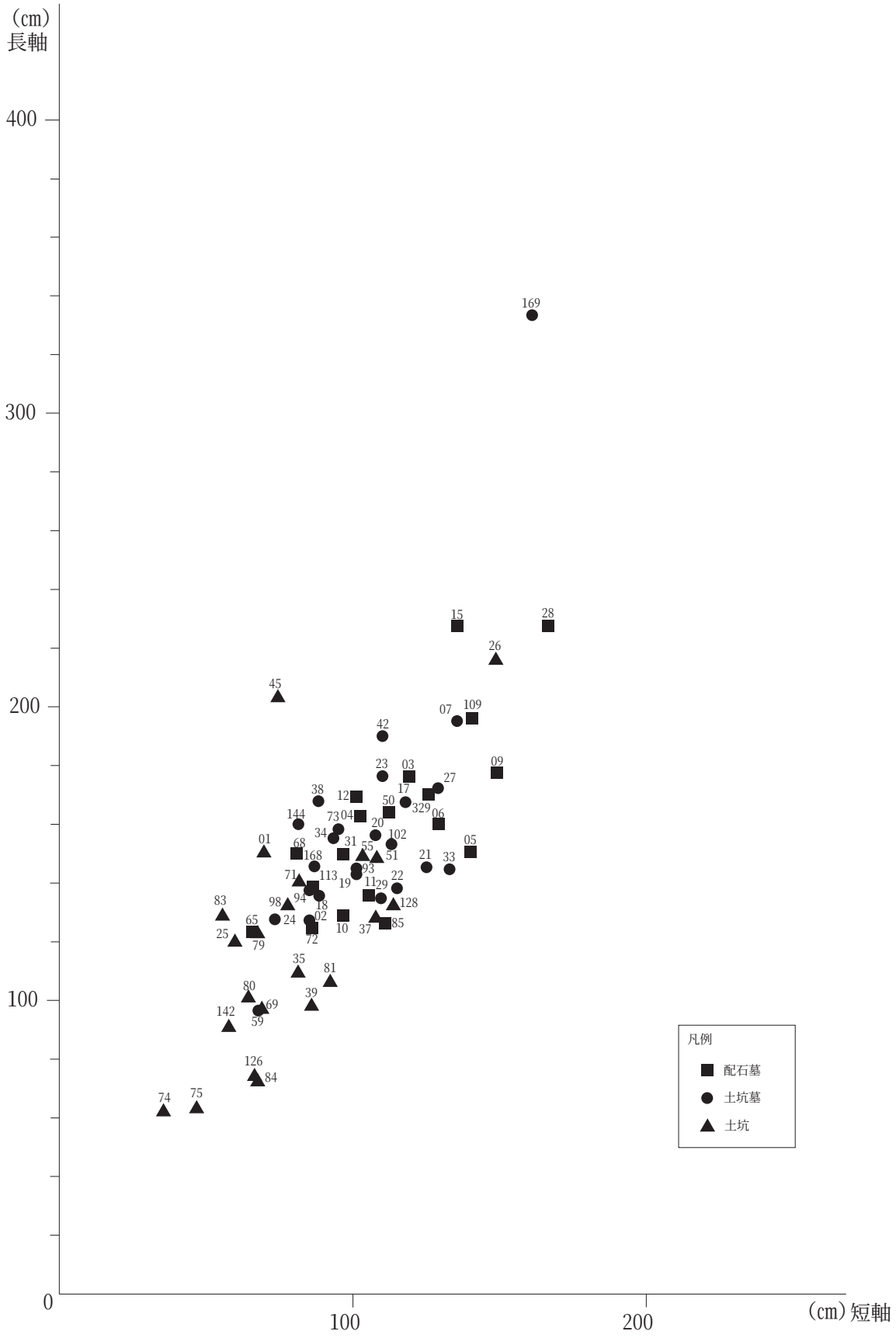
| 遺構番号 | 検出グリッド | 所属群 | 分類 | 規模 | | | | 長軸方向 | 平面形 | 顔料・副葬品等 | 出土遺物 | | | 備考 | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | 高さ | | | | 土器 | 石器 | 剥片等 | | |
| ＳＫ246 | ＮＤ26 | Ｄ群 | 土坑 | 161 | 102 | 33 | 43 | Ｎ４°Ｅ | 不整楕円形(長) | | | | | | 28 |
| ＳＫ276 | ＮＫ27 | Ｃ群 | 土坑 | (90) | 63 | 25 | 38 | N61°Ｗ | 不整楕円形 | | | | | ＳＫ197より古い<br>ＳＫ288より新しい | 27 |
| ＳＫ277 | ＮＪ26・27<br>ＮＫ26・27 | Ｃ群 | 土坑 | 345 | 319 | 52 | 56 | N60°Ｅ | 不整略円形 | 小玉１点 | 10 | | 2 | ＳＫ198より古い | 27 |
| ＳＫ282 | ＮＩ27 | Ｃ群 | 土坑 | 70 | 54 | 23 | | N21°Ｗ | 楕円形(ズ) | | 1 | | | | 29 |
| ＳＫ283 | ＮＩ27 | Ｃ群 | 土坑 | 107 | 79 | 26 | 40 | N85°Ｗ | 不整楕円形 | | 18 | | 1 | | 29 |
| ＳＫ287 | ＮＫ27 | Ｃ群 | 土坑 | 72 | 64 | 12 | | N28°Ｅ | 不整楕円形(隅丸・ズ) | | | | 1 | ＳＫ299より古い | 29 |
| ＳＫ288 | ＮＫ26・27 | Ｃ群 | 土坑 | (144) | 85 | 20 | | N18°Ｗ | 不整楕円形(長) | | 1 | | | ＳＫ276・309より古い | 27 |
| ＳＫ293 | ＮＫ27・28<br>ＮＬ27・28 | Ｃ群 | 配石墓 | (155) | (120) | 37 | | N32°Ｅ | 楕円形(隅丸・ズ) | | 19 | | 2 | ＳＫ225・295より古い | 28 |
| ＳＫ295 | ＮＫ27・28 | Ｃ群 | 配石墓 | 179 | 146 | 49 | 56 | N37°Ｗ | 楕円形(隅丸・ズ) | | 9 | | 1 | ＳＫ293より新しい | 28 |
| ＳＫ299 | ＮＫ26・27 | Ｃ群 | 土坑 | 70 | (60) | 24 | | N29°Ｗ | 不整楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ287・309より新しい | 27 |
| ＳＫ301 | ＮＤ25・26 | Ｄ群 | 土坑 | 108 | 82 | 55 | | N36°Ｗ | 楕円形 | | | | | | 29 |
| ＳＫ307 | ＮＬ・NM24 | Ｃ群 | 土坑 | 99 | 87 | 31 | | N17°Ｗ | 不整楕円形(ズ) | | 3 | | | ＳＩ190より新しい | 29 |
| ＳＫ309 | ＮＫ27 | Ｃ群 | 土坑 | (55) | (50) | 26 | | N14°Ｅ | 不整略円形 | | | | | ＳＫ288より新しい<br>ＳＫ299より古い | 27 |
| ＳＫ313 | ＮＩ・ＮＪ27 | Ｃ群 | 配石墓 | 166 | 121 | 43 | 43 | N88°Ｗ | 不整楕円形 | | 20 | | 4 | | 29 |
| ＳＫ317 | ＮＩ27・28 | Ｃ群 | 土坑 | 119 | 102 | 24 | | N61°Ｗ | 楕円形(ズ) | | | | | | 29 |
| ＳＫ319 | ＮＨ・ＮＩ28 | Ｃ群 | 配石墓 | 153 | 119 | 34 | | N13°Ｅ | 楕円形(ズ) | | 6 | | | | 29 |
| ＳＫ320 | ＭＣ・ＭＤ29 | Ｂ群 | 土坑 | 86 | 66 | 37 | | N37°Ｅ | 不整楕円形 | | | | | ＳＫ116・ＳＫＰ119より新しい | 19 |
| ＳＫ321 | ＭＤ29 | Ｂ群 | 土坑 | 86 | 84 | 13 | | N58°Ｅ | 不整方形 | | 7 | | | | 20 |
| ＳＫ323 | ＮＨ27・28 | Ｃ群 | 土坑 | 148 | 115 | 30 | | N42°Ｗ | 不整楕円形(ズ) | | 4 | | 2 | | 29 |
| ＳＫ324 | ＮＩ27・28<br>ＮＪ27・28 | Ｃ群 | 土坑 | 144 | 138 | 37 | | N28°Ｅ | 不整方形 | | 12 | | | | 29 |
| ＳＫ326 | ＭＤ29 | Ｂ群 | 配石墓 | (115) | (95) | 32 | | Ｎ１°Ｗ | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ181より新しい | 20 |
| ＳＫ327 | ＭＣ29 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 134 | 68 | 26 | | N55.5°Ｗ | 楕円形(隅丸・長) | | | | | ＳＫ114より古い<br>ＳＫ118より新しい | 19 |
| ＳＫ328 | ＭＤ29・30 | Ｂ群 | 土坑 | 260 | (232) | 41 | | N22°Ｅ | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ124より古い<br>ＳＫ181より新しい | 20 |
| ＳＫ329 | ＭＡ27 | Ａ群 | 配石墓 | 168 | (126) | 30 | | N21.5°Ｗ | 不整楕円形 | | 224 | | 17 | | ８・22 |
| ＳＫ334 | ＭＥ29 | Ｂ群 | 土坑 | 122 | (84) | 18 | 27 | N41.5°Ｅ | 不整楕円形 | | 4 | | | ＳＫ174より古い<br>ＳＫ175より新しい | 22 |
| ＳＫ338 | ＮＪ27 | Ｃ群 | 配石墓 | 138 | 133 | 42 | 49 | N35°Ｅ | 不整略円形 | | 41 | | 1 | ＳＫ213より新しい | 28 |
| ＳＫ351 | ＭＤ・ＭＥ32 | Ｂ群 | 土坑 | (90) | 60 | 15 | | N63.5°Ｅ | 不整楕円形 | | | | | ＳＫ133より新しい<br>ＳＫ352より古い | 20・38 |
| ＳＫ352 | ＭＥ32 | Ｂ群 | 土坑 | 99 | 64 | 23 | | N40.5°Ｗ | 楕円形 | | | | | ＳＫ351より新しい | 20・38 |
| ＳＫ354 | ＭＥ31 | Ｂ群 | 土坑 | 85 | 83 | 32 | | N52°Ｗ | 略円形 | | | | | | 22・38 |
| ＳＫ355 | ＭＥ32 | Ｂ群 | 土坑 | 102 | 80 | 21 | | N4.5°Ｗ | 不整楕円形(ズ) | | | | | | 22・38 |
| ＳＫ363 | ＭＤ32 | Ｂ群 | 土坑 | (85) | 68 | 18 | | N53.5°Ｅ | 楕円形(ズ) | | 14 | | | ＳＫ131より新しい | 20・38 |
| ＳＫ365 | ＮＬ25 | Ｃ群 | 土坑 | 73 | (55) | 19 | | N34°Ｅ | 不整略円形 | | | | | ＳＫ188との新旧関係不明<br>ＳＫ216より古い | 26 |
| ＳＫ366 | ＭＭ・ＭＮ25 | Ｄ群 | 土坑 | 123 | 102 | 25 | | N41°Ｅ | 不整楕円形(隅丸・ズ) | | | | | | 30 |
| ＳＫ369 | ＭＥ・ＭＦ32 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 146 | 123 | 37 | | N68.5W | 楕円形(ズ) | | | | | | 22・38 |
| ＳＫ370 | ＭＧ32 | Ｂ群 | 土坑 | 103 | 99 | 33 | | N73°Ｗ | 不整略円形 | | | | | | 22・38 |
| ＳＫ371 | ＭＧ32 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 112 | 96 | 45 | | N72°Ｗ | 楕円形(ズ) | | | 1 | | | 23・38 |
| ＳＫ374 | ＭＧ32・33 | Ｂ群 | 土坑 | 100 | 92 | 30 | | N72.5°Ｗ | 略円形 | | | | | ＳＱ373との新旧関係不明 | 23・38 |
| ＳＫ376 | ＭＦ33 | Ｂ群 | 土坑(墓) | (135) | 114 | 33 | | N75°Ｗ | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ384より新しい | 23・38 |
| ＳＫ377 | ＭＦ33 | Ｂ群 | 土坑 | 90 | 78 | 16 | | N44°Ｅ | 楕円形(ズ) | | | | | | 23・38 |
| ＳＫ381 | ＭＧ・ＭＨ32 | Ｂ群 | 土坑 | 114 | 80 | 24 | 29 | N17.5°Ｗ | 楕円形 | | | | | ＳＫ385より新しい<br>ＳＫ521との新旧関係不明 | 23・38 |
| ＳＫ383 | ＭＦ32 | Ｂ群 | 土坑 | 66 | 58 | 17 | | N43°Ｗ | 不整楕円形(ズ) | | | | | | 23・38 |

## 第10表　土坑観察表④

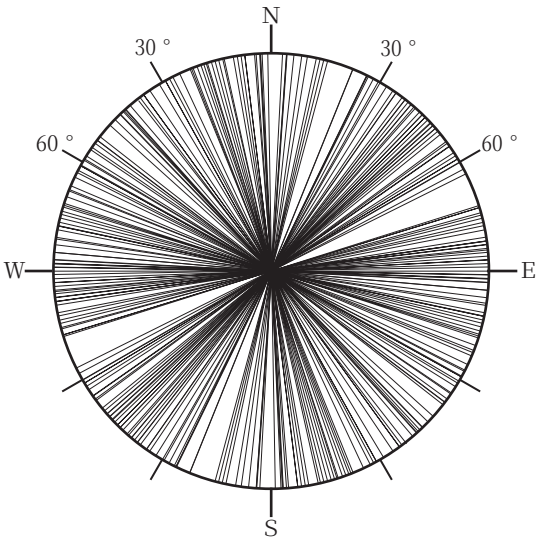
| 遺構番号 | 検出グリッド | 所属群 | 分類 | 規模 | | | | 長軸方向 | 平面形 | 顔料・副葬品等 | 出土遺物 | | | 備考 | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | 高さ | | | | 土器 | 石器 | 剥片等 | | |
| ＳＫ384 | ＭＥ・ＭＦ33 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 116 | (110) | 41 | | N13°W | 略円形 | | 35 | | 4 | ＳＫ376より古い | 23・38 |
| ＳＫ385 | ＭＧ・ＭＨ32 | Ｂ群 | 土坑(墓) | (130) | (96) | 43 | | N43°W | 不整楕円形 | | | | | ＳＫ381・393より古い<br>ＳＫ521との新旧関係不明 | 23・38 |
| ＳＫ386 | ＭＨ33 | Ｂ群 | 土坑 | 86 | 70 | 17 | | N61°W | 楕円形(ズ) | | 2 | | | | 23・38 |
| ＳＫ387 | ＭＴ・ＮＡ24 | Ｄ群 | 配石墓 | 154 | 144 | 39 | | N83°W | 不整略円形 | | 30 | | | | 30 |
| ＳＫ393 | ＭＧ・ＭＨ32 | Ｂ群 | 土坑 | 92 | (78) | 26 | | N59.5°W | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ392より新しい<br>ＳＫ521との新旧関係不明 | 23・38 |
| ＳＫ394 | ＭＧ・ＭＨ33 | Ｂ群 | 土坑 | 102 | 63 | 29 | | N50°E | 楕円形 | | | | | ＳＫＰ397より新しい | 23・38 |
| ＳＫ395 | ＭＤ・ＭＥ33 | Ｂ群 | 土坑 | 80 | 69 | 10 | 43 | N2.5°W | 楕円形(ズ) | | 5 | | | | 23・38 |
| ＳＫ396 | ＭＤ33 | Ｂ群 | 土坑 | 92 | 88 | 24 | 63 | N74.5°E | 不整略円形 | | 27 | 1 | 2 | | 23・38 |
| ＳＫ398 | ＮＨ26・27<br>ＮＩ26・27 | Ｃ群 | 土坑 | (96) | (96) | 14 | | N63°W | 不整略円形 | | | | | ＳＫ286との新旧関係不明 | 30 |
| ＳＫ399 | ＭＤ27 | Ｂ群 | 土坑 | 105 | 92 | 36 | 39 | N42.5°W | 楕円形(ズ) | | 2 | | | | 23 |
| ＳＫ400 | ＭＤ27 | Ｂ群 | 土坑 | 148 | 110 | 31 | 45 | Ｎ３°Ｅ | 不整楕円形 | | 14 | | | ＳＫ203より新しい | 22 |
| ＳＫ401 | ＭＣ26・27<br>ＭＤ26・27 | Ｂ群 | 土坑 | 136 | 121 | 35 | | N59°W | 楕円形(隅丸・ズ) | | 37 | | | | 23 |
| ＳＫ404 | ＭＤ・ＭＥ26 | Ｂ群 | 土坑 | 123 | (108) | 31 | | N29.5°E | 楕円形(ズ) | | 35 | | 4 | | 24 |
| ＳＫ407 | ＭＤ37・38<br>ＭＥ37・38 | Ｂ群 | 配石墓 | 169 | 162 | 50 | | N80°E | 不整方形(隅丸) | | 151 | 4 | 11 | | 24・38 |
| ＳＫ408 | ＭＧ34・35 | Ｂ群 | 土坑 | 109 | 107 | 35 | | N28°E | 不整略円形 | | 7 | | | | 24・38 |
| ＳＫ409 | ＭＦ34 | Ｂ群 | 土坑 | 92 | 91 | 10 | | N25°E | 不整略円形 | | | | | | 24・38 |
| ＳＫ410 | ＭＧ35 | Ｂ群 | 土坑 | 133 | 89 | 17 | | N48°E | 不整楕円形 | | | | | | 24・38 |
| ＳＫ413 | ＭＨ36 | Ｂ群 | 土坑 | 65 | 64 | 12 | | N78°E | 不整略円形 | | 2 | | | | 24・38 |
| ＳＫ415 | ＭＦ30 | Ｂ群 | 土坑 | 96 | 77 | 22 | | N48°W | 不整楕円形(隅丸・ズ) | | | | | | 24 |
| ＳＫ416 | ＭＥ36 | Ｂ群 | 土坑 | 90 | 90 | 24 | 31 | N46°E | 略円形 | | 8 | | 1 | | 24・38 |
| ＳＫ417 | ＭＥ36 | Ｂ群 | 土坑 | (92) | 72 | 28 | 37 | N46°W | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ519より古い | 24・38 |
| ＳＫ440 | ＭＦ35 | Ｂ群 | 土坑 | (84) | 78 | 7 | | N43°W | 略円形 | | | | | ＳＫ441より古い | 24・38 |
| ＳＫ441 | ＭＦ35 | Ｂ群 | 土坑 | 87 | 84 | 9 | | Ｎ３°Ｗ | 略円形 | | 12 | | | ＳＫ440より新しい | 24・38 |
| ＳＫ443 | ＭＥ・ＭＦ36 | Ｂ群 | 土坑 | (95) | (75) | 13 | | N30°E | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ445はＳＫ443・444より新しく、ＳＫ443・444の新旧関係不明 | 25・38 |
| ＳＫ444 | ＭＥ・ＭＦ36 | Ｂ群 | 土坑 | (80) | (60) | 15 | | N84.5°E | 楕円形 | | | | | | 25・38 |
| ＳＫ445 | ＭＥ36 | Ｂ群 | 土坑 | (95) | (75) | 13 | | N76°W | 楕円形(隅丸・ズ) | | | | | | 25・38 |
| ＳＫ447 | ＭＨ・ＭＩ34 | Ｂ群 | 土坑 | 86 | (76) | 12 | | N27°W | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ508より新しい | 25・38 |
| ＳＫ448 | ＭＨ・ＭＩ34 | Ｂ群 | 土坑 | 98 | 89 | 25 | | N89°E | 不整楕円形(ズ) | | | | | | 25・38 |
| ＳＫ454 | ＭＧ・ＭＨ34 | Ｂ群 | 土坑 | 106 | 99 | 30 | | N44°W | 略円形 | | 17 | | | ＳＫＰ509より古い<br>ＳＫＰ510との新旧関係不明 | 25・38 |
| ＳＫ460 | ＭＨ33 | Ｂ群 | 土坑 | (82) | 54 | 24 | | N32°W | 不整楕円形 | | | | 2 | ＳＫ461より古い | 25・38 |
| ＳＫ461 | ＭＨ33 | Ｂ群 | 土坑 | (98) | 86 | 41 | | N18°W | 不整楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ462より新しい | 25・38 |
| ＳＫ462 | ＭＨ33 | Ｂ群 | 土坑 | 118 | (96) | 44 | | N47°E | 不整楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ460との新旧関係不明<br>ＳＫ461より古い<br>ＳＫＰ518より古い | 25・38 |
| ＳＫ507 | ＭＨ35 | Ｂ群 | 土坑 | 96 | 61 | 6 | | N31°W | 不整楕円形(隅丸) | | | | | | 25・38 |
| ＳＫ508 | ＭＨ34 | Ｂ群 | 土坑 | (78) | 61 | 22 | | N43°E | 楕円形(ズ) | | | | | ＳＫ447より古い | 25・38 |
| ＳＫ512 | ＭＤ36 | Ｂ群 | 土坑(墓) | 113 | 89 | 20 | | Ｎ８°Ｅ | 不整楕円形(隅丸・ズ) | | 45 | 3 | 22 | | 25・38 |
| ＳＫ519 | ＭＥ36 | Ｂ群 | 土坑 | — | — | 36 | | — | — | | | | | ＳＫ417より新しい | 24・38 |
| ＳＫ521 | ＭＧ・ＭＨ32 | Ｂ群 | 土坑(墓) | — | — | — | | — | — | | | | | ＳＫ381・ＳＫ385・ＳＫ393との新旧関係不明 | 23・38 |


長軸
(cm)
400
300
200
100
0
100
200
300
(cm)
短軸
凡例
A群
B群
C群
D群
※但し長軸短軸不明の５基を除く

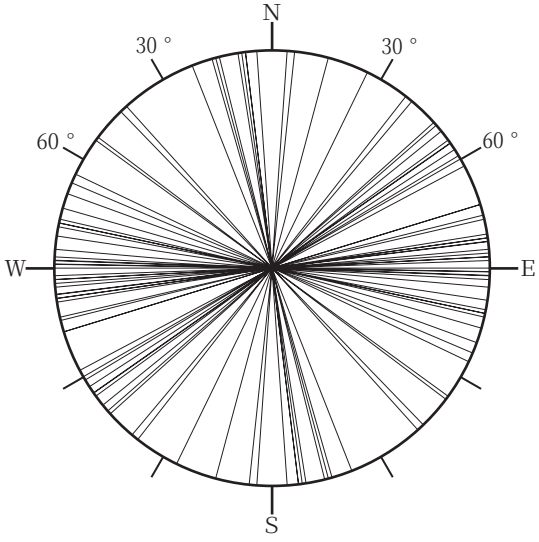
**第63図　土坑の規模**



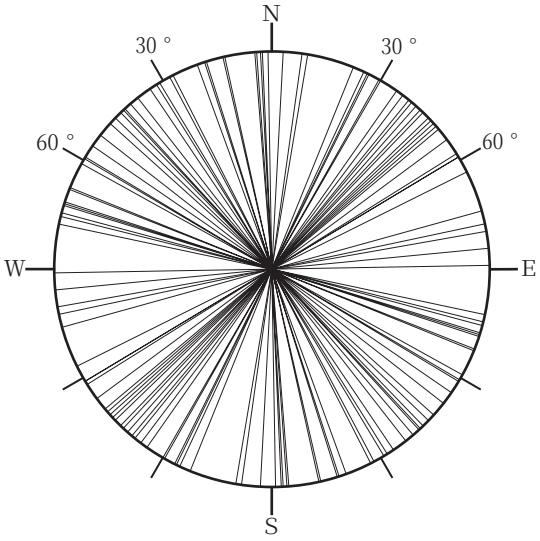

**第64図　A群土坑類の規模**



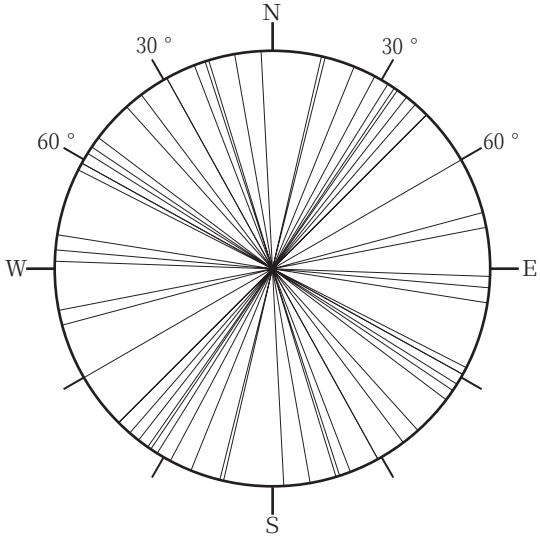

〈全検出土坑類〉



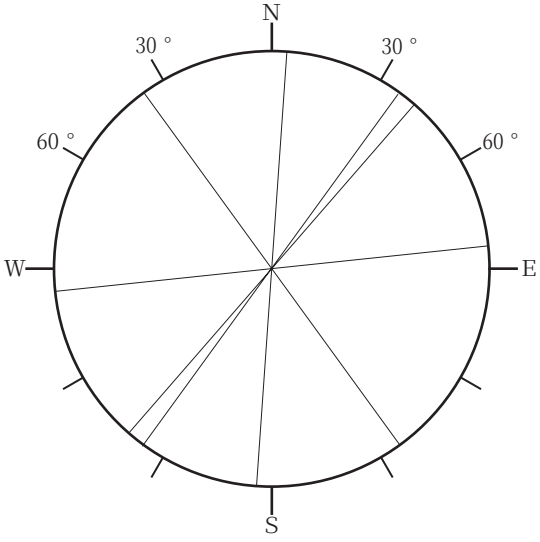

〈A群（墓域）〉




〈B群（北部配石遺構群）〉

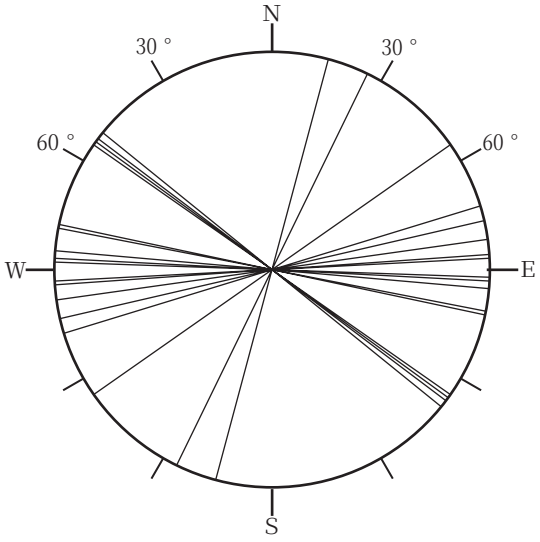



〈C群（西部土坑群）〉

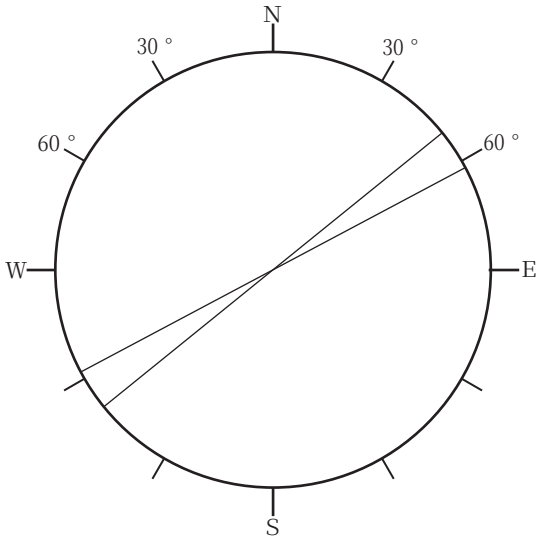



〈D群（その他）〉

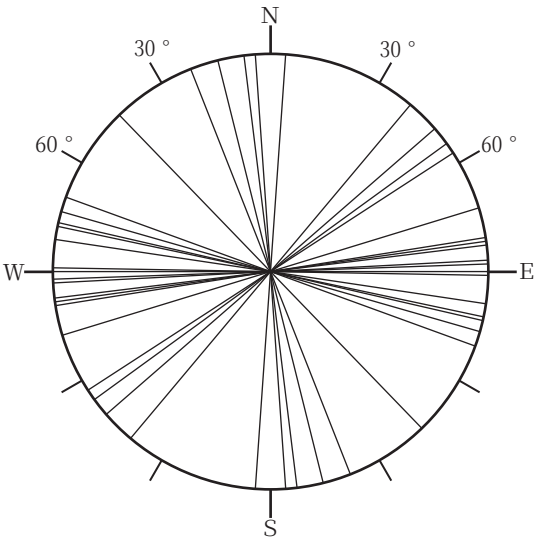
**第65図　土坑類全部と各群別での長軸方向**



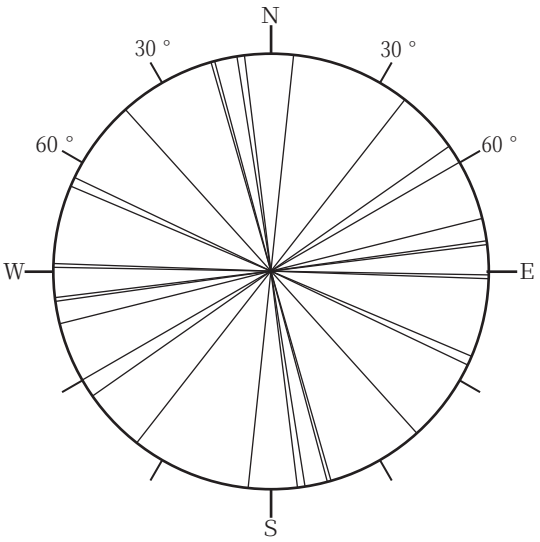
〈配石墓〉



〈土坑墓〉



〈土坑(墓)〉



〈土坑〉

**第66図　A群検出土坑類長軸方向**

が、あまりに規模が大きいために土坑として扱った。ＳＫ06は向様田Ａ遺跡において検出される配石墓の典型例である。ヒスイ製の玉が１点床面直上から出土した。ＳＫ17は向様田Ａ遺跡において検出された土坑類のなかで、最も墓らしい墓である。13点の小玉が出土し、うち７点は数珠繋ぎの状態で出土している。また、同遺構からは赤色顔料も検出されているが、この分布は小玉の出土位置とほぼ一致する。

当遺跡では以上のように、墓として断定できる確実な要素をもつ土坑が非常に少ない。言いかえれば、こうした赤色顔料や副葬品の少なさが特徴であるといえる。

（６）配石墓について

当遺跡からは全部で32基の配石墓が検出された。一般的な「配石墓」と異なり、その配置に規則性が看取されることは少なく、また、多様なあり方を成している。そうした中で、わずかではあるが特徴をまとめてみたい。

１．伴出する礫は大きさ・形・石質ともに多種多様であり、特別な礫の選別などはみられない。

２．礫は覆土中位から上位に顕著にみられ、断面で観察するとレンズ状に堆積している。

３．全部ではないが、上部中央若しくは一端に、比較的大きな礫が配されることが多い。

以上のことが特徴としてあげられる。このことから、遺体を埋葬した後に埋め戻しと同時に礫をかぶせ、最後に要となるような大きな礫を配するという行為を想定できる。

## ２　配石遺構群

全部で36基検出した配石遺構であるが、そのほとんどは東部環状配石遺構の北部に集中している。この区域の配石遺構群であるが、その検出面が地山からかなり高い黒褐色土中であり、また、その周辺には不規則に礫が点在していたため、その性格付けが非常に困難であった。この一画では25基の配石遺構を検出しており、その中には焼土を伴うもの、埋設土器を伴うものもあった。このことから、住居に伴う石囲炉の可能性も想定して慎重に調査を行ったが、住居に伴うその他の要素（平面プラン・柱穴・床面等）が検出されなかったことから、炉としての用途が想定できるものがあるにせよ、それは住居の炉として用いられたものではないということは言える。また、前述の不規則に点在する礫の中には磨石や石皿がみられ、一見乱雑に見えるこの一帯の礫の在り方にも、何らかの意味があったのかもしれない。また、この一帯の礫のレベルを比較すると、かなりの高低差がある。しかも、ＳＱ418とＳＱ420の関係にみられるように、配石遺構が重なって構築されていることからも、この一帯の配石遺構の構築時期も、一定の幅を持って断続的に構築されていったものと推測できる。配石遺構の多くは円形もしくは方形に組まれているが、礫に被熱痕が認められるものはごく少数であった。またＳＱ361とＳＫ410や、ＳＱ406とＳＫ507のように、配石遺構下に土坑を確認したものもある。これらは黒褐色土中での検出だったため、関係を明らかにし、配石墓と断定することはできなかったが、土坑の上面に石を組んだ可能性があることは否めない。しかしながら、前述の通りＳＱ418とＳＱ420は配石墓による作りかえによって生じる破壊が認められないため、周囲一帯の配石下に土坑が伴っていたとは考えにくい。以上のことから、北部配石遺構群は屋外の祭祀施設という含みを持たせながら、

大部分については用途不明であると言わざるを得ない。

また、ＳＱ47・48はそれぞれ、方形に組まれた礫の中心に焼土が確認されたものと、敷石状に礫が配されたものであり、互いに炉としての用途を想定できるものである。この２つの配石遺構の検出位置を見てみると、南西部捨て場で検出された礫群の一画に形成されたものである。この礫群は捨て場の遺物と同時に配されたものと考えられる。また、この礫群のなかには石皿、磨石、凹石などの石器類が多数混入しており、そういった意味では、この両配石遺構は大きな配石遺構の一部であったということが言えるかもしれない。

## ３　環状配石遺構

東部環状配石遺構は墓域の南西に形成される。直径約13m、幅約２～2.5m、高さ約40㎝の規模で環状に礫を積み上げ、その中心部に直径1.5m程の円形の配石を置く。さらにその北側には長さ20m、幅６m、高さ60㎝程の規模で礫が積み上げられる。これらの配石遺構は元来段丘礫層中の自然礫の露出が激しく、人為的部分と自然部分とに明瞭な差異は認められない。しかしながら中心部配石の周囲には礫が少なく、環状の石積部の北側に礫が抜ける箇所があることから判断すると、その部分に元々あった自然礫を利用して周囲に積石を繰り返し、これらの配石遺構を構築したことが想定できる。こうした大規模な配石遺構は、墓域や捨て場に伴う祭祀遺構としての性格が推測される。

西部環状配石遺構は土坑群Ｃ群の東側に形成される。東部環状配石遺構より約60m西に位置する。中心部敷石は扁平な礫を用い、長軸3.9m、短軸1.9mの不整形をなす。その周囲には若干礫の希薄な部分が巡り、さらにその周囲に小礫が巡る傾向にある。これは東部環状配石遺構に比べて範囲は不明瞭であるが、直径約16mの範囲で環状になっている。敷石部の周辺には長径80～250㎝、深さ70～155㎝の掘り込みが７基ある。中でもＳＫＰ340・341、ＳＸ347はその規模形状から柱状構造物があったと想定できよう。これらの柱穴は、同時に存在したのか時期差を有するのかは定かでないが、祭祀の中心地としての敷石状祭壇にトーテムポール状の柱を附属させ、よりシンボリックにした可能性がある。近接する土坑群Ｃ群に墓域の性格付けを与えることができれば、西部環状配石遺構も葬送儀礼的祭祀場とも考えられる。

なお東西両環状配石遺構共に補足調査が決定しており、平面図作成後は現地にて保存している。そのため両遺構とも下部施設の存在については未調査であり、今後の調査によって遺構のありかたがより明らかになるはずである。既述の東西環状配石遺構に関する考察は、平成13年度調査終了段階での解釈である。

## ４　捨　て　場

遺跡内で２箇所の「捨て場」が検出された。便宜上「北東部捨て場」と「南東部捨て場」と呼称する。北東部捨て場は墓域の北側に位置し、広さは320㎡に及ぶ。出土遺物は完形の精製土器が多く、朱塗り・漆塗りの土器や祭祀用の遺物が多く見られた。ＳＮ99の他、部分的に焼土や多くの炭化物が認められるため、この場所で焚き火を伴う祭祀行為が行われたと推測できる。

南東部捨て場は墓域の西側に位置し、広さは230㎡である。ＳＫ128やＳＫ169といった土坑10基程度の直上に形成される。北東部捨て場同様、多種多量の遺物が出土しているほか、ＳＱ47・48配石遺構や無数の礫群を確認している。この中には石皿・磨石・凹石・赤色顔料の付着した石などがあり、長さ30㎝程の石棒も出土した。ここでは主として礫群の形成と、多量の遺物を捨てると共に祭祀行為が行われたと推測する。

これら「捨て場」からは遺物整理用中コンテナ（容量約37リットル）で700箱以上もの遺物が出土している。（第67図）縄文時代晩期前半の縄文土器、石器を中心に、祭祀遺物の出土も多い。捨て場から出土した遺物は現在整理作業中であり、明言は避けたいが、土器では精製土器の割合が高いように思われる。祭祀遺物では岩偶、大小様々な中空・中実土偶、石棒、石剣、石刀、岩版、土版、土製装飾品、玉類などバラエティーに富んでいる。

「捨て場」の土器・土の堆積状況から判断すれば、晩期前半の時期に一定の地点を定め、継続的に「捨てる」という行為が行われたと判断する。また、「捨て場」の土には多量の炭化物、部分的には焼土粒が混入しており、火を使用した祭祀が行われていたことも推測される。

## ５　結　　語

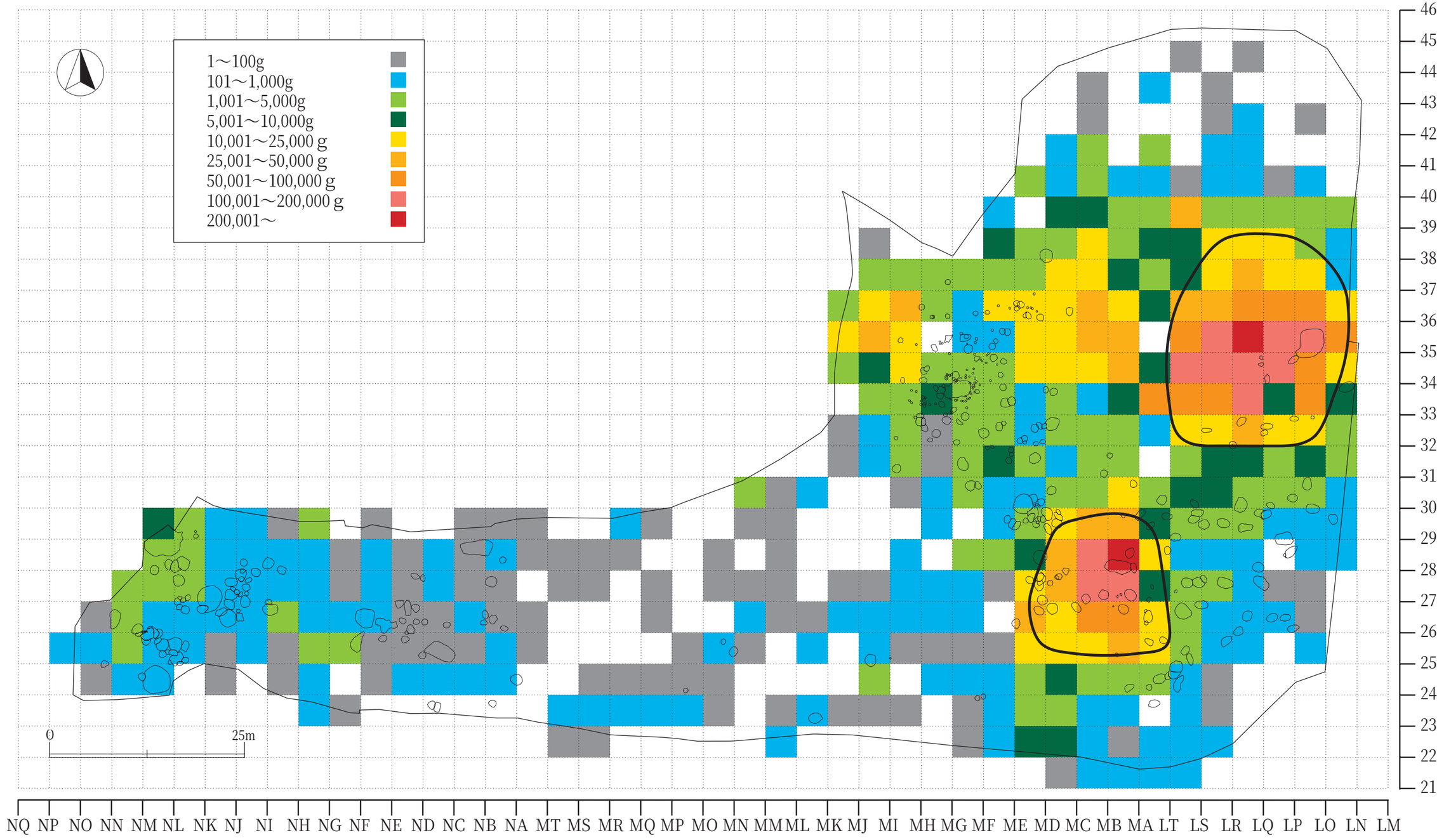
向様田Ａ遺跡は、東西２箇所に大規模な環状配石遺構、土坑墓・配石墓からなる「墓域」、小規模な配石遺構が密集する区域、２箇所の「捨て場」が形成されており、縄文時代晩期前半の祭祀遺跡であると言える。

今回、発掘調査において検出された遺構について述べてきたが、その中心的な施設である環状配石遺構については今後の補足調査の結果が待たれる。

今回十分な分析を行ったとは言えず、また、他にも分析すべきである事柄も多い。さらには出土遺物の大半が現在整理作業中であり、遺構からのアプローチしかできなかったということもある。同時期の周辺遺跡との比較を行うことも必要であろう。以上のことは今後の課題である。

また、本遺跡の周辺には向様田Ｂ遺跡・向様田Ｃ遺跡・向様田Ｄ遺跡・向様田Ｅ遺跡・向様田Ｆ遺跡が隣接し、特に向様田Ｂ遺跡・向様田Ｄ遺跡は、向様田Ａ遺跡と同一段丘面上に立地し、連続した一連の遺跡であると捉えることが可能である。向様田Ａ遺跡の西に隣接する向様田Ｄ遺跡では、向様田Ａ遺跡の西部環状配石遺構の北西に、小又川に向かって開く小さな谷を挟んで、大規模な「盛土」遺構が形成されている。これは、およそ300㎡の範囲に多量の縄文土器・石器などが土と一緒に、高さ約80㎝まで積み上げられたものであり、そのあり方は向様田Ａ遺跡の「捨て場」のあり方に類似している。また、この「盛土」遺構の形成された時期は、出土遺物から向様田Ａ遺跡の「墓域」・「捨て場」・「環状配石遺構」などが形成された時期とほぼ同時期である。向様田Ａ遺跡の東に隣接する向様田Ｂ遺跡は、その調査区東側で配石遺構群が、調査区西側で土坑群がそれぞれ検出されている。うち、調査区西側の土坑群は、向様田Ａ遺跡の墓域と連なる可能性は考えられる。さらに、向様田Ｂ遺跡よりも一段低い段丘面にある向様田Ｃ遺跡では、直径４ｍに達する配石遺構が検出されている。

向様田遺跡群は、縄文時代晩期前半に、小又川流域各所に暮らした人々が祭祀の拠点として築いた場所であり、当時この周辺に暮らす人々が行った共同的な営為をうかがい知る上で、非常に貴重な遺




**第67図　向様田Ａ遺跡グリッド別出土土器重量分布図**

跡である。なお近隣にある向様田Ｆ遺跡や向様田遺跡群より1.5㎞下流の姫ヶ岱Ｄ遺跡などでは、晩期前半の極小規模な集落跡が確認されている。今後、向様田Ａ遺跡出土の遺物の整理作業、さらに向様田遺跡群の整理作業が進展することにより、当時の小又川流域の人々の生活の様子が鮮明に浮かび上がってくることであろう。それは同時に、縄文時代晩期前半の縄文人の精神世界理解の一助になることは言うまでもない。

参考文献

秋田県教育委員会 『虫内Ⅲ遺跡―東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅦ―』 秋田県文化財調査報告書第242集 1994（平成６）年

秋田県教育委員会 『虫内Ⅰ遺跡―東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅩⅢ―』 秋田県文化財調査報告書第274集 1998（平成10）年

秋田県教育委員会 『伊勢堂岱遺跡―県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』 秋田県文化財調査報告書第293集　1999（平成11）年

秋田県教育委員会 『姫ヶ岱Ｄ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ―』 秋田県文化財調査報告書第300集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会 『桐内沢遺跡・日廻岱Ａ遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ―』 秋田県文化財調査報告書第335集　2002（平成14）年

1　向様田地区全景（空撮・北→）

2　向様田地区全景（空撮・南西→）

図版2

向様田Ａ遺跡全景（空撮・南→）

図版3

向様田Ａ遺跡礫群遠景（空撮・南東→）

図版4

墓域全景（空撮・南→）

図版5

東部環状配石遺構（空撮・南→）

図版6

西部環状配石遺構（空撮・北→）

1　基本土層ＬＴ28～29グリッド付近（東→）

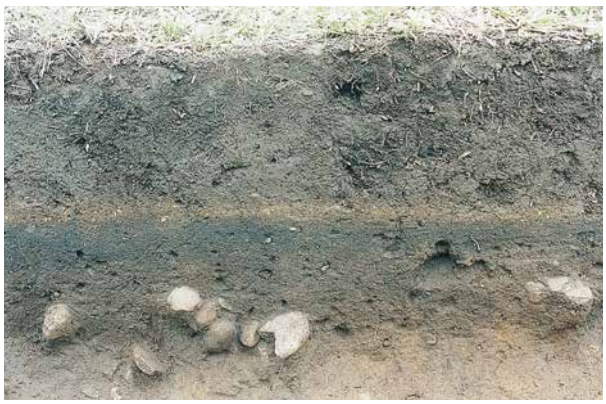
2　基本土層ＭＡ32～33グリッド付近（東→）

3　基本土層ＭＡ34～35グリッド付近（東→）

4　基本土層ＭＡ29グリッド付近（東→）

5　基本土層ＬＰ35～36グリッド付近（西→）

6　基本土層ＬＴ43グリッド付近（西→）



7　基本土層ＮＦ25～26グリッド付近（西→）

8　基本土層ＭＩ33～ＭＪ33グリッド付近（南→）

図版8

1　ＳＫ02土坑（墓）完掘状況（北西→）

2　ＳＫ04配石墓確認状況（南西→）

3　ＳＫ05・06配石墓確認状況（北西→）

4　ＳＫ05・06配石墓完掘状況（北→）

5　ＳＫ06配石墓確認状況（南西→）

6　ＳＫ06配石墓礫出土状況（南→）

7　ＳＫ06配石墓土層断面・小玉出土状況（南→）

8　ＳＫ06配石墓遺物出土状況（北東→）

1　ＳＫ09配石墓確認状況（南東→）

2　ＳＫ09配石墓完掘状況（南東→）

3　ＳＫ10配石墓確認状況（北→）

4　ＳＫ10配石墓礫出土状況（南→）

5　ＳＫ15配石墓確認状況（南→）

6　ＳＫ15配石墓覆土内礫出土状況（南→）

7　ＳＫ17土坑墓完掘状況（南→）

8　ＳＫ17土坑墓小玉出土状況（南東→）

図版10

1　ＳＫ20・73土坑（墓）土層断面（南→）

2　ＳＫ20・73土坑（墓）完掘状況（南→）

3　ＳＫ21土坑（墓）確認状況（南→）

4　ＳＫ22土坑（墓）土層断面（北東→）

5　ＳＫ23土坑（墓）確認状況（北→）

6　ＳＫ23土坑（墓）土層断面（北→）

7　ＳＫ23土坑（墓）完掘状況（北→）

8　ＳＫ25土坑・31配石墓完掘状況（南→）